

栃木県埋蔵文化財調査報告第 415 集

下 飯 貝 遺 跡

—快適で安全な道づくり事業費（補助）国道 121 号京泉Ⅱ工区に伴う発掘調査—

2024. 3

栃 木 県
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

しも しい がい い せき
下 飯 貝 遺 跡

—快適で安全な道づくり事業費（補助）国道121号京泉Ⅱ工区に伴う発掘調査—

2024.3

栃 木 県
公益財団法人とちぎ未来づくり財団



下飯貝遺跡遠景（南から）



大内廃寺から下飯貝遺跡を望む（北から）



下飯貝遺跡遠景（北西から）



下飯貝遺跡全景（上空から）



南区出土墨書土器



SD-37・SD-40 出土中国産陶磁器



SI- 2 出土土瓦

序

下飯貝遺跡は、栃木県の南東部真岡市に位置しています。真岡市は、古代の芳賀郡衙と考えられる堂法田遺跡や付属寺院の大内廃寺、中世芳賀氏の城館跡、近世には真岡木綿の産地で栄えるなど、この地域の政治・文化の中心地として知られています。

この度、国道121号の幅員狭小を解消するための改良工事が計画され、事業地内に所在する遺跡の取り扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

今回の発掘調査では、古墳時代から古代の集落や道路跡、中世の城館跡に伴う溝が見つかりました。また、「奉」の字を記した墨書土器や、中国産の輸入陶磁器などが多数出土し、当時の人々の生活を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました真岡市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和6（2024）年3月

栃 木 県

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

例 言

- 1 本書は、栃木県真岡市京泉に所在する下飯貝遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、快適で安全な道づくり事業費（補助）国道 121 号京泉Ⅱ工区に伴う記録保存のための発掘調査である。
- 3 発掘調査は、栃木県の委託を受け、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが、栃木県教育委員会事務局文化財課（現文化振興課）の指導のもと実施した。
- 4 本遺跡の現地調査および整理報告書作成作業期間は以下のとおりである。

令和 4 年度 発掘調査

期 間 令和 4 年 5 月 23 日から令和 4 年 7 月 28 日

担当者 調査課副主幹 谷中 隆 嘱託職員 小筆一成

令和 5 年度 整理・報告書作成

期 間 令和 5 年 4 月 3 日から令和 6 年 3 月 28 日

担当者 整理課主任 手島 実実子

- 5 本報告書の執筆・編集は手島がおこなった。なお、遺物観察において埋蔵文化財センター職員のほか浅野晴樹氏、今平利幸氏、村山卓氏の協力を得た。
- 6 発掘調査にあたり、以下の業務を委託した。

表土除去等業務：有限会社小林建設産業

基準点測量、航空写真撮影および遺構図造化委託業務：株式会社シン技術コンサル栃木営業所
テフラ分析、花粉・珪藻分析：株式会社火山灰考古学研究所

放射性炭素年代測定、炭化材の樹種同定、石材同定、銭貨の蛍光 X 線分析：株式会社パレオ・ラボ

保存処理等業務：有限会社武蔵野文化財修復研究所

遺物写真撮影：小川忠博

- 7 発掘調査における写真撮影は発掘調査担当者がおこない、出土遺物の写真撮影は委託したほか整理担当者がおこなった。
- 8 発掘調査の参加者は以下のとおりである。

青柳茂樹 岩上愛純 大塚茂美 篠崎昌 鈴木和二 西村順雄 橋本和行 橋本丈臣 菱沼力

福村典正 前川菊枝 吉川聡行 若林公明（敬称略）

- 9 整理作業・報告書作成の参加者は以下のとおりである。

天野崇弘 石川貴子 佐藤愛 武田智子 野中美帆（敬称略）

- 10 本遺跡の調査概要は、埋蔵文化財センター年報・栃木県埋蔵文化財保護行政年報等で報告されているが、本書を正式報告とする。
- 11 本遺跡の発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々、関係機関より御指導・御協力を賜った。記して感謝いたします。
栃木県県土整備部 栃木県教育委員会 真岡市教育委員会（順不同・敬称略）
- 12 本遺跡の出土遺物と図面・写真・各種台帳などの諸資料は、栃木県が保有し、栃木県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 遺跡の略称は、真岡市下飯貝遺跡を略した MO-SI である。
- 2 本報告書中の座標系は平面直角座標第 IX 系（世界測地系）を用い、方位はその座標北である。水準は東京湾平均海面（T.P.）を基準とする海拔高を用いた。
- 3 遺構略号は、文化庁記念物課編 2010『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編』に準拠し、以下のとおりである。

SB：掘立柱建物 SD：溝 SI：竪穴建物 SK：土坑 SP：ピット SF：道路状遺構

SX：性格不明遺構

- 4 土層・遺物の色調および土壌の注記は、農林水産省農林水産技術研究所・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』を使用した。
- 5 遺構・遺物図の縮尺は各図にスケールを示した。基本縮尺は以下のとおりである。
遺構平面図：1/60 遺構断面図：1/60
出土遺物図：土器・石製品 1/4 土製品・金属製品：1/2 古銭・石鏡：1/1
- 6 遺構図中の遺物番号は、遺物図の遺物番号と一致する。
- 7 遺構番号は発掘調査時に遺構の種類に関わらず、確認された順に番号を付した。しかし、報告書作成にあたって遺跡全体で番号を統一するため、南区の遺構番号を以下のように変更した。

旧遺構番号：SX-1 新遺構番号：SX-42

- 8 遺物の注記、遺物観察表の出土位置は、発掘調査時の遺構番号および遺物取り上げ番号を記載した。
- 9 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。なお、遺物の名称は文化庁記念物課編 2013『発掘調査のてびき—各種遺跡調査編』に準拠した。瓦の名称については歴史的名称を用い、鉦瓦（軒丸瓦）、宇瓦（軒平瓦）、男瓦（丸瓦）、女瓦（平瓦）とした。

種別 土師器、須恵器、土製品、瓦、陶器、磁器、石器、石製品、鉄製品、銅製品、鉄滓

寸法 単位は cm であり、（ ）で示した数値は推定値、[] で示した数値は残存値である。

胎土 雲母・海面付針など特徴的な鉱物等のほか、混和材の色調などを記した。

焼成 良好・普通・不良の 3 段階に分けて示した。

備考 時期、生産窯などの特記事項を記した。

- 10 遺物図に示したトーンは以下のとおりである。

須恵器 ■■■ 灰軸陶器 ■■■ 金属製品 ■■■ 内面黒色処理 ■■■ 内外面漆仕上げ ■■■

- 11 本報告書で使用した男体山・浅間山・榛名山噴火による降下火砕物等の呼称については、以下の表記をともに使用する。

浅間 B テフラ：As-B（天仁元年：1108 年）

榛名ニツ岳沢川テフラ：Hr-FA（6 世紀初頭）

浅間 C 軽石：As-C（3 世紀後半）

男体今市スコリア：Nt-I（約 1.4 ～ 1.5 万年前）

男体七木桜軽石：Nt-S（約 1.4 ～ 1.5 万年前）

- 12 本報告書で使用した地図は、国土地理院発行 1/25,000 電子地形図、真岡市都市計画図である。

目次

巻頭図版

序

例言	i
凡例	ii
目次	iii

第1章 調査にいたる経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の方法と成果	18
第1節 調査の方法	18
第2節 調査の概要	19
第3節 基本土層	19
第4節 北区の遺構と遺物	24
第5節 北区の遺構外出土遺物	66
第6節 低地部の調査	68
第4章 理化学分析	83
第1節 分析結果の概要	83
第2節 放射性炭素年代測定	85
第3節 テフラ分析	89
第4節 花粉・珪藻分析	98
第5節 炭化材樹種同定	110
第6節 石製紡錘車の石材同定	115
第7節 銭貨の蛍光X線分析	117
第5章 総括	119
第1節 下飯貝遺跡および周辺における時期的変遷の検討	119
第2節 集落内の手工業生産	125
第3節 下飯貝遺跡出土の古代文字資料について	126
第4節 下飯貝遺跡の評価	132
第5節 今後の展望と課題	132

挿図目次

第1図	遺跡の範囲と発掘調査位置図	1	第36図	SF-36 出土遺物実測図	59
第2図	遺跡位置図	5	第37図	SX-7・8 遺構図	61
第3図	栃木県の地形	5	第38図	SX-7・8 出土遺物実測図	62
第4図	周辺地形分類図	6	第39図	SD-6・SF-5 遺構図	64
第5図	下飯貝遺跡周辺主要遺跡分布図	9	第40図	SD-38 遺構図	65
第6図	周辺遺跡分布図	10	第41図	北区遺構外出土遺物実測図	66
第7図	遺構全体図	20	第42図	南区出土遺物実測図(1)	69
第8図	基本層序図	21	第43図	南区出土遺物実測図(2)	70
第9図	北区北壁断面図	22	第44図	南区全体図・SX-42 遺構図	74
第10図	SI-1 遺構図	24	第45図	SX-42 出土遺物実測図(1)	75
第11図	SI-1 出土遺物実測図	25	第46図	SX-42 出土遺物実測図(2)	76
第12図	SI-2 遺構図	27	第47図	SX-42 出土遺物実測図(3)	77
第13図	SI-2 掘方・カマド遺構図	28	第48図	SX-42 出土遺物実測図(4)	78
第14図	SI-2 出土遺物実測図(1)	29	第49図	暦年校正結果(1)	88
第15図	SI-2 出土遺物実測図(2)	30	第50図	暦年校正結果(2)	89
第16図	SI-3 遺構図	33	第51図	テフラ分析試料採取位置図	94
第17図	SI-3 カマド遺構図	34	第52図	テフラ分析土層柱状図	96
第18図	SI-3 出土遺物実測図	35	第53図	下飯貝遺跡のテフラ実体顕微鏡写真	97
第19図	SI-4 カマド遺構図	36	第54図	下飯貝遺跡の花粉組成ダイヤグラム	106
第20図	SI-30 遺構図	37	第55図	下飯貝遺跡の主要珪藻組成ダイヤグラム	107
第21図	SI-30 出土遺物実測図	37	第56図	下飯貝遺跡の花粉生物顕微鏡写真	108
第22図	SI-31 遺構図	39	第57図	下飯貝遺跡の珪藻生物顕微鏡写真	109
第23図	SI-31 出土遺物実測図	40	第58図	炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)	113
第24図	SI-41 遺構図	42	第59図	炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)	114
第25図	SB-9 遺構図	44	第60図	紡錘車の主な元素マッピング図	116
第26図	SB-9 出土遺物実測図	44	第61図	分析対象遺物と測定位置	118
第27図	SB-10 遺構図	45	第62図	時期別遺構変遷図	121
第28図	SK-39 遺構図	46	第63図	土器変遷図(1)	122
第29図	SD-37・40 遺構図	47	第64図	土器変遷図(2)	123
第30図	SD-37 出土遺物実測図(1)	48	第65図	土器変遷図(3)	124
第31図	SD-37 出土遺物実測図(2)	49	第66図	下飯貝遺跡出土墨書土器	127
第32図	SD-40 出土遺物実測図	53	第67図	下飯貝遺跡出土刻書土器	130
第33図	SP-11～18・21～23 遺構図	56	第68図	「社」の字形と参考資料	131
第34図	SP-24～29・32～35 遺構図	57	第69図	下飯貝遺跡の機能想定図	133
第35図	SF-36 遺構図	58			

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	11	第15表	SX-42 出土遺物観察表	79
第2表	SI-1 出土遺物観察表	26	第16表	測定試料および処理	86
第3表	SI-2 出土遺物観察表	31	第17表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	87
第4表	SI-3 出土遺物観察表	35	第18表	テフラ検出分析結果	95
第5表	SI-30 出土遺物観察表	37	第19表	下飯貝遺跡における花粉分析結果	104
第6表	SI-31 出土遺物観察表	41	第20表	下飯貝遺跡における珪藻分析結果	105
第7表	SB-9 出土遺物観察表	44	第21表	樹種同定結果一覧	110
第8表	SD-37 出土遺物観察表	50	第22表	石製品とその詳細	115
第9表	SD-40 出土遺物観察表	54	第23表	主な高濃度部分の点分析結果	116
第10表	ピット一覧表	55	第24表	分析対象一覧および半定量分析結果	118
第11表	SF-36 出土遺物観察表	60	第25表	下飯貝遺跡における時期別変遷表	121
第12表	SX-7・8 出土遺物観察表	62	第26表	下飯貝遺跡出土墨書土器一覧	127
第13表	北区遺構外出土遺物観察表	67	第27表	栃木県内出土奉書土器一覧	128
第14表	南区出土遺物観察表	71	第28表	下飯貝遺跡出土刻書土器一覧	129

図版目次

- 巻頭図版一
下版貝遺跡遠景（南から）
大内庵寺から下版貝遺跡を望む（北から）
- 巻頭図版二
下版貝遺跡遠景（北西から）
下版貝遺跡全景（上空から）
- 巻頭図版三
南区出土墨書土器
- 巻頭図版四
SD-37・SD-40 出土中国産陶磁器
SI-2 出土宇瓦
- 図版一 遺構（全景）
下版貝遺跡遠景（南から）
下版貝遺跡全景（西から）
- 図版二 遺構（全景）
北区調査区西半全景（北から）
北区調査区東半全景（北から）
- 図版三 遺構（全景）
南区調査区全景（南西から）
下版貝遺跡現況（西から）
- 図版四 遺構（竪穴建物）
北区 SI-1 完掘（南から）
北区 SI-1 B-B' 土層断面（南から）
北区 SI-1 遺物出土状況（南から）
北区 SI-1 鉄線(3011014)・碇石(3011013)出土状況(東から)
北区 SI-2 完掘（南から）
北区 SI-2 遺物出土状況・B-B' 土層断面（南から）
北区 SI-2 カマド完掘（南から）
北区 SI-2 カマド D-D' 土層断面（東から）
- 図版五 遺構（竪穴建物）
北区 SI-2 入口ピット土層断面（東から）
北区 SI-2 宇瓦（第15図23）出土状況（南東から）
北区 SI-2 掘方完掘（南から）
北区 SI-2 貼床内石炭跡跡車(第15図24)出土状況(西から)
北区 SI-2 作業風景（南から）
北区 SI-3 完掘（南から）
北区 SI-3 土層断面（北から）
北区 SI-3 カマド完掘（南から）
- 図版六 遺構（竪穴建物）
北区 SI-3 カマド C-C' 土層断面（東から）
北区 SI-3 貯蔵穴 D-D' 土層断面（南から）
北区 SI-4 完掘（北から）
北区 SI-4 カマド A-A' 土層断面（北から）
北区 SI-30 完掘（西から）
北区 SI-30A-A' 土層断面（部分）（南から）
北区 SI-30P 2・P 3 完掘（南から）
北区 SI-30P 2・P 3 C-C' 土層断面（南西から）
- 図版七 遺構（竪穴建物）
北区 SI-31 完掘（東から）
- 北区 SI-31B-B' 土層断面（南から）
北区 SI-31P 1 土層断面（南から）
北区 SI-31 が完掘（南から）
北区 SI-31 が検出状況（西から）
北区 SI-31 貯蔵穴 C-C' 土層断面（東から）
北区 SI-31 貯蔵穴・遺物出土状況（南から）
北区 SI-31 土師器環（第23図2）出土状況（東から）
- 図版八 遺構（竪穴建物・掘立柱建物）
北区 SI-41 完掘（東から）
北区 SI-41B-B' 土層断面（南から）
北区 SI-41P 1 完掘（南から）
北区 SI-41P 1 土層断面（南から）
北区 SB-9・SB-10 全景（東から）
- 図版九 遺構（掘立柱建物）
北区 SB-9・SB-10 検出状況（西から）
北区 SB-9P 1 完掘（南から）
北区 SB-9P 1 柱穴検出状況（南から）
北区 SB-9P 1 土層断面（東から）
北区 SB-9P 1 土層断面（南から）
- 図版一〇 遺構（掘立柱建物）
北区 SB-9P 2 完掘（南から）
北区 SB-9P 2 柱穴検出状況（南から）
北区 SB-9P 2 土層断面（南から）
北区 SB-9P 3 完掘（南から）
北区 SB-9P 3 柱穴検出状況（南から）
北区 SB-9P 3 土層断面（南から）
北区 SB-9P 4 完掘（南から）
北区 SB-9P 4 柱穴検出状況（南から）
- 図版一一 遺構（掘立柱建物）
北区 SB-9P 4 土層断面（南から）
北区 SB-9P 4 土層断面（東から）
北区 SB-9P 5 完掘（南から）
北区 SB-9P 5 柱穴検出状況（南から）
北区 SB-9P 5 土層断面（東から）
北区 SB-9P 6 完掘（南から）
北区 SB-9P 6 柱穴検出状況（南から）
北区 SB-9P 6 土層断面（東から）
- 図版一二 遺構（掘立柱建物・土坑・溝）
北区 SB-10P 1 完掘（南から）
北区 SB-10P 1 土層断面（南から）
北区 SB-10P 2 完掘（南から）
北区 SB-10P 2 土層断面（南から）
北区 SB-10P 3 完掘（南から）
北区 SB-10P 3 土層断面（南から）
北区 SK-39 完掘（南から）
北区 SD-37 作業風景（東から）
- 図版一三 遺構（溝）
北区 SD-37・SD-40 完掘（東から）
北区 SD-37 全体（東から）
北区 SD-40 完掘（北西から）
北区 SD-37A-A' 土層断面（東から）
北区 SD-37・SD-40B-B' 土層断面（東から）

図版一四 遺構（溝）

- 北区 SD-37・SD-40 遺物出土状況（東から）
- 北区 SD-37 遺物出土状況（東から）
- 北区 SD-37 遺物出土状況（西から）
- 北区 SD-37 常滑産瓶子（第 31 図 30）出土状況（東から）
- 北区 SD-37 青磁碗（第 31 図 39）出土状況（東から）
- 北区 SD-40 青磁碗（第 32 図 10）出土状況（南から）
- 北区 SD-37 壁面掘削痕跡（北から）
- 北区 SD-40 壁面掘削痕跡（北東から）

図版一五 遺構（ピット）

- 北区 SP-15 土層断面（南から）
- 北区 SP-18 土層断面（北から）
- 北区 SP-21 完掘（南から）
- 北区 SP-21 土層断面（南から）
- 北区 SP-26 完掘（南から）
- 北区 SP-26 土層断面（南から）
- 北区 SP-27 完掘（南から）
- 北区 SP-27 土層断面（南から）

図版一六 遺構（ピット・道路状遺構）

- 北区 SP-28 完掘（南から）
- 北区 SP-28 土層断面（南から）
- 北区 SP-27・SP-28・SP-29 完掘（南西から）
- 北区 SF-36 完掘（南から）
- 北区 SF-36D 1 完掘（南から）
- 北区 SF-36D 2 完掘（南から）
- 北区 SF-36B・B'・C・C' 土層断面（部分）（南から）
- 北区 SF-36 から大内廃寺を望む（南から）

図版一七 遺構（性格不明遺構・近世以降の遺構）

- 北区 SX-7 完掘（西から）
- 北区 SX-7A・A' 土層断面（北から）
- 北区 SX-7 須恵器坏（第 42 図 1）出土状況（北から）
- 北区 SX-8 完掘（南から）
- 北区 SD-6 土層断面（南西から）
- 北区 SF-5 土層断面（南から）
- 北区 SF-5 板材検出状況（南から）
- 北区 SD-6・SF-5 検出状況（東から）

図版一八 遺構（低地）

- 南区 SX-42 遺物出土状況（西から）
- 南区 A 区 SX-42 遺物出土状況（南東から）
- 南区 A 区 III 層書土器（第 45 図 5）出土状況（北から）
- 南区 A 区 SX-42 程鉢（第 45 図 15）出土状況（東から）
- 南区 A 区 III 層女瓦（第 42 図 12）出土状況（南から）

図版一九 遺構（低地）

- 南区 B 区 SX-42 遺物出土状況（南から）
- 南区 C 区 SX-42 遺物出土状況（南から）
- 南区 C 区 SX-42 1 層書土器（第 45 図 6）出土状況（東から）
- 南区 7 トレンチ土層断面（南西から）
- 南区 E'E' 土層断面（東から）
- 南区 C・D 区作業風景（南東から）
- 地元説明会
- 調査参加者

図版二〇 遺物

- SF-1-1・6・8・9・13
- SF-2-1・2・3・7・8・9・11・12・13・15・16・17

図版二一 遺物

- SI-2-18・19・21・23・24
- SI-3-1・3・6・7
- SI-30-1

図版二二 遺物

- SI-31-1・2・3・4・5・6・7・10・11・12
- SB-9-1・2・4
- SD-37-1・2・3・4・5・6・8

図版二三 遺物

- SD-37-9・10・14・15・16・18・19・20・22・23・24・25・26・28・30

図版二四 遺物

- SD-37-27・29・31・33・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44
- SD-40-3・4

図版二五 遺物

- SD-40-5・8・9・10・11・12
- SF-36-6・7・8・9・10
- SX-7-1・2
- SX-8-3・4

図版二六 遺物

- 北区遺構外-1・2・4・5・6・8・9・10・11
- 南区-1・3・4・5・7・8・9・10

図版二七 遺物

- 南区-11・12・13・14・15・16・18・19・20・21・22・25・26・27・28・29

図版二八 遺物

- SX-42-3・5・6・7・8・10・11・12・13・15・18・19・20・21

図版二九 遺物

- SX-42-24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・39・40・41

図版三〇 遺物

- SX-42-47・49・50・52・53・54・56・58・59・61・62・63・64・65・66・67・68・69・70

図版三一 遺物（鉄製品・鍛冶関連遺物・

漆附着土器・焼成粘土塊）

- SI-1-14
- SI-3-8
- SD-40-13
- SI-2-25
- SX-42-42
- 鍛冶関連遺物（鉄滓・羽口）
- 漆附着土器
- 焼成粘土塊

図版三二 遺物（剣書土器）

- 剣書-1・3・4・5・6・7・8・14

第1章 調査にいたる経緯と経過

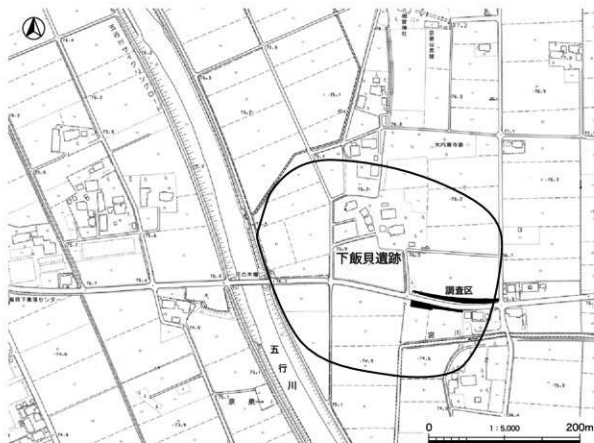
第1節 調査にいたる経緯

(1) 調査にいたる経緯（第1図）

下飯貝遺跡は、栃木県真岡市京泉地内に所在する。本調査は、栃木県県土整備部のおこなう国道121号京泉Ⅱ工区整備事業に伴い、記録保存のための発掘調査として実施された。

一般国道121号は山形県米沢市を起点とし、福島県喜多方市および会津若松市を経て栃木県にいたる。栃木県内では、日光市から鹿沼市の中心部を南北に縦断し、県央部の宇都宮市から真岡市を横断して益子町にいたる県内でも主要な路線のひとつである。今回調査をおこなった事業地付近は、市街地にも近いため通勤等による交通量が多い場所であり、片側1車線で歩道もなく道幅も狭いため、歩道の拡幅等による道路改良の必要性が生じていた。このため、一般国道121号を整備することにより、安全な歩行者空間と円滑な交通の確保を目的とした整備事業が計画された。

国道121号京泉Ⅱ工区整備事業に係る埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成27年度の埋蔵文化財個別打合せ会で協議がおこなわれ、平成27年10月23日に所在調査を実施した。その結果、事業予定区域については、下飯貝遺跡ほか4遺跡の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在すること、埋蔵文化財の詳細な状況等を把握するための確認調査を実施する必要がある旨を、平成28年3月9日付け文財第143号で回答した。その後、用地買収等の進捗に伴い一斗内Ⅰ・Ⅱ遺跡および花の木遺跡の確認調査を平成30年6月21日、



第1図 遺跡の範囲と発掘調査位置図

8月8日、下飯貝遺跡の確認調査を令和3年1月26日に実施した。その結果、一斗内Ⅰ・Ⅱ遺跡および花の木遺跡では低地が広がるのみで遺構等は確認されず、下飯貝遺跡では竪穴住居跡、溝跡、柱穴跡などの遺構と遺物が検出された。この結果をもとに取扱いについて協議を進め、下飯貝遺跡については、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講じることとなった。

これを受けて、令和4年度に栃木県県土整備部長より、栃木県教育委員会教育長あて発掘調査の依頼が令和4年4月1日付け道整号外で提出された。文化財課では発掘調査を実施するために、同日付け文財号外で公益財団法人とちぎ未来づくり財団理事長あて発掘調査費用について見積書提出を依頼し、埋蔵文化財センター（以下センター）では同日付けとち埋文号外で回答した。これに基づいて文化財課より同日付け文財号外で財団理事長あて委託契約締結の依頼がなされ、センターでは同日付けとち埋文号外でこれを受諾し、栃木県知事と財団理事長との間で発掘調査の業務委託契約書が締結された。

整理・報告書作成作業については令和5年度に実施することとなり、栃木県県土整備部長より、栃木県生活文化スポーツ部長あての依頼が令和5年4月3日付け道整13号で提出された。これに基づいて文化振興課より同日付け文振号外で財団理事長あて委託業務締結の依頼がなされ、センターでは同日付けとち埋文号外でこれを受諾し、栃木県知事と財団理事長との間で業務委託契約書が締結された。

(2) 調査の組織

令和4年度の発掘調査および令和5年度の整理・報告書作成作業を実施した組織は以下のとおりである。

令和4年度（発掘調査）

理 事 長	千金 榮 宏	埋蔵文化財センター	
常務理事兼事務局長	野中 正知	所 長	金田 繁夫
総務企画課長	内田 裕介	副所長	藤田 典夫 篠原 祐一
		調査課長	江原 英
		副主幹	谷中 隆
		嘱託職員	小筆 一成

令和5年度（整理・報告書作成）

理 事 長	千金 榮 宏	埋蔵文化財センター	
常務理事兼事務局長	野中 正知	所 長	栗原 亨
総務企画課長	内田 裕介	副所長	川田 高志 篠原 祐一
		整理課長	江原 英
		主任	手島 美実子

第2節 調査の経過

下飯貝遺跡は、国道121号京泉Ⅱ工区整備事業に先立ち、令和4年度に発掘調査をおこない、令和5年度に整理・報告書作成作業をおこなった。以下に調査の経過について概略を記す。

(1) 発掘調査

調査面積	1,123㎡
調査費用	18,265,000円（うち消費税および地方消費税の額1,660,454円）
契約期間	令和4年4月1日から令和5年3月30日
調査期間	令和4年5月23日から令和4年7月28日

令和4年度の発掘調査は事前準備として、真岡土木事務所との現地打合せや安全柵工事を実施後、令和4年5月23日から24日にかけて南区および北区東半の重機による表土除去作業をおこなった。5月24日からは作業員による遺構確認作業を開始し、5月28日から29日には北区西半の重機による表土除去作業を実施した。確認作業の結果、古墳時代中期から中世にかけての遺構・遺物が検出された。これらの遺構は作業の進捗に合わせて、順次、土層断面図・遺構平面図・写真撮影などの記録作成作業をおこなった。その後、7月27日から28日にかけて重機による埋め戻し作業、遺物・発掘器材の撤収をおこない、現地調査を終了した。

7月29日には埋蔵物発見届（真岡警察署長あて）と埋蔵文化財保管証（栃木県教育委員会あて）を提出し、実績報告書作成等の事務処理をおこない、令和5年3月31日に終了した。

この間、7月17日には地域住民を対象とした遺跡の現地説明会を開催し、41名の参加があった。

（2）整理・報告書作成

整理・報告書作成費用 16,000,000円（うち消費税 1,454,545円）

契約期間 令和5年4月3日から令和6年3月28日

整理・報告書作成期間 令和5年4月3日から令和6年3月28日

令和5年度の整理・報告書作成作業は、令和5年4月3日から出土遺物の水洗・注記を開始し、遺物の接合・復元に着手した。その後、実測・拓本・トレース・写真撮影をおこない挿図を作成した。

これらの作業と併行して、遺構図版や写真図版の編集、原稿執筆、遺物観察表等の作成をおこない、入稿後、3回の校正を経て報告書を刊行した。

あわせて、本報告書に係る遺物、遺構・遺物実測図、写真、空中写真等の成果品、各種台帳の整理をおこない、収蔵庫・記録保管庫に収納し、下版員遺跡発掘調査のすべての作業を終了した。



発掘作業写真



整理作業写真

第2章 遺跡の立地と環境

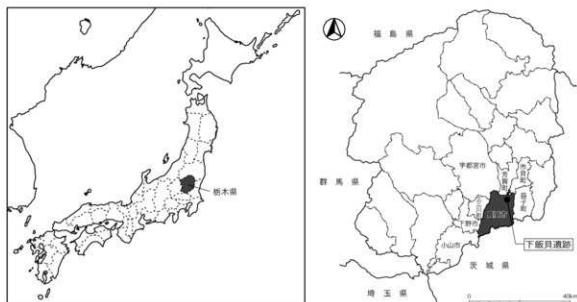
第1節 地理的環境 (第2・3・4図)

位置 下飯尾遺跡は、栃木県南東部の真岡市京泉地内に所在する。真岡市は、北は宇都宮市、芳賀町、市貝町、東は益子町、茨城県桜川市、南は茨城県筑西市、西は小山市、下野市、上三川町に接している。本遺跡は真岡市北東部にあり、古代においては郡衙や郡守に推定される遺跡が所在するなど芳賀郡の中心地となり、中世には芳賀氏の拠点となり複数の城跡がつくられ、近世には真岡木綿の集散地として栄えた地域である。

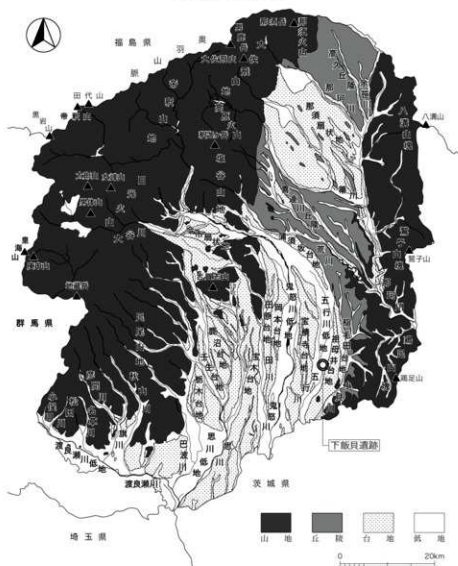
地形の分類 栃木県は東北地方から続く山岳部と関東平野の北縁が接する地域に位置している。地理的には、県東西に発達する2つの山地と県央部を南北に占める平野部の3つの地形に区分される。山地は、県東縁に阿武隈山地の南に連なる八溝山地が標高1,000 m以下の低山地を形成する。県北西部から西部には、奥羽山脈の南に連なる大佐飛山地から帝釈山地では標高2,000 m級を含む大起伏の山地を形成し、那須・高原・日光の各火山群を内包する。県北の那須岳・釈迦ヶ岳・男体山はこれら火山群の代表的な火山である。また、県南西部の足尾山地は北境を大谷川によって画され、北部は標高2,000 m級の険しい山地からなるが、東部から南部にかけては低位となり県央平野部にいたる。

県央平野部は、鬼怒川地溝帯の上に成り立ち、おもに丘陵、台地、低地で構成される。丘陵は、県央平野部の北部および中部に分布し、高久丘陵や喜連川丘陵などがいずれも南東方向へなだらかな傾斜面を形成する。低地および台地は、おもに県央平野部の南部にみられ、鬼怒川などの南流する河川の浸食によって形成された低地と台地が南北に併行している。これらは堆積した火山灰層（関東ローム層）の層序関係等で、宝積寺面・宝木面・田原面・絹島面（沖積低地）と形成時期が区分される。低地は、五行川低地、鬼怒川低地、思川低地などがみられ、渡良瀬川と思川の合流点付近には渡良瀬遊水地などの大小の沼や湿地が分布している。

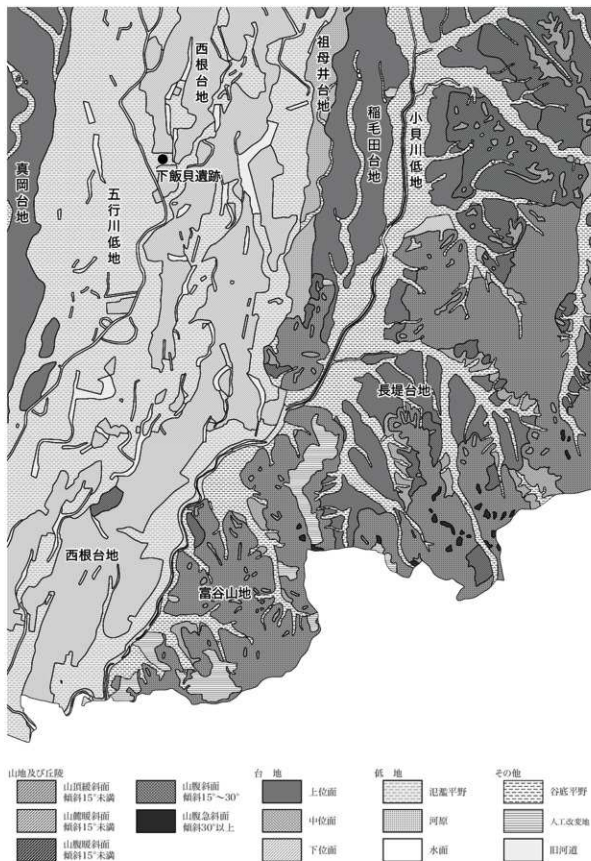
真岡市は、県央平野部に位置しており、市域の90%以上が台地や低地で占められる。市内には鬼怒川、五行川、小貝川が南北に流れ、流域にはそれぞれ鬼怒川低地、五行川低地、小貝川低地が形成され、低地と低地の間には細長い台地が残されている。このうち、鬼怒川低地と五行川低地の間に存在する真岡台地（宝積寺台地）は、塩谷郡高根沢町付近から続く台地で、ローム層中に飯土真岡テフラ（J-MO）を含むことから、上位段丘の宝積寺面に相当する。また、五行川低地と小貝川低地の間に存在する稲毛田台地（塙台地）は、ローム層中に宝積寺ロームに含まれる満美穴スコリアが認められるため、宝積寺面に相当する。五行川低地と稲毛田台地の間には祖母井台地（西田井台地）が存在し、ローム層中に赤城鹿沼テフラ（Ag-KP）を含むことから、中位の宝木面に相当する。また、五行川低地と稲毛田台地・小貝川低地の間に存在する西根台地（赤羽台地）は明瞭な段丘崖がない場合が多く、上位の祖母井台地との高低差も約1 mしかないので、祖母井台地や五行川低地とは地形の外観から区別するのは困難である。しかし、祖母井台地には赤城鹿沼テフラ（Ag-KP）を含む宝木ロームが堆積しているのに対して、西根台地には赤城鹿沼テフラが認められないことから、祖母井台地よりも新しい台地である。従来、この台地面の多くが低地の一部である絹島面とされてきたが、男体今市スコリア（Ni-I）と男体七本桜軽石（Ni-S）を含むローム層が認められることから田原面に相当する。山地は、南高岡付近と根本山、磯山に分布がみられるにすぎず、面積的にはごく狭い範囲である。



第2図 遺跡位置図



第3図 栃木県の地形



第4図 周辺地形分類図

西根台地 下飯貝遺跡は、五行川低地に接する西根台地に立地している。この台地は五行川や小貝川に流下する小河川の浸食によって開析され、不規則に平面的な形状を示す。台地面は単一な平坦面ではなく、高低差1～1.5mの崖線を境に2～3面に細分できる地域もあり、台地面上にも旧河道の痕跡が認められる。台地面の高度は北部の市貝町赤羽で標高85m、南部の真岡市高田（原分）では標高50mほどで南に傾斜する。

現況 昭和40年の五行川改修に伴う水田基盤整備事業やそれ以前の開墾により旧地形はあまり残されていないが、現集落は自然堤防上や微高地上に点在する傾向にある。下飯貝遺跡は、五行川と支流である宮川に挟まれた西根台地が五行川低地に向かって傾斜する緩斜面に広がっており、標高は約75mである。調査区は、五行川から東へ約20mに位置しており、遺跡周辺でみると西根台地と五行川低地の比高差は1mほどである。

参考文献

- 国土地理院 1994 1:25,000土地条件図「真岡」
 栃木県企画部資源対策課編 1990『土地分類基本調査 真岡』栃木県
 真岡市史編さん委員会編 1987『真岡市史』第6巻 原始古代中世通史編 真岡市



下飯貝遺跡周辺航空写真



西根台地・五行川低地の崖線

第2節 歴史的環境 (第5・6図、第1表)

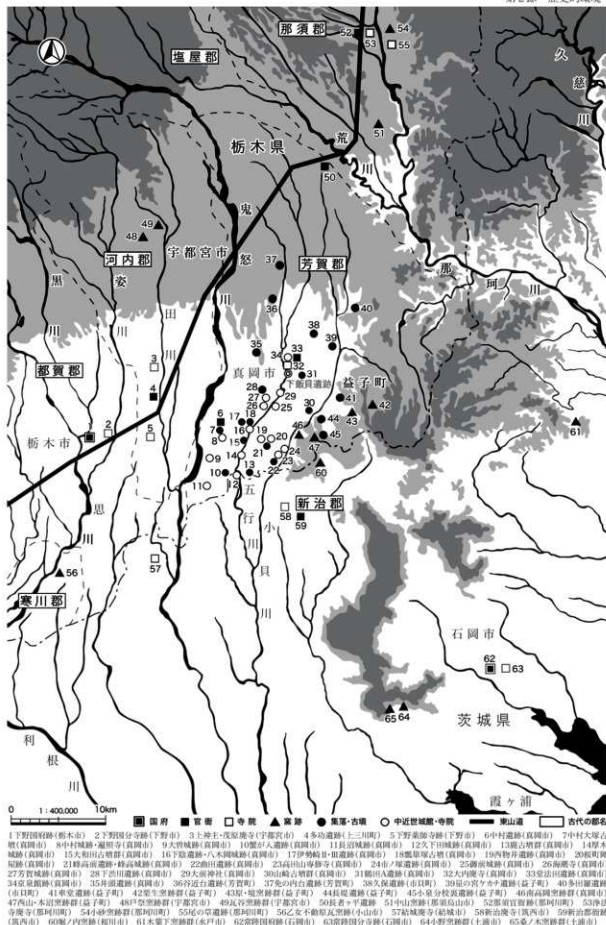
真岡市では、真岡台地を中心として古墳時代から中近世にかけての遺跡が多く存在している。下飯貝遺跡周辺では多くの遺跡が所在することが知られているが、多くは分布調査により時期や範囲が推定されている遺跡であり、発掘調査が実施された事例は少ないため、不明確な部分が多い。ここでは、これらの遺跡のなかから時代ごとに主要な遺跡を抽出し、特に本遺跡と時期または遺跡の性格上かかわりの深いものについては詳細に記載することとする。

(1) 旧石器時代

本地域において、当該期の遺跡は少ないが後期旧石器時代の資料が出土している。磯山遺跡(真岡市)は県内初の旧石器時代の学術調査がおこなわれた遺跡である。小貝川左岸西根台地南西麓の傾斜面に立地し、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、局部磨製石器のほか、石刃技法の特徴を示す良好な接合資料が出土している。西根台地ではこのほかに4遺跡確認されており、五行川左岸の西物井遺跡(第5図19)では珪質凝灰岩製の石刃、峰高前遺跡(第5図21)では硬質頁岩製の搔器、小貝川右岸の市ノ塚遺跡(第5図24)では頁岩製のナイフ形石器がそれぞれ遺構外から出土している。また、小貝川右岸の桑ノ川遺跡(真岡市)では同一母岩と考えられる流紋岩製の搔器2点が中世以降の溝状遺構覆土内から出土している。江川右岸真岡台地上の伊勢崎Ⅱ・Ⅲ遺跡(第5図17)では剥片のブロックおよび礫群、江川右岸真岡台地の亀山北遺跡(第6図26)では多数の剥片とナイフ形石器が出土している。石器はすべて台地および台地周辺において石器単体で出土するものが多いため、真岡市周辺における旧石器時代の遺跡の多くは、台地、丘陵縁辺部や中央部に存在すると推定される。

(2) 縄文時代

本地域では、草創期から前期にかけての遺跡は少なく、中期から後期が主体と考えられる。草創期では、江川右岸真岡台地の稲荷山遺跡(真岡市)で草創期初頭の微隆起線文土器、小貝川右岸西根台地の曲田遺跡(第5図22)で黒曜石製の柳葉形尖頭器が出土している。早期では、小貝川右岸西根台地の市ノ塚遺跡で燃土文期の竪穴建物8軒と同時期の陥し穴状遺構5基が確認され、竪穴建物内からは、少量の土器片と石鏃・三角錐状石器・磨石などの石器が多く出土している。また、小貝川右岸根本山南西麓の山崎遺跡(第6図13)では、沈線文土器が採集されている。前期では、山崎遺跡で古墳の墳丘および溝溝内から東関東系の浮島式土器が出土しているほか、市ノ塚遺跡や曲田遺跡、小貝川左岸西根台地の馬場先遺跡(真岡市)で前期中葉の黒浜式土器、東関東系の浮島式・興津式土器が出土している。中期では、江川左岸真岡台地の西海道遺跡(真岡市)で阿玉台Ⅱ式土器を伴う袋状土坑、江川左岸真岡台地の熊倉遺跡(第6図29)で加曾利E1式土器を伴う袋状土坑、五行川左岸稲毛田台地西縁部の赤坂道上北遺跡(芳賀町)では中期後葉の集落が確認されている。また、五行川左岸西根台地の中内遺跡(真岡市)、小貝川左岸西根台地の磯山遺跡、江川右岸真岡台地の稲荷山遺跡で中期中葉から後葉、江川左岸真岡台地の熊倉遺跡・塚原遺跡(真岡市)で中期から後期初頭、於宮遺跡(真岡市)で中期中葉から後期前葉の土器や石器が採集されている。後期では五行川左岸西根台地の西物井遺跡で堀之内式土器と打製石斧を伴う遺物集中箇所が確認されている。小貝川右岸根本山南西麓の柳久保遺跡(第6図10)では称名寺式、江川右岸真岡台地の塚原遺跡では称名寺式、堀之内1・2式土器が採集されている。また、五行川左岸五行川低地の一ツ橋遺跡(真岡市)および南側に隣接する横田小沼尻地内では、堀之内1・2式、加曾利B式、安行1式土器が多数採集されており、これらは一連の遺跡であると考えられる。このことから、本地域では中期から後期が主体であり、中期までは台地平坦面から縁辺部にかけて立地する遺跡が多くみられるが、後期には低地にも集落が進出していったと推定される。



第5図 下飯貝遺跡周辺主要遺跡分布図



第6図 周辺遺跡分布図
- 10 -

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	備考
1	下飯貝遺跡	真岡市京泉	散布地	奈良・平安、近世	
2	大内院寺	真岡市京泉	集落・社寺跡	奈良・平安	県指定史跡
3	タイ遺跡	真岡市京泉	集落跡	奈良・平安	鉄滓出土
4	堂法田遺跡	真岡市京泉	官館跡	縄文、奈良～近世	県指定史跡
5	京泉シトミ原古墳群	真岡市京泉	古墳	古墳（6c後～7c）	県指定史跡鶴塚古墳を含む 8基確認
6	久保遺跡	市貝町赤羽	集落跡	古墳・奈良・平安	
7	鶴田A遺跡	真岡市鶴田	集落跡	旧石器、古墳・奈良・平安	
8	岡古墳群	真岡市西田井	古墳	古墳	古墳22基確認
9	深田原遺跡	真岡市根本	集落跡	縄文～中世	旧根本深田遺跡
10	柳久保遺跡	真岡市根本	集落跡・古墳	縄文～古墳	
11	根本山古墳群	真岡市根本	古墳	古墳	古墳14基確認
12	大船山古墳群	真岡市根本	古墳	古墳	古墳15基確認
13	山崎古墳群	真岡市根本	集落跡・古墳	縄文～古墳（4c後～6c）	真岡市指定史跡 山崎遺跡を含む
14	大島遺跡	真岡市根本	集落跡	縄文、古墳～平安	
15	神宮寺塚古墳	真岡市根本	古墳	古墳	真岡市指定史跡 森ノ木古墳群内
16	東沼谷中遺跡	真岡市東沼	集落跡	古墳～平安、近世	旧谷中遺跡
17	谷近台遺跡	芳賀町西水沼	集落跡	古墳・奈良・平安	
18	龍の子塚古墳	芳賀町西高橋	古墳	古墳	県指定史跡
19	上り戸遺跡	芳賀町西高橋	集落跡	縄文、平安	
20	井瀬遺跡	真岡市下籠谷	集落跡	弥生～中世	
21	宇大農学部付属農場内遺跡	真岡市下籠谷	散布地	旧石器、縄文・平安	
22	太郎塚遺跡	真岡市上大田和	散布地	古墳（前）、奈良・平安	
23	吹上遺跡群	真岡市堀内	集落跡	縄文、古墳～平安	旧吹上遺跡
24	貫輪前遺跡	真岡市飯貝	集落跡	縄文、古墳、近世	
25	赤曾II遺跡	真岡市下籠谷	集落跡	縄文、古墳～中世	
26	龜山北遺跡	真岡市龜山	集落跡	旧石器、縄文～平安	
27	中郷塚田遺跡	真岡市中郷	集落跡	縄文～平安	旧熱田遺跡
28	下流川遺跡	真岡市西郷	集落跡	縄文、古墳～近世	旧西郷下如來遺跡
29	熊倉遺跡	真岡市西郷、寺久保	集落跡	縄文、弥生、古墳、近世	旧寺久保・熊倉A遺跡
30	城内北A遺跡	真岡市台町	散布地	縄文	
31	城内北B遺跡	真岡市台町	散布地	縄文	
32	萩田遺跡	真岡市荒町	散布地	縄文	
33	城内遺跡	真岡市台町	散布地	縄文	
34	城内東遺跡	真岡市台町	散布地	縄文	
35	旧日本蓄音機工場内遺跡	真岡市台町	集落跡	古墳	
36	台町丸山遺跡	真岡市台町	集落跡	古墳	旧丸山遺跡
37	下高間木西A・B遺跡	真岡市下高間木	集落跡	縄文・弥生、平安、中世	
38	八木岡I遺跡	真岡市八木岡	集落跡	縄文、古墳～近世	
39	大曲北遺跡	真岡市八木岡	集落跡	縄文・弥生、平安	
40	大曲遺跡	真岡市八木岡	集落跡	縄文、古墳・奈良～近世	栃木県指定史跡 狐塚古墳を含む
41	伊勢崎II遺跡	真岡市伊勢崎	集落跡	旧石器～近世	

※ 遺跡 No. は第6図中の番号と対応

(3) 弥生時代

栃木県全体で弥生時代の遺跡は少ない傾向にある。県内で確認されている弥生時代の遺跡は、中期前半までは再葬墓を中心とした墓坑が主であり、中期後半頃から1～2軒の極小規模な集落が形成されるようになる。後期においても集落は小規模であったと考えられているが、詳細は不明である。本地域では、小貝川流域と江川流域にかけて立地する遺跡が多く、とくに小貝川流域に集中する傾向がみられ、県内でも特徴的な様相を呈する。中期では、江川右岸真岡台地の亀山北遺跡で東北系の土器が出土している。後期では、江川左岸真岡台地の熊倉遺跡、井頭遺跡、江川右岸真岡台地の稲荷山遺跡、伊勢崎Ⅱ遺跡で二軒屋式の集落が確認されている。小貝川流域では小貝川左岸長堤台地の長堤遺跡(第5図44)、車堂遺跡(第5図41)、小貝川右岸根本山南麓の柳久保遺跡で二軒屋式・十王台式の集落が確認され、柳久保遺跡と隣接する山崎遺跡でも古墳調査のトレンチ内から二軒屋式の土器が出土している。また、熊倉遺跡で竪穴建物の跡からコバルトブルーのガラス小玉10点が出土したことは特筆される。

(4) 古墳時代

本地域では、数多くの古墳や集落が確認されており、遺跡数は前代に比べて急増する。

古墳時代前期 前期では、小貝川左岸の西根台地が遺跡分布の中心となる。小貝川・五行川流域では前方後方墳が6基確認されており、小貝川流域では小貝川左岸喜連川丘陵南端部の上根二子塚1号墳・3号墳(市貝町)、小貝川右岸根本山南麓の山崎古墳群(山崎1号墳)、西根台地の星の宮浅間塚古墳(益子町)の計4基が確認されている。また、五行川流域では五行川左岸稲毛田台地の浅間山古墳(芳賀町)、五行川右岸真岡台地の亀の子塚古墳(第6図18)の計2基が確認されている。これらの前方後方墳は、4世紀後半～5世紀初頭における小地域の首長墓とされるものである。このほか、小貝川右岸西根台地の市ノ塚遺跡で方墳3基、五行川左岸西根台地の西物井遺跡で方形周溝墓6基、五行川右岸真岡台地の下除遺跡(第5図16)で方墳2基、石島富士山古墳で方墳または円墳、江川右岸真岡台地の稲荷山遺跡で方形周溝墓5基が確認されている。

集落については、五行川流域では五行川左岸西根台地の西物井遺跡、峰高前遺跡、五行川右岸西根台地の谷近台遺跡(第6図17)、五行川右岸真岡台地の長島南遺跡(真岡市)、江川流域では江川左岸真岡台地の井頭遺跡(第6図20)、塚原遺跡、江川右岸真岡台地の稲荷山遺跡、亀山北遺跡、伊勢崎Ⅱ遺跡、小貝川流域では小貝川右岸西根台地の市ノ塚遺跡がある。とくに、市ノ塚遺跡では約70軒、亀山北遺跡では22軒の竪穴建物が確認されており、いずれも一辺7mを超える大型の竪穴建物が存在することから前期の拠点集落と考えられる。このような大規模な集落に対して、峰高前遺跡や伊勢崎Ⅱ遺跡、谷近台遺跡などでは10軒前後と比較的小規模な集落であるが、低地を臨む台地の縁辺に集落を形成する傾向は共通しており、この時期から本格化する低地開発と関連する集落のあり方もみてとれる。

生産遺跡については、江川流域の亀山北遺跡で鍛冶工房、小貝川流域の市ノ塚遺跡から管玉や勾玉を中心とする未製品が多数出土し、割石石材や砥石、作業ビットを伴う玉作の工房跡が確認されている。また、本地域ではS字状口縁をもつ台付甕が五行川流域の峰高前遺跡、谷近台遺跡、鶴田A遺跡(第6図7)、中峯遺跡(芳賀町)、吹上遺跡群(第6図23)、熊倉遺跡、江川流域の亀山北遺跡、伊勢崎Ⅱ遺跡、市ノ塚遺跡でのみ出土しており特筆される。このほか、五行川右岸西根台地の箕輪前遺跡(第6図24)では大型壺を粗製の手握ね土器が取り囲んだ状態で出土しており、古墳時代前期の祭祀形態を知ることのできる遺跡として注目される。

古墳時代中期 中期になると、古墳の分布は小貝川流域から五行川流域へと変化していく。五行川流域では

五行川右岸真岡台地に芳賀郡最古の前方後円墳といわれる大和田富士山古墳（第5図15）がある。また、小貝川右岸西根台地では市ノ塚遺跡で前方後円墳1基、曲田遺跡で方墳と円墳が確認されている。

集落については、前期に続いて低地を臨む台地の縁辺に形成される傾向にあるが、西根台地が遺跡分布の中心となる。小貝川右岸西根台地の市ノ塚遺跡、曲田遺跡、五行川右岸西根台地の東沼谷中遺跡（第6図16）、五行川左岸西根台地の鶴田A遺跡、五行川右岸真岡台地の蟹が入遺跡（第5図10）が確認されるのみで、前期に比べて集落数は減少する。

生産遺跡については、蟹が入遺跡で鍛冶工房、市ノ塚遺跡では管玉を中心に剣形・鏡・白玉の未製品、曲田遺跡では剣形・鏡形・勾玉形・白玉・有孔円板の未製品が多数出土する玉作の工房跡が確認されている。このことから、小貝川右岸流域ではこれらの手工業生産が古墳時代前期から中期にかけて本格的に始まったと考えられる。

古墳時代後期 後期になると遺跡数がさらに増加し、遺跡の立地も低地を臨む台地縁辺部から台地全体へと広がっていく。古墳の分布は前代に引き続き五行川流域が中心となり、大規模な古墳群としては鬼怒川左岸真岡台地の上大曾古墳群（真岡市）、五行川左岸西根台地の京泉シトミ原古墳群（第6図5）、五行川右岸西根台地の鹿古墳群（第5図13）、五行川右岸真岡台地の大和田古墳群（第5図15）、瓢塚古墳（第5図18）、石島古墳群（真岡市）などがある。京泉シトミ原古墳群は、かつて17基の円墳で構成されていたと考えられるが、その半数以上は宅地化・基盤整備事業などにより消滅した。このうち、瓢塚古墳では多くの人物・形象埴輪を伴い、江川流域真岡台地の亀山大塚古墳（真岡市）も同様である。また、石室床面に埴が敷かれる神宮寺塚古墳（第6図15）は被葬者が窯業生産を司る人物と推定されており、近接する南高岡窯跡群（第5図46）との関連が想定される。このほか大小の古墳がすでに消滅していることが分布調査により判明している。

集落については、古墳の分布とほぼ同じ傾向である。おそらく古墳被葬者層の拡大に伴い、古墳と集落がより近接して同様の展開を示すようになったものと考えられる。小貝川右岸西根台地の市ノ塚遺跡や五行川右岸真岡台地の蟹が入遺跡、五行川右岸西根台地の東沼谷中遺跡、五行川左岸西根台地の鶴田A遺跡では前代に継いで集落が営まれ、江川左岸真岡台地の井頭遺跡、西海道遺跡、江川右岸真岡台地の稲荷山遺跡、五行川左岸西根台地の西物井遺跡、峰前遺跡、五行川左岸喜連川丘陵東端の久保遺跡（第6図6）で新たに集落が形成される。

生産遺跡については、小貝川左岸富谷山地の南西斜面にある南高岡窯跡群が、7世紀前半に須恵器窯として操業を開始する。ただし、古墳の副葬品生産を目的とした小規模で単発的な操業であったとみられている（梁木1987）。

（5）奈良・平安時代

本地域では、大規模な集落が複数確認されており、遺跡数は前代に比べて増加し、台地・微高地では大規模集落が形成されるようになる。古代において本遺跡周辺は下野国芳賀郡に属する。芳賀郡は、『倭名類聚抄』によれば14郷からなる下野国最大の郡とされ、現在の真岡市、芳賀町、さくら市氏家、高根沢町を含む広大な地域であったと考えられる。東は八溝山地を挟んで常陸国と、西は鬼怒川を境に河内郡と接していた。なお、飛鳥藤原京では「下毛野國芳賀評口」と記された荷札木簡が出土しており、律令体制下での芳賀郡が7世紀末頃には成立していたと考えられる。本遺跡周辺には、芳賀郡衙とされる堂法田遺跡（第6図4）、芳賀郡衙に付属する寺院（郡寺）とされる大内庵寺（第6図2）などが集中していることから、古代芳賀郡の中心地であったと考えられる。また、中村遺跡（第5図6）や長者ヶ平遺跡（那須烏山市）では芳賀郡衙別院など

と推定される建物群が確認されている。ここでは、本遺跡周辺の官衙・寺院・集落・生産遺跡について概観してみたい。

寺院 本遺跡の北250mに所在する大内廃寺は、昭和40年の水田基盤整備事業等により一部を残して削平されたため、他の堂宇の存在や配置は不明であるが、塔跡と金堂跡が東西に並ぶことから法隆寺式伽藍配置と推定されている(大金1984)。創建時期は出土した面遺齧歯文緑半弁8弁蓮華文鏡瓦や三重弧文字瓦などから7世紀末葉で、軒瓦の同范関係から芳賀郡衙に付属する郡寺と考えられている。また、常陸国新治廃寺系の齧歯文緑半弁16弁蓮華文鏡瓦・均整唐草文瓦は補修期に当たる8世紀中頃のもので、堂法田遺跡、中村遺跡、井頭遺跡、下野国分尼寺、下野薬師寺などと同范である。

官衙関連遺跡 本遺跡の北東850mに所在する堂法田遺跡は、東西約60m、南北300mの範囲で、礎石建物・掘立柱建物で構成される38棟の建物群が確認され、西群で正倉とみられる建物群が整然と並ぶことから芳賀郡衙と推定されている(辰巳・屋代1966ほか)。出土した常陸国新治廃寺系の齧歯文緑半弁16弁蓮華文鏡瓦・均整唐草文瓦は大内廃寺などと同范で、團唐草文緑素弁23弁蓮華文鏡瓦は大内廃寺、下野薬師寺と同范である。存続期間は、出土遺物の年代から大内廃寺と同時期の7世紀末頃に設置され9世紀代にかけて機能していたとみられ、8世紀中頃には瓦葺きの正倉が存在したと考えられる。

集落 本遺跡周辺では、一般的な集落以外に郡衙と関連視されるものや有力農民層の私宅である可能性のあるもの、仏教関連施設が存在が推定されるものがある。江川左岸真岡台地の井頭遺跡は8世紀中葉～9世紀後半を中心とする集落跡で、竪穴建物187軒、掘立柱建物18棟が確認されている。5軒前後で構成される複数の竪穴建物群が一つの集落を形成していることから、農耕集落の典型とする以外に、芳賀郡衙の建設(整備)を目的とした計画村落である可能性が示唆されている(大金1974)。小貝川右岸稲毛田台地の星の宮ケカチ遺跡(第5図39)は、9世紀代の集落跡で竪穴建物24軒、掘立柱建物8棟が規則的に配置されている。多量の黒書土器のほか石帯、水晶製ハート型装飾品、佐波理の匙など特殊遺物もみられることから、律令官人層と関連する富豪層など在地の有力農民層の倉などを含む私宅である可能性が指摘されている(仲山1988)。また、側柱式の掘立柱建物や「寺」の黒書土器が出土していることから、集落内に仏堂が存在したと推定されている(池田2011)。そして、「神役寺」の黒書土器が出土した西物井遺跡、「太田寺」の黒書土器が出土した長沼城跡(第5図11)、「中寺」の黒書土器が出土した鶴田A遺跡、「寺」の黒書土器が出土した彦七新田遺跡(市貝町)などの大規模な集落でも仏堂が存在した可能性がある。さらに、くるま橋遺跡(真岡市)からは小型の銅造鍍金阿彌陀如来坐像1躯が竪穴建物の覆土から出土しており、建物廃絶後に安置(または埋納)されたと推定されている(池田2020)。本遺跡に近接する鶴田A遺跡は、8～10世紀代の竪穴建物52軒や道路状遺構が確認されており、本地域の拠点集落の1つである。これらの遺跡のほかにも、下流川遺跡、くるま橋遺跡、蟹が入遺跡、久保遺跡、市ノ塚遺跡、馬場先遺跡など五行川低地や小貝川低地に面した台地上で集落が確認されている。このような集落のあり方から、奈良時代以降、五行川・小貝川流域の低地部の開発が計画的におこなわれていたことがわかる。

生産遺跡 真岡市の一部と益子町から茨城県桜川市にかけての八満山地沿いには窯業遺跡が多数存在している。本遺跡の南東約7kmにある益子窯跡群は、八満山地の一部である富谷山地が小貝川の支流により開析された支谷沿いに位置しており、西から南高岡窯跡群、西山・本沼窯跡群(第5図47)、原・境窯跡群(第5図43)、栗生窯跡群(第5図42)の4つの支群に分けられる。操業期間は、7世紀前半に南高岡窯跡群で須恵器窯の操業が開始され、7世紀末には西山・本沼窯跡群の西山窯で大内廃寺創建期の瓦が生産される⁽³¹⁾。続く8世紀前半には原・境窯跡群の原東窯が操業を開始し、8世紀中葉には西山窯で下野国分寺創建期や大

内麿寺補修期の瓦が生産される。8世紀後葉～9世紀中葉には、西山・本沼窯跡群の谷津入窯、カスガ入窯、原・境窯跡群のフジナ入窯、丸峰窯、栗生窯跡群の滝ノ入窯、倉見沢窯で操業が開始され、9世紀後葉には栗生窯跡群の脇屋窯や原・境窯跡群南部が操業の中心となる（津野 2022）。また、西山・本沼窯跡群の南約4km、茨城県桜川市の丘陵裾部には堀ノ内窯跡群が所在し、8世紀～9世紀の操業が確認されている（高井・五十川 1988）。さらに、茨城県土浦市からかすみがうら市にかけての筑波山南東麓丘陵部には新治窯跡群が所在し、7世紀末葉～9世紀代の操業が確認されている（赤井 1998）。また、タイイ遺跡（第6図3）では鉄滓が出土しており、堂法田遺跡と関連する鍛冶工房とも推定されている（真岡市教委 2015）。

なお、本遺跡では益子窯産須恵器のほか、三義窯産須恵器、常陸地域産須恵器（堀ノ内窯、新治窯）、東海地方産の須恵器・灰輪陶器、中国産輸入陶磁器が出土しており、製品流通の様相を垣間見ることができる。

また、本遺跡周辺は平安時代末期には大内庄に属していたと考えられるが、真岡市域の荘園である中村庄や八木岡庄などととも史料が少なく成立時期や領域など不明な点が多い。新潟県菟田野古墳群出土の経筒銘によれば嘉応2年（1170）以前に大内庄が存在していたと考えられ^(註2)、領域については「専修寺文書」などによれば芳賀町から真岡市にかけての小貝川と五行川に挟まれた南北に長く連なる地域であったと推定されている（『真岡市史』第2巻）。荘園領主については鎌倉初期の大内庄が全体として吉田家領（本家五辻斎院）であったこと以外は不明であるが、芳賀氏の祖とされる高澄から五代の孫清重には芳賀郡司との所伝があり、芳賀氏が平安後期以降国衙の在庁官人となり武士団として成長していったと推定されている（永原 1984）。

（6）中世

鎌倉時代以降、真岡市域は芳賀氏の支配下となるが、旧二宮町域では長沼氏、水沼氏、宇都宮・芳賀一族の支配下となり、これら領主間での勢力争いの舞台となった。本遺跡周辺は、京泉館跡（第5図34）をはじめ芳賀氏一族の城館跡や墓所があるなど、芳賀氏とのつながりが深い地域である。

芳賀氏の起源については史料が少ないため確証は得られないが、「芳賀・小宅系図」によれば、寛和元年（985）、花山天皇の怒りにふれた清原高重が、下野国芳賀郡鹿島戸郷松原の里に配流されたのが始まりとされる。その後、後三年の役（1083～1088）の際、芳賀高澄が戦功をあげたことにより後冷泉天皇から祖先の罪を許されている（芳賀 1976）。これ以後、芳賀氏は益子氏とともに「紀清両党」とよばれ、宇都宮氏の重臣として活躍する。この伝承をすべて史実と認めることはできないが、下野国に貴族が配流され権力をふるうことは史実としてあり（『栃木県史』通史編古代2）、芳賀氏の祖がそうした形で上着し、中世武士団として宇都宮氏に付き従っていったと推定される。

城館跡については、京泉館跡など12か所が存在したとされるが、半数が宅地・水田化により消滅している。芳賀氏の居城については、真岡市京泉付近→真岡市若色付近→御前城→芳賀城（真岡城）と変遷すると考えられているが（安永 2011）、京泉と若色についてはその位置に諸説あり特定できていない。ここでは、本遺跡周辺の芳賀氏に関連する城館跡について概観してみたい。

京泉館跡 本遺跡の北西400mに所在する。伝承によると、清原真人滝口藏人高重は寛文元年（985）花山天皇の怒りによって京泉地内の鹿島戸に配流されたが、領地を拡大し京泉屋敷（本殿屋敷か）を構えたという（芳賀 1976）。明治20年（1887）頃までは四方に土塁を巡らしてあったといわれ、昭和8年頃までは二重の堀と土塁が残っていたというが（芳賀郡市文化財保護審議会連絡協議会 1998）、現在は宅地・水田化され消滅している。この館は別名御前館ともいう。鹿島戸には芳賀氏の墓所がある（栃木県教委文化課編 1982）。

御前城跡 本遺跡の南西約4kmに所在する（第5図25）。別名芳賀古城といい、承保3年（1076）に芳賀

高澄が築城し、芳賀高親が修築、以後芳賀氏の本拠となったという。五行川左岸西根台地上に築かれた平城で、その規模は東西約220m、南北約200mの方形を呈したものであったが、天正5年(1577)の芳賀城普請に伴い廃城になったという。明治初期頃には消滅し、現在は宅地・水田・真岡中学校の敷地となっている(栃木県教委文化課編1982)。平成15年度の南濠の発掘調査では、13～14世紀の土器が出土遺物の中心を占め、16世紀に比定できるかわらけや内耳土器などは、南濠の上端から約80cm以内の上層から出土している。このことから、御前城は14世紀には機能していたが、16世紀には少なくとも南濠の大部分は埋没していたと推定されている(真岡市教委2015)。

芳賀城跡 本遺跡の南西約4kmに所在する(第5図27)。築城は、①貞治元年(1362)芳賀高貞説(統群書類従・長連寺文書)、②天文元年(1533)芳賀高経説(広沢家古記録)、③天正5年(1577)芳賀高継説(日下田家文書・下野國誌)の3説がある。ただし、天正5年に堅固な城普請があったことは「日下田家文書」により確実である。五行川右岸真岡台地上に築かれた城跡で、昭和5年の「真岡城絵図」では大手口の北側に3郭、南側に1郭がおかれる連郭式平山城で、その規模は周囲の堀を含め東西約300m、南北約550mであったが、慶長2年(1597)の改易に伴い廃城になったという。現在は、真岡小学校の敷地と城山公園となっているが、北側と西側には当時のものとみられる堀や土塁が残されている。平成19年度の発掘調査では、二の丸と三の丸を区画する堀跡から16世紀のかわらけが出土しており、芳賀城が城として機能したのがこの頃と推定されている。また、御前城の発掘調査成果と考え合わせると、芳賀城の築城時期は、高貞が14世紀に御前城から移転築城し、高継が後北条氏の侵攻に備えて堅固な城郭に改築したと考える説が有力視されている(真岡市教委2015・栃木県教委2011)。

このほか、本地域には中村城跡(第5図8・中村氏)、八木岡城跡・下陰遺跡(第5図16・八木岡氏)、峰高城跡(第5図21・宇都宮氏家臣)、長沼城跡(第5図11・長沼氏)などの城館跡があり、鹿島戸観音堂と海潮寺(第5図26)には芳賀氏の墓所と伝わる層塔や宝篋印塔が残されている。

社寺については、延喜式内小社の天前神社(第5図29)北関東における浄土真宗布教の中心となった高田山寺修寺(第5図23)のほか、海潮寺、遍照寺(第5図8)など本地域を支配していた氏族に関連する社寺が多く存在している。

墓域については、市ノ塚遺跡で14～15世紀にかけての方形区画施設を伴う墓域が確認されており、高田山寺修寺との関連が指摘されている(藤田2008)。また、井頭遺跡で15～16世紀、下高間木西A・B遺跡(第6図37)で16世紀の溝で区画したなかに地下式坑や方形堅穴などが密集した墓域が確認されている。このほか、下陰遺跡で地鎮に関連したとみられる15世紀末～16世紀後半の輪宝墨書土器が出土しており、井頭遺跡でも2枚を合口にしたかわらけのなかに銭貨を埋納した地鎮に関連する遺構が確認されている。

(7) 近世

中世以降、真岡市域は芳賀氏の支配下にあったが、慶長2年(1597)に宇都宮氏・芳賀氏が改易となり、慶長6年(1601)に宇都宮城代をへて浅野長重が真岡城代として赴任したことで真岡藩が成立した。慶長16年(1611)に長重が移封されると、堀親良が浅野氏に代わって入国し、寛永4年(1627)には稲葉正成が堀氏に代わって入国した。正成の子正勝は老中をはじめ重職を歴任し、寛永9年(1632)には相模国小田原城主となり、真岡藩は廢藩となった。以後真岡領は小田原藩の飛び地として残り、真岡城跡に奉行屋敷を設けて真岡奉行が統治にあたり、天明3年(1782)には小田原藩により上知され幕府領となった。

本地域では、桜町領を統治するため元禄12年(1699)に桜町陣屋(第5図20)、真岡領を統治するため寛政9年(1797)に真岡陣屋(真岡市)、寛政11年(1799)に東郷陣屋(真岡市)が建てられ、農村復興

などの拠点となった。平成25年度の発掘調査では近世の井戸跡が確認され、「柳田久一家文書 真岡陣屋絵図」によれば、これが寛政9年(1797)に幕府代官竹垣三右衛門の陣屋として建てられた真岡陣屋の井戸と考えられている(真岡市教委文化財課編2015)。このほか、八木岡Ⅰ遺跡(第6図38)で約100点の経石と経容器(壺)が確認されており、近世の経塚と推定されている。

注

- 1 大橋泰夫氏は、西山窟採集の女瓦の型押文を検討した結果、大内廃寺創建期の三重瓦文字瓦と同じ型押文であることを確認し、西山窟が大内廃寺創建期であることを明らかにした(大橋2001)。
- 2 経筒には「嘉応二年庚寅七月廿三日 下野国大内厚木住回道十八人」とあり、嘉応二年に大内荘厚木の住人が経筒を埋納した勧進者として名を連ねている(新潟県史料編2)。このことから大内荘の成立時期は1170年以前と考えられ、東国における寄進地系荘園成立時期が12世紀代である点からも妥当である。また、当時は荒廃公田などにより財政的危機にあった国府が未開地の開発や荒廃した公田の再開発を進めており、荘園の成立はこれらの主体となった在地領主層の成立を背景として考えなければならない。

参考文献

- 赤井博之 1998 「古代常陸国新治窟跡群の基礎的研究(1) 一奈良・平安時代の須恵器編年を中心に」 『豊良岐考古』第20号 豊良岐考古同人会
- 池田敏宏 2011 「『寺』 銘書書土器と、古代仏教系遺物、仏堂建物跡の共時性(覚書) — 栃木県域事例を対象に —」 『研究紀要』第19号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 池田敏宏 2020 「Ⅳ. 特記事項 4. 銅造鍍金阿弥陀如来坐像の位置付け」 『くるま橋遺跡Ⅱ』 栃木県埋蔵文化財調査報告第402集
- 池田敏宏 2008 「Ⅱ. 遺跡の立地と環境 2. 歴史的環境 [2] 中世の遺跡」 『下野遺跡Ⅰ』 栃木県埋蔵文化財調査報告第310集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 大金宣亮 1984 「第5章 歴史時代 三 大内廃寺跡」 『真岡市史』第1巻 考古資料編 真岡市
- 大金宣亮 1987 「下野国府と芳賀郡部」 『真岡市史』第6巻 原始古代通史編 真岡市
- 大金宣亮 1974 「第5章 総括」 『井頭』 栃木県埋蔵文化財調査報告第14集 栃木県教育委員会 p.337
- 大橋泰夫 2001 「下野の瓦生産について」 『栃木県考古学会誌』第22集 栃木県考古学会
- 大橋泰夫 2007 「紙上報告 堂法田遺跡/中村遺跡」 『栃木県考古学会シンポジウム上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』 栃木県考古学会
- 木本雅康 1997 「古代伝路の復元と問題点」 『古代交通研究』7 古代交通研究会 八木書店
- 杉原昭博 2011 「改訂増補 近世栃木の城と陣屋 随想舎
- 高井穂三郎・五十川伸矢 1988 『常陸国新治郡上代遺跡の研究Ⅱ』 甲陽史学会
- 辰巳四郎・屋代方子 1966 『塔法田遺跡発掘調査略報』
- 津野 仁 2022 「谷津人窟跡群・カスガ入窟跡群・西山窟跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第407集
- 栃木県教育委員会文化課編 1982 『栃木県の中世城館跡』 栃木県教育委員会
- 栃木県史編さん委員会編 1980 『栃木県史』通史編2 古代2 栃木県
- 徳田浩淳再校訂 1989 『下野國誌』(原著は河野守弘が嘉永元年(1848)に出版。初版は1968年に佐藤行哉が校訂) 下野新聞社
- 永原慶二 「真岡地方における荘園と武士」 『真岡市史案内』第3号 真岡市教育委員会
- 仲山英樹 1988 「星の宮ケチ遺跡の検討—集落出土の墨書土器をめぐって—」 『栃木県考古学会誌』第10集 栃木県考古学会
- 新潟県編 1981 『新潟県史』資料編2 原始・古代2 文獻編 新潟県
- 芳賀郡市文化財保護審議会連絡協議会 1998 『芳賀の文化財』第19集 城館・陣屋跡編
- 芳賀善次郎 1976 『芳賀氏興亡史』ポプラ印刷
- 梁木 誠 1987 「南高岡窟跡群採集の須恵器」 『真岡市史案内』第6号 真岡市教育委員会
- 藤田直也 2008 「第Ⅶ章 調査の成果」 『市ノ塚遺跡1区(古墳時代2・古代・中近世)』 栃木県埋蔵文化財調査報告第303集
- 真岡市教育委員会 2015 『真岡市文化財保護年報』平成25年度
- 真岡市教育委員会事務局文化財課編 2015 『真岡市遺跡分布調査報告書』真岡市教育委員会
- 真岡市史編さん委員会編 1984 『真岡市史』第1巻 考古資料編 真岡市
- 真岡市史編さん委員会編 1987 『真岡市史』第6巻 原始古代中世通史編 真岡市
- 真岡市教育委員会事務局文化財課編 2005 『真岡市遺跡分布調査報告書』真岡市教育委員会
- 屋代方子 1984 「堂法田(塔法田堂址)遺跡」 『栃木県考古学会誌』第8集 栃木県考古学会
- 安永貞一 2011 「(65) 真岡城跡・城内遺跡」 『栃木県埋蔵文化財保護行政年報33』 栃木県埋蔵文化財調査報告第332集 栃木県教育委員会

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法（第7図）

（1）調査区の設定

本遺跡は、五行川左岸の台地南西端部に位置している。調査区は、遺跡中央を東西に走る国道121号を挟んで北側は台地、南側は台地先端の南斜面から低地にあたる。発掘調査にあたっては、国道121号を境界として2か所の調査区を設定し、北側を北区、南側を南区とした。北区の調査対象面積は744㎡、南区の調査対象面積は379㎡の計1,123㎡である。

（2）発掘調査の方法

表土については基本的に重機によって掘削したが、南区のうち国道121号に面した部分は人力によって掘削した。その後、人力による遺構平面プランを検出し、遺構の形状や重複関係の確認をおこなった。

なお、南区は発掘調査範囲が狭小であり隣接する道路や水路を保護するため、国道121号に面した部分と水路に面した部分についてはトレンチによる遺構確認をおこなった。このうち、水路南側の7トレンチにおいては、表土下に遺物包含層が残存していることから、包含層の性格等を確認するためトレンチを拡張し、AからD区の4つに分けて層位ごとに掘削し、遺構確認をおこなった。

遺構確認後は、堅穴建物や溝など大形の遺構は土層観察用ベルトを設定し、土坑やピットなど小形の遺構は埋土を半載して人力での掘削をおこなった。土層観察用ベルトは各遺構の埋土堆積状況などを観察し、分層作業や写真撮影、断面図化作業をおこなった後に取り除いた。

出土した遺物は、遺構に伴う可能性の高い遺物を中心に、出土状況の記録写真やトータルステーションを用いて出土位置を記録し、取り上げをおこなった。遺物包含層から出土した遺物は出土状況の記録写真を撮影し、層位ごとに取り上げをおこなった。

遺構測量は、現地調査で取得した数値データ、オルソ画像等をもとに写真測量により平面図および断面図を委託により作成した。

遺構写真の撮影は、デジタルカメラを使用して実施し、その後ハードディスクによるデータの記録保存を図った。調査区の全景写真はドローンによる空中写真撮影を委託により実施した。

理化学分析は、遺構の年代や石材流通などに関する情報収集や、遺跡周辺における古環境を復原することを目的として、放射性炭素年代測定、テフラ分析、花粉・珪藻分析、炭化材の樹種同定、紡錘車の石材同定、銭貨の蛍光X線分析を委託により実施した。試料採取は委託業者により高純度での分析試料採取をおこない、実験室内で同定作業を実施した。また、金属製品の一部は、脆弱で劣化のおそれがあることからX線透過撮影後錆等を除去する保存処理を委託によりおこなった。

（3）整理作業の方法

報告書作成のための整理作業は、出土遺物を水洗し、遺跡略号、調査区、遺構名、遺物取り上げ番号を注記した。そして、遺物を種別・器種別に分類し、土師器、須恵器、陶磁器等のそれぞれについて接合をおこなった。その後、各遺構の年代や性格を明らかにするうえで重要な報告書掲載遺物を選別し、欠失部はセメント系修復用材（クレイテックス）を充填して復元した。復元を終えた遺物は順次、写真撮影・実測・拓本・トレースをおこなった。

遺物写真の撮影は、デジタルカメラを使用しておもに委託により実施し、ハードディスクによるデータの記録保存を図った。遺物図は実測後スキャナでパソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いてデジタルトレ

ースし、報告書掲載図とした。

遺構図は委託成果品に土層注記などの注釈を加え、報告書掲載図とした。

これらの作業と併行して、本文・遺物観察表などの原稿執筆をおこない、報告書の編集・校正作業を経て、発掘調査報告書を刊行した。

報告書の掲載遺物については、台帳作成後収納作業をおこなったが、掲載されなかった遺物については、調査区・遺構・種別ごとに分類して収蔵庫に収納した。

第2節 調査の概要 (第7図)

調査前の現況は水田であり、昭和40年の五行川改修に伴う水田基盤整備事業やそれ以前の開墾により旧地形はあまり残されていないが、遺構の残存状況は比較的良好であった。

検出した遺構は、北区で竪穴建物7軒、掘立柱建物2棟、土坑1基、ピット23基、溝4条、道路状遺構2条、性格不明遺構2基、南区で土器集積遺構1基である(第7図)。このうち、SD-6、SD-38、SF-5は近現代の遺構であるが、米軍の空中写真や近世の絵図で長方形あるいはL字状の区割や道を確認することができ、少なくとも近世までさかのぼる可能性がある。このため、これらについても遺構として扱うこととした。また、南区では台地端部から低地にかけて傾斜する旧地形を確認し、低地で土器集積遺構を検出した。このため、低地の調査成果は、北区の遺構・遺物と分けて掲載することとした。

竪穴建物は、古墳時代中期1軒、後期1軒、終末期1軒、古墳時代終末期～奈良時代前半1軒、奈良時代2軒、古代1軒である。北区のSF-36より東方を中心に分布しており、南区は低地であることから本調査区が集落域の南限にあたりとみられる。SI-1からは鉄鏝(平根五角形鏝)、SI-2からは大内廃寺と同范の宇瓦や石製紡錘車、SI-3からは石製模造品が出土している。

掘立柱建物は、平安時代1棟、時期不明1棟である。土坑・ピットは時期不明のものが多く、SB-9と主軸方位が一致するSP-11～SP-13は平安時代の柵列である可能性がある。

溝は、中世2条、近現代2条である。とくに、中世のSD-37からは中国産輸入陶磁器や常滑・瀬戸産陶器が出土しており、流れ込みではあるが弥生時代後期の壺、古代の土師器・須恵器、三足土器が出土している。

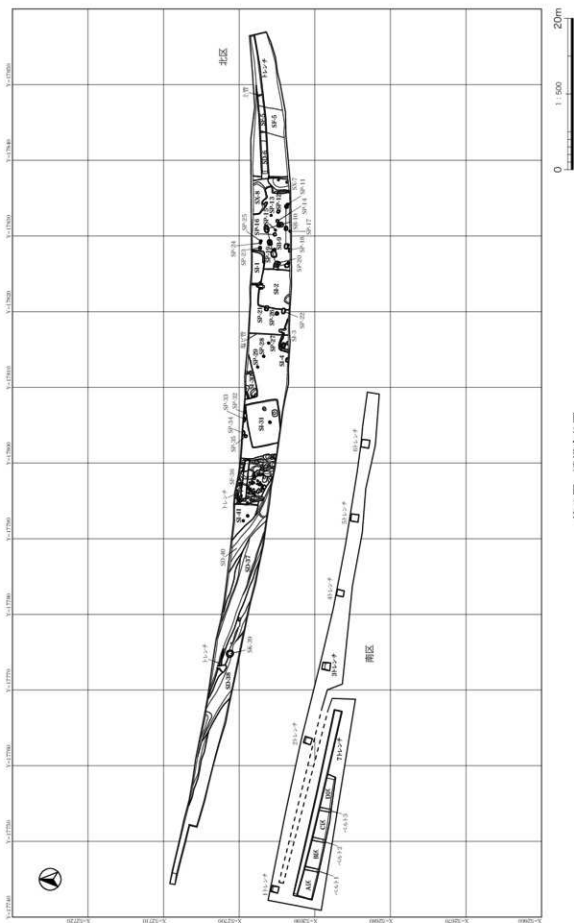
道路状遺構は、奈良～平安時代1条、近現代1条である。このうち、SF-36は主軸を北に延長すると大内廃寺の塔と金堂の中間点にあたることから、大内廃寺へ向かう参道と考えられる。

また、南区の土器集積遺構からは奈良～平安時代の土師器・須恵器を主体に、墨書土器、製塩土器、円面硯、鉄滓、漆付着土器などが出土し、その上層の遺物包含層中からは古墳時代前期のS字状口縁台付甕、Ⅱ・Ⅲ層中から羽口片が出土している。

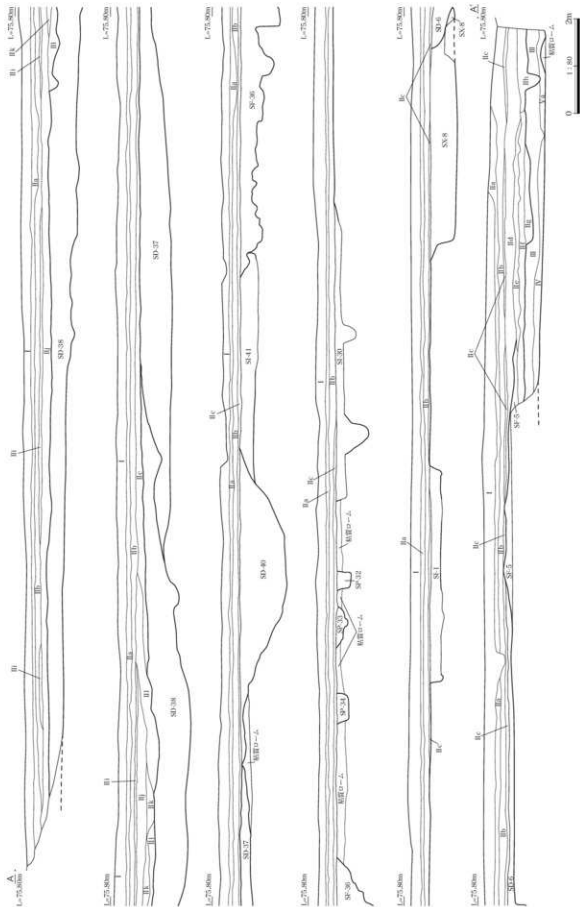
第3節 基本土層 (第8図)

基本層序第1・2地点は北区の台地、第3地点は南区の低地、第4地点は南区の台地先端の南斜面にあたる。第2地点周辺は、昭和40年の水田基盤事業、第4地点ではSF-5の造成による改変を受けている。層位は大きくⅠ～Ⅴ層に分かれ、Ⅱ層はさらに細分される。遺構確認面は、北区のSF-5より西側ではローム層上面、東側ではⅢ層上面、南区ではローム層は認められずⅣ層下面が遺構確認面となる(第8図)。なお、北区と南区の比高差は1.0～1.5mあり、北から南に向かって傾斜している。

台地となる北区ではⅠ層～Ⅱ層は共通して確認できるが、それ以下はSF-5の東西で堆積状況が異なる。Ⅰ層は現代の水田耕作土(表土)で、Ⅱa層はその床土にあたる。Ⅱb・Ⅱc層は旧水田耕作土と床土にあたり、



第7図 遺構全体図



第9図 北区北壁断面図

SF-5より西側では、Ⅱc層の下位で遺物包含層が確認されず、直下が粘質ローム層（地山）となり、最上部に男体今市スコリア（Nt-D）、男体七本桜軽石（Nt-S）が堆積している。また、SD-6およびSD-37付近では粘質ローム層の下位で砂質ローム層、SD-38付近では砂質ロームの下位で砂礫層を部分的に確認している。SF-5より東側では、Ⅱc層の下位に水田基盤事業に伴う客土層であるⅡd・Ⅱe層が堆積している。Ⅱe層の下位には、それ以前の耕作土または旧表土とみられるⅡf層が堆積している。Ⅲ・Ⅳ層は古代の遺物包含層であり、Ⅴ層はローム層直上の堆積層で古代またはそれ以前の遺物包含層と考えられる。Ⅴ層の下位には粘質ローム層（地山）が堆積している。

台地先端の南斜面から低地となる南区は、第3地点では第2地点のⅠ・Ⅱa層、Ⅲ層に相当する堆積層が確認できるが、第4地点ではSF-5の造成により上位面は削平され、Ⅲ層に相当する堆積層のみ確認できる。Ⅳ層は土師器や須恵器、瓦が少量出土していることから、Ⅲ層と同じく古代の遺物包含層と考えられる。Ⅴ層は自然堆積層とみられ、その下面ではローム層は確認できず、白色粘土層になるとみられる。

調査区内での旧地形は、北区の第1地点と第2地点の粘質ローム層上面の標高差が約1mあることから、東から西へ傾斜する地形であったとみられる。また、いずれもローム層上面は地形変化が認められないことから、SF-5付近が台地端部でそれより東側は低地であったと考えられる。なお、北区西半の調査で低地とみられる堆積層が確認できないことから、第4地点周辺から北西方向にのびる台地と低地の境は本調査区より西側であったと想定できる。一方、南区1～3トレンチでは表土や人為的盛土が厚く堆積しており遺物包含層であるⅢ層が確認されず、4・5トレンチではⅢ層が確認できることから、1～3トレンチ付近は低地、4・5トレンチ付近が台地端部であったと推定される。6トレンチ付近では、Ⅲ層上面が削平されているものの周辺トレンチの状況などから、台地端部であったと考えられる。また、第2・4地点のⅢ層上面の標高は74.8mであり、この2地点を結んだあたりが台地と低地の境であった可能性が考えられる（第8図）。

以上のように、本調査区周辺では西根台地が五行川低地に向かってなだらかに傾斜し、南区4～6トレンチ付近は台地が南へ向かって舌状に張り出す旧地形であったと推定される。

第4節 北区の遺構と遺物

(1) 竪穴建物

竪穴建物 SI-1 (第10・11図、第2表、図版四・二〇・三一)

重複関係 SI-2のカマドを含む北東隅を掘り込んでいる。主軸はN・7°Eである。

規模・形状 東西4.57m、南北は約2/3が調査区外となるため不明である。主柱穴・貯蔵穴・間仕切り溝・入口施設は、床面においても貼床除去後にも認められなかった。

壁・壁溝 壁は確認面より約20cmの深さで、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、南東隅と南西隅で確認されており、全周はしていない。南西隅では貼床土を掘り込んでいることから、貼床後に壁溝を掘削したと考えられる。

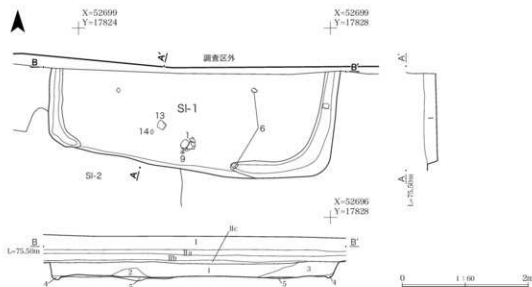
床面・貼床 床面の大部分は地山(ローム層)で、一部でローム粒を多量に含む明褐色土による貼床が施され、床は硬くしまっている。

掘方 壁際および隅部において床面から2~6cmの深さで掘り込みが確認される以外は、ほぼ平坦である。

埋土 ローム粒を多量に含む暗褐色土(1層)を主体とし、埋土全体に男体今市スコリア(Nt-I)と男体七本桜軽石(Nt-S)を微量含む。調査時の所見では、1・2層は人為埋没で、3層は壁面崩落などによる自然埋没の可能性がある。1~3層がSI-1埋土、4層が壁溝埋土、5層が貼床埋土である。

遺物出土状況 全体的に遺物量がやや少ない。遺物の大半は東半部からの出土で、床面直上からは土師器の鉢(1)、砥石(13)が出土している。このほか、須恵器の坏(4~7)、高台付坏(8・9)、甕(10~12)、平根五角形籾(14)が埋土中から出土している。

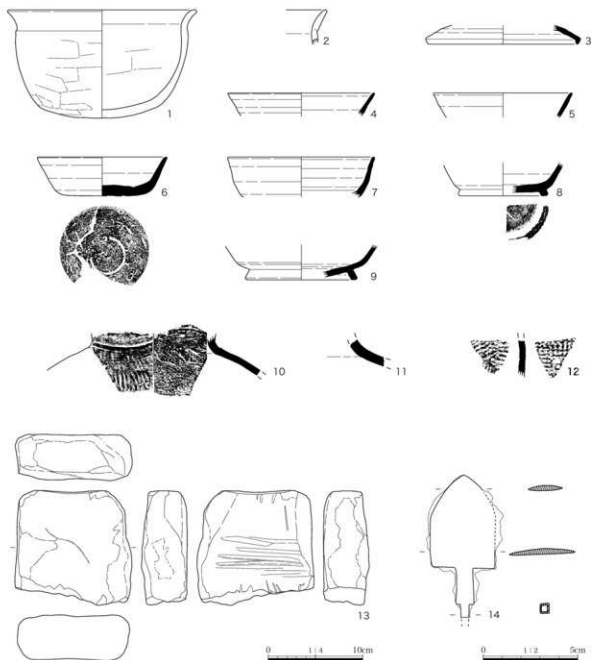
出土遺物 須恵器を主体としており、益子窯産以外に三森窯産・新治窯産の坏や甕、東海産とみられる坏が



- SI-1
- | | |
|---------|---|
| 1 暗褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック(0.5~6cm)微量。炭化物粒少量。炭化物(0.5~1cm)少量。焼土粒少量。暗褐色・黒褐色土ブロック(0.5~3cm)微量。Nt-Iスコリア・Nt-S軽石微量。しりりあり。SI-1埋土。 |
| 2 明黒褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック(0.5~1cm)微量。炭化物粒微量。炭化物(0.5~1cm)少量。焼土粒微量。Nt-Iスコリア・Nt-S軽石微量。しりりあり。SI-1埋土。 |
| 3 褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック(0.5~1cm)微量。Nt-Iスコリア・Nt-S軽石微量。しりりあり。SI-1埋土。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック(0.5~2cm)少量。Nt-Iスコリア・Nt-S軽石微量。しりりあり。壁溝埋土。 |
| 5 明褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック(0.5~3cm)少量。Nt-Iスコリア・Nt-S軽石微量。しりり貼床埋土。 |

第10図 SI-1遺構図

出土している。須恵器蓋（3）・坏（6）・高台付坏（8）はいずれも8世紀後半のものである。4は他のものに比べて胎土が緻密な東海産とみられる坏で、5は灰白色系の三義窯産の坏である。このほか、6世紀末～7世紀前半の土師器の鉢（1）、7世紀以前の黒色雲母粒を含む新治窯産の甕（10）や下野系須恵器甕（12）、9世紀第2四半期～中頃の流ノ入・倉見沢窯段階の高台付坏（9）などの遺物が混入している。



第11図 Si-1出土遺物実測図

第2表 SI-1 出土遺物観察表

採集番号	種別・器種	法量 (cm/g)	成形技法・特徴	胎土	色調・構成	残存率	出土位置	備考
1	土師器 鉢	口径 (19.8) 底径 - 器高 11.4	内面:口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ナデ。 外面:口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラナデ。	石英粒・長石粒・黒雲母粒少量、砂粒微量	内:にぶい黄緑 10YR6/3 外:にぶい黄緑 10YR7/3 構成:不良	口縁~体部 1/2 底部欠存	1層床上 2cm SI-1No.3 SI-1東平	6C末~7C前半
2	土師器 甕	口径 - 底径 - 器高 [3.6]	内面:ヨコナデ。 外面:ヨコナデ。頸部に輪轆痕残存。	白色粒・砂粒少量、黒雲母粒少量	内:にぶい赤褐 5YR5/4 外:にぶい赤褐 5YR5/4 構成:普通	口縁部破片	SI-1	
3	須恵器 甕	口径 (15.8) 底径 - 器高 [2.0]	内面:ロクロナデ。 外面:ロクロナデ。	白色粒多量、砂粒微量	内:灰 N5/ 外:灰 N6/ 構成:良好	口縁部 1/4	SI-1	8C後半 産地不明
4	須恵器 環	口径 (15.4) 底径 - 器高 [2.5]	内面:ロクロナデ。 外面:ロクロナデ。	黒色粒・透明粒少量	内:灰白 2.5Y7/1 外:黄灰 2.5Y6/1 構成:良好	口縁部 1/12	SI-1東平	産地不明?
5	須恵器 環	口径 (14.6) 底径 - 器高 [2.5]	内面:ロクロナデ。 外面:ロクロナデ。	砂粒微量	内:黄灰 2.5Y7/2 外:灰白 2.5YR/2 構成:普通	口縁~体部 1/12	SI-1東平	三産源?
6	須恵器 環	口径 13.6 底径 8.0 器高 4.1	内面:ロクロナデ。 外面:ロクロナデ。底部回転ヘラナデナリ。	石英粒・長石粒・砂粒少量	内:黄灰 2.5Y7/2 外:黄灰 2.5Y5/1 灰黄 2.5Y7/2 構成:不良	口縁部 1/4 体~底部 3/4	1層 SI-1No.1 1層床上 3cm SI-1No.7 SI-1東平	8C後半 産地不明
7	須恵器 環	口径 (15.5) 底径 - 器高 [4.2]	内面:ロクロナデ。 外面:ロクロナデ。	白色粒多量、砂粒微量	内:灰白 N7/ 外:灰白 N7/ 構成:良好	口縁部一部 体部 1/8	SI-1東平	産地不明
8	須恵器 高台付杯	口径 - 底径 (9.2) 器高 [3.5]	内面:ロクロナデ。 外面:体部ヨコナデ。底部回転ヘラナデナリ。高台部付。底部研書。内外面自然釉付着。	白色粒多量、砂粒微量	内:黄灰 2.5Y6/1 外:黄灰 2.5Y5/1 黄褐 2.5Y3/1 構成:良好	底部 1/4	SI-1	8C後半 産地不明
9	須恵器 高台付杯	口径 - 底径 (11.4) 器高 [3.7]	内面:ロクロナデ。 外面:体部ヨコナデ。底部ロクロナデナリ。高台部付着。	石英粒・長石粒多量・砂粒微量	内:灰 N6/ 外:灰 N6/ 構成:良好	底部 1/8	1層 SI-1No.2	9C第2段半間~4中頃 磁石噴布(磯ノ人)
10	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [4.3]	内面:頸部ナデ。胴部同心円文で具飾。 外面:頸部ナデ。胴部平行叩き能力ナリ。 内外面厚粒。	白色粒少量、石英粒・黒雲母粒・砂粒微量	内:にぶい黄緑 10YR7/2 外:黄灰 2.5Y7/2 構成:不良	頸~胴部破片	SI-1東平	古墳 7C以前 新治京産
11	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [2.8]	内面:ヘラナデ。 外面:ヨコナデ。	石英粒・長石粒少量、砂粒微量	内:灰白 2.5YR/2 外:灰白 2.5YR/2 構成:良好	胴部破片	SI-1	産地不明
12	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [3.8]	内面:同心円文叩き。 外面:直格子叩き。	白色粒少量、砂粒微量	内:灰 N5/ 外:明褐色 SP7/1 構成:良好	胴部破片	SI-1	古墳 7C以前 下野系須恵器
13	石製品 砥石	長 [112.1] 幅 [112.4] 厚 [4.8] 重 1214.67				左側面は成形時の敲打痕が顕著で、表面・右側面にも敲打痕が現る。小口は片面研削。5面を使用しており、表面および小口右側面は平面に研削。表面は線状の研削痕が縦・横方向にみられ、幅 4mm前後の浅い塊状の研削痕が縦方向に4条現る。底面は粗砂目。	小口一部欠損	1層床上 5cm SI-1No.5
14	鉄製品 鉄鏝	長 [17.5] 幅 3.8 厚 0.5 重 22.99				平根式の鉄鏝で、鏝身部の平面形が五角形を呈し、基部の先端を欠損する。鏝下部は少し内へ広がらる。又細写写真で観察しても鏝は持たないと判断できる。鏝身部長 4.8~4.9cm、鏝身幅 3.4cm、頸部長 1.9cm、頸部幅 0.8cm(上部)~1.0cm(下部)、頸部厚 0.5cmで、頸部の断面形は長方形を呈する。基部の断面形は 0.5cm四方の正方形を呈する。頸部と基部の境界は上下面に段を持たない。	頸先端欠損	1層床上 5cm SI-1No.4

竪穴建物 SI-2 (第12~15図、第3表、図版四・五・二〇・二一・三)

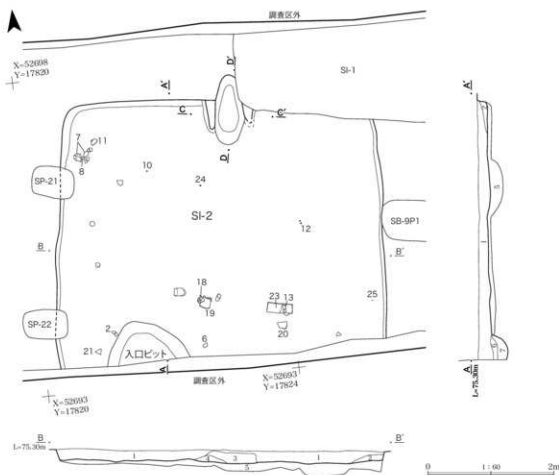
重複関係 SI-1に北東隅を掘り込まれ、西はSP-21・SP-22に掘り込まれている。主軸はN-5°Eである。

規模・形状 東西5.22m、南北は検出長4.3m(推定4.6m)である。貯蔵穴・塚溝・間仕切り溝は、床面においても貼床除去後にも認められなかった。

壁 壁は確認より約20cmの深さでほぼ垂直に掘り込まれている。

床面・貼床 床面はローム粒を多量に含む褐色土による貼床が施され、床は硬くしまっている。粘土粒や黄褐色粘土粒・ブロックを含むことから、カマドをつくり替える際に出た土を貼床土として使用した可能性がある。また、貼床は西平で薄く、東平で約15~20cmと厚くなるが、これは掘方掘削後の凹凸を均し、床面を平坦にするためと考えられる。

掘方 床面からの深さは5~10cmで、全体的に凹凸が目立つ。また、不整形の土坑状の掘り込みが複数あり、



SI-2

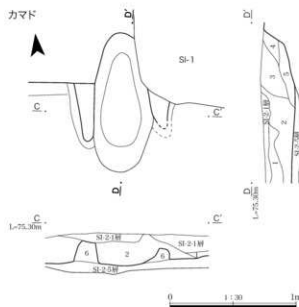
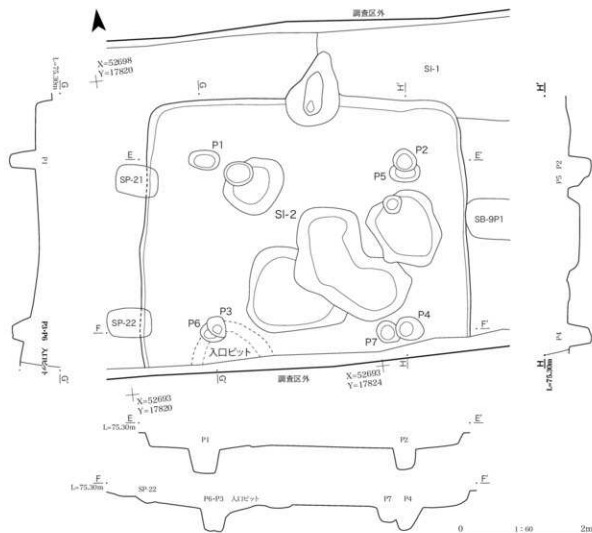
- | | |
|---------|--|
| 1 黒褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック (0.5~1cm) 微量。炭化物粒少量。炭化物 (0.5~1cm) 微量。焼土粒少量。焼土ブロック (0.5~1cm) 少量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック (0.5~2cm) 微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。SI-2埋土 |
| 2 暗黒褐色土 | ローム粒微量。ロームブロック (1~4cm) 少量。炭化物粒微量。焼土粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。SI-2埋土 |
| 3 黄褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック (0.5~1cm) 少量。炭化物粒微量。炭化物 (0.5~1cm) 微量。焼土粒少量。焼土ブロック (0.5~1cm) 微量。黄褐色粘土粒多量。黄褐色粘土ブロック (1~8cm) 多量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまり強。SI-2埋土 |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒微量。ロームブロック (0.5~1cm) 少量。炭化物粒少量。炭化物 (0.5~1cm) 微量。焼土粒多量。焼土ブロック (1~3cm) 少量。黄褐色粘土粒多量。黄褐色粘土ブロック (1~2cm) 多量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。SI-2埋土 |
| 5 褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック (1~5cm) 多量。炭化物粒少量。焼土粒微量。焼土ブロック (0.5~2cm) 微量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック (1~3cm) 微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。貼床埋土 |
| 6 明黒褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック (0.5~1cm) 微量。炭化物粒微量。炭化物 (0.5cm ほど) 微量。焼土粒微量。焼土ブロック (0.5~1cm) 微量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック (0.5~1cm) 微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。入口ピット埋土 |
| 7 明褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック (0.5~1cm) 多量。炭化物粒微量。焼土粒少量。焼土ブロック (0.5~1cm) 微量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック (0.5~1cm) 微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。入口ピット埋土 |

第12図 SI-2遺構図

調査時の所見では他の貼床土と異なり、ローム・焼土・黒色土などを主体とする土で埋め戻されていたとされている。

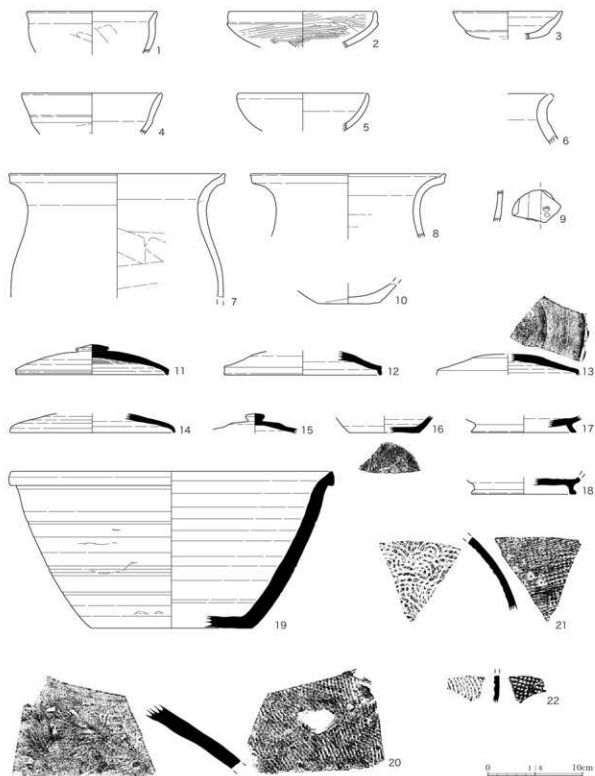
埋土 ローム粒や炭化物・焼土粒を少量含む黒褐色土(1層)を主体とし、埋土全体に男体今市スコリア(Nt-I)と男体七木桜軽石(Nt-S)を微量含む。基本的に人為埋没で、1~4層がSI-2埋土、5層が貼床埋土、6・7層が入口ピット埋土である。カマドは1~5層が天井崩落土などの埋土、6層がカマド袖構築材である。

柱穴 主柱穴は4本で、新旧合わせると7本である。すべて貼床除去後に確認し、平面プランは円形または

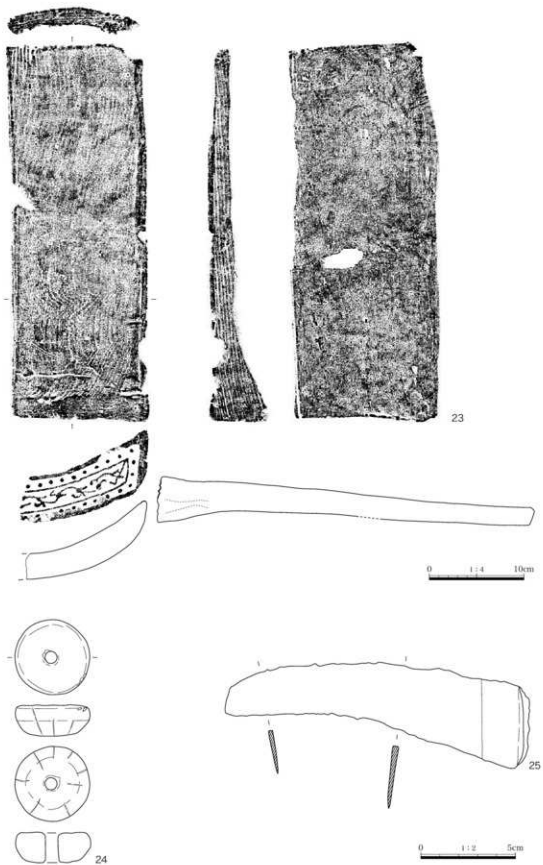


- SI-2カマド
- 1 黄褐色土
 ローム粒少量。ロームブロック (0.5~1cm) 少量。炭化物粒微量。炭化物 (0.5~1cm) 微量。焼土粒少量。焼土ブロック (0.5~1cm) 微量。黄褐色粘土粒多量。黄褐色粘土ブロック (1~8cm) 多量。Ni4スコリア・NiS軽石微量。しまり強。カマド天井部粘土の崩落土
 - 2 暗黄褐色土
 ローム粒微量。ロームブロック (0.5~1cm) 少量。炭化物粒少量。炭化物 (0.5~1cm) 微量。焼土粒多量。焼土ブロック (1~3cm) 少量。黄褐色粘土粒多量。黄褐色粘土ブロック (1~2cm) 多量。Ni4スコリア・NiS軽石微量。しまりあり。カマド天井部・天井内面の崩落土
 - 3 橙褐色土
 ローム粒微量。炭化物粒微量。炭化物 (0.5~1cm) 微量。焼土粒多量。焼土ブロック (1~4cm) 多量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック (1~2cm) 少量。Ni4スコリア・NiS軽石微量。しまりあり。カマド煙道部天井内面の崩落土
 - 4 暗橙褐色土
 ローム粒微量。炭化物粒微量。焼土粒少量。焼土ブロック (1~3cm) 少量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック (1~2cm) 微量。Ni4スコリア・NiS軽石微量。しまりあり。カマド天井内面の崩落土・流入土
 - 5 明褐色土
 ローム粒微量。ロームブロック (1~2cm) 微量。炭化物粒微量。炭化物 (0.5~1cm) 微量。焼土粒少量。焼土ブロック (1~2cm) 少量。灰少量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック (1~3cm) 微量。Ni4スコリア・NiS軽石微量。しまりあり。カマド天井崩落土
 - 6 明黄褐色土
 ローム粒微量。焼土粒微量。黄褐色粘土粒多量。黄褐色粘土ブロック (1~5cm) 多量。Ni4スコリア・NiS軽石微量。しまりあり。カマド崩壊材

第13図 SI-2掘方・カマド遺構図



第14図 SI-2出土遺物実測図(1)



第15図 SI-2出土遺物実測図(2)

第3表 SI-2 出土遺物観察表

掲載番号	種類・器種	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	土師器 坪	口径 (13.6) 底径 器高 [4.6]	内面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 外面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	金雲母粒・砂粒 少量	内:にぶい赤褐色 10YR7/2 外:にぶい赤褐色 10YR7/3・ 5YR6/6 焼成:普通	口縁~体部 1/8	SI-2南西	
2	土師器 坪	口径 (15.6) 底径 器高 [3.8]	内面:口縁~体部ミガキ。 外面:口縁~体部ミガキ。	白色粒・黒雲母 粒微量	内:にぶい赤褐色 5YR5/4 外:にぶい赤褐色 5YR5/4・ にぶい赤 7.5YR5/4 焼成:普通	口縁~体部 1/4	1層 SI-2No.15	7C前~中頃
3	土師器 坪	口径 (11.6) 底径 器高 [2.9]	内面:ヨコナデ。 外面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	赤色粒少量、黒 雲母粒微量	内:にぶい赤褐色 7.5YR7/3 外:にぶい赤褐色 7.5YR7/3 焼成:普通	口縁~体部 1/8	SI-2南東	6C末~7C前半
4	土師器 坪	口径 (14.6) 底径 器高 [4.3]	内面:ヨコナデ。 外面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	石炭粒・雲母粒・ 砂粒微量	内:灰白 5YR6/6 外:にぶい赤褐色 5YR5/4 焼成:良好	口縁~体部破片	SI-2北東	6C末~7C前半
5	土師器 坪	口径 (13.6) 底径 器高 [4.0]	内面:口縁~体部ヨコナデ。 外面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	石炭粒・長石粒 少量、赤色粒・ 砂粒微量	内:にぶい赤褐色 7.5YR6/4 外:黄 5YR6/6 焼成:普通	口縁~体部 1/4	SI-2北西 SI-2掘方北西 SI-2掘方	7C末~8C前半
6	土師器 費	口径 底径 器高 [5.2]	内面:ナデ。 外面:口縁部ナデ。胴部上端縦方向ヘラケズリ。	黒雲母粒・砂粒 多量	内:灰青褐色 10YK5/2 外:明赤褐色 2.5YR5/6 焼成:不良	口縁部破片	1層 SI-2No.12	6C後半?
7	土師器 費	口径 (22.8) 底径 器高 [13.1]	内面:口縁~胴部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 外面:口縁~胴部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。胴部割離が著しい。	石炭粒・砂粒多 量	内:にぶい赤褐色 5YR5/4 外:にぶい赤褐色 7.5YR5/3 焼成:不良	口縁部 1/6 胴部 5/12	床直 SI-2No.24 1層床土6cm SI-2No.26	9C中頃
8	土師器 費	口径 (20.6) 底径 器高 [6.9]	内面:口縁~胴部ヨコナデ。 外面:口縁~胴部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	石炭粒・砂粒多 量	内:にぶい赤褐色 7.5YR5/4 外:にぶい赤褐色 5YR5/4 焼成:不良	口縁~胴部 1/8	床直 SI-2No.25 SI-2北西	9C中頃
9	土師器 費	口径 底径 器高 [3.4]	内面:ヘラケズリ。 外面:縦方向ヘラケズリ。縁割反直。	砂粒多量、黒雲 母粒微量	内:暗赤褐色 5YR5/4 外:にぶい赤褐色 5YR5/4 焼成:良好	胴部破片	SI-2南東	
10	土師器 費	口径 底径 器高 [6.2] [2.2]	内面:ナデ。 外面:胴部ナデ。底部ヘラケズリ。	砂粒多量、長石 粒少量	内:暗赤褐色 5YR2/3 外:赤褐色 5YR4/6 焼成:不良	底部 1/3	船床土 SI-2No.28	
11	土師器 蓋	口径 (16.0) 底径 器高 3.2	内面:口縁部ナデ。 外面:口縁~体部口縁ナデ。天井部 回転ヘラケズリ後つまみ彫付(ボタン 状つまみ)。	石炭粒・長石粒 砂粒少量	内:灰 5Y5/1 外:灰 5Y6/1 焼成:良好	天井~口縁部 3/5 つまみ定存	1層床土3cm SI-2No.19 SI-2北西 SI-2掘方	8C 第2四半期 ~中頃 益子産産(原 産)
12	須恵器 蓋	口径 (16.6) 底径 器高 [2.5] [2.2]	内面:口縁部ナデ。 外面:口縁~体部口縁ナデ。天井部 回転ヘラケズリ。	石炭粒・長石粒 多量、砂粒微量	内:灰 N6/ 外:灰 N6/ 焼成:良好	口縁~体部 1/8	船床土 SI-2No.30	8C 第4四半期 益子産産(谷 津人)
13	須恵器 蓋	口径 (15.2) 底径 器高 [2.2]	内面:口縁部ナデ。 外面:口縁~体部口縁ナデ。天井部 回転ヘラケズリ。天井部割離「大ウ」。	砂粒少量	内:灰 N6/ 外:灰 N6/ 焼成:良好	口縁~体部 1/8	SI-2南東	8C 第3~4四 半期 益子産 産(原産2号 ~3号津人)
14	須恵器 蓋	口径 (17.4) 底径 器高 [2.0]	内面:口縁部ナデ。 外面:口縁部ナデ。	石炭粒・長石粒 少量、砂粒微量	内:灰白 2.5Y7/1 外:黄灰 2.5Y6/1 焼成:良好	口縁部 1/4	SI-2南東	7C末~8C初 産地不明
15	須恵器 蓋	口径 底径 器高 [2.1] [2.1]	内面:口縁部ナデ。 外面:口縁部ナデ。天井部回転ヘ ラケズリ後つまみ彫付。自然焼付着。	砂粒微量	内:灰白 10YR7/1 外:灰白 2.5Y7/1 焼成:普通	体部 1/8 つまみ 7/8	SI-2南東	産地不明
16	土師器 坪	口径 (7.4) 底径 器高 [1.8]	内面:口縁部ナデ。 外面:体部口縁ナデ。底部回転ヘラ ケズリ後つまみ彫付。	白色粒多量、砂 粒微量	内:灰白 N5/ 外:灰 N5/ 焼成:良好	底部 1/8	SI-2掘方	益子産産(産 人・倉屋)
17	須恵器 高台付坪	口径 底径 器高 [11.0] [1.8]	内面:口縁部ナデ。 外面:口縁~体部口縁ナデ。底部回転ヘラ ケズリ後高台彫付。	石炭粒・長石粒 砂粒微量	内:灰白 2.5YR/2 外:灰白 2.5YR/2 焼成:不良	底部 1/4	SI-2北東	8C 第3四半期 後半~第4四 半期前半 三 義産産(三浦)
18	須恵器 皿	口径 底径 器高 [11.0] [1.8]	内面:口縁部ナデ。 外面:体部口縁ナデ。底部回転ヘラ ケズリ後高台彫付。	砂粒微量	内:灰 5Y6/1 外:灰 5Y6/1 焼成:普通	外底部 3/8 高台部 1/4	SI-2No.7 SI-2南西 SI-2北西	8C 中~後半 三義産産
19	須恵器 鉢	口径 (33.8) 底径 器高 16.6	内面:口縁部ナデ。 外面:口縁~体部口縁ナデ。	白色粒少量、砂 粒微量	内:黄灰 2.5Y6/1 外:灰青褐色 2.5Y7/2 焼成:普通	口縁~底部 1/6	1層 SI-2No.10	9C 第2四半期 ~中頃 益子 産産(産人・ 倉屋)
20	須恵器 費	口径 底径 器高 [6.7]	内面:ナデ。焼成時の縮ワラ線跡。 外面:平行明き。	石炭粒多量、砂 粒微量	内:黄灰 2.5Y6/1 外:灰 5Y4/1 焼成:良好	胴部破片	1層 SI-2No.3	益子産産

第3章 調査の方法と成果

図録番号	種別・部材	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	粘土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
21	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [7.5]	内面：同心円文帯付縁。 外面：格子印後縁方角半目。自然 脱皮。	砂粒微量	内：黄灰 2.5Y5/1 外：灰白 2.5Y7/1 焼成：良好	割部破片	1層 SI-2No.14	古墳時代 産地不明
22	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [2.8]	内面：同心円文帯付縁。 外面：縦格子印後縁方角半目。	白色粘微量	内：灰 10Y5/1 外：灰 10Y5/1 焼成：良好	割部破片	SI-2 掘方	古墳時代 下野系須恵器 甕
23	宇瓦	長 40.5 幅 [13.4] 厚 4.7 重 2877.08	均整ゆず文。凸型成形台による粘土板 一枚作り。器面は凸面広縁部に粘土 を貼り付け成形する貼り付け技法である。 凸面は焼明き後、縦方向のヘアケ ズリが施され焼明きの痕跡はほぼ残さ ない。凸面は斜切面を有し、広縁部に幅 2～3cmの縦位ヘアケズリ。割部に面 取りを施す。	砂粒少量、赤色 粘微量	凸：にぶい層 7.5YR7/4 凹：にぶい黄緑 10YR7/3 焼成：不良	2/5	1層床土 5cm SI-2No.6	
24	石製品 紡錘車	長 4.0 幅 3.9 厚 1.6 重 39.31	上面(広端部)と下面(狭端部)は石材の磨理に沿った割れ目で、粗く研削する。 上下面に穿孔孔を有し、孔道中央にわずかな段をもつことから、両面穿孔である。 孔道内は磨きや用紙屑と棒を通した時の痕もみられる。側面は幅広く切削 した後研削し、切削痕をほとんど残さない。縦紋付型		ほぼ完形		煎床土 SI-2No.27	
25	石製品 鎌	長 [16.2] 幅 [4.3] 厚 [0.4] 重 53.92	曲刀型で全体形を留める。甲技法により製作され、刃部の断面形は楕円形である。 基部はほぼ直前に折り返され、表面に幅1.7cmほどの柄とみられる木質が認め られるが、表面には木質が認められない。			—	10層煎床土 SI-2No.1	

隅丸長方形を呈する。P1を除く柱穴では新旧2基の柱穴が確認され、P2よりP5が古く、P3・P4よりP6・P7が古い。断面を図化できなかつたが、調査時の記録では煎床土もしくは類似する土で埋め戻されていたようである。床面で柱穴を確認できなかつたことや柱穴の新旧関係から、SI-2は最低でも3時期あったとみられ、P1・P5～P7を主柱穴とする時期→P1～P4を主柱穴とする時期→竪穴部外に主柱穴を伴う時期の順に変遷したと考えられる。ただし、竪穴掘方の規模は変わらないため、柱穴の立て替えのみおこなわれたのであろう。

入口ピット 南西隅付近で1基確認された。平面プランは不整形とみられ、埋土は上層(6層)が明褐色土、下層(7層)がローム粒を多量に含む明褐色土である。煎床の床面を掘り込んでいることから、竪穴部外に主柱穴を伴う時期に帰属すると考えられる。

カマド 北壁中央にあり、両袖と煙道の一部が残存している。煎床上面に黄褐色粘土を積み上げて袖をつくり、構築土の一部に白色粘粒を少量含む。煙道南半壁には壁に補強粘土を貼り付けている。両袖の上面および内面は被熱し、特に西袖の一部で壁が崩れるなど脆くなっている。内部には、炭化物・焼土・黄褐色粘土ブロックを含む土(5層)、焼土粒・焼土ブロックと流入土を含む土(3・4層)、焼土粒・黄褐色粘土ブロックなどを多量に含む土(1・2層)が堆積している。このことから、まず天井の一部が崩落し、その後流入土を伴い天井や煙道の崩落が進行し、最終的に天井全体が崩落したと考えられる。カマド中央の5層上面には火床面がみられるので、この部分が燃焼部であろう。袖の粘土には焼土粒を含むことから、つくり替えている可能性がある。カマド南から南東の床面には、天井構築材の粘土や焼土が広がることから、カマドが大規模に壊されたと考えられる。また、床面中央付近に焼土粒や黄褐色粘土を多く含む層(3・4層)がみられることから、カマドが人為的に壊されたことがわかる。煎床上面に構築されていることから、竪穴部外に主柱穴を伴う時期に帰属すると考えられる。

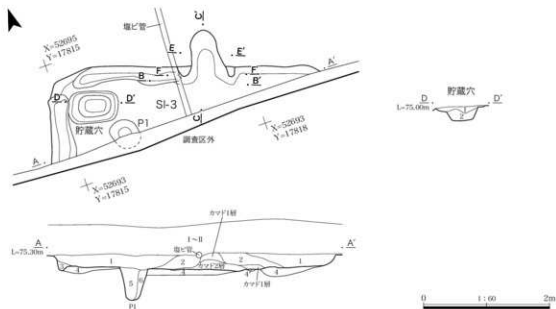
遺物出土状況 大半の遺物は床面から5～10cm浮いた埋土1層中より出土している。また、宇瓦(23)、被熱痕のある礫が南壁付近の床面直上で出土しており、カマドの芯材あるいは支脚として使用されたと考えられる。11の須恵器蓋は、床面直上と掘方埋土中から出土した個体が接合したものである。掘方内からは土師器環(5)、谷津入窯段階の須恵器蓋(12)、滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器環(16)、石製紡錘車(24)が出土している。このほか、埋土中からは土師器環(2～4)、土師器甕(8)、三倉窯産の須恵器高台付環(17)などが出土している。このことから、7世紀末～8世紀初頭にSI-2がつくられ、8世紀代に柱の立て替えがおこなわれ、カマドの改修と煎床を伴う建物へつくり変えられた可能性もある。

出土遺物 須恵器を主体としており、益子窯産のほかに三義窯産の高台付環が出土している。11は8世紀第2四半期～中頃の原東窯段階の蓋、12は8世紀第4四半期の谷津入窯段階の蓋、13は8世紀第3～4四半期の原東2号窯～谷津入窯段階の蓋で、17は8世紀中頃～後半の三義窯産の高台付環、18は8世紀第3～4四半期の三義窯産の皿である。23は8世紀中頃の均整唐草文字瓦で、益子窯跡群の西山窯跡で採集されていることから、ここで生産されたと考えられる。同范品が下野国分尼寺跡・下野薬師寺跡・大内廃寺・堂法田遺跡・中村遺跡・井頭遺跡・鶴田A遺跡から出土している。このほか、7世紀以前の須恵器甕(21・22)6世紀末～7世紀前半の土師器環(3・4)、7世紀前半～中頃の土師器環(2)、7世紀末～8世紀初頭の土師器環(5)、9世紀中頃の土師器甕(8)や滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器環(16)・鉢(19)、石製紡錘車(24)、曲刃鎌(25)が出土している。

竪穴建物 SI-3 (第16～18図、第4表、図版五・六・二一・三)

重複関係 SI-4と重複するとみられるが、調査区外のため切合い関係は不明である。また、カマド左袖は農業送水用塩化ビニル管の埋設溝で一部が壊されている。主軸はN-17°-Eである。

規模・形状 大部分が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、カマドが北壁中央にあるとした場合、北辺は4.8mと推定される。間仕切り溝・入口施設は調査範囲内では確認されていない。



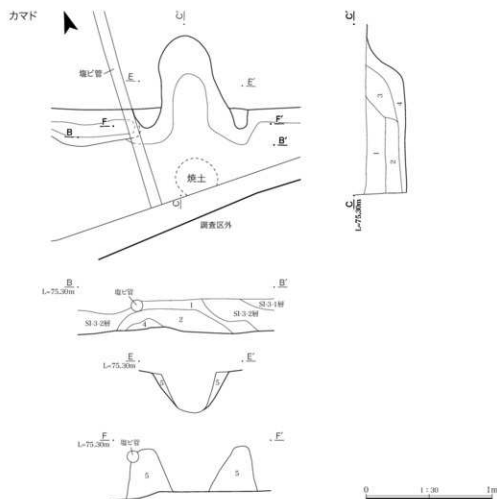
SI-3

- | | |
|---------|---|
| 1 明黒褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック(1～2cm)微量。炭化物粒微量。焼土粒微量。黄褐色粘土粒少量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しりりあり。SI-3埋土。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒少量。炭化物粒微量。焼土粒少量。焼土ブロック(0.5～2cm)微量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック(1～2cm)微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しりりあり。SI-3埋土。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒少量。炭化物粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しりりあり。壁溝埋土。 |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック(1～4cm)少量。炭化物粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しりりあり。陥床埋土。 |
| 5 暗黄褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック(1～3cm)少量。炭化物粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しりりあり。P1柱礎埋土。 |
| 6 黄褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック(1～4cm)多量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しりりあり。P1柱礎方埋土。 |

貯蔵穴

- | | |
|--------|--|
| 1 黒褐色土 | ローム粒少量。炭化物粒微量。焼土粒微量。黄褐色粘土粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しりりあり。 |
| 2 褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック(0.5～1cm)微量。炭化物粒微量。黄褐色粘土粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しりりあり。 |

第16図 SI-3遺構図



SI-3 カマド

- | | |
|---------|--|
| 1 黄褐色土 | ローム粒少量。炭化物粒微量。焼土粒微量。焼土ブロック (0.5~2cm) 微量。黄褐色粘土粒多量。黄褐色粘土ブロック (1~4cm) 多量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。カマド天井部粘土の崩落土。 |
| 2 明黒褐色土 | ローム粒少量。炭化物粒少量。焼土粒微量。焼土ブロック (0.5~2cm) 少量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック (0.5~2cm) 微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。カマド天井内面の崩落土・流入土。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒少量。炭化物粒微量。焼土粒多量。焼土ブロック (0.5~2cm) 多量。黄褐色粘土粒多量。黄褐色粘土ブロック (0.5~2cm) 少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。天井内面の崩落土。 |
| 4 褐色土 | ローム粒少量。炭化物粒少量。灰少量。焼土粒少量。焼土ブロック (0.5~3cm) 少量。黄褐色粘土粒少量。黄褐色粘土ブロック (0.5~5cm) 少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。カマド天井部・天井内面の崩落土。 |
| 5 黄褐色粘土 | カマド袖構築材 |

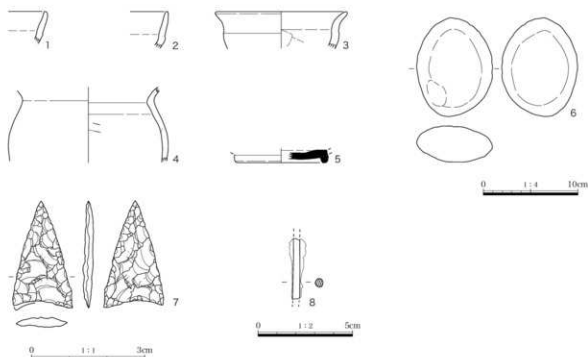
第 17 図 SI-3 カマド遺構図

壁・壁溝 壁は確認より約 20cm の深さでほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は北西隅で確認されており、全周はしていない。貼土を掘り込んでいることから、貼床後に壁溝を掘削したと考えられる。

床面・貼床 床面の一部は地山（ローム層）であるが、大部分はローム粒を多量に含む暗黄褐色土による貼床が施される。床面は、しまりはあるが硬化しているというほどではない。

掘方 床面からの深さは 5~10cm ほどで、土坑状の掘り込みもなく全体的にほぼ平坦である。

埋土 ローム粒や黄褐色粘土粒を少量含む明黒褐色土（1層）を主体とし、埋土全体に男体今市スコリア（Ni-I）と男体七本椀軽石（Ni-S）を微量含む。基本的に人為埋没で、1・2層が SI-3 埋土、3層が壁溝埋土、4層が貼床埋土、5・6層が柱穴（P1）埋土である。貯蔵穴は 1・2層が埋土、カマドは 1~5層が天井崩落土などの埋土、6層がカマド袖構築材である。



第18図 SI-3出土遺物実測図

第4表 SI-3出土遺物観察表

発掘番号	種類・名称	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	土師器 杯	口径 底径 器高 [3.4]	内面：口縁～体部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。	赤色粒・黒雲母 粒少量、砂粒微量	内：橙 5YR6/6 外：にふい黄橙 7.5YR7/4 焼成：普通	口縁～体部破 片	SI-3 カマド前 7C 後半～8C 前半 内階3輪杯	
2	土師器 杯	口径 底径 器高 [3.5]	内面：口縁～体部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズ リか、著しく摩耗。	黒雲母粒少量、 砂粒微量	内：にふい黄橙 10YR7/2 外：にふい黄橙 10YR7/2 焼成：不良	口縁～体部破 片	SI-3 南西	
3	土師器 杯	口径 (11.6) 底径 器高 [4.1]	内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズ リか、摩耗。	赤色粒少量、石 英粒微量	内：にふい黄橙 10YR7/2 外：にふい黄 7.5YR7/4 焼成：普通	口縁～体部 1/8	SI-3 カマド前 6C 末～7C 前 半	
4	土師器 小型甕	口径 底径 器高 [8.0]	内面：頸部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。 外面：頸部ヨコナデ、胴部ヘラナデか、 胴部輪積痕・著しく摩耗。	砂粒多量、石英 粒少量	内：にふい黄橙 10YR7/3 外：橙 7.5YR7/6 焼成：普通	胴～胴部 1/8	SI-3P1 柱6	古墳時代後期
5	須恵器 高台付杯	口径 底径 器高 [11.5]	内面：口縁ナデ。 外面：ヘラ切り、ナデ高台付。	砂粒少量	内：灰 10Y6/1 外：灰 10Y6/1 焼成：良好	底部 1/8	SI-3 南西	8C 前半 益子産産（原 重4）
6	石製品 磨石	長 10.4 幅 8.0 底径 3.8 厚 377.96	自然の河原石を利用。表面には全体的に溝状の磨痕が認められ、裏面には全体的に磨痕が認められる。焼熱や線打痕は認められない。凝灰質砂岩			完形	SI-3P2	
7	石器 石鏃	長 12.0 幅 11.6 厚 0.3 重 1.04	良質なチャートを使用し、器体は薄く側縁が直線的な二等三角形を呈する。基部は緩く内湾する凹基。			ほぼ完形	SI-3 カマド前 面	凹基石鏃
8	武器品 棒状不明	長 13.2 幅 10.5 厚 10.5 重 1.55	両端部が別れ、内部の錆化した中空部が露出するが、本来は中央とみられる。断面形は円形を呈するため、鏢や釘ではないとみられる。			両端部欠損	SI-3 カマド壁 口付近	

柱穴 主柱穴は4本とみられるが、検出できたのは北西の1本のみである。柱掘方は貼土を掘り込んでいることから、柱を立て替えた可能性もある。底面形からみて柱径は14cm以下である。

カマド 北壁中央付近にあり、両袖の基部と煙道が残存している。貼土上面に黄褐色粘土を積み上げて袖を

つくる。カマド内部には焼土・黄褐色粘土ブロックを含む土(4層)、焼土・黄褐色粘土粒と流入土を含む土(2・3層)、黄褐色粘土ブロックを多量に含む土(1層)が堆積している。このことから、被熱し脆くなった天井と天井内壁の一部が崩落し、その後流入土を伴い天井の崩落が進行し、最終的に天井全体が崩落したと考えられる。カマド前面は地肌で、その上に灰層や焼土層が薄く互層をなして堆積していることから、この付近が火床面と考えられる。

貯蔵穴 北西隅にあり、東西0.78m、南北0.5m、深さ0.22mである。平面形は長方形を呈し、上面から3～8cmほど皿状に掘り込まれ、断面形は逆台形状を呈する。この皿状の掘り込みは蓋受けの可能性がある。埋土はローム粒を多量に含む褐色土(2層)を主体とする。

遺物・出土状況 全体的に量が少ない。カマド周辺にややまとまりがあり、非掲載のものも含めて7世紀後半以降の内湾口縁環(1)の出土が多い。柱穴(P1)や貯蔵穴からは土師器環や甕(4)が出土している。埋土中からは、7世紀以前の須恵器甕、益子窯産の須恵器環や高台付環、瓦が出土している。このほか、縄文時代の磨石(6)や石鏝(7)が混入している。

出土遺物 土師器を主体としており、なかでも7世紀後半から8世紀前半の内湾口縁環(1)が中心となる。3は椀形環、5は8世紀第1四半期後半～第2四半期前半の原東4号窯段階の須恵器高台付環である。7はチャート製の凹基石鏝、8は棒状鉄製品で器種は不明である。

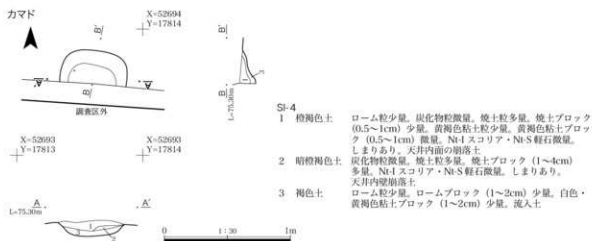
竪穴建物 SI-4 (第19図、図版六)

重複関係 SI-3と重複するとみられるが、調査区外のため切合い関係は不明である。

規模・形状 カマドの一部以外は調査区外となるため、規模・形状は不明である。

カマド 煙道の一部のみを検出した。天井の崩落によりローム粒やロームブロックを少量含む褐色土(3層)が流入し、その後被熱により脆くなった天井内壁の一部(2層)がそのまま崩落し、最終的に天井が崩落したと考えられる。

出土遺物 図化できるものはない。カマド煙道より土師器甕2点が出土していることから、古代の竪穴建物と考えられる。

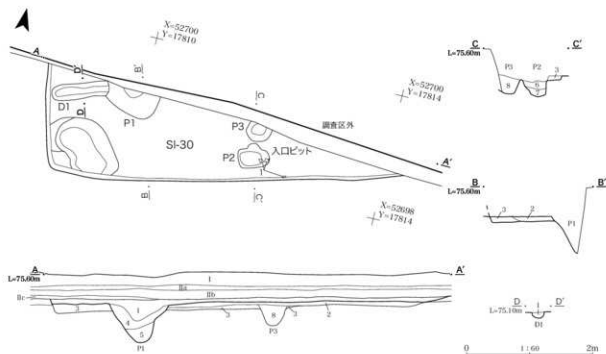


第19図 SI-4カマド遺構図

竪穴建物 SI-30 (第20・21図、第5表、図版六・二一)

位置・重複関係 重複関係なし。主軸はN-13°-Wである。

規模・形状 東西検出長5.6m、南北は大部分が調査区外となるため、正確な規模は不明である。壁溝・貯蔵穴は調査範囲内では確認されていない。



SI-30

- 1 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック (0.5~2cm) 微量、炭化物粒微量、炭化物 (0.5~1cm) 微量、焼土粒微量、Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、SI-30 埋土
- 2 褐色土 ローム粒少量、ロームブロック (0.5~1cm) 少量、炭化物粒微量、焼土粒微量、Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量、しりり強、ローム・黒色土主体の薄い層が互層をなす、軽化した貼床埋土
- 3 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック (0.5~3cm) 多量、Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、貼床埋土
- 4 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック (0.5~2cm) 少量、炭化物粒微量、炭化物 (0.5~1cm) 微量、焼土粒微量、Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、P1 埋土
- 5 褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (0.5~3cm) 多量、炭化物粒微量、Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、P1 埋土
- 6 暗黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (0.5~4cm) 多量、Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、入口ピット (P2) 埋土
- 7 褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (0.5~2cm) 少量、Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、入口ピット (P2) 埋土
- 8 暗黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (0.5~4cm) 多量、Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、入口ピット (P3) 埋土

D1 (間仕切り溝)

- 1 黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (1~4cm) 少量、Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量、しりりあり。

第20図 SI-30 遺構図



第21図 SI-30 出土遺物実測図

第5表 SI-30 出土遺物観察表

図版番号	種類・器種	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	土師器 杯	口径 (16.0) 底径 高さ 4.0	内面:口縁~体部コナデ、底部ナデ。 磨仕上げ。 外面:口縁部コナデ、体~底部ヘラ ケスリ。口縁~体部磨仕上げ。	石炭灰・黒空母 粒・砂粒微量	内:灰黄褐 10YR6/2 紫灰 10YR4/1 外:紫褐 7.5YR3/1・ 灰黄褐 10YR6/2 焼成:普通	口縁部 5/12 体~底部 1/2	P2 内 SI-30No.1 P2 内 SI-30No.2 床土 4cm SI-30No.3 SI-30 貼床	7C 前半

壁 確認面より約10cmの深さで、ややならかに掘り込まれている。壁溝は、調査範囲内では確認されていない。

床面・貼床 床面を掘り抜いてしまい断面での確認であるが、ロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床を全面に施している。また、調査時の所見によれば、P 2・P 3のある南東部分では、ローム土と黒色土主体の薄い層が版築状に固められており、生活時に堆積した土が踏み固められたものと考えられる。

掘方 床面からの深さは5～10cmほどで、南西隅が土坑状に浅くくぼむ以外はほぼ平坦である。

埋土 ローム粒を少量含む黒褐色土（1層）を主体とし、埋土全体に男体今市スコリア（Nt-I）と男体七本桜軽石（Nt-S）を微量含む。基本的に人為埋没で、1層がSI-30埋土、2・3層が貼床埋土、4・5層が柱穴（P 1）埋土、6～8層が入口ピット（P 2・P 3）埋土で、間仕切り溝（D 1）の埋土は単層である。

柱穴 主柱穴は4本とみられるが、検出できたのは南西の1本のみである。貼床層（2層）を掘り込んでいことから、貼床後に柱穴を掘ったことがわかる。柱痕跡が確認されず、柱穴上部が外側に開き、南側はやや浅く掘り広げた段があるため、柱抜取穴と考えられる。

入口ピット 南壁中央付近で2基確認された（P 2・P 3）。平面プランはP 2が不整形、P 3が円形を呈する。いずれもローム粒を多量含む貼床埋土に似た暗黄褐色土で埋め戻されている。P 3は貼床層（3層）を掘り込んでおり、P 2も断面では確認できないが、貼床後に掘られたようである。P 2・P 3の新旧関係は不明であるが、調査時の所見では同時期ではない可能性が高いとされている。

間仕切り溝 西辺に一条あり、上幅0.25m、深さ10cmの明瞭な溝である。貼床除去後に確認し、ローム主体の土で埋め戻されている。P 1～P 3は貼床を掘り込んでいことから、間仕切り溝の方が古い。また、P 1は柱抜取穴と考えられることから、間仕切り溝（柱穴未確認）→柱（P 1）を立て、貼床と入口施設（P 2・P 3）を設けるという順で建て替えがおこなわれた可能性がある。

遺物と出土状況 遺物の大部分が調査区外となるため、遺物は非常に少ない。貼床土中から土師器・須恵器片が数点出土しているのみである。図示した1は内外面を漆仕上げした須恵器模倣土師器坏（以下須恵器模倣坏）で、7世紀前半のものである。

竪穴建物 SI-31（第22・23図、第6表、図版七・二二）

重複関係 栃木県教育委員会による試掘トレンチにより北辺の一部が壊されている。主軸はN-11°-Wである。

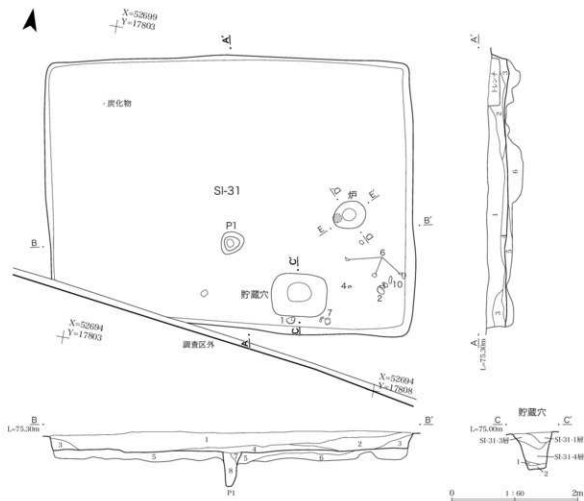
規模・形状 東西5.8m、南北4.4mである。主柱穴・壁溝・間仕切り溝・入口施設は床面においても貼床除去後にも認められなかった。

壁 壁は確認面より約20～30cmの深さで、ほぼ垂直に掘り込まれている。

床面・貼床 床面の一部は地山（ローム層）であるが、大部分はロームブロックを多量に含む暗褐色土による貼床が施される。床面は、しまりはあるが硬化しているというほどではない。

掘方 床面からの深さは10～20cmほどで、一部が土坑状に大きくくぼむ以外はほぼ平坦である。

埋土 1層上位に浅間Bテフラ（As-B）、1層下位・2層上位に榛名ニッ岳澁川テフラ（Hr-FA）、2層中位～下位に浅間C軽石（As-C）が混在している。いずれも降下ユニットは確認できないため二次堆積であるが、SI-31 廃絶後にHr-FAやAs-Bが降下した可能性がある。また、貯蔵穴1・2層以外の埋土中に男体今市スコリア（Nt-I）と男体七本桜軽石（Nt-S）を微量含む。一部に炭化物・焼土粒を含むが基本的に自然埋没と考えられ、1～4層がSI-31埋土、5・6層が貼床埋土、7・8層が柱穴（P 1）埋土である。その埋土は単層で、貯蔵穴は底部の一部を除きSI-31埋土である1・3・4層が堆積している。



SI-31

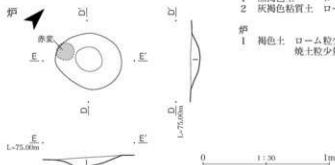
- 1 明褐色土 ローム粒微量。炭化物粒微量。焼土粒微量。As-B 軽石・Hr-FA テフラ・Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。SI-31 埋土。
- 2 暗褐色土 ローム粒少量。炭化物粒微量。焼土粒微量。Hr-FA テフラ・As-C 軽石・Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。SI-31 埋土。
- 3 黒褐色土 ローム粒少量。炭化物粒微量。焼土粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。SI-31 初期埋土。
- 4 褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (1~2cm) 微量。炭化物粒微量。炭化物 (0.5~1cm) 微量。焼土粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。SI-31 初期埋土。
- 5 暗褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (1~6cm) 多量。炭化物粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石多量。しまりあり。貼床埋土。
- 6 暗黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (1~8cm) 多量。炭化物粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。貼床埋土。
- 7 暗褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5~1cm) 微量。炭化物粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。P1 柱根跡埋土。
- 8 明褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (1~5cm) 少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。P1 柱根跡埋土。

貯蔵穴

- 1 黒褐色土 ローム粒微量。しまりややあり。
- 2 灰褐色粘質土 ローム粒微量。しまりややあり。

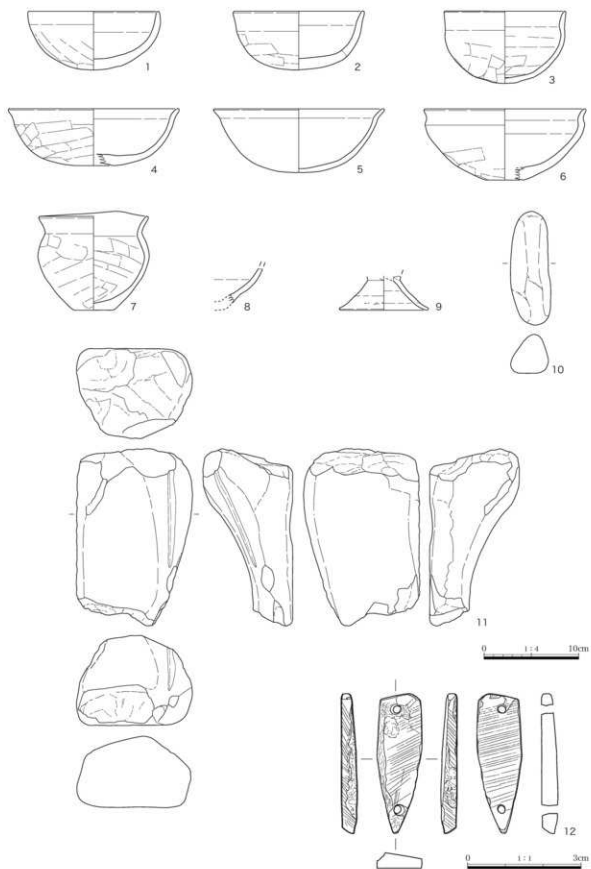
炉

- 1 褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (1~2cm) 微量。炭化物粒微量。焼土粒少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。



第22図 SI-31 遺構図

第3章 調査の方法と成果



第23図 SI-31 出土遺物実測図

第6表 SI-31 出土遺物観察表

掲載番号	類別・器種	法重 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	土師器 杯	口径 (13.8) 底径 器高 6.2	内面:口縁部ヨコナデ。体~底部ナデ。 外面:口縁部ヨコナデ。体~底部ヘラケズリ。	赤色粒少量。砂粒微量	内: 紺 5YR6/6 外: にぶい紺 5YR6/4 焼成: 普通	口縁~底部 5/8	床: 1cm SI-31No.10 SI-31 南東	5C 中頃
2	土師器 杯	口径 13.8 底径 器高 6.2	内面:口縁部ヨコナデ。体~底部ナデ。 外面:口縁部ヨコナデ。体~底部ヘラケズリ後ナデ。	赤色粒少量。砂粒微量	内: にぶい紺 7.5YR7/4 外: 灰褐 7.5YR5/2・ にぶい紺 7.5YR7/4 焼成: 普通	口縁~体部 7/8 底部完存	床: 2cm SI-31No.5 SI-31 南東	5C 中頃
3	土師器 杯	口径 (12.8) 底径 器高 7.5	内面:口縁部ヨコナデ。体~底部ヘラケナデ。 外面:口縁部ヨコナデ。体~底部ヘラケズリ後一部ナデ。口縁部輪模痕。	石英粒・砂粒微量	内: にぶい紺 7.5YR7/4 外: にぶい紺 7.5YR7/4 焼成: 普通	口縁~底部 1/4	SI-31 南内 SI-31 南部	5C 中頃
4	土師器 杯	口径 (18.0) 底径 (4.0) 器高 6.0	内面:口縁部ヨコナデ。底部調整不明。体~底部一部部面調整。 外面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。底部ナデ。	砂粒少量。石英粒微量	内: 紺 5YR6/6 外: 灰褐 7.5YR4/2 焼成: 普通	口縁~底部 1/4	床: 4cm SI-31No.2 SI-31 土器集中	5C 中頃
5	土師器 杯	口径 (18.0) 底径 器高 16.7	内面:口縁部ヨコナデ。体~底部は摩耗が多く調整不明。 外面:口縁部ヨコナデ。体~底部ヘラケズリか。	砂粒少量	内: 紺 5YR6/6 外: 紺 5YR6/6 焼成: 不具	口縁部 1/4 体~底部 1/2	SI-31 南部 SI-31 中頃	5C 中頃
6	土師器 杯	口径 (17.0) 底径 (4.0) 器高 7.5	内面:口縁部ヨコナデ。体~底部調整不明。体~底部部面の調整が深い。 外面:口縁部ヨコナデ。体部上平ヘラケナデ。体部下平ヘラケズリ。底部ナデ。	砂粒少量。石英粒微量	内: 明赤褐 2.5YR5/6 外: 紺 2.5YR6/6 焼成: 普通	口縁部 1/8 体~底部 3/8	床: 5cm SI-31No.1・ 床: 4cm SI-31No.2・ 床: 3cm SI-31No.4・ SI-31No.7 SI-31 南東 西平部	5C 中頃
7	土師器 鉢	口径 (11.4) 底径 4.0 器高 10.4	内面:口縁部ハケ調整後一部ヨコナデ。胴~底部ヘラケナデ。胴部輪模痕。 外面:口縁部ヨコナデ。胴~底部ヘラケズリ。	赤色粒多量。石英粒・砂粒少量	内: 灰褐 7.5YR4/2 外: にぶい赤褐 5YR5/4 焼成: 普通	口縁部 1/4 底部完存	4層床: 1cm SI-31No.9	5C 中頃
8	土師器 鉢か	口径 - 底径 - 器高 13.6	内面:ヘラケナデ。 外面:ヨココナメハケ後一部ヘラケズリ。	砂粒微量	内: にぶい赤褐 10YR7/4 外: にぶい紺 7.5YR6/4 焼成: 普通	胴部破片	SI-31 南内	
9	土師器 付付體	口径 - 底径 (9.2) 器高 13.6	内面:ヨコナデ。 外面:ヨコナデ。台部輪模痕。	石英粒・黒雲母粒・砂粒微量	内: 明赤褐 2.5YR5/6 外: にぶい赤褐 5YR5/4 焼成: 普通	台部破片	SI-31 北内	
10	石製品 輪磨石	長 12.0 幅 4.1 厚 4.6 重 288.61	自然の河原石を利用。胴の下部が少し窪むため磨けやすい。加工・使用痕や視触痕は認められない。磨石			完形	2層床: 3cm SI-31No.6	
11	石製品 砥石	長 [18.7] 幅 [12.3] 厚 5.9 重 2414.05	4面を使用しており表裏面は平滑に摩滅。表面は弧状に研ぎ減り。左側面および右側面下部には輪状の研磨痕が斜方向にみられる。右側面上部には溝状の研磨痕がみられる。主な面率のある製品の破断に使用されたと考えられる。小口は片面が折損し、もう1面は小割にした際の破断面が残る。成形時の割面痕をそのまま残す。炭灰質研石(熟焼)				SI-31 南中央	
12	石製品 石製製造品	長 2.68 幅 1.15 厚 0.41 重 2.86	表裏面および小口には成形時の埋込が顕著に認められる。側面には一部割面を残す。埋込は表裏面に比べやや粗い。両面穿孔(2孔)。滑石				SI-31 北東	5C 後半

柱穴 中央で1基を確認した以外は、貼床除去後にも認められなかった。P1は主柱穴ではないと考えられ、床面からの深さは0.53mである。床面で確認されたことから、貼床後に柱穴を掘ったことがわかる。

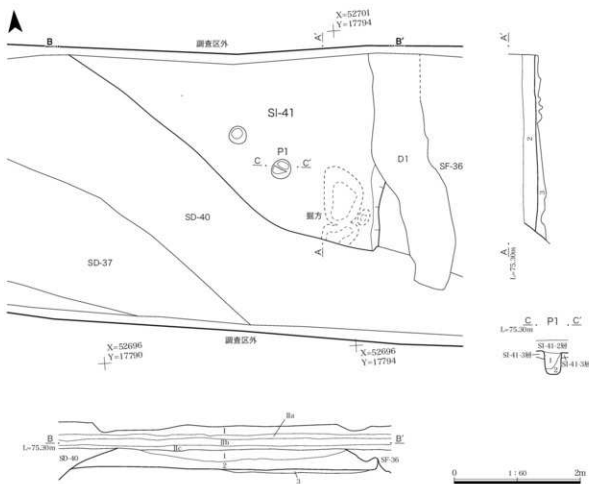
炉 中央の東寄りにあり、東西42cm、南北46cm、深さ4~8cm。炉の北西部が被熱により赤化するが、全体的に焼土も少ない。底面の赤化も不明瞭で、長期間使用した様子はみられない。埋土はローム粒・焼土粒を少量含む褐色土である。

貯蔵穴 南東隅付近にあり、東西0.95m、南北0.67m、深さ0.58mである。平面形は長方形を呈し、断面形は断面図では不明瞭であるが、上面から10cmほどの部分が受け口状になり、それ以下は逆台形状を呈する。この受け口状の掘り込みは蓋受けの可能性はある。埋土は底部を除く大部分でSI-31と同じ土層が堆積し、底部はローム粒を微量含む黒褐色土(4層)、灰褐色粘質土(5層)である。周囲に土手状の高まりは認め

られなかった。

遺物出土状況 遺物は少ないが、南東部とくに貯蔵穴周辺にまとまり、床面から2～5cm浮いた埋土中より出土している。ほぼ完形の土師器杯（2）・編物石（10）が貯蔵穴東側の床面から出土したほか、小型の鉢（7）や台付甕（9）、剣形の石製模造品（12）が出土している。また、小片のため非掲載であるが、貯蔵穴の底面から土師器杯や甕が出土している。

出土遺物 5世紀中頃の内斜口縁形の土師器杯が主体で、丸底（2・3・5）と平底（4・6）のものがある。土師器鉢（7）は小型で口縁部が外反し、平底を呈する。また、一括で取り上げたなかには古代の益子窯産の須恵器杯が少量あるが、これは埋没時に混入したものであろう。このほか焼成粘土塊、攻玉に用いたとみられるやや大型の砥石（11）、5世紀後半の剣形の石製模造品（12）が出土している。



SI-41

- 1 黒褐色土 ローム粒微量。炭化物粒微量。焼土粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。SI-41埋土。
- 2 明黒褐色土 ローム粒少量。ロームブロック（1～6cm）微量。炭化物粒微量。炭化物（0.5cm程度）微量。焼土粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。SI-41埋土。
- 3 黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック（1～6cm）多量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石少量。しまり微。SI-41粘床埋土。

P1

- 1 暗黒褐色土 ローム粒微量。ロームブロック（1～2cm）微量。炭化物粒微量。焼土粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。P1柱頭埋土。
- 2 黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック（1～6cm）多量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。P1柱頭方埋土。

第24図 SI-41遺構図

竪穴建物 SI-41 (第24図、図版八)

重複関係 SD-40・SF-36に掘り込まれている。主軸はN-9°-Eである。

規模・形状 大部分を重複する遺構により掘り込まれているため、規模・形状は不明である。壁溝・貯蔵穴・間仕切り溝・入口施設は、調査範囲内では確認されていない。

壁 壁は確認より20～34cmの深さでほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は調査範囲内では確認されていない。

床面・貼床 一部は地山(ローム土)であるが、それ以外はローム粒・ロームブロックを多量に含む黄褐色土による貼床が施され、床面は硬化している。調査時の所見によれば、東壁付近ではローム土と黒褐色土が版築状になる部分があり、生活時に堆積した土が踏み固められたものと考えられる。

掘方 床面からの深さは6～10cmほどで、全体的にほぼ平坦である。

埋土 ローム粒を少量含む黒褐色土(2層)を主体とし、埋土全体に男体今市スコリア(Nt-I)と男体七木桜軽石(Nt-S)を微量含む。調査時の所見によれば、基本的に人為埋没で、1～2層がSI-41埋土、3層が貼床埋土、4・5層が柱穴(P1)埋土である。

柱穴 主柱穴は4本とみられるが、検出できたのは南東の1本のみである。貼床層(3層)を掘り込んでいることから、貼床後に柱穴を掘ったことがわかる。柱痕跡が確認されないことから、柱抜取穴の可能性がある。なお、P1北西にあるピット状の掘り込みは柱穴ではない。

遺物出土状況 遺物は非常に少ない。埋土中より土師器坏と甕が出土し、周辺からは土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕、瓦が出土している。

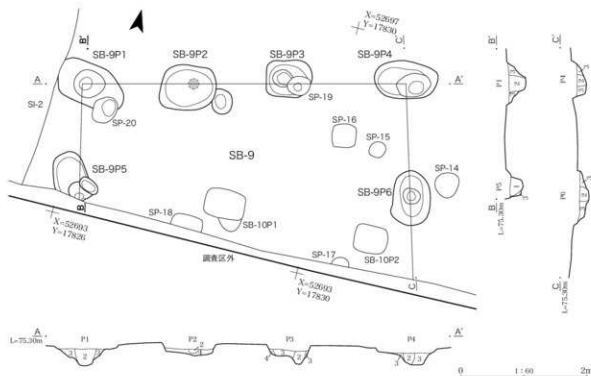
出土遺物 SI-41に伴う遺物は小片のため図化していないが、6世紀後半の口縁から体部内外面を磨く土師器坏が複数出土しているため、当該期の遺構と判断した。周辺からは7世紀前半の磨きのない須恵器模倣坏や9世紀初頭の益子窯産の須恵器坏が出土しているが、確実にSI-41に伴うと判断できないため、北区遺構外出土遺物として扱うこととした。

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物 SB-9 (第25・26図、第7表、図版八～一一・一二)

重複関係 SP-19・SP-20に掘り込まれ、SI-2東壁を掘り込んでいる。SB-10と重複するが、柱穴の切合いがなく前後関係は不明である。柱掘方の規模や柱間寸法の規格性からはSB-9の方が古いとみられるが、SB-10の柱穴はいずれも抜取穴でありSB-9より古い可能性もある。主軸はN-14°-Wである。

規模・形状 南は調査区外となるため、正確な規模は不明であるが、桁行3間、梁行2間以上の側柱式の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が1.7m等間、梁行は若干ばらつきがあるが、およそ1.8m(6尺)である。柱掘方は、楕円形から隅丸方形を呈し、長辺が約0.8～1.1mで、確認面からの深さは20cm前後で、上部はかなり削平を受けているようである。柱穴底面の標高は74.83～74.98mとほぼ一定であることから、旧地表面は水平に近いと考えられる。P1・P3・P6は柱痕跡が底面より4～8cm沈下しており、P3は柱痕跡がわずかに東へ傾斜している。P2は柱痕跡が底面まで及んでいないことから、柱掘方の掘削作業と柱の製材や立柱作業に一貫性がなかった。別の建物の柱材を再利用したなどの可能性も推定できる。P5の柱は抜き取られており、柱抜取穴から復元できる柱径は20cm前後である。その他の柱穴も柱径20cm前後でそうだが、P1は30cmと一回り太くなっている。P4は、検出段階で柱痕跡が不明瞭であったが、断面では暗褐色土主体の柱痕跡が認められる。南西隅のくぼみは掘り過ぎによるものである。



SB-9

- 1 明黒褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5cm程度) 微量。炭化物粒少量。炭化物 (0.5~1cm) 少量。焼土粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。柱礎跡埋土。
- 2 暗褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5cm程度) 微量。炭化物粒少量。炭化物 (0.5~1cm) 微量。焼土粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。柱礎跡埋土。
- 3 褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5~3cm) 少量。炭化物粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。柱礎方埋土。
- 4 黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (1~5cm) 多量。しまりあり。柱礎方埋土。

第25図 SB-9遺構図



第26図 SB-9出土遺物実測図

第7表 SB-9出土遺物観察表

発掘番号	種別・器種	法量 (cm/g)	成形技法・特徴	胎土	色調・構成	残存率	出土位置	備考
1	土師器 小型甕	口径 (13.6) 底径 - 器高 [4.5]	内面:ヨコナデ, 外面:ヨコナデ。	砂粒微量	内:にぶい褐 7.5YR5/3 外:にぶい褐 7.5YR5/3 構成:普通	口縁~底部 1/6	SB-9P1	
2	土師器 甕	口径 - 底径 (7.2) 器高 [4.6]	内面:口縁部ナデ、肩部ヘラナデ。 外面:口縁~肩部ヨコナデ。	砂粒・ガラス粒 粒多量	内:にぶい褐 7.5YR5/3 外:灰褐 7.5YR4/2 構成:良好	口縁部破片	SB-9P2	8C中頃少 常陸型甕
3	須恵系 杯	口径 - 底径 (7.2) 器高 [3.1]	内面:体~底部ロクロナデ。 外面:体部ロクロナデ、底部ヘラ切り 後ナデ。	石黄粒・長石粒・ 砂粒微量	内:灰 N4/ 外:灰 N4/ 構成:良好	体~底部 1/8	SB-9P5	9C 中頃 第1四半期 曇子須恵 (方 寸考)
4	土師器土師 灯明土	口径 (9.0) 底径 - 器高 [2.0]	内面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底 部指オサエ。 外面:口縁部ヨコナデ、体~底部ナデ、 内外面口縁部又付着。	赤色粒・石黄粒 微量	内:にぶい赤褐 5YR5/4 外:にぶい赤褐 5YR5/4 構成:普通	口縁~底部 1/5	SB-9P4 土師 (P4土層層乱 中層)	13C中頃

埋土 柱痕跡はP5を除くすべての柱穴で確認された。また、柱掘方埋土である4層以外では、男体今市スコリア(Nt-I)と男体七本桜軽石(Nt-S)を微量含む。柱痕跡埋土は、ローム粒・炭化物粒を少量含む暗褐色土を主体とし、柱掘方埋土はローム粒・ロームブロックを少量含む褐色土を主体とする。

遺物と出土状況 遺物は非常に少ない。P1からP6の埋土中より土師器甕や須恵器蓋・坏・高台付坏・甕、焼成粘土塊が出土している。2は常総型の土師器甕、3は9世紀第1四半期のカスガ入窯段階の須恵器坏、4は撈乱とみられる土層から出土した土師質土器の皿(灯明皿)である。

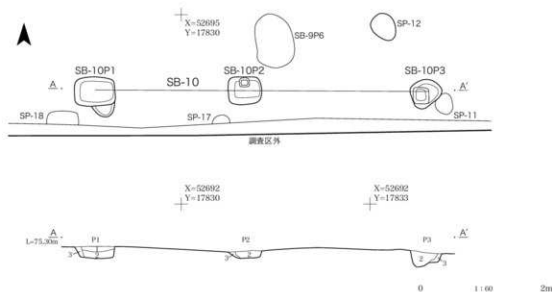
掘立柱建物SB-10(第27図、図版八・九・一二)

重複関係 SB-9と重複するが、柱穴の切合いがなく前後関係は不明である。規模や規格性からはSB-9が古いとみられるが、SB-10はいずれも柱抜取穴でありSB-9より古い可能性もある。軸はほぼ正方位である。

規模・形状 南は調査区外となるため、建物の規模や棟方向、構造は不明であるが、東西2間以上、南北1間以上の掘立柱建物である。間寸法は、1間目が2.4m、2間目が2.8mとばらつきがある。柱掘方は、楕円形から長方形を呈し、長辺が0.5～0.64mで確認面からの深さは10～25cmと浅く、上部はかなり削平を受けているようである。柱穴底面の標高は、74.82～74.96mとほぼ一定であることから、旧地面は水平に近いと考えられる。柱はいずれも抜き取られており、その後ローム粒・ロームブロックを少量含む黒褐色土(2層)で埋め戻されている。柱抜取穴から復元できる柱径は30～40cmである。P2・P3の柱穴底面は方形にくぼむ部分があり、この部分が柱痕跡である可能性がある。

埋土 埋土全体に男体今市スコリア(Nt-I)と男体七本桜軽石(Nt-S)を微量含む。柱抜取穴埋土は、ローム粒・ロームブロックを少量含む黒褐色土を主体とし、柱掘方埋土はローム粒・ロームブロックを多量含む黄褐色土を主体とする。

遺物と出土状況 遺物は非常に少ない。小片のため図化していないが、P1からP3の埋土中より、土師器坏・



SB-10

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック(0.5～1cm)少量、炭化物粒微量、Nt-Iスコリア・Nt-S軽石微量、しまりあり、柱抜取穴埋土
- 2 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック(0.5～1cm)少量、炭化物粒微量、Nt-Iスコリア・Nt-S軽石微量、しまりあり、柱抜取穴埋土
- 3 黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(1～5cm)多量、Nt-Iスコリア・Nt-S軽石微量、しまりあり、柱掘方埋土

第27図 SB-10遺構図

甕、益子窯産の須恵器環が出土している。益子窯産の須恵器環が出土していることや柱穴の規模から、古代の遺構である可能性が高い。

(3) 土坑

土坑 SK-39 (第28図、図版一二)

重複関係 SD-38 に掘り込まれる。

規模・形状 平面プランは不整形を呈し、長軸0.95m、短軸0.9m、残存する深さは0.65mである。底面はほぼ平坦で、南壁の一部はオーバーハング気味に掘り込まれている。

埋土 粘質ローム粒を多量含む暗褐色土を主体とすることから、人為埋没と考えられる。

出土遺物 混入品とみられる土師器環の薄片が1点出土しただけで、この土坑の時期は判断できなかった。



第28図 SK-39遺構図

(4) 溝

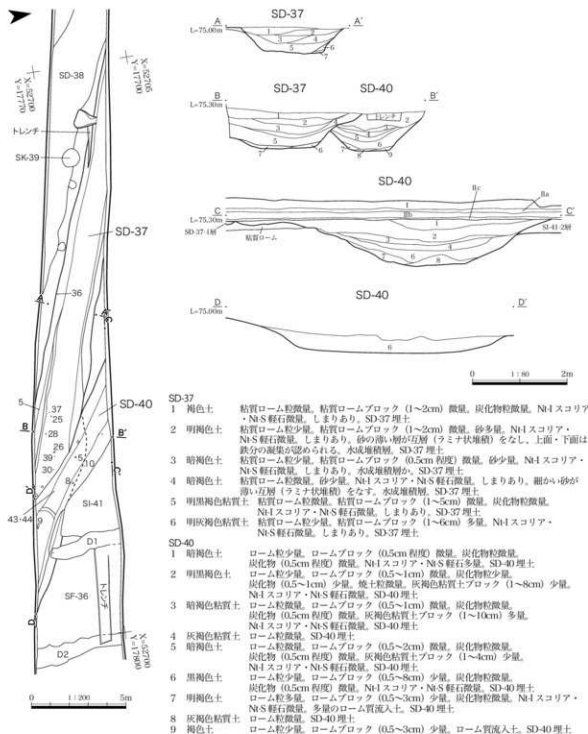
溝 SD-37 (第29～31図、第8表、図版一二～一四・二二～二四)

位置・重複関係 北区西端部にあり、SD-38 に掘り込まれ、SD-40 を掘り込んでいる。主軸は N-20°-E である。

規模・形状 上幅 2.05～2.56m、下幅 1.22m～1.54m、深さ 0.5～0.8m、断面形は逆台形状を呈する。堆積状況から一度溝が埋没した後掘り直した痕跡が認められる。古い溝は新しい溝より幅が狭く深いもので、東半では溝の掘り直しが見え、結果的にテラス状になる。底面標高は 74.34～74.53m で、西から東へ傾斜しており、壁面や底面には、掘削時の工具痕が残されている。

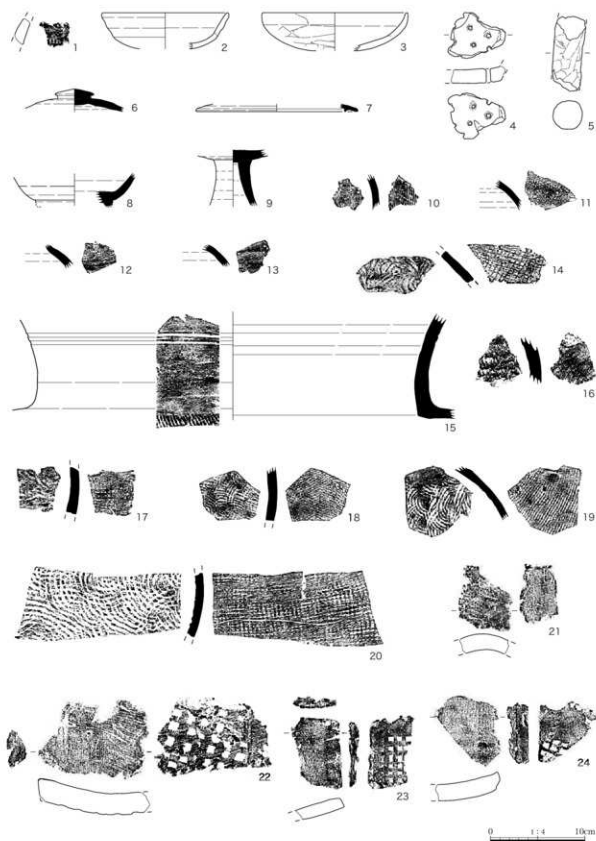
埋土 基本的に自然埋没で、いずれの層からも浅間 B テフラ (As-B)、男体今市スコリア (Nt-1)、男体七本桜軽石 (Nt-S) が検出された。古い溝では砂粒やロームブロックを含まない黒褐色土 (7層)、ロームブロックを多量含む明灰褐色粘質土層 (6層) が堆積している。新しい溝では、下層 (5層) はグライ化した黒灰色粘質土が主体となり、中層は砂粒が薄くラミナ状に堆積している状況 (2・4層) や砂粒を少量含む暗褐色土 (3層) が認められることから、水成堆積層と判断できる。

遺物出土状況 遺物の出土状況は、基底部からの出土はなく、5層中から青磁碗のほか混入品とみられる土師器環や三足土器、SD-40 と切合う 1～4層中からも土師質土器皿などが少量出土している。また、溝東部からの出土が多い傾向にある。中世の遺物は少量であり土師質土器皿、常滑窯など国産陶磁器、龍泉窯・同

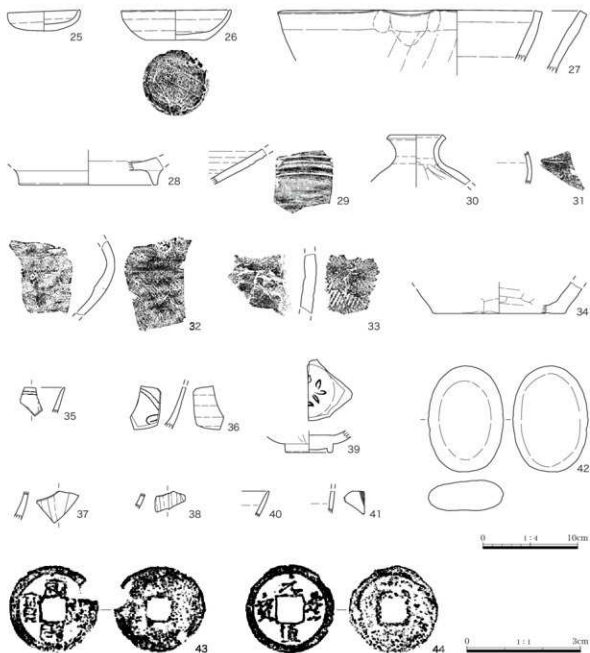


第29図 SD-37・40遺構図

安窯系の中国産陶磁器が出土している。上層 (1層) から龍泉窯系青磁碗、白磁碗、常滑窯産片口鉢、中層 (2~4層) から土師質土器皿や錢貨、下層 (5層) から龍泉窯系青磁碗、白磁碗、常滑産瓶子、山茶碗窯系片口鉢、女瓦が出土している。これらのうち、埋土一括で取り上げたものや1~4層中から出土したものについては、SD-40に伴う遺物が含まれている可能性もある。また、埋土一括で取り上げたものの中には、土師器や須恵器など周囲からの混入品が多く含まれている。



第30図 SD-37 出土遺物実測図(1)



第31図 SD-37出土遺物実測図(2)

出土遺物 25は13世紀後半～14世紀前半の手づくねの土師質土器皿、26は13世紀後半頃のロクロ成形の土師質土器皿である。27は13世紀中頃の常滑窯産の片口鉢、28は13世紀後半の山茶碗窯系の片口鉢で、29は古瀬戸の三足盤で内面に軸がみられないことから、14世紀後半～15世紀中頃とみられる。30は12世紀後半頃の常滑窯産の瓶子、33は13世紀初頭の渥美窯産の大甕である。35・36は12世紀後半～13世紀前半の龍泉窯系青磁碗で、11世紀後半～12世紀中頃にさかのぼる可能性もある。37～39は13世紀後半～14世紀初頭の龍泉窯系青磁碗で、37は鏡蓮弁文の様相から12世紀後半～13世紀前半にさかのぼり、39は退化した草花文の様相から14世紀末～15世紀にくだる可能性もある。40は12世紀後半の白磁碗で、41は12世紀後半～13世紀頃の同安窯系の白磁梅瓶である。銭貨は2点出土しており、43は唐国通宝、

第8表 SD-37 出土遺物観察表

掲載番号	種別・名称	法量 (cm ³)	成形技法・特徴	胎土	色調・構成	残存率	出土位置	備考
1	赤土器 磁か	口径 - 底径 - 器高 [2.7]	内面：頸部コナデ後縁状文。 外面：コナデ。	赤色粒・砂粒混 量	内：赤い黄緑 10YR7/3 外：赤い黄緑 10YR7/3 構成：普通	頸部破片	SD-37 東部	養生後陶か 二軒屋式？
2	土師器 環	口径 (13.2) 底径 [3.8] 器高 [3.8]	内面：口縁部コナデ。体～底部ヘラ ナデ。 外面：口縁～体部コナデ。底部ヘラ ナデ。外周著しく磨耗。	赤色粒・黒雲母 粒・砂粒混量	内：橙 5YR7/6 外：橙 5YR7/6 構成：普通	口縁～体部 1/6	SD-37 東区	古墳時代
3	土師器 環	口径 (15.2) 底径 - 器高 [4.0]	内面：口縁～体部コナデ。底部ナデ。 外面：口縁部コナデ。体～底部ヘラ ナデ。	赤色粒・黒雲母 粒・石英粒・砂 粒混量	内：赤い橙 5YR6/4 外：赤い橙 5YR6/4 構成：普通	口縁～底部 1/4	5層 SD-37No.8	7C前半
4	土師器 瓶	口径 - 底径 - 器高 [1.8]	内面：ヘラ加工によるナデ。 外面：ヘラナデ後ナデ。	砂粒混量	内：橙 5YR6/6 外：橙 5YR6/6 構成：普通	底部破片	SD-37 東区	古墳中～後半 鉢形瓶
5	土師器 三足土器	口径 - 底径 - 器高 [7.9]	三足土脚の脚部、円柱状で表面をナデ 調整する。	砂粒多量、石英 粒混量	内：赤い黄緑 10YR6/3 構成：不良	頸部破片	5層 SD-37No.10	9C後半～10C 前半
6	須恵器 蓋	口径 - 底径 - 器高 [2.4]	内面：ロクロナデ。 外面：体部コナデ。天井部凹転ハ ラケズリ後つまみ彫付（ボタン状つま み）。	雲母粒・砂粒混 量	内：灰白 2.5Y8/2 外：灰白 2.5Y8/2 構成：普通	つまみほぼ完 存 3層 SD-37No.9 SD-40 へらト 部分	3層 SD-37No.9 SD-40 へらト 部分	8C前半 産地不明
7	須恵器 高杯	口径 (17.0) 底径 [0.8] 器高 [3.4]	内面：ロクロナデ。 外面：ロクロナデ。	砂粒混量	内：灰白 2.5Y8/2 外：灰白 2.5Y8/2 構成：不良	口縁部破片	SD-37 東区	産地不明 三葺京産か？
8	須恵器 高杯付付	口径 - 底径 (8.4) 器高 [3.4]	内面：ロクロナデ。 外面：ロクロナデ後高台彫付。	砂粒少量、白色 粒混量	内：灰 7.5Y5/1 外：灰 10Y6/1 構成：良好	底部 1/5	SD-37 東区	8C 第2四半期 ～中頃 益子京産（原 裏1・3）
9	須恵器 高杯	口径 - 底径 - 器高 [6.0]	内面：ロクロナデ。 外面：ロクロナデ。	砂粒少量、石英 粒・長石粒混量	内：灰 7.5Y6/1 外：灰 7.5Y6/1 構成：良好	坏部破片 脚部 1/2	SD-37 東部	8C後半か 益子京産
10	須恵器 腹間か平瓶	口径 - 底径 - 器高 [3.6]	内面：ロクロナデ。 外面：ロクロナデ後力半目。	砂粒混量	内：灰 5Y6/1 外：灰 N6/ 構成：良好	頸部破片	SD-37 東区	益子京産
11	須恵器 横瓶か	口径 - 底径 - 器高 [3.1]	内面：ロクロナデ。 外面：ヘラナデ。	砂粒少量、石英 粒混量	内：灰 5Y6/1 外：灰 5Y7/1 構成：良好	頸部破片	SD-37 東部	益子京産
12	須恵器 横瓶	口径 - 底径 - 器高 [2.4]	内面：ロクロナデ。 外面：ロクロナデ後垂橋流状文。	黒色粒多量、砂 粒混量	内：灰白 2.5Y7/1 外：黄灰 2.5Y5/1 構成：良好	頸部破片	SD-37 中央区	産地不明
13	須恵器 横瓶	口径 - 底径 - 器高 [2.2]	内面：ロクロナデ。 外面：ロクロナデ。	砂粒混量	内：灰黄 2.5Y6/2 外：灰黄 2.5Y7/2 構成：良好	頸部破片	SD-37 東部	南部須か三葺 京産
14	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [3.3]	内面：同心文当て具。脚部。 外面：真格子叩き後力半目。	砂粒混量	内：灰 5Y6/1 外：灰 N5/ 構成：良好	頸部破片	SD-37 東区	下野系須恵器 産
15	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [11.5]	内面：ロクロナデ。指オサエ。 外面：頸部ロクロナデ後垂橋流状文1 条。凹転2条。胴部平行叩き。	砂粒少量、石英 粒・長石粒混量	内：灰 N4/N6/ 外：灰 N5/ 構成：良好	頸部 1/4	SD-37	8Cか 益子京産
16	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [5.0]	内面：平行当て具。 外面：平行叩き後一部力半目。	砂粒少量、石英 粒混量	内：灰 5Y6/1 外：灰 5Y5/1 構成：良好	頸部破片	SD-37 東部	鶴倉窯
17	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [4.9]	内面：同心文当て具。 外面：格子叩き。	砂粒混量	内：灰 N6/ 外：灰 5Y6/1 構成：良好	頸部破片	SD-37 中央区	古墳時代 7C 以前 産地不明
18	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [5.5]	内面：同心文当て具。 外面：平行叩き。	砂粒混量	内：灰 N5/ 外：灰 N5/ 構成：良好	頸部破片	SD-37 東区	古墳時代 7C 以前
19	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [5.5]	内面：ロクロナデ。同心文当て具。 外面：真格子叩き。	砂粒混量	内：灰 N6/ 外：灰 N6/ 構成：良好	頸部破片	SD-37 へらト	古墳時代 7C 以前 産地不明
20	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [6.8]	内面：同心文当て具。 外面：真格子叩き後力半目。	砂粒混量	内：灰 5Y4/1 外：灰 N7/ 構成：良好	頸部破片	SD-37 中央区	産地不明 下野系須恵器 産
21	男瓦	長 17.5 幅 15.5 厚 11.7 重 78.39	凸面：タテヘラケズリ。 凹面：布目。	砂粒混量	凸：赤い黄緑 10YR7/3 凹：赤い黄緑 10YR7/3 構成：普通	破片	SD-37 東部	
22	女瓦	長 19.1 幅 112.2 厚 12.3 重 324.35	凸面：格子叩き。糸切痕。 凹面：糸切痕。布目。 側面：ヘラケズリ。	砂粒多量、石英 粒混量	凸：灰 5Y5/1 凹：灰 N4/ 構成：良好	破片	SD-37 東区×5 層	益子京産 粘土板 下野同分寺跡 428 形式カ
23	女瓦	長 17.7 幅 15.5 厚 11.3 重 78.24	凸面：格子叩き。 凹面：布目。側面ヘラケズリ。 側面：真格子叩き後力半目。	白色粒多量、黒 雲母粒混量	凸：灰 7.5Y6/1 凹：淡黄 2.5Y8/3 構成：普通	破片	SD-37 東区	下野同分寺跡 228 形式カ
24	女瓦	長 17.8 幅 17.3 厚 11.8 重 122.98	凸面：格子叩き後コナデ。 凹面：布目。 側面：ヘラケズリ。面取。	石英粒・砂粒混 量	凸：灰 N4/ 凹：灰 N5/N6/ 構成：良好	破片	SD-37 東区	西山窯 大内院寺御建 期

図録番号	種別・名称	法相 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
25	土師瓦土高 蓋	口径 7.6 底径 - 高さ 2.3	内面:口縁部ヨコナデ、体一底部ナデ、指オサエ。 外面:口縁部ヨコナデ、体一底部ナデ。	白色粘土質、黒 雲母粒・砂粒混 量	内:黄 5YR6/6 外:黄 5YR6/6 焼成:普通	口縁一底部 4/5	3層 SD-37No.9	13C 後半～ 14C 前半 子づくむ
26	土師瓦土高 皿	口径 11.5 底径 6.5 高さ 3.2	内面:口縁～体部ロクロナデ、底部ロ クロナデ後ヨコナデ。 外面:口縁～体部ロクロナデ、底部回 転糸切り後調整。板状口縁。	金雲母粒多量。 砂粒微量	内:にぶい-橙 7.5YR6/4 外:にぶい-橙 7.5YR6/4 焼成:良好	口縁～体部 5/8 底部完存	4層 SD-37No.2 SD-37 東区	13C 後半
27	陶器 片口鉢	口径 (28.0) 底径 - 器高 [6.9]	内面:ヨコナデ。体部摩滅(使用痕)。 外面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	砂粒多量	内:黄灰 2.5Y5/1 外:にぶい-黄 7.5YR5/3 焼成:良好	口縁部 1/8	SD-37 西区	13C 後半～ 14C 前半 常楽堂 6B～7 付点
28	陶器 片口鉢	口径 - 底径 (14.6) 器高 [3.7]	内面:ロクロナデ。底部摩滅(使用痕)。 外面:ロクロナデ後高台付。底部磨 れ砂付着。	砂粒微量	内:灰白 2.5Y7/1 外:灰白 2.5Y7/1 焼成:良好	底部 1/8	5層 SD-37No.1	13C 後半 山形窯系
29	陶器 三足盤	口径 - 底径 - 器高 [3.6]	内面:ロクロナデ。 外面:ロクロナデ、回転ヘラケズリ。 内外面無釉。	砂粒・礫微量	内:淡黄 2.5Y8/3 外:淡黄 2.5Y8/3 焼成:良好	体部破片	SD-37 東区	15C 中後期 14C 中後期 常楽堂
30	陶器 飯子	口径 (5.6) 底径 - 器高 15.5]	内面:口縁～腹部ロクロナデ、肩部指 オサエ。 外面:ロクロナデ。 内外面自然釉付着。	砂粒微量	内:灰 7.5Y5/1 外:灰白 7.5Y6/2 焼成:良好	口縁部 1/2 腹部完存	5層 SD-37No.4	12C 後半頃 常楽堂
31	陶器 飯子	口径 - 底径 - 器高 [2.8]	内面:ロクロナデ。 外面:ロクロナデ後平行沈線2条。無 釉。	白色粒微量	内:灰黄 2.5Y7/2 外:灰黄 2.5Y6/2 焼成:良好	腹部破片	SD-37 東区	瀬戸系灰陶 器
32	陶器 甕	口径 - 底径 - 器高 [7.7]	内面:ヨコナデ。 外面:肩部ヨコナデ。腹部ヘラケズリ。	砂粒少量。石英 粒・礫微量	内:にぶい-黄 10YR5/3 外:灰黄 7.5YR4/2 焼成:良好	腹部破片	SD-37 東区	
33	陶器 甕	口径 - 底径 - 器高 [6.2]	内面:ナデ。 外面:平行明きナデ。	砂粒微量	内:黄灰 2.5Y6/1 外:灰白 2.5Y7/1 焼成:良好	腹部破片	SD-37 中央区	13C 初頭 海楽堂 大甕
34	陶器 甕	口径 - 底径 (14.0) 器高 [3.3]	内面:腹部ロクロナデ、指オサエ。底 部指ナデ。 外面:腹部ロクロナデ、底部ナデ。 内面一底部外面自然釉付着。	砂粒微量	内:灰 5Y6/1 外:灰 7.5Y5/1 焼成:良好	底部 1/8	SD-37 東区	
35	青磁 碗	口径 - 底径 - 器高 [3.0]	内面:口縁部沈線2条。体部割花文。 無釉。 外面:ロクロナデ後無釉。 貫入なし。	精織	内:明オリーブ灰 5G7/1 外:明オリーブ灰 5G7/1 焼成:良好	口縁部破片	SD-37 東区	13C 初頭 龍泉窯系A4 類
36	青磁 碗	口径 - 底径 - 器高 [4.6]	内面:蓮華指文(片切り彫り)。無釉。 外面:無釉。 貫入あり。	精織	内:オリーブ灰 5G6/1 外:オリーブ灰 5G6/1 焼成:良好	体部破片	1層底土6cm SD-37No.12	12C 後半～ 13C 前半 龍泉窯系A2 類
37	青磁 碗	口径 - 底径 - 器高 [3.3]	内面:無釉。 外面:体部割蓮花文。無釉。 貫入あり。	精織	内:灰 10Y6/1 外:オリーブ灰 10Y6/2 焼成:良好	体部破片	5層 SD-37No.8	13C 後半～ 14C 初頭 龍泉窯系B1 類
38	青磁 碗	口径 - 底径 - 器高 [2.2]	内面:無釉。 外面:体部割蓮花文。無釉。 貫入なし。輪が厚い。	精織	内:オリーブ灰 5G6/1 外:オリーブ灰 2.5G6/1 焼成:良好	体部破片	SD-37 東区1 層	13C 後半～ 14C 初頭 龍泉窯系B0 類
39	青磁 碗	口径 - 底径 5.0 器高 [2.3]	内面:足見草花文。無釉。 外面:蓮弁文。体一高台部無釉。費付 ～外底部高脚。 貫入あり。	黒色粒微量	内:明オリーブ 5Y5/2 外:明オリーブ 5Y5/2 焼成:良好	底部 1/2	4層 SD-37No.3	13C 後半～ 14C 初頭 龍泉窯系B1 類
40	白磁 碗	口径 - 底径 - 器高 [2.7]	内面:ロクロナデ後無釉。沈線1条。 外面:ロクロナデ後無釉。 貫入あり。	黒色粒微量	内:灰オリーブ 5Y6/2 外:灰オリーブ 5Y6/2 焼成:良好	口縁～体部破 片	SD-37 東区1 層	12C 後半 白磁陶 V 類
41	白磁 小型の輪軸 か	口径 - 底径 - 器高 [2.4]	内面:ロクロナデ後無釉。 外面:口縁部沈線3条(渦巻文)。無釉。 貫入あり。	黒色粒微量	内:灰白 10YR7/1 外:灰白 7.5Y7/1 焼成:良好	腹部破片	SD-37 東区	12C 後半～ 13C 同安窯系
42	石製品 磨石	長 11.2 幅 8.0 厚 3.2 重 381.98	自然の河原石を利用。表裏面には全体的に厚摩滅が認められる。絶熱性や硬付 損は認められない。安山岩			完整	SD-37	
43	銅製品 銭貨	外縁外径:24.14mm 外縁内径:19.11mm 内径外径:7.7mm 内径内径:6.2mm 外縁厚:1.27mm 重:2.22g 唐国建宝(初鑄985年)				一部欠損	2層 SD-37No.6	青銅類
44	銅製品 銭貨	外縁外径:23.97mm 外縁内径:18.91mm 内径外径:7.87mm 内径内径:6.84mm 外縁厚:1.40mm 重:2.95g 元徳通宝(初鑄1078年)				完整	2層 SD-37No.6	青銅類

44 は元豊通宝である。このほか、弥生時代後期の壺（1）、古墳時代の土師器環（2・3）、古墳中期～後期の甕（4）、益子窯産の須恵器蓋・環・高台付環（8）・高坏（9）・瓶類（10・11）、甕、9世紀後半～10世紀前半の土師器三足土器（5）、下野系須恵器甕（14）、篠倉窯段階の須恵器甕（16）、須恵器甕（18～20）、磨石（42）が出土しているが、これらは周囲からの混入品と考えられる。

時期と性格 出土した土師質土器皿や陶磁器の年代から、13世紀後半～14世紀頃の遺構と考えられる。これは埋土中から浅間Bテフラ（As-B）が検出されることも総合的である。ただし、30・40のように12世紀後半の遺物や、35・36のように11世紀後半～12世紀中頃までさかのぼる可能性のある遺物が出土していることから、重複するSD-40も含めて下限は12世紀以前となる可能性も考えられる。遺構の性格については、台地と低地の境界に沿うように掘られており、上幅約2.0～2.5m、深さ0.5～0.8mと比較的規模が大きいこと、中国産陶磁器や北宋銭が出土することなどから、中世寺院や館に伴う区画溝である可能性が高いと考えられる。また、調査区の南は台地縁辺であることから、今回確認した溝は館南辺の溝に相当し、館本体は北側に存在していたと推定される。

溝SD-40（第29・32図、第9表、図版一三・一四・二四・二五・三一）

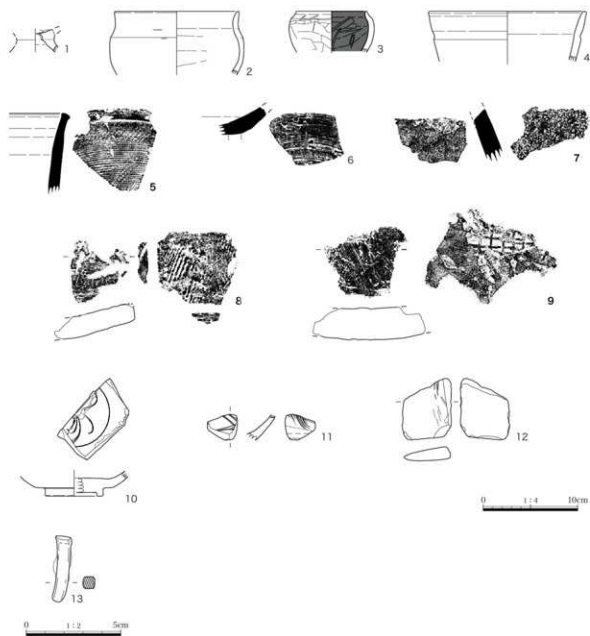
位置・重複関係 北区中央付近にあり、SD-37に掘り込まれ、SI-41・SF-36を掘り込んでいる。また、栃木県教育委員会による試掘トレンチにより、上面の一部が壊されている。主軸はN-36°Eである。

規模・形状 上幅約2.0m、下幅0.7～0.84m、深さ0.78～0.98m、断面形は逆台形状を呈する。底面標高は74.06～74.22mで、北西から南東へ傾斜している。底面や壁面には、掘削時の工具痕が残されているが、SD-37ほど掘削単位が明瞭ではない。

埋土 調査時の所見では1～3層は人為埋没、それ以外はローム粒を含むが自然埋没と考えられる。また、いずれの層からも浅間Bテフラ（As-B）、男体今市スコリア（Nt-I）、男体七本桜軽石（Nt-S）が検出された。下層はローム粒を含む褐色～明褐色土（7・9層）と灰褐色粘質土層（8層）で、壁面の崩落により地山の粘質ロームなどが流入したものと考えられる。中層はローム粒を少量含む黒褐色土（6層）、灰褐色粘質ブロックを少量含む暗褐色土（5層）、グライ化した灰褐色粘土層（4層）が堆積している。このうち、4層および5層上面はグライ化が認められることから、一時期滞水していたと考えられる。上層はローム粒のほか炭化物粒・焼土粒を微量含む粘質土層（3層）とローム粒のほか炭化物粒・焼土粒を少量含む明黒褐色土層（2層）、ローム粒・炭化物粒を少量含む暗褐色土が堆積している。埋土全体でラミナ状堆積が認められないことから、空堀であったと推定される。

遺物出土状況 全体的に遺物の出土量が少ないが、5・6層中からの出土が多い傾向にある。中世の遺物は少量であり、龍泉窯・同安窯系の中国産陶磁器が出土している。上層から同安窯系青磁碗と砥石、中層（6層）から龍泉窯系青磁碗が出土している。これらのうち、埋土一括で取り上げたものについては、SD-37に伴う遺物が含まれている可能性もある。このほか、5層から女瓦、6層から須恵器鉢・女瓦が出土し、埋土一括で取り上げたものなかには、土師器や須恵器など周囲からの混入品が多く含まれている。

出土遺物 10は12世紀後半～13世紀前半の龍泉窯系青磁碗で、11は13世紀初頭の同安窯系青磁碗である。いずれも11世紀後半～12世紀中頃にさかのぼる可能性がある。遺物の大半は土師器甕で、ほかに土師器高坏（1）・鉢（2・3）、須恵器蓋・環・高台付環・鉢（5）・壺（6）・瓶類・甕（7）、女瓦（8・9）、焼成粘土塊、砥石（12）、鉄製の釘（13）が出土しているが、これらは周囲からの混入品と考えられる。とくに、古墳時代の土師器鉢（2・3）は重複するSI-41から混入した可能性が高いとみられる。



第32図 SD-40出土遺物実測図

時期と性格 出土した陶磁器の年代から13世紀初頭の遺構と考えられる。これは埋土中から浅間Bテフラ(As-B)が検出されることも総合的である。ただし、10・11のように11世紀後半～12世紀中頃までさかのぼる可能性のある遺物が出土していることから、重複するSD-37も含めて下限は12世紀以前となる可能性も考えられる。遺構の性格については、SD-37と同様に台地と低地の境界に沿うように掘られており、上幅約2.0m、深さ0.78～0.98mと比較的規模が大きいこと、中国産陶磁器や北宋銭が出土することなどから、中世寺院や館に伴う区画溝である可能性が高いと考えられる。また、調査区の南は台地縁辺であることから、今回確認した溝は館南辺の溝に相当し、館本体は北側に存在していたと推定される。

第9表 SD-40 出土遺物観察表

視察番号	種類・形状	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	土師器 高坏	口径 - 底径 - 器高 [2.5]	内面：坏部ヘラナデ、脚部ナデ、一部ヘラナデ止痕。 外面：土コナデ。	砂粒多量、黒炭母粒微量	内：ふいね 7.5YR6/3 外：灰濁 7.5YR5/2 焼成：普通	脚部一部	SD-40 60A	
2	土師器 鉢	口径 (13.0) 底径 - 器高 [5.7]	内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、輪轆痕。	黒色胎土・砂粒微量	内：ふいね黄緑 10YR7/3 外：ふいね黄緑 10YR7/2 焼成：普通	口縁部一部 体部 1/8	SD-40 ベルト部分 SD-40 東平	7C 前半
3	土師器 鉢	口径 (7.4) 底径 - 器高 [4.4]	内面：口縁部ナデ、体部ヘラナデ後一部ヘラミガキ。 外面：口縁部ナデ、体部ヘラナデ後一部ヘラミガキ。	砂粒微量	内：黒 N2/ 5YR6/4 10YR7/2 焼成：普通	口縁～体部 1/4	SD-40 ベルト部分	7C 前半
4	土師器 鉢	口径 (16.4) 底径 - 器高 [5.6]	内面：口縁～体部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部調整不明、体部剥落が著しい。	赤色胎・砂粒微量	内外：ふいね 5YR6/4 にふいね黄緑 10YR7/3 焼成：普通	口縁部 1/6	SD-40 ベルト部分	
5	須恵器 鉢	口径 - 底径 - 器高 [8.5]	内面：ロケロナデ。 外面：口縁部ロケロナデ、体部平行凹き後ひろコナデ、古キ目。	石英粒・長石粒・砂粒微量	内：灰白 2.5Y8/1 外：灰白 2.5Y7/1 焼成：良好	口縁～体部 1/8	6層 SD-40No.2	7C 産地不明
6	須恵器 皿	口径 - 底径 - 器高 [2.9]	内面：調整不明。 外面：割部ロケロナデ後下端ヘラナデナリ、底部ナデ。高台部剥離。	石英粒・長石粒・砂粒微量	内：灰 5Y5/1 外：灰 N5/ 焼成：良好	割部破片	SD-40 東平	
7	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [5.4]	内面：ナデ。 外面：自然釉付着。	砂粒微量	内：黄灰 2.5Y6/1 外：黄灰 2.5Y5/1 焼成：良好	割部破片	SD-40 東平	産地不明
8	女瓦	長 [7.9] 幅 [8.5] 厚 [2.2] 重 [173.02]	凸面：縄目。 凹面：布目痕。広縁割縁部ヘラナズリ、割面：広縁部・側面ヘラナズリ。	砂粒少量、赤色粒・石英粒微量	凸：橙 5YR6/6 凹：橙 5YR6/6 焼成：普通	破片	5層 SD-40No.4	
9	女瓦	長 [10.1] 幅 [13.7] 厚 [3.5] 重 [434.65]	凸面：格子目後ナデ。 凹面：布目痕。	砂粒少量	凸：灰 N5/ 凹：灰 N5/ 焼成：良好	破片	6層 SD-40No.6	下野岡分寺跡 83型式カ
10	青磁 碗	口径 - 底径 (6.0) 器高 [2.8]	内面：足ひも蓮華文(片切彫り)。垂軸。 外面：体～高台部垂軸。費付～外底部露胎。	精釉	内：オリーブ灰 2.5G7/1 外：灰 10Y6/1 焼成：良好	底部 1/2	6層 SD-40No.3	12C 後半～ 13C 前半 鹿屋系系A類
11	青磁 碗	口径 - 底径 - 器高 [2.7]	内面：体部花文。垂軸。 外面：ロケロナデ後体部上下半彫文。上半垂軸。下半露胎。 貫入なし。	精釉	内：オリーブ灰 2.5G7/1 外：灰 7.5Y6/1 焼成：良好	体部破片	SD-40 東上層	13C 初通 同家系系A類
12	石製品 砥石	長 [6.4] 幅 [5.3] 厚 [1.7] 重 [58.88]	表面面を使用し、著しく摩滅する。ただし、浅い体縁状の痕跡もわずかに残る。 広・狭端部・右側面を欠損。凝灰岩			一部欠損	SD-40 東上層	
13	鉄製品 釘	長 [3.5] 幅 [0.8] 厚 [0.7] 重 [3.60]	先端部を欠損しているかもしれないが、錆が厚いため確実ではない。頭部が円の手前側に逆J字状にくわずかに張り出す。身の断面形状は上部が正方形に近く、下部はやや狭くなり断面形状は長方形に近しい。			一部欠損	SD-40 ベルト部分	

(5) ビット (第33・34図、第10表、図版一五・一六)

調査区全体で23基のビットを検出した。調査区が狭小であるため、本来の分布状況は不明であるが、ビットは調査区中央付近に集中する傾向にある。平面形は、不整形を呈するものが多く、掘立柱建物の柱穴と推定されるものは隅丸長方形を呈するものが多い。掘立柱建物や櫛列など建築物として組合せを把握するにはいたらなかったが、多くのビットで柱痕跡や柱抜取穴が認められることから、大半が掘立柱建物の柱穴であったと推定される。SP-27～SP-29がやや直線的に並ぶ配置であるが、埋土や柱痕跡の形状に共通性がなく、掘立柱建物との位置関係や主軸方位が異なる点からも、櫛列とするには疑問が残る。SP-21・SP-22・SP-33・SP-34は、規模・形状が掘立柱建物の柱穴と類似し、柱径15cmほどに復元できる柱痕跡が認められるものもあることから、掘立柱建物の柱穴であった可能性が高い。

柱痕跡の埋土は、ローム粒・ロームブロック・炭化物粒を含む黒褐色～明黒褐色土を主体とする。柱痕跡の埋土は、下層ではローム粒・ロームブロックを多量含む黄褐色～暗黄褐色土が主体となり、上層ではローム粒・ロームブロックを少量含む黒褐色土が主体となる。柱抜取穴を含む柱痕跡の大半は人為埋没であり、

第10表 ビット一覧表

遺構名	規模 (m)			形状	種別	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
ビット SP-11	0.34	0.28	0.12	不整円形	柱穴 (柱痕跡あり)	
ビット SP-12	0.45	0.37	0.27	不整円形	柱穴 (柱痕跡あり)	土師器甕
ビット SP-13	0.26	0.25	0.31	円形, 底面方形	柱痕跡	
ビット SP-14	0.4	0.37	0.17	不整円形	柱穴 (柱痕跡あり)	
ビット SP-15	0.26	0.24	0.29	不整円形	抜取穴か	
ビット SP-16	0.38	0.38	0.18	隅丸方形	柱穴 (柱痕跡あり)	
ビット SP-17	0.28	[0.14]	0.2	平面形状不明	柱穴 (柱痕跡あり)	
ビット SP-18	0.4	[0.22]	0.23	隅丸方形か	柱穴 (柱痕跡あり)	
ビット SP-19	0.37	0.3	(0.46)	不整円形	柱穴 (柱痕跡あり)	
ビット SP-20	0.4	0.4	(0.23)	不整円形	抜取穴か	
ビット SP-21	0.68	0.5	0.33	隅丸長方形	柱穴 (抜取穴か)	土師器環・甕、須恵器蓋
ビット SP-22	0.71	0.47	0.05	隅丸長方形	柱穴	土師器甕
ビット SP-23	0.4	0.37	0.29	不整円形	ビット	土師器環・甕
ビット SP-24	0.28	[0.21]	0.2	不整円形	ビット	
ビット SP-25	0.33	0.29	0.24	不整円形	ビット	
ビット SP-26	0.43	0.42	0.24	隅丸方形	柱穴 (柱痕跡あり)	土師器甕、須恵器環
ビット SP-27	0.32	0.24	0.32	不整円形	柱穴 (柱痕跡あり)	
ビット SP-28	0.31	0.26	0.26	隅丸方形	柱穴 (柱痕跡あり)	土師器甕
ビット SP-29	0.29	0.25	0.28	不整円形	柱穴 (柱痕跡あり)	
ビット SP-32	[0.42]	[0.15]	0.3	平面形状不明、底面方形	抜取穴	
ビット SP-33	0.68	[0.23]	0.25	平面形状不明	柱穴 (柱痕跡あり)	
ビット SP-34	0.66	[0.28]	0.25	平面形状不明	柱穴	
ビット SP-35	0.36	0.36	0.26	円形	柱穴	

〔 〕 検出長 () 復元長

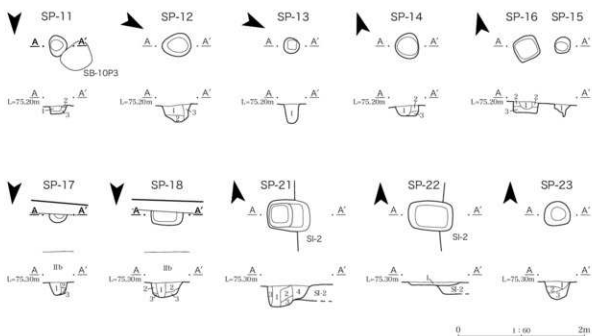
※ SP-19・SP-20 は断面・エレベーション図を作成していないため、各ビットの底面レベルと重複する9号掘立柱建物の1・3号柱穴上端レベルの差から深さを算出

各層中には男体今市スコリア (Nt-I)、男体七本桜軽石 (Nt-S) を微量含む。

遺物は非常に少なく、土師器・須恵器の小片がわずかに出土しているが、図化できるものはなかった。SP-21からは柱痕跡埋土中から白雲母を多量に含む常陸産の土師器甕、柱穴埋土中から土師器環・甕、益子窯産の須恵器蓋の小片が出土している。このうち、柱穴埋土中から出土したものは重複するSI-2に伴う遺物の可能性もある。また、SP-12・SP-22・SP-28から土師器甕、SP-23から内外面漆仕上げの土師器環、SP-26からは土師器甕と須恵器環の小片が出土している。

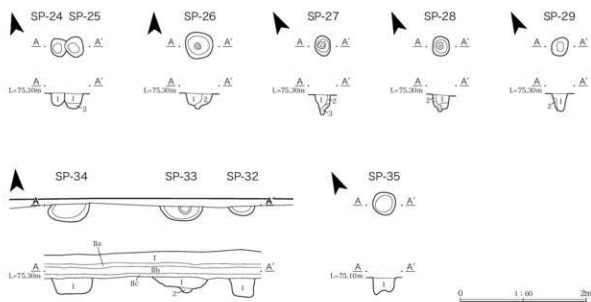
大半のビットは時期不明であるが、掘立柱建物の柱穴とみられるSP-21・SP-22・SP-33・SP-34は古代の遺構である可能性が高い。

第3章 調査の方法と成果



- SP-11
 1 明黒褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (0.5~1cm) 少量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱痕跡埋土。
 2 暗褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (0.5~1cm) 少量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱掘方埋土。
 3 暗黄褐色土 ローム粒多量, ロームブロック (1~5cm) 多量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまり強, 柱掘方埋土。
- SP-12
 1 暗褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (0.5~2cm) 微量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまり強, 柱痕跡埋土。
 2 暗褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (0.5~2cm) 少量, 暗褐色土ブロック (0.5~2cm) 少量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱痕跡埋土。
 3 暗黄褐色土 ローム粒多量, ロームブロック (1~6cm) 多量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱掘方埋土。
- SP-13
 1 黒褐色土 ローム粒微量, ロームブロック (0.5~1cm) 微量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱痕跡埋土。
- SP-14
 1 褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (1~2cm) 少量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱痕跡埋土。
 2 暗黄褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (1~4cm) 多量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱掘方埋土。
 3 黄褐色土 ローム粒多量, ロームブロック (1~6cm) 多量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱掘方埋土。
- SP-15
 1 黒褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (0.5~1cm) 微量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱痕跡埋土か。
- SP-16
 1 明黒褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (0.5~1cm) 微量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱痕跡埋土。
 2 暗褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (1~2cm) 少量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱掘方埋土。
 3 黄褐色土 ローム粒多量, ロームブロック (1~6cm) 多量, しまり強, 柱掘方埋土。
- SP-17
 1 黒褐色土 ローム粒微量, ロームブロック (0.5~1cm) 微量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱痕跡埋土。
 2 明黒褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (0.5~2cm) 少量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱掘方埋土。
 3 黄褐色土 ローム粒多量, ロームブロック (1~5cm) 多量, しまり強, 柱掘方埋土。
- SP-18
 1 明黒褐色土 ローム粒少量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱痕跡埋土。
 2 暗褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (1~2cm) 少量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱掘方埋土。
 3 暗黄褐色土 ローム粒多量, ロームブロック (1~5cm) 多量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまり強, 柱掘方埋土。
- SP-21
 1 暗褐色土 ローム粒少量, 炭化物粒少量, 炭化物 (0.5cm 程度) 少量, 焼土粒少量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱痕跡埋土。
 2 黄褐色土 ローム粒多量, ロームブロック (1~3cm) 多量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱掘方埋土。
 3 褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (0.5~1cm) 少量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 柱掘方埋土。
 4 暗褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (0.5~2cm) 微量, 炭化物粒微量, 焼土粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり, 古い時期の柱痕跡埋土か。
- SP-22
 1 暗褐色土 ローム粒微量, 炭化物粒微量, 炭化物 (0.5cm 程度) 微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり。
- SP-23
 1 暗褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (1~2cm) 微量, 炭化物粒微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり。
 2 暗褐色土 ローム粒微量, ロームブロック (1~2cm) 微量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり。
 3 黄褐色土 ローム粒少量, ロームブロック (1~4cm) 多量, Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量, しまりあり。

第33図 SP-11～18・21～23 遺構図



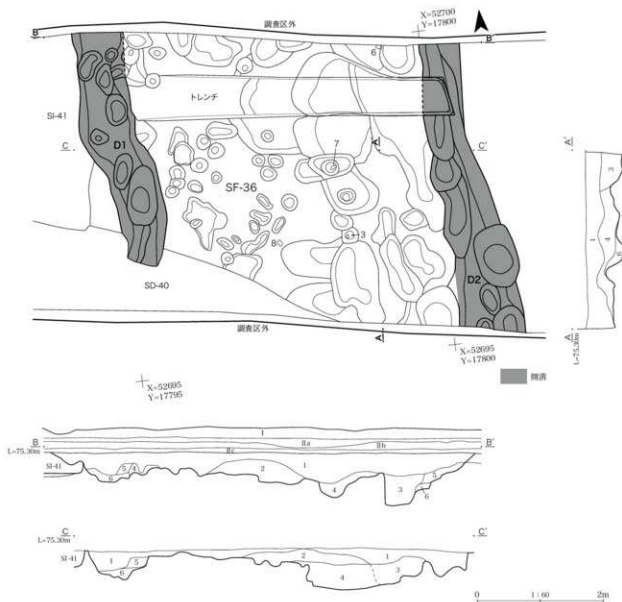
- SP-24
1 暗褐色土 ローム粒微量。ロームブロック (0.5~1cm) 微量。炭化物粒微量。焼土粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。
- SP-25
1 褐色土 ローム粒微量。ロームブロック (0.5~1cm) 微量。炭化物粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。
2 明褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (1~4cm) 少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。
- SP-26
1 暗褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5~1cm) 微量。炭化物粒微量。炭化物 (0.5cm 程度) 微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭跡埋土
2 褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (0.5~2cm) 少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭方埋土
- SP-27
1 黒褐色土 ローム粒微量。炭化物粒微量。焼土粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭跡埋土
2 暗褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5~1cm) 微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭方埋土
3 暗黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (1~2cm) 多量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭方埋土
- SP-28
1 明黒褐色土 ローム粒微量。炭化物粒微量。焼土粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭跡埋土
2 暗褐色土 ローム粒少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭方埋土
3 暗黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (1~4cm) 多量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭方埋土
- SP-29
1 明黒褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5cm 程度) 微量。炭化物粒微量。焼土粒微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭跡埋土
2 暗褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5~2cm) 少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。柱頭方埋土
- SP-32
1 暗褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5~2cm) 少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石少量。しまりあり。人為的埋没か
- SP-33
1 明黒褐色土 ローム粒微量。ロームブロック (0.5~1cm) 微量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。人為的埋没か
2 暗褐色土 ローム粒微量。しまりあり。柱頭跡埋土か
- SP-34
1 明黒褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (0.5~2cm) 少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石少量。しまりあり。人為的埋没か
SP-35
1 黒褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (0.5~3cm) 少量。Ni-I スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。人為的埋没か

第34図 SP-24~29・32~35 遺構図

(6) 道路状遺構

道路状遺構 SF-36 (第35・36図、第11表、図版一六・二五)

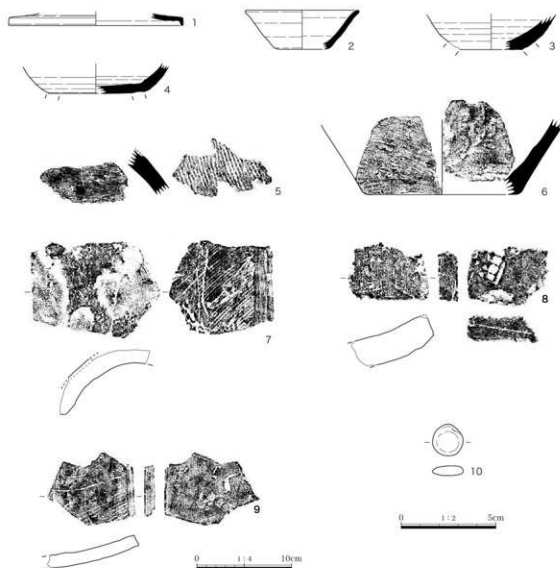
位置・重複関係 北区中央付近にあり、SD-40に掘り込まれ、SI-41を掘り込んでいる。また、路面は後世の土坑・ピット状の掘り込みや、栃木県教育委員会による試掘トレンチにより壊されている。主軸はほぼ正方位である。



SF-36

- | | |
|---------|--|
| 1 暗褐色土 | ローム粒微量。ロームブロック (0.5~2cm) 微量。炭化物粒微量。炭化物 (0.5cm程度) 微量。焼土粒微量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。自然埋没 |
| 2 灰褐色土 | ローム粒微量。ロームブロック (0.5~2cm) 微量。As-Bテフラ・Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。自然埋没が |
| 3 褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック (1~6cm) 少量。As-Bテフラ・Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。 |
| 4 褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック (1~6cm) 多量。Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまり強。ローム土と黒色土の薄い層が板状に互層をなす。上面は一部で硬化している。SF-36構築土 (路盤)・路面 |
| 5 明褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック (1~2cm) 少量。As-Bテフラ・Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまりあり。SF-36側埋土 |
| 6 暗黄褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック (1~4cm) 多量。As-C軽石またはHr-FAテフラ・Ni-Iスコリア・Ni-S軽石微量。しまり強。SF-36側埋土 |

第35図 SF-36遺構図



第36図 SF-36 出土遺物実測図

規模・形状 南北に平行する溝2条（D1・D2）とその内側の東半で部分的に硬化面を確認した。溝に挟まれた部分が路面、溝2条が東西側溝と考えられる。側溝の心々距離は5.0～5.4m、路面幅は4.2～4.5mを測り、側溝の断面形はU字条を呈し、確認面からの深さは、約0.45mである。西側溝は上幅0.7～0.9m、東側溝は上幅0.63～1.0mで、いずれも底面は不整形な土坑が連続する。路面東半は、波板状圧痕は認められないが、一部で土坑状に掘り込んだ後にローム土と黒色土を版築状に埋め戻し、上面が硬化している。これは道路の構築土（路盤）と路面にあたるとみられ、硬化面（路面）が面をなしていないことから、路面部分は大きく削平されていることがわかる。路面西半は、後世の不整形の土坑・ピット状の掘り込みにより削平され、波板状圧痕や硬化面は確認できない。また、版築状の堆積（構築土）もみられず、東半の硬化面と同じレベルで粘質ロームの地山となる。路面の標高は約74.7～75.0mで、東端がやや低くなっている。

埋土 側溝の埋土は、ローム粒を多量含む明褐色土（5層）とロームブロックを多量含む暗黄褐色土（6層）で、壁面の崩落などにより地山の粘質ロームが流入したと考えられる。路面は硬化面が確認されたため、4層上

第11表 SF-36 出土遺物観察表

埋蔵番号	種別・形状	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	須恵器 甕	口径 (18.4) 底径 (5.8) 器高 11.5	内面: ロクロナデ。 外面: ロクロナデ。	白色粘多量、砂粒微量	内: 灰 5Y4/1 外: 灰 5Y5/1 焼成: 良好	口縁~大片部 部2/9	SF-36	8C 第2四半期~中葉 益子窯産 (順 量1・3)
2	須恵器 環	口径 (12.5) 底径 (5.8) 器高 14.1	内面: ロクロナデ。 外面: ロクロナデ。	白色針状物質・ 石英粒・長石粒・ 砂粒微量	内: 灰 5Y6/1 外: 灰 5Y6/1 焼成: 普通	口縁~体部 1/8	SF-36 南西	高台付新治 窯産
3	須恵器 壺類	口径 - 底径 (6.6) 器高 (3.8)	内面: ロクロナデ。底部自然軸付着。 外面: 割部ロクロナデ。底部ロクロナ デ後高台取付。割部自然軸付着。	砂粒少量	内: 黄灰 2.5Y6/1 外: 黄灰 2.5Y4/1 焼成: 良好	底部 1/4 高台部欠損	6 層 SF-36No.4	産地不明
4	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 (3.2)	内面: ロクロナデ。底部自然軸付着。 外面: 割部ロクロナデ。底部ロクロナ デ後高台取付。割部自然軸付着。	石英粒・長石粒・ 砂粒微量	内: 灰白 N7/ 外: 暗灰 N3/ 焼成: 良好	底部 3/4 高台部欠損	SF-36	益子窯産
5	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 (4.6)	内面: ココナデ。 外面: 平行叩き。	砂粒微量	内: 灰白 5Y7/1 外: 灰白 5Y7/1 焼成: 良好	割部破片	SF-36	産地不明
6	須恵器 甕	口径 - 底径 (16.4) 器高 (7.9)	内面: 平行叩き。 外面: 平行叩き。	砂粒微量	内: 灰 5Y6/1 外: 灰 N4/ 焼成: 良好	割~底部 1/8	1 層 SF-36No.5	9C 中~後葉 益子窯産 (確 定)
7	男瓦	長 110.91 幅 110.11 厚 12.31 重 315.38	凸面: タテ方向ヘラナデ。 凹面: 布白肌。糸切肌。割縁部ヘラケ ズリ後面取り。	石英粒・砂粒微 量	凸: 灰白 7.5Y8/7 凹: 灰白 7.5Y8/7 焼成: 普通	破片	2 層 SF-36No.1	粘土板
8	女瓦	長 16.31 幅 18.71 厚 13.11 重 246.21	凸面: 格子叩き後タテ方向ヘラナデ。 凹面: 布白肌。 割面: 広縁・割面ヘラケズリ。	砂粒少量、石英 粒微量	凸: 黄灰 2.5Y5/1 凹: 黄灰 2.5Y4/1 焼成: 不良	破片	1 層 SF-36No.6	粘土板
9	女瓦	長 18.01 幅 19.71 厚 11.41 重 123.07	凸面: タテ方向ヘラナデ。 凹面: 布白肌。糸切肌。割縁部面取り。 割面: 割面ヘラケズリ。	黒雲母少量。 砂粒微量	凸: 灰白 2.5Y8/2 凹: 灰白 2.5Y8/2 焼成: 普通	破片	SF-36 北部上 層	粘土板
10	石製品 碇石か	長 1.7 幅 1.6 厚 0.5 重 2.02	ややいびつな円形で両面とも丁寧な研削を施す。黒色硬質頁岩			完形	SF-36 北部上 層	

面に想定できる。4層はローム土と黒色土の薄い層が版築状に堆積しており、上面が硬化している。上層は、灰褐色粘質土(2層)、炭化物粒・焼土粒を微量に含む暗褐色土(1層)でいずれも自然埋没と考えられる。2・3・5層中には浅間Bテフラ(As-B)、6層上位には浅間C軽石(As-C)または榛名二ツ岳沢川テフラ(Hr-FA)とみられるテフラ粒子が検出された。

遺物出土状況 遺物は少ないが、側溝埋土から土師器環・甕、益子窯産の須恵器環・甕、新治窯産の高台付環が出土している。1層からは篠倉窯段階の須恵器甕、女瓦が出土し、2層からは土師器環・益子窯産の須恵器環・甕、瓦が出土している。また、一括で取り上げたなかには土師器環・高環・甕、益子窯産の須恵器蓋・環・高台付環・甕、新治窯産の甕、壺、羽口片、碇石などがある。

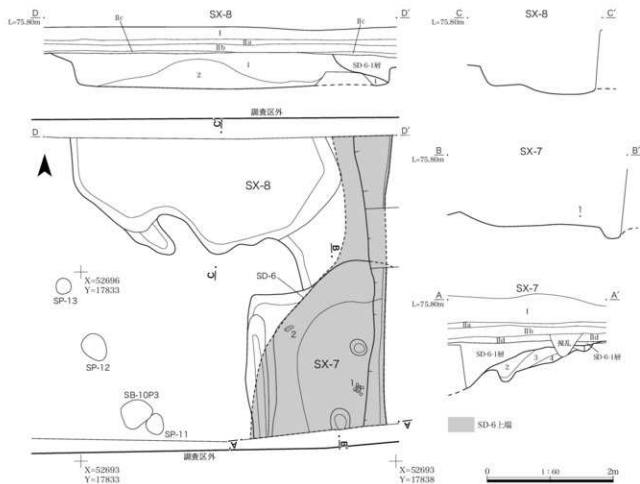
出土遺物 遺物の大半は古代の須恵器片で、原東1・3号窯産の須恵器蓋など8世紀第2四半期~中頃の遺物がわずかにみられる以外は、9世紀中頃~後半の須恵器環(2)、甕(6)が中心である。ほかに、古墳時代の須恵器甕や時期不明の羽口片や碇石(10)などが出土しているが、これらは周囲からの混入品と考えられる。

(7) 性格不明遺構

性格不明遺構 SX-7 (第37・38図、第12表、図版一七・二五)

位置・重複関係 SD-6に掘り込まれる。SX-8と重複するが新旧関係は不明である。

規模・形状 東西検出長2.2m、南北検出長2.63m、残存する深さ0.35mで、平面形は不整形を呈する。西側肩部は幅約0.4mで浅くくぼんでおり、工具痕が並ぶ状況から別の溝状遺構である可能性もあるが、判断がつかなかった。底面は西から東へ傾斜し、工具痕のような小さな凹凸がみられ、ビット状の掘り込みが2基検出された。SX-7の性格については、底面が傾斜し貼床など硬化面が認められないこと、粘質ロームを



SX-7

- 1 暗褐色土 ローム粒微量、ロームブロック (1~3cm) 微量、焼土粒微量、焼土ブロック (0.5cm 程度) 微量、Ni-I スコア・Ni-S 軽石微量、しりりあり。別遺構の埋土か
 2 褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (1~3cm) 微量、炭化物粒微量、炭化物 (0.5~1cm) 少量、焼土粒少量、焼土ブロック (0.5cm 程度) 少量、Ni-I スコア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、
 3 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック (1~3cm) 微量、炭化物粒微量、炭化物 (0.5~1cm) 微量、焼土粒少量、焼土ブロック (0.5cm 程度) 多量、Ni-I スコア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、
 4 明黒褐色土 ローム粒微量、ロームブロック (1~3cm) 微量、炭化物粒微量、焼土粒微量、Ni-I スコア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、

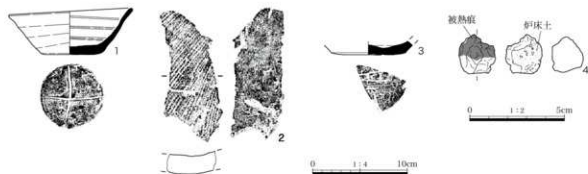
SX-8

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック (1~6cm) 微量、炭化物粒微量、褐色土ブロック・黒色土ブロック (1~6cm) 微量、Ni-I スコア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、
 2 褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (1~6cm) 多量、褐色土ブロック・黒色土ブロック (1~6cm) 少量、Ni-I スコア・Ni-S 軽石微量、しりりあり、

第37図 SX-7・8遺構図

掘り込むことから、土取り穴の可能性がある。調査時の所見ではSI-3のカマド袖構築材に用いられている粘土がSD-6付近で確認された粘土に類似することから、SX-7・SX-8が粘土採掘坑ではないかと推定している。ただし、SX-7・SX-8はいずれも粘土層ではなく粘質ローム層を掘り込んでおり、埋土中に掘削時や埋戻し時に流入した粘土ブロックや古土壌を含まないことから、粘土採掘坑である可能性は低い。

埋土 埋土全体に男体今市スコリア (Ni-I) と男体七本桜軽石 (Ni-S) を微量含む。2~4層はローム粒・炭化物粒・焼土粒を含む暗褐色~褐色土で、堆積状況から自然埋没とみられる。1層はローム粒・炭化物粒・焼土粒をほとんど含まず、西側肩部を溝状に掘り込むような形状であることから、別の溝状遺構の埋土である可能性もある。



第38図 SX-7・8出土遺物実測図

第12表 SX-7・8出土遺物観察表

陶器番号	種別・形種	寸法 (cm/g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	須恵器 環	口径 13.0 底径 6.5 器高 4.9	内面：ロクロナデ。 外面：口縁～体部ロクロナデ。底部へ ラ切り残ナデ。底部刻書「X」。	白色粒・石炭粒・ 長石粒少量	内：灰 5Y5/1 外：灰 5Y5/1 焼成：良好	口縁～体部 3/4 底部完存	SX-7No.1 SD-6・SX-7付 近	9C 第2四半期 ～中頃 益子 窯産（施ノ人・ 倉見沢）
2	瓦	長 114.7 幅 86.31 厚 11.91 重 2206.5	凸面：布目肌。系切堀。 凹面：タテナデ。	砂粒少量。石英 粒・黒雲母粒微 量	凸：にぶい黄砂 10YR6/3 凹：灰黄配 10YR6/2 焼成：不良	破片	SX-7No.2	粘土板
3	須恵器 環	口径 (7.8) 底径 (7.8) 器高 11.41	内面：ロクロナデ。 外面：体部半端ロクロナデ。底部へラ 切り。底部刻書多量。	石英粒・長石粒・ 砂粒微量	内：灰 5Y6/1 外：灰 5Y6/1 焼成：良好	底部 1/8	SX-8 覆土	益子窯産
4	鉄滓	長 12.11 幅 11.91 厚 11.61 重 4.70	上面と側部の一部が生きており、上面と側部の大半が破面となる。上面は焼熱 痕が認められ下面には炉床土が付着している。また、上下面の一部に黒色ガラス 質残片が付着している。			破片	SX-8 覆土	焼熱銅滓

遺物と出土状況 遺物は非常に少ない。埋土中からは、土師器環・甕、益子窯産の須恵器蓋・環、瓦、焼成粘土塊、陶器が出土している。1は、底部外面に「X」の刻書を有する9世紀第2四半期～中頃の施ノ人・倉見沢窯段階の須恵器環である。このほか、6世紀後半～7世紀前半の内外面漆仕上げの土師器環、底部に木炭痕のある甕、古墳時代の須恵器甕が出土している。上面をSD-6に掘り込まれており、混入品が含まれている可能性もあるが、出土した須恵器環の年代から、9世紀第2四半期～中頃以降に埋没したと考えられる。

性格不明遺構 SX-8（第37・38図、第12表、図版一七・二五）

位置・重複関係 SD-6に掘り込まれる。SX-7と重複するが断面で重複関係を確認できなかったため、新旧関係は不明である。出土遺物の年代からSX-8がSX-7より古い可能性がある。

規模・形状 東西検出長4.06m、南北検出長2.45m、深さ0.58mで、平面形は不整形を呈する。壁面は、西壁付近でオーバーハンク気味になるほかは、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は、北東隅でやや平坦となるほかは、大小の掘り込みによりかなりの凹凸が認められ、工具痕が残されている。SX-8の性格については、底面に工具痕とみられる凹凸が認められ盛土状の堆積（2層）が確認できること、粘質ロームを掘り込むことから、SX-7と同じく土取り穴の可能性もある。

埋土 埋土全体に男体今市スコリア（Nt-I）と男体七本桜軽石（Nt-S）を微量含む。下層（2層）はローム粒・ロームブロック主体の土と黒色土主体の土が数cm単位で盛土状に堆積していることから、人為埋没である。上層（1層）はローム粒・ロームブロックを微量含む暗褐色土主体である。

遺物と出土状況 遺物は非常に少ない。埋土中からは土師器環・甕、益子窯産の須恵器蓋・環・高台付環・甕、新治窯産の須恵器環、瓦、鉄滓が出土している。3は底部外面に刻書（多重線）を有する9世紀第1四半期のカスガ入窯段階の須恵器環、4は椀形滓である。一部をSD-6に掘り込まれており、混入品が含まれている可能性もあるが、出土した須恵器の年代から、9世紀第1四半期以降に埋没したと考えられる。

（8）近世以降の遺構

溝SD-6（第39図、図版一七）

位置・重複関係 北区東端部にあり、SF-5・SX-7・SX-8を掘り込んでいる。走向方位はN-15°-Eである。
規模・形状 検出長5.2m、上幅6.72m、下幅4.08m、深さ0.8m以上で、断面形は逆台形を呈する。地元の方の話では、昭和30～40年代の土地改良時まで使用していた農業用水路とのことである。また、米軍の航空写真や近世の絵図でも長方形あるいはL字状の地割が確認できることから、開削時期は少なくとも近世までさかのぼる可能性がある。

埋土 上位はローム粒・炭化物粒を微量含む灰褐色～暗灰褐色粘質土（1・2層）、下位は木材（生材片）を多量含む明黒灰褐色砂質土（3層）である。

遺物 土師器甕、須恵器環、瓦、陶器の小片が出土しているが、いずれも周囲から流入したもので、この遺構に伴う遺物はない。

溝SD-38（第40図）

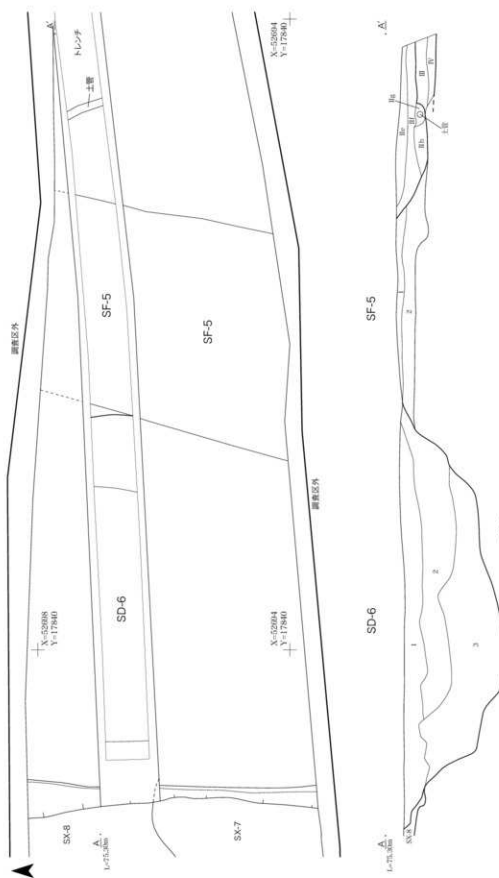
位置・重複関係 北区西端部にあり、SK-39・SD-37を掘り込んでいる。走向方位はN-29°-Eである。

規模・形状 上幅2.0～2.48m、深さ0.32m、断面形は皿状で、南壁の一部が浅く段状に掘り込まれる。また、調査区北壁付近では底面が土坑状に掘り込まれ、周辺より30～50cmほど低くなっている。底面標高は74.30～74.44mで、底面に明瞭な傾斜はなく調査区北壁付近がやや深い程度である。底面には、クワ・スキとみられる工具痕があり、人力掘削により掘られた溝であることがわかる。また、地山である砂質ローム層や砂礫層を掘り抜いて壁面や底面にしている。

中世の遺構であるSD-37・SD-40と走行方向が近似しており、旧地形や地割を反映していると判断される。また、SD-6と同様に、米軍の航空写真や近世の絵図でも長方形あるいはL字状の地割が確認できることから、開削時期は少なくとも近世までさかのぼる可能性がある。

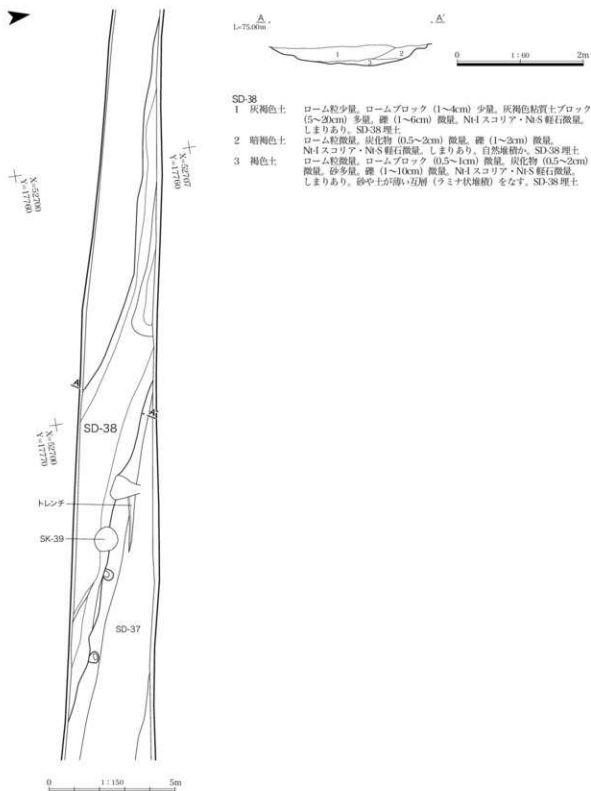
埋土 上層（1層）はロームブロック・灰褐色粘質土などを含むことから、人為埋没である。下層（2層）は南壁が浅く段状に掘り込まれた部分の埋土で、ローム粒などの混入物をほとんど含まないことから自然堆積とみられる。最下層（3層）は砂層と礫混じりの砂質土によるラミナ状堆積が認められることから、流水による自然堆積と判断できる。

遺物 18世紀後半の陶磁器（染付碗・小杯・土瓶・香炉・灯明皿）・鉄鍋の吊手、明治末～大正初期の軍盃や銅版転写の磁器碗など、大正末～昭和初期頃の薬瓶・試験管・おはじきなどのガラス製品、陶管などの遺物が大半をしめる。開削時期は、陶磁器が本遺構に伴うとすれば少なくとも18世紀後半までさかのぼると考えられる。埋没時期は、陶器甕や陶管などが出土していることから昭和20～30年頃とみられる。このほか、土師器環・甕、須恵器環・甕、瓦も出土しているがいずれも周囲から流入したものである。



- SD-6
 1 灰褐色粘質土 rome土粘層 炭化物 (0.5cm程度) 微量、しりりあり、SD-6埋土
 2 暗灰色粘質土 rome土粘層 炭化物 (0.5cm程度) 微量、しりりあり、SD-6埋土
 3 明褐色細砂質土 rome土粘層 炭化物 (0.5cm程度) 微量、木材(木材片・1~4cm) 多量、しりりあり、SD-6埋土
- SF-5
 1 灰褐色土 粘質rome土少量、粘質rome土アロック (1~4cm) 少量、砂多量、礫 (1~15cm) 少量、SF-5断面密着土
 2 暗褐色土 粘質rome土少量、粘質rome土アロック (1~4cm) 微量、砂微量、礫 (1~15cm) 少量、SF-5断面密着土

第39図 SD-6・SF-5遺構図



SD-38

- 1 灰褐色土 ローム粒少量。ロームブロック (1~4cm) 少量。灰褐色粘質土ブロック (5~20cm) 多量。礫 (1~6cm) 微量。Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。SD-38 埋土。
- 2 暗褐色土 ローム粒微量。炭化物 (0.5~2cm) 微量。礫 (1~2cm) 微量。Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。自然堆積か。SD-38 埋土。
- 3 褐色土 ローム粒微量。ロームブロック (0.5~1cm) 微量。炭化物 (0.5~2cm) 微量。砂多量。礫 (1~10cm) 微量。Ni-S スコリア・Ni-S 軽石微量。しまりあり。砂や土が薄い互層 (クミナ状堆積) をなす。SD-38 埋土。

第40図 SD-38 遺構図

道路状遺構 SF- 5 (第39図、図版一七)

位置・重複関係 北区東端部にあり、SD- 6に掘り込まれている。走向方位はほぼ正方位である。

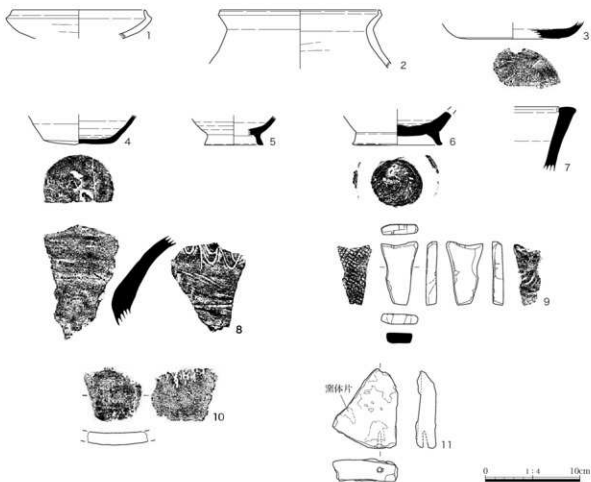
規模・形状 検出長4.74m、幅3.4m、深さ0.32～0.5mで、路面は中央が浅くくぼみ両端が少し高くなる。路面の中央は砂利が敷き詰められ、硬化している状況が確認された。地元の方の話では、五行川や鬼怒川の砂利を運んで敷いたそうで、昭和30～40年代の土地改良時まで使用していたとのことである。また、SD- 6・SD-38と同様に、米軍の航空写真や近世の絵図でも長方形あるいはL字状の地割が確認できることから、近世以前の道を踏襲してつくられたと考えられる。

埋土 基底部に板材を敷き、その上層(2層)には礫を少量含む暗褐色土、多量の砂礫と少量の粘質ローム粒・粘質ロームブロックを含む灰褐色土(1層)が堆積している。

遺物 付近で6世紀後半の口縁から体部内外面に磨きのある土師器杯や8世紀第1四半期～中頃の原東窯段階の須恵器高台付杯、近現代の陶磁器が出土しているが、いずれも混入品でありこの遺構に伴う遺物はない。

第5節 北区の遺構外出土遺物 (第41図、第13表、図版二六)

本調査では検出した多くの遺構から遺物が出土しているが、なかには明確な遺構に伴わない状態で出土す



第41図 北区遺構外出土遺物実測図

第13表 北区遺構外出土遺物観察表

掲載番号	種類・器種	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	土師器 埴	口径 (14.0) 底径 器高 13.0	内面：口縁～体部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	石英粒・砂粒微量	内：帯 5YR6/6 外：帯 5YR6/6 焼成：不良	口縁部 1/8	SI-41 周辺	7C 面平
2	土師器 甕	口径 (17.0) 底径 器高 16.2	内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英粒・砂粒多量	内：にじい濁 7.5Y6/3 外：にじい帯 7.5Y7/4 焼成：普通	口縁部 1/8	SF-5 SD-6 付近	9C 以降
3	須恵器 埴	口径 底径 (9.8) 器高 11.7	内面：ロクロナデ。 外面：体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ後外環手持ちヘラケズリ。	白色粒多量、砂粒少量	内：灰 5Y6/1 外：灰 5Y6/1 焼成：良好	底部 1/4	SI-1 周辺	新治窯産
4	須恵器 埴	口径 底径 (7.2) 器高	内面：ロクロナデ。 外面：体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量、石英粒・長石粒微量	内：黄灰 2.5Y5/1 外：黄灰 2.5Y5/1 焼成：良好	体部 1/4 底部 3/4	SI-41 周辺	9C 前1 四半期 益子窯産（力 ズガ入）
5	須恵器 高台付埴	口径 底径 (6.2) 器高 13.1	内面：ロクロナデ。 外面：体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ後高台付着。 内外面自然釉付着。	砂粒微量	内：灰 5Y6/1 外：灰 5Y5/1 焼成：良好	底部 1/4	西半東部	益子窯産（瀬 ノ入、倉見沢）
6	須恵器 高台付埴	口径 底径 (9.2) 器高 13.8	内面：ロクロナデ。 外面：体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ後高台付着。	砂粒少量	内：黄灰 2.5Y6/1 外：灰白 2.5Y7/1 焼成：良好	環底部 7/8 高台部 1/2	中央付近	9C 前～中頃 産地不明
7	須恵器 甕	口径 底径 器高 17.4	内面：ロクロナデ。 外面：ロクロナデ。	砂粒少量	内：黄灰 2.5Y7/2 外：黄灰 2.5Y7/2 焼成：良好	口縁部破片	西平中央	産地不明
8	須恵器 甕	口径 底径 器高 19.3	内面：ナデ。 外面：一本筥指波状文、ヘラナデ。 内外面自然釉付着。	砂粒微量	内：灰 5Y4/1 外：灰 5Y5/1・ 帯 7.5Y2/1 焼成：良好	胴部破片	西平中央	産地不明 下野系須恵器 産
9	須恵器 甕	長 16.7 幅 13.9 厚 1.1 重 30.17	内面：同心円文で具組。 外面：菱格子明き。 側面は全体的に厚減。	石英粒・長石粒少量、砂粒微量	内：灰帯 7.5Y8/2 外：灰 5Y4/1 焼成：良好	胴部破片	SD-6 SX-7 付 近	砥石に転用 下野系須恵器 産
10	女瓦	長 16.3 幅 17.2 厚 11.3 重 78.00	凸面：縄甲巻後ナデ。 凹面：布目織。	砂粒微量	凸：灰 7.5Y5/1 凹：灰 7.5Y5/1 焼成：良好	破片	SF-5 SD-6 付近	粘土層
11	女瓦	長 8.5 幅 6.9 厚 2.2 重 118.28	凸面：自然軸・粟葉片付着。 凹面：自然軸付着。 側面：焼成凹身。	砂粒多量、長石粒微量	凸：灰 7.5Y5/1 凹：灰 7.5Y5/1 焼成：良好	破片	一括 SD-37・ 40 か	益子窯産 焼台か

るものや帰属が不明なものもある。本来は、出土した遺構ごとに報告するところではあるが、本節では明確な遺構に伴わない遺物および帰属が不明な遺物等を「遺構外出土遺物」として取り扱い、図化できたものを中心に掲載する。なお、南区の遺構外出土遺物については、層位ごとの取り上げにより遺物包含層の形成時期が推定でき、SX-42 から避難した可能性が高いものが多く含まれているため、第6節で取り扱うこととする。

北区の遺構外出土遺物の多くは、周辺の竪穴建物の埋土中にあつたものが、後世の耕作に伴って遺構外へと移動したものと考えられる。1は7世紀前半の磨きのない須恵器模倣埴である。3は新治窯産の須恵器埴で、胎土に白色雲母を含む。4は9世紀第1四半期のカスガ入窯段階の須恵器埴、5は9世紀第2四半期から中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器高台付埴で、内外面に自然釉が付着している。8は一本筥指波状文のある下野系の須恵器甕、9は下野系の須恵器甕を転用した砥石である。11は益子窯産の女瓦で、凹凸面に窯葉片が付着することから、焼台に転用されたものとみられる。また、側面には焼成前穿孔1孔を施す。下飯貝遺跡に窯葉関連施設があつたとは考えられないことから、大内庵寺に瓦が搬入された際に何らかの関係で移動したものと推定される。

第6節 低地部の調査

(1) 低地部の調査(第42～44図、第14表、図版一八・一九・二六・二七)

概要 南区において、台地斜面から低地にかけての部分でトレンチ調査を実施し、遺物包含層のほか土器集積遺構1か所を確認した。トレンチは台地南斜面に6本(1～6トレンチ)、低地に1本(7トレンチ)を設定した(第44図)。7トレンチは、遺構の性格や範囲を確認するためにトレンチを拡張し、4つのグリッド(A～D区)を設定し、層位ごとに掘り下げをおこなった。

地形 南区は、台地先端の南斜面から低地にあたり、台地南斜面の標高は74.8～75.5m、低地の標高は73.9～74.1mである。

遺構と遺物包含層の状況 台地先端の南斜面には、遺構は認められない。一方、低地では土器集積遺構1か所を確認している。また、集落から廃棄されたとみられる土師器・須恵器を主体とする遺物包含層が台地南斜面から低地にかけて堆積している。

低地の堆積層 Ⅰ層は現代の水田耕作土(表土)で、Ⅱ層はその床土にあたる。Ⅲ・Ⅳ層は土師器・須恵器を主体とする遺物包含層で、Ⅴ層は自然堆積層である。Ⅲ～Ⅴ層は灰黒褐色～灰褐色粘質土のグライ化した堆積層で、湿地化した環境であったと推定される。

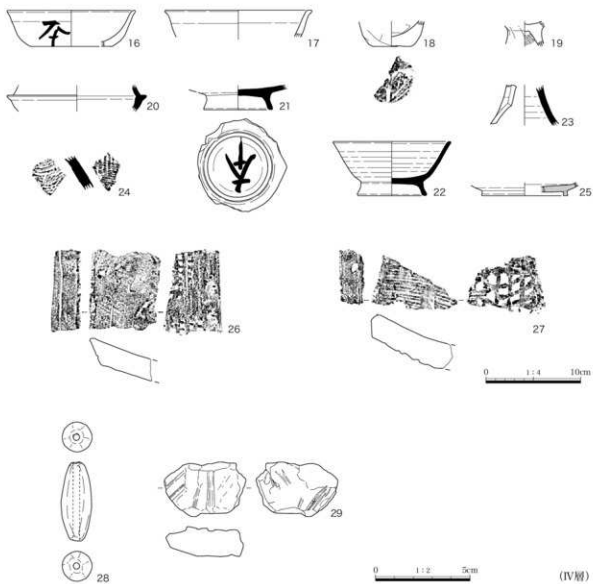
台地斜面の堆積層 低地部でのⅠ・Ⅱ層、Ⅴ層に相当する堆積層は認められず、旧表土および道路建設の客土層(Ⅰb層)、旧耕作土および道路建設の客土層(Ⅰc層)がみられる。遺物包含層であるⅢ層は4～6トレンチで確認でき、東へいくほど厚く堆積している。また、同じく遺物包含層であるⅣ層は6トレンチのみで認められる。この付近は、台地が南へ緩やかに傾斜していくところであるため、耕作時にも削平されずに残ったものと推定される。

遺物出土状況 Ⅲ・Ⅳ層から平安時代の土師器・須恵器がやや多く出土している。とくに、低地の遺物包含層であるⅣ層からの出土量が多く、A区からはⅣ層出土量の6割以上が出土している。Ⅲ層中からは、土師器環・高坏・甕、須恵器蓋・坏・高台付坏・皿・甕、瓦、焼成粘土塊、鉄滓が出土し、Ⅳ層中からは土師器環・高坏・鉢・甕・台付甕、須恵器蓋・坏・高台付坏・皿・提瓶・甕、灰軸陶器碗、瓦、焼成粘土塊などが出土している。また、Ⅱ・Ⅲ層中からは羽口片が出土していることから、Ⅲ層から出土した鉄滓とあわせ、付近で製鉄がおこなわれていたと推定される。

出土遺物 1～3はⅡ・Ⅲ層から出土したもので、1は6世紀代TK43併行期とみられる上野産の坏蓋、2は9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器坏、3は9世紀第1四半期のカスガ入窯段階の高台付坏である。4～14はⅢ層から出土したもので、4は11世紀代の土師質土器皿で、5・6は9世紀中頃の内面黒色処理を施す土師器坏で、5の体部外面には「奉」と考えられる墨書が記されている。8は9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器高台付坏で、底部外面には「奉」の墨書が記されている。10は下野系の須恵器甕、11は益子窯産の円面碗、12・13は益子窯産の女瓦、14は桃形滓である。15はⅢ・Ⅳ層から出土した9世紀後半の脇屋窯段階の須恵器皿である。16～29はⅣ層から出土したもので、16は9世紀中頃の土師器坏で、体部外面には「奉」の墨書が記されている。19は古墳時代前期の土師器S字状口縁台付甕である。20は6世紀代の須恵器坏身、21・22は9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器高台付坏で、21の底部外面には「奉」の墨書が記されている。26は益子窯産の女瓦、25は尾張産の灰軸陶器碗、28は土釜、29は焼成粘土塊である。このほか、小片のため非掲載であるがⅡ・Ⅲ層から羽口片が1点出土している。



第42図 南区出土遺物実測図(1)



第43図 南区出土遺物実測図(2)

第14表 南区出土遺物観察表

図帳番号	類別・器種	法量 (cm/g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	須恵器 蓋	口径 (16.4) 底径 器高 [3.0]	内面：口縁～底部ロクロナデ。 外面：口縁～底部ロクロナデ。	砂粒少量、石英 粒・長石粒微量	内：灰 7.5Y5/1 外：灰 10Y5/1 焼成：良好	口縁部破片	B区Ⅱ・Ⅲ層	GC TK43併行 1) 野産
2	須恵器 杯	口径 底径 (7.0) 器高 [2.6]	内面：体～底部ロクロナデ。 外面：体部ロクロナデ、底部回転へつ 切り後ナデ。	白色粒多量、石 英粒・長石・砂 粒微量	内：灰 7.5Y5/1 外：灰 7.5Y5/1 焼成：良好	体～底部 1/6	A区Ⅱ・Ⅲ層	9C 第2四半期 ～中葉 益子 産産(編入人、 倉見沢)か
3	須恵器 高台付杯	口径 底径 7.0 器高 [2.8]	内面：体～底部ロクロナデ。火だすき 痕。外面：体部ロクロナデ、底部回転へつ クスリ後高台貼付。	砂粒少量、石英 粒・長石粒微量	内：灰 7.5Y6/1 外：灰 7.5Y6/1 焼成：良好	平底部完 高台部 2/3	B区 SX11層 No.121・122 B区Ⅱ・Ⅲ層	9C 第1四半期 益子産産(力 スガ人)
4	土師器 杯	口径 (12.4) 底径 (6.6) 器高 [2.9]	内面：著しい摩耗のため調整不明。 外面：口縁～体部ナデ、底部回転糸切 り。内外面著しい摩耗。	赤色粒多量、黒 雲母粒・砂粒 微量	内：浅黄緑 10Y88/3 外：浅黄緑 10Y88/3 焼成：不良	口縁～底部 1/8	7トレンチⅡ 層	
5	土師器 杯	口径 (13.4) 底径 (8.2) 器高 [14.4]	内面：口縁～底部ロクロナデ後ヘラミ ガキ。黒色焼痕。 外面：口縁～体部ロクロナデ、底部回 転糸切り。体部滑蓋「ネ」か。	黒雲母粒多量、 砂粒少量	内：黒 N2/ 外：にぶい黄緑 10Y77/2 焼成：普通	口縁部一 部 体～底部 1/4	A区Ⅱ層 No.208 A区Ⅳ層	
6	土師器 杯	口径 (14.6) 底径 器高 [3.1]	内面：口縁～体部コナデ後ヨコ方向 ヘラミガキ。黒色焼痕。 外面：ロクロナデ後一部ヨコナデ。	黒雲母粒・砂粒 微量	内：黒 N2/ 外：にぶい黄緑 10Y85/3 焼成：普通	口縁部 1/4	C区Ⅱ層	
7	須恵器 杯	口径 (14.0) 底径 (7.4) 器高 [4.0]	内面：口縁～底部ロクロナデ。 外面：口縁～体部ロクロナデ、底部回 転糸切り。 胎土マーブル状。	砂粒少量、石英 粒・長石粒・チ ナート微量	内：灰 7.5Y6/1・ 灰黄 2.5Y7/3 外：灰 5Y6/1・ 灰黄 2.5Y7/2 焼成：普通	口縁部一部 体～底部 1/4	7トレンチⅡ 層	9C 第2四半期 ～中葉 益子 産産(編入人、 倉見沢)か
8	須恵器 高台付杯	口径 底径 7.4 器高 [2.9]	内面：体～底部ロクロナデ。 外面：口縁～体部ロクロナデ、底部高台貼 付後ロクロナデ、底部滑蓋「ネ」。	砂粒多量、石英 粒・長石粒微量	内：灰 7.5Y6/1 外：灰 7.5Y6/1 焼成：良好	底部ほぼ完 存	7トレンチⅡ 層	9C 第2四半期 ～中葉 益子 産産(編入人、 倉見沢)
9	須恵器 費	口径 底径 器高 [4.3]	内面：口縁～底部ロクロナデ。 外面：口縁～体部ロクロナデ後底部沈 降之染。磨擦痕跡状無文。	砂粒微量	内：灰 5Y5/1 外：灰 5Y5/2 焼成：良好	口縁部破片	7トレンチⅡ 層	8C 第1～第 2四半期 益 子産産(東葉 4号窯?)
10	須恵器 費	口径 底径 器高 [3.9]	内面：同心文当具痕。一部砥石転用 時の使用痕あり。 外面：縦格子印。	砂粒少量、礫 微量	内：灰 7.5Y5/1 外：灰 7.5Y6/1 焼成：良好	口縁部破片	A区Ⅱ層 No.197	古墳時代 7C 以降 産地不明 土野系須恵器 類
11	須恵器 門面碗	口径 底径 器高 [4.5]	内面：ロクロナデ。 外面：ロクロナデ後タテ方向沈降之染。 透かし孔1カ所残存。	砂粒少量	内：灰 N5/ 外：灰 N5/ 焼成：良好	脚部破片	C区Ⅱ層	益子産産
12	女瓦	長 11.2[1] 幅 11.3[0] 厚 2[1] 重 489.4[1]	凸面：格子印後木口状工具によるナ デ。 凹面：布目痕。多方向のヘラナデ。狭 帯脚部ヨコヘラナデ、脚部面取。 側面：ヘラクスリ。	砂粒多量、石英 粒・長石粒少量	凸：黒 10Y2/1 凹：灰黄 2.5Y6/2 焼成：良好	破片	A区Ⅱ層 No.238	西山産産 大内陶寺創建 期
13	女瓦	長 18.8[1] 幅 11.2[1] 厚 2[3] 重 297.0[3]	凸面：格子印後木口状工具によるナ デ。 凹面：布目痕。木口状工具によるナ デ。 側面：ヘラクスリ。	砂粒少量、石英 粒・長石粒微量	凸：灰 10Y4/1 凹：灰 10Y4/1 焼成：良好	破片	7トレンチⅡ 層	益子産産 粘土土 土野田分寺跡 428型式A
14	鉄片	長 [3.2] 幅 [4.6] 厚 [2.2] 重 21.07	断面に生成した塊形錆層。厚層は大半が欠損。土面の厚は長さ5～8mmの 欠出する部分がある。下面の厚は表面に錆が気泡が立ち、表面には酸化 土砂や砂質土の一部が付着。			破片	B区Ⅱ層	一段塊形錆 層 古鉄
15	須恵器 皿	口径 (14.4) 底径 器高 [2.4]	内面：口縁～体部ロクロナデ。 外面：口縁～体部ロクロナデ、体部下 半回転へつクスリ。	砂粒少量	内：灰 N6/ 外：灰 N5/ 焼成：良好	口縁部 1/4	C区Ⅱ層 C区Ⅳ層	9C 後半 益子産産(編 入)
16	土師器 杯	口径 (13.4) 底径 (8.6) 器高 [3.8]	内面：口縁～底部ロクロナデ。 外面：口縁～体部ロクロナデ、底部回 転糸切り。体部滑蓋「ネ」。	黒雲母粒少量、 赤色粒・砂粒 微量	内：浅黄緑 7.5Y88/4 外：浅黄緑 7.5Y88/4 焼成：不良	口縁部一部 体部 1/8 底部一部	C区Ⅳ層	
17	土師器 杯	口径 (15.4) 底径 器高 [3.1]	内面：口縁～体部ナデ。 外面：口縁～体部ナデ。体部摩耗が著しい ため調整不明。	黒雲母粒少量、 砂粒微量	内：黒 N5/2/1 外：灰黄 2.5Y7/2 焼成：不良	口縁部破片	A区Ⅳ層	産地不明

第3章 調査の方法と成果

掲載番号	種別・器種	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	粘土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
18	土師器 鉢	口径 - 底径 4.8 器高 [2.7]	内面：ヘラナデ。 外面：製部ヘラナデ、底部ナデ、底部木製痕。	黒出母胎・砂粒少量、長石粒微量	内：にぶい相 5YR6/4 外：にぶい相 5YR6/4 焼成：良好	底部 1/2	A区IV前期 No.172	
19	土師器 台付甕	口径 - 底径 [2.7] 器高 [2.7]	内面：底部ヘラナデ、台部ハケナデ、外面：台部ハケナデ。	砂粒少量、輝石	内：にぶい相 10YR7/3 外：にぶい相 10YR7/3・ 相 7.5YR6/6 焼成：普通	底部 1/2 台部 1/3	C区IV前期	古墳前期 S字口土師台 付甕
20	須恵器 環	口径 - 底径 - 器高 [2.7]	内面：口縁～体部ロクロナデ、外面：口縁～体部ロクロナデ、内外面還元焼成により焼き締まる。	砂粒多量、石英粒・長石粒少量	内：暗赤相 10R4/1 外：灰黒 5YR4/2 焼成：良好	口縁部 1/8	A区IV前期	6C 産地不明
21	須恵器 高台付杯	口径 - 底径 7.2 器高 [2.6]	内面：底部ロクロナデ、外面：体部ロクロナデ、底部跡にヘラケズリ、高台貼付後ロクロナデ、底部指書「奉」。焼き重ね痕	砂粒多量、礫粒	内：灰 5Y5/1・ 黄灰 2.5Y5/1 外：黄灰 2.5Y5/1 焼成：良好	底部完存	A区IV前期 No.204	9C 第2四半 期～9C 中頃 曇子楽産（編 ノ人・倉見所）
22	須恵器 高台付杯	口径 (12.4) 底径 [2.8] 器高 [5.7]	内面：体～底部ロクロナデ、外面：体部ロクロナデ、底部跡にヘラケズリ、高台貼付後ロクロナデ。	砂粒多量、石英粒微量	内：灰 5Y6/1 外：灰 5Y6/1 焼成：良好	口縁部一部 体部 1/4 底部完存	A区IV前期 No.180	9C 第2四半 期～9C 中頃 曇子楽産（編 ノ人・倉見所）
23	須恵器 高杯	口径 - 底径 - 器高 [4.2]	内面：脚部ロクロナデ、自然釉付着。外面：脚部ロクロナデ、自然釉付着。2方透かし。	砂粒微量	内：灰 10Y4/1 外：黒 N2/ 焼成：良好	脚部破片	A区IV前期	曇子楽産
24	須恵器 甕	口径 - 底径 [3.5] 器高 [3.5]	内面：同心円文当て具痕。外面：平行叩き後か半目。	砂粒微量	内：にぶい相 7.5YR6/4 外：にぶい相 7.5YR5/3 焼成：普通	製部破片	A区IV前期	古墳時代7C 以前 産地不明
25	灰釉陶器 碗	口径 - 底径 (9.0) 器高 [1.4]	内面：体～底部ロクロナデ後施釉。外面：体部ロクロナデ、底部跡にヘラケズリ後高台貼付、高台は扁丸形状。	砂粒微量	内：灰白 2.5Y7/1・ 輪：灰オリーブ 5Y6/2 外：灰白 2.5Y7/1 焼成：良好	底部 1/4	A区IV前期 No.187	9C 前 (V期 新) 尾張産か
26	女瓦	長 19.51 幅 17.31 厚 12.51 重 221.55	凸面：格子叩き後木口状工具によるタテナデ。 凹面：白目面、糸切面、タテ方向ヘラケズリ、側縁部面取り、割面：ヘラケズリ。	砂粒多量、石英粒微量	凸：灰 7.5Y5/1 凹：灰 10Y6/1 焼成：良好	破片	A区IV前期 No.177	曇子楽産 粘土板 下部四分角鉢 319号型式B
27	女瓦	長 16.51 幅 19.11 厚 12.81 重 168.50	凸面：格子叩き後ナデ。 凹面：白目面、糸切面。 割面：ヘラケズリ後面取り。	砂粒少量、赤色粒・石英粒微量	凸：にぶい相 5YR6/4 凹：にぶい赤褐 5YR5/4 焼成：普通	破片	B区IV前期 No.124	粘土板
28	土製品 土鏝	長 4.1 幅 1.6 厚 0.3 底 7.79	内面：棒状工具により両端から穿孔。外面：ナデ。摩耗。	砂粒微量	外：灰白 10YR8/2 焼成：不良	ほぼ完形	B区IV前期 No.162	
29	焼成粘土 埴	長 2.9 幅 4.4 厚 1.6 底 14.59	一部に押し当てたような平坦面。草本植物の茎の圧痕がみられる。	赤色粒少量	相 5Y7/6 焼成：普通	完形	SX-1A区IV前期	

(2) 土器集積遺構(第44～48図、第15表、図版一八・一九・二八～三一)

概要 低地部のA～D区に位置する。7トレンチⅢ層下面で、遺物がとくに集中している範囲を確認したため、トレンチを拡張して精査をおこなった。遺物は、約15m×2mの範囲に集中しており、A～D区の4つのグリッドに分けて取り上げをおこなった。集積の厚さは最も厚いところで40cmあり、調査区南端と西端にも遺物が続くことから、さらに広い範囲に土器集積が広がっていると推定される。遺物の投棄は、台地から低地への地形変換点を意識しているものとみられる。とくに、9世紀第2四半期から中頃においては、「奉」・「寺」・「得カ」と記された墨書土器が多く出土していることから、信仰関連のステバと推定される。

埋土 1層は褐色粘質土で炭化物・炭化物粒を少量、焼土粒を多量、2～10cm大の礫を少量含む。また、土師器・須恵器などの遺物を多く含む。2層は、暗褐色粘質土で、炭化物・炭化物粒・焼土粒、2～10cm大の礫を微量含むが遺物は少ない。3層は、黒褐色粘質土で炭化物粒・焼土粒を微量含むが遺物は非常に少ない。また、1～3層は褐色～黒褐色粘質土のグライ化した堆積層で、層中には管状斑鉄が認められることから、湿地化した環境であったことがわかる。

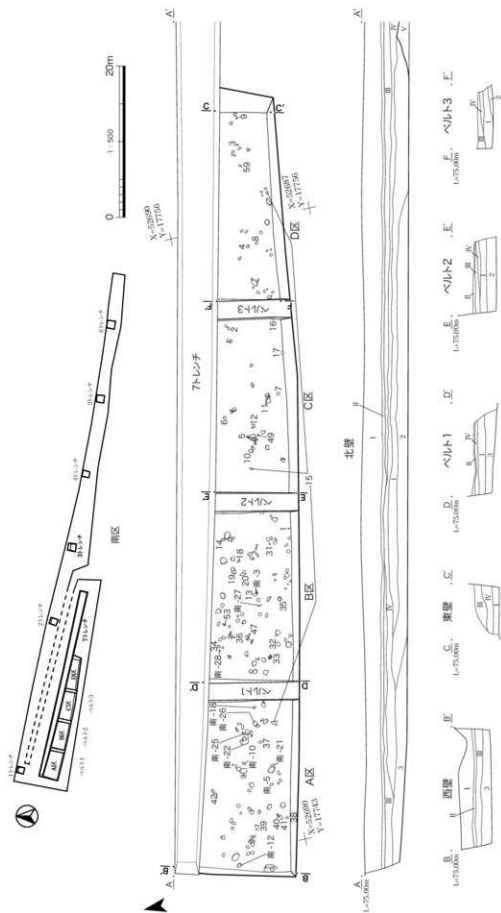
遺物出土状況 遺物は多く出土しており、B・C区の上層に集中している。1層中からは土師器環・甕、須恵器環・高台付環・鉢・甕が出土し、2層中からは土師器環、須恵器高台付環、益子窯産の女瓦が出土している。また、3層中からは土師器鉢または小型甕、益子窯産の須恵器蓋、男瓦・女瓦が出土している。遺物の時期は9世紀第2四半期～中頃が主体であるが、B区では8世紀後半～9世紀前半の須恵器、C区では7世紀中頃の土師器環が一定量出土している。とくに、C区の1層中から9世紀第2四半期～中頃の墨書土器が10点出土しており、一括で投棄された可能性が高い。また、遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層中から出土した墨書土器についても、土器の時期や墨書の特徴からSX-42から遊離したものと判断される。このことから、8世紀後半から9世紀後半まで断続的に遺物の投棄が続けられ、9世紀第2四半期から中頃は墨書・刻書土器を伴う信仰関連のステバであったと推定される。このほか、縄文時代の石皿や古墳時代前期のS字状口縁台付甕が出土しているが、これらは周囲からの混入品と考えられる。

土器集積遺構 SX-42 1層出土遺物 (第45図、第15表、図版二八)

3は8世紀後半の新治窯産の須恵器環、5は9世紀第2四半期後半～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器環である。6は9世紀中頃～後半の須恵器環で、内外面に墨書が記されている。底部内面の文字は判読不明であるが、体部外面の文字は「得」と考えられる。7は9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器環で、底部内面には「寺」の墨書が記されている。8・10は9世紀第2四半期後半～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器高台付環で、10の底部外面には「奉」の墨書が記されている。9は南那須窯産の須恵器高台付環で、胎土には海面骨針が含まれている。11は9世紀後半の脇屋窯段階の皿、12は9世紀第1四半期のカスガ入窯段階の皿で底部外面には「奉」の墨書が記されている。13は8世紀第4四半期の谷津入窯段階の須恵器壺、15は8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の谷津入窯・カスガ入窯段階の捏鉢である。17は下野系の須恵器甕、18・19は益子窯産の女瓦、20は西山窯産の大内鹿寺創建期の女瓦である。

土器集積遺構 SX-42 1・2層出土遺物 (第46図、第15表、図版二八・二九)

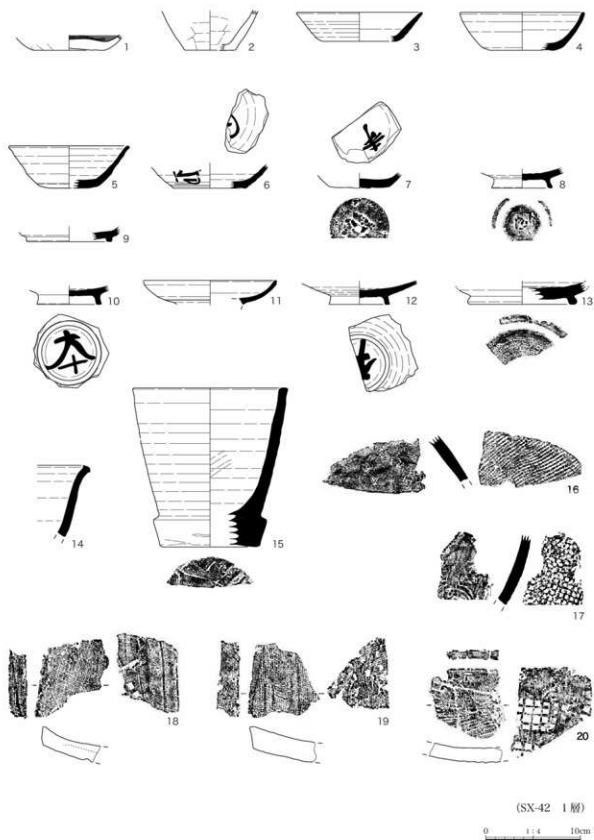
21・22は7世紀中頃の内外面漆仕上げの土師器環、25は土師器高環である。26は8世紀第3～4四半期の原東2号窯～谷津入窯段階の須恵器蓋、28は9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器環である。29は9世紀中頃～後半の籾倉窯段階の須恵器高台付環で、底部外面には「奉」の墨書が記されている。30は8世紀第1四半期後半～第2四半期前半の原東4号窯段階の須恵器高台付環で、外面には記号とみられる刻書がある。



SX-42

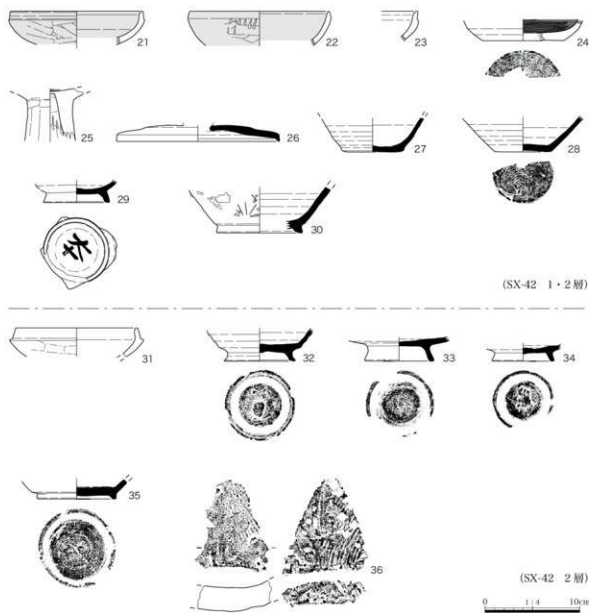
- 1 褐色土 粘質土、底分礫化による赤褐色土多量、礫土程少量、灰化材(0.5~2cm)少量、礫(2~10cm程度)少量。
- 2 暗褐色土 粘質土、底分礫化による赤褐色土少量、礫土程微量、灰化材(0.5~2cm)微量、礫(2~10cm程度)微量。
- 3 黒褐色土 粘質土、底分礫化による赤褐色土少量、礫土程微量、灰化材程微量。

第44図 南区全体図・SX-42 遺構図

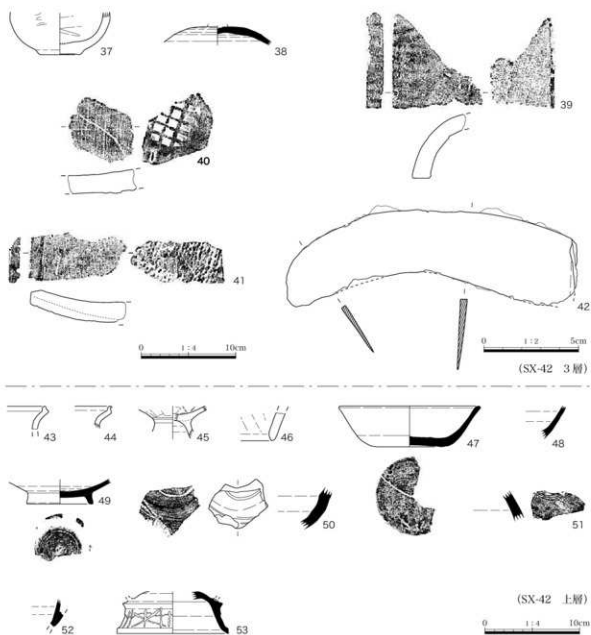


第45図 SX-42 出土遺物実測図(1)

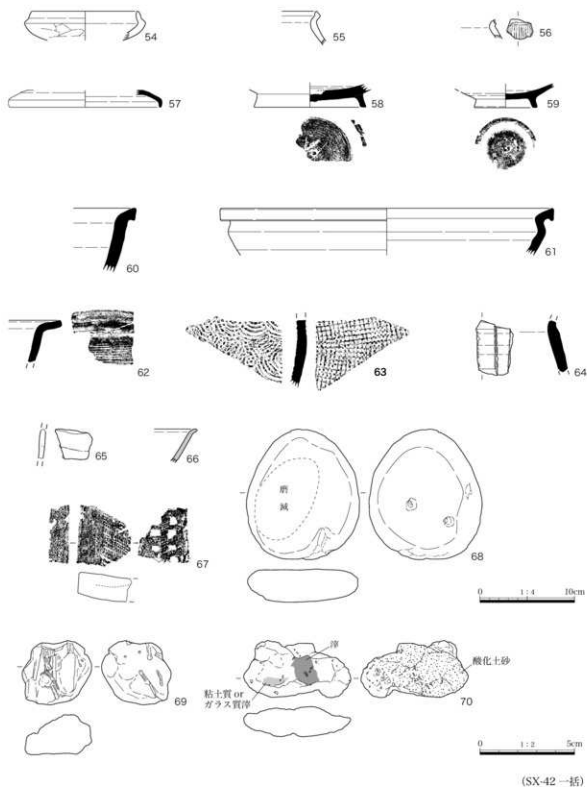
第3章 調査の方法と成果



第46図 SX-42出土遺物実測図(2)



第47図 SX-42出土遺物実測図(3)



第48図 SX-42出土遺物実測図(4)

第15表 SX-42 出土遺物観察表

図帳番号	種類・器種	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
1	土師器 環	口径 底径 7.8 部高 11.6	内面: 胴~底部1/4単口コホロミガキ。 黒色処理。 外面: 胴部へラナデ、底部へラケズリ。 やや骨化。	黒言母多量、赤 色粒少量、砂粒 微量	内: 黒 N2/ 外: 浅肉焼 7.5YR8/3 焼成: 不良	底部 2/3	B区 SX-1 1層・ 上層 No.81	
2	土師器 甕	口径 底径 (5.4) 部高 14.2	内面: 胴~底部1/3口方向へラナデ。 外面: 胴部コホロケズリ、底部へラ ケズリ後ナデ。	石炭粒・砂粒少 量、礫微量	内: にぶい・間 7.5YR5/4 外: 赤黒 5YR4/6 焼成: 普通	胴~底部 1/8	C区 SX-1 1層 No.40	OC 首輪型甕
3	須恵器 環	口径 (13.2) 底径 (8.0) 部高 13.1	内面: 口縁~底部口コナデ。 外面: 口縁~体部口コナデ後体部 端子持ちへラケズリ、底部へラ切り。	砂粒・礫微量	内: 灰 N6/ 外: 灰白 N7/ 焼成: 良好	口縁部 体部 1/4 底部 1/4	D区 SX-1 1層 No.12	OC 後半 須恵器 (東 城寺)
4	須恵器 環	口径 (12.8) 底径 (6.8) 部高 14.0	内面: 口縁~底部口コナデ。 外面: 口縁~体部口コナデ、底部別 転系切り。	砂粒少量、白色 粒微量	内: 黄灰 2.5Y6/1 外: 黄灰 2.5Y6/1 焼成: 良好	口縁~底部 1/8	D区 SX-1 1層 No.23	OC 前~中頃 産地不明
5	須恵器 環	口径 (12.6) 底径 (8.4) 部高 14.4	内面: 口縁~底部口コナデ。 外面: 口縁~体部口コナデ、底部へ ラ切り後ナデ。	砂粒少量、白色 粒・礫微量	内: 灰 5Y6/1 外: 灰 N5/1 焼成: 良好	口縁部 体部 1/4 底部 1/2	C区 SX-1 1層 No.64・65・ 66・67	OC 第2四半期 須恵器 (瀬ノ人・ 倉見沢)
6	須恵器 環	口径 底径 (7.6) 部高 12.7	内面: 体~底部口コナデ、底部別 転系切り。 外面: 体部口コナデ、底部へラ切り。 体部別転系「□」得々。	砂粒少量、黒言 母粒・礫微量	内: にぶい・黄焼 10YR6/3 外: にぶい・黄焼 10YR7/3・ 期灰 10YR5/1 焼成: 普通	底部 2/9	C区 SX-1 1層 No.59	産地不明
7	須恵器 環	口径 底径 6.2 部高 11.6	内面: 体~底部口コナデ、底部別 転系「等」。 外面: 体部口コナデ、底部へラ切り。	砂粒少量、礫微 量	内: 灰 N6/ 外: 灰 N6/ 焼成: 良好	底部 2/3	C区 SX-1 1層 No.47	OC 第2四半期 ~中頃 曇子 須恵器 (瀬ノ人・ 倉見沢)
8	須恵器 高台付杯	口径 底径 6.4 部高 12.11	内面: ロコナデ。 外面: 体部口コナデ、底部口コナ デ後高台貼付。	砂粒少量、石炭 粒・長石粒微量	内: 灰 N6/ 外: 灰 N6/ 焼成: 良好	底部 4/5	D区 SX-1 1層 No.22	OC 第2四半期 ~中頃 曇子 須恵器 (瀬ノ人・ 倉見沢)
9	須恵器 高台付杯	口径 底径 (9.0) 部高 11.6	内面: ロコナデ。 外面: 体部口コナデ、底部別転へラ ケズリ後高台貼付。	石炭粒・海神砂 粒・砂粒微量	内: 浅肉焼 2.5Y7/3 外: 浅肉焼 10YR8/3 焼成: 不良	底部 1/8	D区 SX-1 1層 No.2	瀬南産地
10	須恵器 高台付杯	口径 底径 6.4 部高 12.0	内面: 体~底部口コナデ。 外面: 体部口コナデ、底部へラ切り。 高台貼付後口コナデ、底部別転系「等」。	砂粒多量、石炭 粒・長石粒微量	内: 灰 7.5Y6/1 外: 灰 N5/1 焼成: 良好	底部ほぼ保存	C区 SX-1 1層 No.73	曇子須恵器 (瀬 ノ人・倉見沢)
11	須恵器 皿	口径 (14.0) 底径 部高 12.5	内面: ロコナデ。 外面: 口縁~体部上半口コナデ、体 部下半別転へラケズリ。	砂粒少量、礫微 量	内: 灰 7.5Y6/1 外: 灰 N5/ 焼成: 良好	口縁部 4/9	C区 SX-1 1層 No.48・49・ 50	OC 後半 曇子須恵器 (臨 川)
12	須恵器 皿	口径 底径 6.4 部高 12.5	内面: 口縁~底部口コナデ。 外面: 体部口コナデ、底部別転へラ ケズリ、高台貼付後口コナデ、底部 別転系「等」。	砂粒少量	内: 灰 7.5Y6/1 外: 灰 N6/ 焼成: 良好	底部 1/2	C区 SX-1 1層 No.60	OC 第1四半期 曇子須恵器 (古 ス人)
13	須恵器 甕	口径 底径 (11.2) 部高 12.5	内面: 胴~底部口コナデ。 外面: 胴部口コナデ、底部別転へラ ケズリ後高台貼付。	白色粒多量、砂 粒少量、礫微 量	内: 灰 N3/ 外: 灰 N4/ 焼成: 良好	底部 1/4	B区 SX-1 1層 No.120	OC 第4四半期 曇子須恵器 (谷 津)
14	須恵器 鉢	口径 底径 部高 17.5	内面: ロコナデ。 外面: ロコナデ。	赤色粒・砂粒少 量、石炭粒・長 石粒微量	内: 灰 7.5Y5/1 外: 灰 N6/ 焼成: 良好	口縁部破片	B区 SX-1 1層 No.99	曇子須恵器
15	須恵器 控鉢	口径 (16.2) 底径 (10.4) 部高 16.7	内面: ロコナデ後一部ハナナデ。 外面: 口縁~体部口コナデ、底部別 転系切り後ナデ。	砂粒少量、礫微 量	内: 黄灰 2.5Y4/1 外: 灰 5Y5/1 焼成: 良好	口縁部 体部 1/4 底部 3/8	D区 SX-1 1層 No.14 C区 SX-1 1層 No.77 A区 倉庫 No.173	曇子須恵器 (谷 津人・古ス人)
16	須恵器 甕	口径 底径 部高 14.8	内面: ナデ。 外面: 胴~脚部、明き貝が埋め込み目 録の付着しているため、一部格子状に みえる部分もある。	砂粒少量、石炭 粒・長石粒微量	内: 灰 5Y5/1 外: 灰 N6/ 焼成: 良好	胴部破片	C区 SX-1 1層 No.38	曇子須恵器
17	須恵器 甕	口径 底径 部高 17.3	内面: 同文・同文貝当具をナデ滑す。 外面: 胴部明き。	砂粒微量	内: 灰 N6/ 外: 灰 N6/ 焼成: 良好	胴部破片	C区 SX-1 1層 No.46	産地不明 上野系須恵器 甕
18	瓦瓦	長 (9.5) 幅 (7.1) 厚 (1.1) 重 127.98	凸面: 格子明きナデ。 凹面: 布目織、斜線織面取り。 側面: へラケズリ。	石炭粒・長石粒 砂粒微量	凸: 黄灰 2.5Y6/1 凹: 灰白 10YR7/1 焼成: 良好	破片	B区 SX-1 1層 No.105	内山産地 粘土版 大内院寺遺蹟 側
19	瓦瓦	長 (8.7) 幅 (7.3) 厚 (2.4) 重 149.52	凸面: 格子明き後木口状工具によるナ デ。 凹面: 布目織、糸切織、斜線織面取り。 側面: へラケズリ。	砂粒少量、礫微 量	凸: 灰 10Y5/1 凹: 灰 10Y5/1 焼成: 良好	破片	B区 SX-1 1層 No.107	曇子須恵器 粘土版
20	瓦瓦	長 (9.4) 幅 (8.7) 厚 (1.1) 重 146.35	凸面: 格子明き後タテナデ。 凹面: 布目織、糸切織、ナデ、狭端割 線部コホロケズリ。 側面: 狭端割へラケズリ。	砂粒・礫少量	凸: 灰 5Y6/1 凹: 灰 10Y4/1 焼成: 良好	破片	B区 SX-1 1層 No.108	内山産地 粘土版 大内院寺遺蹟 側
21	土師器 環	口径 (14.0) 底径 部高 13.9	内面: 口縁~体部口コナデ。 外面: 口縁部口コナデ、体部へラケ ズリ。 内外面漆仕上げ。	赤色粒・石炭粒 砂粒微量	内: にぶい・間 7.5YR6/4 外: にぶい・間 7.5YR6/4 焼成: 普通	口縁部 1/8 体部 1/4	C区 SX-1 1・ 2層	7C 中頃

第3章 調査の方法と成果

掲載番号	種別・銘柄	法盤 (mm)	成型技法・特徴	粘土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
22	土師器 環	口径 (14.6) 底径 器高 [3.7]	内面：口縁～体部ロクロナデ。 外面：口縁部ロクロナデ、体部ヘラケズリ。 内外面磨光仕上げ。	白色粘粒量	内：黒濁 7.5YR3/1 外：黒濁 10YR3/1 焼成：普通	口縁部一部	C区 SX-1・1・2層	7C中頃
23	土師器 環	口径 - 底径 器高 [3.5]	内面：口縁～体部ロクロナデ。 外面：口縁部ロクロナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。	砂粒微量	内：にぶい赤濁 5YR5/4 外：にぶい赤濁 5YR5/4 焼成：普通	口縁部破片	C区 SX-1・1・2層	7C中頃
24	土師器 環	口径 - 底径 (8.6) 器高 [2.3]	内面：体～底部ヨコナデ後ヨコ方向ヘラケミガキ。黒色焼成。 外面：体部ヨコヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。	砂粒少量、石英粒微量	内：黒 N2/ 外：にぶい赤濁 5YR5/4 焼成：普通	底部 1/3	A区 SX-1 B区 SX-1・1・2層	
25	土師器 高台付環	口径 - 底径 - 器高 [5.6]	内面：環底部ヨコ方向ヘラミガキ、即部ヨコヘラケズリ。ヘラ状工具磨。 外面：脚部タテヘラケズリ後ヨコヘラケズリ。	砂粒少量、礫粒	内：橙 5YR6/6 外：にぶい黄濁 10YR6/3 焼成：普通	環底～脚部 5/12	C区 SX-1・1・2層	7C中頃
26	須恵器 蓋	口径 (17.2) 底径 器高 [1.7]	内面：口縁～天打部ロクロナデ。 外面：口縁～体部ロクロナデ、天打部回転ヘラケズリ。	砂粒多量、礫粒	内：灰白 5Y7/1 外：灰白 5Y7/1 焼成：良好	口縁部一部 体部 1/4	B区 SX-1・1・2層	8C 第4回平明 ～9C中頃 磁子産産 (谷津人)
27	須恵器 環	口径 - 底径 (6.5) 器高 [3.6]	内面：体部ロクロナデ。 外面：体部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内外面磨光。	砂粒少量、赤色粒微量	内：にぶい黄濁 10YR7/3 外：にぶい黄濁 10YR7/3 焼成：普通	体部 1/4 底部 1/2	C区 SX-1・1・2層 SX-1 上層	産地不明
28	須恵器 環	口径 - 底径 6.0 器高 [3.7]	内面：ロクロナデ。 外面：体部ロクロナデ、底部回転糸切り。	砂粒多量、石英粒少量	内：暗灰 7.5YR5/5 外：暗灰 7.5YR5/5 焼成：普通	体部 1/4 底部 3/4	C区 SX-1・1・2層 C区 SX-1	9C 第2回平明 ～9C中頃 磁子産産 (倉見沢)
29	須恵器 高台付環	口径 - 底径 6.8 器高 [2.4]	内面：体～底部ロクロナデ。 外面：体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、高台側付後ロクロナデ、底部磨光「布」。	砂粒多量、礫粒	内：灰 N5/ 外：灰 N4/ 黒濁 7.5YR3/1 焼成：良好	底部 2/3	B区 SX-1・1・2層	9C中～後頃 磁子産産 (藤倉)
30	須恵器 高台付環	口径 - 底径 (9.0) 器高 [4.8]	内面：体～底部ロクロナデ。 外面：自然磨付若くのため磨光不明、高台側付。体部削着「N」。	砂粒多量、石英粒微量	内：灰白 N7/1 外：黄灰 2.5Y6/1-1 自然磨 灰オーリーブ 7.5Y4/2 焼成：良好	体～底部 1/4	B区 SX-1・1・2層 B区 SX-1	8C前半 磁子 産産 (原康4)
31	土師器 環	口径 (12.8) 底径 - 器高 [3.0]	内面：口縁～体部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	赤色粒・黒雲母粒・砂粒微量	内：橙 5YR7/6 外：橙 5YR7/6 焼成：全量	口縁～体部 1/8	B区 SX-1 2層 No.86	6C後半
32	須恵器 高台付環	口径 (7.5) 底径 7.5 器高 [3.5]	内面：体～底部ロクロナデ。重ね焼成。 外面：体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、高台側付後ナデ。自然磨付着。	砂粒少量、礫粒	内：灰 N6/ 外：灰 N5/ 焼成：良好	底部ほぼ底面 存	B区 SX-1 2層 No.148	9C中頃 磁子 産産 (藤倉)
33	須恵器 高台付環	口径 - 底径 7.2 器高 [2.5]	内面：底部ロクロナデ。重ね焼成。 外面：体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、高台側付後ナデ。	砂粒少量、礫粒	内：灰オーリーブ 5Y5/5 外：灰 5Y5/1 焼成：良好	環底部ほぼ底面 存 高台部 2/3	B区 SX-1 2層 No.151	9C 第2回平明 ～9C中頃、磁子 産産 (藤倉、倉見沢)
34	須恵器 高台付環	口径 - 底径 6.5 器高 [1.9]	内面：底部ロクロナデ。磨付着。 外面：体部ロクロナデ、底部ヘラ切り、高台側付後ロクロナデ、底部削着「X」。	砂粒少量	内：灰 N5/ 外：灰 N5/ 焼成：良好	底部 2/3	B区 SX-1 2層 No.163	磁子産産 (藤倉、倉見沢)
35	須恵器 高台付環	口径 - 底径 8.2 器高 [2.2]	内面：体～底部ロクロナデ。 外面：体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ後高台側付。	砂粒多量、礫粒	内：灰白 5Y7/1 外：灰 5Y6/1 焼成：普通	底部ほぼ底面 存	B区 SX-1 2層 No.127	磁子産産 (原康1・3)
36	瓦	長 19.81 幅 19.01 厚 12.51 重 242.86	凸面：椅子型後本口具上具によるヨコナデ。 凹面：布目織、糸切織、広端側縁部ヨコ方向ヘラケズリ。 側面：土塗面ヘラケズリ。	砂粒多量	凸：暗灰 N3/ 凹：灰 N4/ 焼成：良好	破片	B区 SX-1 2層 No.167・169	磁子産産 土野田分寺跡 283号式
37	土師器 鉢か小型甕	口径 - 底径 (4.2) 器高 [4.4]	内面：ヘラケズリ、ヘラケズリまたはヘラツの足し込み磨あり。 外面：体部タテ方向ヘラケズリ後ナデ、一部にヘラミガキの可能性のある棒状痕あり。	赤色粒・石英粒少量、砂粒微量	内：にぶい黄濁 10YR7/3 外：にぶい黄濁 10YR7/3 焼成：普通	体～底部 1/4	A区 SX-1 3層 No.179	
38	須恵器 蓋	口径 - 底径 - 器高 [2.1]	内面：体～天打部ロクロナデ。重ね焼成。 外面：体部ロクロナデ、天打部回転ヘラケズリ。	砂粒少量	内：灰 N5/ 外：灰 N6/ 焼成：良好	体～天打部 3/8	A区 SX-1 3層 No.215	9C 第2回平明 ～9C中頃 磁子産産
39	瓦	長 [10.3] 幅 15.71 厚 11.91 重 141.23	凸面：タテ方向ヘラケズリ。 凹面：布目織、側縁部面取り。 側面：ヘラケズリ。	赤色粒多量、砂粒少量、石英粒微量	凸：橙 5YR6/6 凹：にぶい赤濁 5YR5/4 焼成：普通	破片	A区 SX-1 3層 No.222	産地不明 粘土組
40	瓦	長 17.91 幅 17.81 厚 12.21 重 139.00	凸面：椅子型後ナデ。 凹面：布目織。	砂粒少量、赤色粒・石英粒微量	凸：浅黄 2.5Y7/2 凹：灰黄 2.5Y7/2 焼成：普通	破片	A区 SX-1 3層 No.216	産地不明 土野田分寺跡 283号式
41	瓦	長 15.61 幅 110.41 厚 12.11 重 146.33	凸面：縄目後ナデ。 凹面：布目織、側縁部面取り。 側面：ヘラケズリ。	石英粒・砂粒微量	凸：灰白 2.5Y7/1 凹：灰白 5Y7/1 焼成：普通	破片	A区 SX-1 3層 No.214	産地不明 粘土組
42	鉄製品 鏝	長 [15.4] 幅 14.01 厚 40.41 重 48.66	両刃端で基部右側を欠損するが、全体形を留める。甲技法により製作され、刃部欠損。両刃部は楔形である。基部はほぼ直前に折り返され、表面面とも木肌は認められない。				A区 SX-1 3層 No.245	

図帳番号	種別・群集	法種 (cm・g)	成層技法・特徴	動物	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
43	土師器 甕	口径 - 底径 - 器高 [2.4]	内面：口縁～頸部コナデ。 外面：口縁端部つまみ上げ、口縁～頸部コナデ。	石炭粒・長石粒・砂粒少量	内：黒 7.5YR4/3 外：にぶい黄褐色 10YR4/3 焼成：普通	口縁部破片	B区 SX-1 上層	甕底型甕
44	土師器 甕	口径 - 底径 - 器高 [2.3]	内面：口縁～頸部コナデ。 外面：口縁端部つまみ上げ、口縁～頸部コナデ。	石炭粒・砂粒少量	内：にぶい暗 7.5YR7/4 外：にぶい暗 7.5YR6/4 焼成：普通	口縁部破片	SX-1 上層	9C 中咽か 帯輪型甕
45	土師器 台付甕	口径 - 底径 - 器高 [3.5]	内面：甕底部ヘラナデ。台部コナデ。 外面：甕胴部ヘラナデ。台部コナデ。	黒雲母粒・砂粒 微量	内：明赤褐 2.5YR5/6 外：にぶい赤褐 5YR4/3 焼成：普通	台部破片	SX-1 上層	武蔵型甕
46	土師器 甕	口径 - 底径 - 器高 [2.9]	内面：ヘラケズリ。 外面：タテヘラケズリ。	赤色粒・砂粒少量	内：にぶい赤褐 2.5YR5/4 外：にぶい暗 5YR6/4 焼成：普通	底部破片	B区 SX-1 上層	7C 中～後半か
47	須恵器 坏	口径 (14.6) 底径 (8.0) 器高 [4.3]	内面：口縁～底部クロコナデ。 外面：口縁～体部クロコナデ、底部回転糸切り。	赤色粒少量、黒雲母粒・砂粒微量	内：浅黄緑 10YR8/4 外：浅黄緑 10YR8/4 焼成：良好	口縁～底部 1/2	B区 SX-1 2層 No.140 B区 SX-1 4層 No.141 B区 SX-1 上層	9C 後半 産地不明
48	須恵器 坏	口径 - 底径 - 器高 [3.4]	内面：クロコナデ。 外面：クロコナデ。	砂粒微量	内：灰白 2.5Y7/1 外：灰白 2.5Y7/1 焼成：良好	体部破片	B区 SX-1 上層	瀬内産産
49	須恵器 高台付坏	口径 - 底径 (7.0) 器高 [2.6]	内面：クロコナデ。 外面：体部クロコナデ。底部回転糸切り後高台付。	砂粒・微量	内：灰 10Y6/1 外：灰 10Y6/1 焼成：良好	坏底部 1/2 高台部一部	C区 SX-1 1層 No.63 B区 SX-1 上層	9C 第1四半期 益子産産 (方 丈式)
50	須恵器 フラスコ形 甕	口径 - 底径 - 器高 [5.2]	内面：クロコナデ。 外面：クロコナデ後ヘラケズリ。沈線 1条。	砂粒微量	内：灰白 2.5Y7/1 外：黒灰 10YR5/1 焼成：良好	胴部破片	D区 SX-1 上層	瀬内産産か
51	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [3.1]	内面：クロコナデ後かき白。 外面：クロコナデ。	砂粒少量、石炭 粒・長石粒微量	内：にぶい暗 5YR6/4 外：にぶい黄褐 10YR7/3 焼成：普通	胴部破片	B区 SX-1 上層	7C 中～後半 産地不明
52	須恵器 多嘴壺か	口径 - 底径 - 器高 [2.8]	内面：肩部クロコナデ。 外面：肩部クロコナデ後口縁部(嘴)	砂粒微量	内：灰 5Y6/1 外：灰 5Y6/1 焼成：良好	胴部破片	B区 SX-1 上層	産地不明
53	須恵器 門面甕	口径 (8.4) 底径 (11.8) 器高 [4.4]	内面：踵～脚台部クロコナデ。自然軸 付丸。 外面：踵～海部クロコナデ。外壁部突 帯貼付ナデ。脚部クロコナデ後タテ 方向沈線2条と木子状沈線を施す。長 方形底部か孔2ヶ所所見。	砂粒少量、微量	内：灰 7.5Y4/1 外：灰 NS/ 焼成：良好	踵～脚台部 1/4	B区 SX-1 2層 No.137 B区 SX-1 上層	9C 第2四半期 ～中咽 益子 産産 (甕/人・ 倉見沢)
54	土師器 坏	口径 (11.2) 底径 - 器高 [3.1]	内面：口縁～体部コナデ。 外面：口縁部コナデ。体部ヘラケズ リ。	黒雲母粒・石炭 粒・砂粒微量	内：にぶい黄褐 10YR7/2 外：灰黄褐 10YR6/2 焼成：普通	口縁部 1/8	7 トレンチ SX-1	7C 前半
55	土師器 甕	口径 - 底径 - 器高 [3.5]	内面：口縁～頸部コナデ。 外面：口縁部コナデ。頸部ヘラケズ リ後コナデ。	雲母多量、砂粒 微量	内：黒 NS/ 外：灰黄褐 10YR5/2 焼成：普通	口縁部破片	A区 SX-1	9C 前半 帯輪型甕
56	土師器 台付甕	口径 - 底径 - 器高 [2.2]	内面：ヨコ・ナメ方向ハケナデ。 外面：タテ方向ハケナデ。	白色粒・砂粒少 量、石炭粒微量	内：にぶい暗 7.5YR6/3 外：灰黄褐 7.5YR5/2 焼成：普通	胴部破片	C区 SX-1	5 墳前跡 古瓦(口縁部 付甕)
57	須恵器 甕	口径 (16.0) 底径 - 器高 (11.8)	内面：クロコナデ。 外面：クロコナデ。	白色粒・砂粒微量	内：灰 7.5Y6/1 外：灰 7.5Y6/1 焼成：良好	口縁部 1/8 SX-1	7 トレンチ SX-1	産地不明
58	須恵器 高台付坏	口径 (11.8) 底径 (11.8) 器高 [2.6]	内面：底部クロコナデ。 外面：体部クロコナデ。底部回転糸切 り後高台付。底部刷割。	砂粒少量	内：灰 5Y6/1 外：灰 5Y6/1 焼成：良好	坏底部 1/4 高台部 1/8	C区 SX-1	9C 第2四半期 ～中咽 益子 産産 (甕/人・ 倉見沢)
59	須恵器 高台付坏	口径 (6.6) 底径 (2.5) 器高 [2.5]	内面：体～底部クロコナデ。火だすき 丸。 外面：体部クロコナデ。底部クロコナ デ後高台付。	石炭粒・長石粒 少量、砂粒微量	内：灰 7.5Y6/1 外：灰 7.5Y6/1 焼成：良好	坏底部完形 高台部 5/12	D区 IV層 No.10 D区 SX-1	9C 第2四半期 ～中咽 益子 産産 (甕/人・ 倉見沢)
60	須恵器 鉢	口径 - 底径 - 器高 [6.7]	内面：口縁～体部クロコナデ。 外面：口縁～体部クロコナデ。	石炭粒・砂粒少 量	内：灰 10Y4/1 外：灰 10Y4/1 焼成：良好	口縁～体部破 片	C区 SX-1	9C 第2四半期 ～中咽 益子 産産 (甕/人・ 倉見沢)
61	須恵器 鉢	口径 (35.0) 底径 - 器高 [5.0]	内面：口縁～体部クロコナデ。 外面：口縁部クロコナデ。	黒雲母・砂粒微 量	内：灰白 2.5Y7/1 外：灰白 5Y7/1 焼成：普通	口縁部破片	7 トレンチ SX-1	9C 第3四半期 瀬内産産産
62	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [5.0]	内面：口縁～頸部クロコナデ。 外面：口縁～頸部クロコナデ後頸部力 半打。	白雲母・砂粒多 量、石炭粒・長 石粒少量	内：灰黄 2.5Y7/2 外：にぶい黄橙 10YR6/4 焼成：普通	口縁部破片	7 トレンチ SX-1	8C 中咽 新治産産 (東 城寺高塚前)
63	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 [7.0]	内面：同心文付で具組。 外面：刷格子印。	砂粒微量	内：灰 5Y5/1 外：黒 5Y2/1 焼成：良好	胴部破片	7 トレンチ SX-1	7C 前半平 南高塚産産か 1層5号須恵器

第3章 調査の方法と成果

編號番号	種別・器種	法量 (cm・g)	成形技法・特徴	胎土	色調・焼成	残存率	出土位置	備考
64	須恵器 円面硯	口径 - 底径 - 器高 [5.8]	内面：全面に自然釉付着のため調整不 理。 外面：ロクロ子後タテ方向比類2条。 透かし孔1つが残存。	砂粒微量	内：黧 灰オリーブ 7.5Y4/2 外：黒 7.5Y2/1 焼成：良好	胴部破片	A区 SX-1	益子窯産
65	土師器 製磁土器	口径 - 底径 - 器高 [3.2]	内面：ヘラナデ。 外面：ユビナデ。輪轆痕。	白色針状物質多 量。黒雲母粒・ 石英粒・砂粒微 量	内：にぶい黄緑 10YR6/3 外：にぶい緑 7.5YR6/4 焼成：普通	体部破片	C区 SX-1	9C 代カ 常陸産
66	灰輪陶器 碗	口径 - 底径 - 器高 [3.5]	内面：口縁～体部ロクロ子後輪轆。 外面：口縁～体部ロクロナデ。 口縁部大きく丹反。	砂粒微量	内：灰白 2.5Y7/1 輪：灰オリーブ 7.5YR/2 外：灰白 2.5Y7/1 焼成：良好	口縁～体部破 片	A区 SX-1	9C 前半（V期 新） 尾張産か
67	女瓦	長 [9.6] 幅 [5.8] 厚 [2.7] 重 [121.06]	凸面：格子印。 凹面：布目面。糸切痕。側縁部タテヘ ラケズリ。 製面：ヘラケズリ。	砂粒少量。礫微 量	凸：灰 10Y6/1 凹：灰 10Y5/1 焼成：良好	破片	C区 SX-1	益子窯産 粘土板 下野岡寺跡 3E1 型式か
68	石製品 石皿	長 13.8 幅 12.0 厚 3.4 重 870.43	自然の河原石をそのまま使用。表面は顕著な摩滅痕が残され窪く窪む。裏面は 摩滅痕と一部に磨り傷がみられ、側面の一部にも摩滅痕がみとられる。安山 岩		灰白 10YR8/2 焼成：普通	完形	A区 SX-1	
69	焼成粘土塊	長 3.4 幅 3.7 厚 2.2 重 17.77	片面には押し当てたような平凹面。草 状植物の葉の印が多少多く、上面には雨 に帯なった状態の圧痕がみられる。	砂粒微量				
70	鉄滓	長 [3.0] 幅 [5.2] 厚 [1.7] 重 28.17	伊底に生成した小形の椀形澱泊の破片。周縁は上下が欠損。上面の厚は黒黒 色で緻密なものと暗青灰色で発泡したものがある。下面には塵土砂が全体的 に付着し、部分的に伊底土や細かい灰塵が多い層が残る。			破片	C区 SX-1	椀形澱泊

土器集積遺構 SX-42 2層出土遺物 (第46図、第15表、図版二九)

31は6世紀後半の土師器環で、32は9世紀中頃の篠倉窯段階の須恵器高台付坏、33・34は9世紀第2四半期後半～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器高台付坏である。34は底部内面に漆が付着していることから、漆パレットとして利用されたと考えられ、底部外面には記号とみられる刻書がある。35は8世紀第2四半期～中頃の原東1・3号窯産の高台付坏で、36は益子窯産の女瓦である。

土器集積遺構 SX-42 3層出土遺物 (第47図、第15表、図版二九・三一)

37は6世紀末～7世紀初頭の土師器鉢または小型甕、38は9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器蓋、42は鉄製の曲刀鎌である。

土器集積遺構 SX-42 4層出土遺物 (第47図、第15表、図版三〇)

43・44は常総型の土師器甕、45は武蔵型の土師器甕、46は7世紀中頃～後半のものと思われる土師器甕である。47は8世紀後半の須恵器環であるが、焼成が非常に軟質である。49は9世紀第1四半期のカスガ入窯段階の高台付坏、51は7世紀中頃～後半の須恵器提瓶である。53は9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の円面硯である。他地域からの搬入品としては、48は湖西窯産の須恵器環、50は最投窯産のフラスコ形瓶、52は小片のため断定はできないが須恵器多嘴壺と推定される。このほか、小片のため非掲載であるが黒漆の付着した須恵器環（漆パレット）1点が出土している。

土器集積遺構 SX-42 一括出土遺物 (第48図、第15表、図版三〇)

54は7世紀前半の磨きのない須恵器模倣坏、55は常総型の土師器甕である。56は古墳時代前期のS字状口縁台付甕、58・59は9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器高台付坏で、58の底部外面には記号とみられる刻書がある。61は8世紀第3四半期の新治窯産と推定される須恵器鉢、62は8世紀中頃の新治窯産の須恵器甕である。63は7世紀前半の南高岡窯産の須恵器甕、64は益子窯産の円面硯である。65は9世紀代の常陸産製磁土器で、外面に粘土組織み上げの痕跡を明瞭に残し、胎土には海面骨針が含まれる。66は9世紀代の尾張産の灰輪陶器碗で、67は益子窯産の女瓦である。68は縄文時代の石皿で、69は焼成粘土塊、70は椀形滓である。

第4章 理化学分析

第1節 分析結果の概要

下飯貝遺跡では、遺構の年代や石材流通などにかんする情報収集や、遺跡周辺における古環境を復原することを目的として理化学分析を実施した。ここでは、分析結果の概要と担当者からみた評価・所見を述べることとする。

(1) 放射性炭素年代測定

遺構の年代決定は、基本的には出土した遺物の編年研究の成果に基づいているが、クロスチェックによって精度を高める必要から放射性炭素年代測定をおこなった。試料は、南区のA区IV層、SX-42B区上層、SX-42D区1層、北区のSI-2、SI-31、SI-41、SB-9、SD-37、SD-40で採取した炭化材9点である。AMS法による分析の結果、南区については、SX-42B区上層で出土遺物の年代が8世紀後半～9世紀中頃であるのに対し、8世紀後半～9世紀後半の暦年代範囲が示され実年代に近い結果が得られた。北区については、SI-41で出土遺物の年代が6世紀後半を主体とするのに対し、6世紀中頃～7世紀前半の暦年代範囲が示され、こちらも比較的近い結果である。また、SD-40でも出土遺物の年代が13世紀初頭を主体とするのに対し、12世紀中頃～13世紀中頃の暦年代範囲が示され、陶磁器の年代幅を考慮すれば比較の実年代に近い結果である。ただし、それ以外の遺構にかんしては、南区のSX-42D区1層やSI-31では出土遺物の年代よりも大幅に古い暦年代が示された。これは、いずれの試料も最終形成年輪が残存していないため、実際には測定結果より新しい時期とみる必要もあるが、今回の分析結果と出土遺物の実年代には誤差があり、年代を検討する試料として用いるには精度の面で課題がある。考古学的に援用する場合には、他の分析や出土遺物の編年研究と組合せての分析が必要であろう。

(2) テフラ分析

層序や年代が不明な遺構について、層序を確立し年代を把握するため、現地での地質調査およびテフラ分析(火山灰の検出同定)をおこなった。試料は、北区のSI-31、SD-37、SD-37・SD-40重複地点、SD-40、SF-36の9地点の埋土から採取した44点である。肉眼観察では、いずれの地点でも約1.4～1.5万年前の男体今市スコリア(Nt-I)、男体七本桜軽石(Nt-S)が認められ、この低台地におけるローム層の形成年代の上限付近の一点を示している。分析の結果、肉眼で認められた以外にSI-31で浅間C軽石(As-C)と榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)、SD-37・SD-40で浅間Bテフラ(As-B)を検出した。出土遺物との層位的な関係とも矛盾がないため、それぞれの遺構が埋没する過程でこれらのテフラが降下したと考えられる。また、SF-36にかんしては、浅間Bテフラ(As-B)のほか浅間C軽石(As-C)または榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)とみられるテフラ粒子が検出され、出土遺物の年代が9世紀中頃～後半であるのに対し、上限の年代が大幅に古い結果となった。これは、浅間C軽石(As-C)または榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)とみられるテフラ粒子が、二次的に混入したものと推定される。

(3) 花粉・珪藻分析

遺跡周辺の植生の変遷を明らかにし、古環境を復原するため、花粉・珪藻分析をおこなった。試料は、SD-37、SD-37・SD-40重複地点、SD-40、SF-36の埋土から採取した7点である。分析の結果、台地上に立地するSF-36周辺では、比較的乾燥した環境を好む草本花粉および陸生珪藻が認められ、アブラナ科やイネ

科、クリが出現することから、稲作やアブラナ科などの畑作がおこなわれ、近隣にはクリが生育していたと推定される。また、沖積地上に立地するSD-37・SD-40周辺では、比較的乾燥した環境を好む草本花粉や陸生珪藻のほか、流水不定性種、真・好止水性種などが認められ、イネ属、ソバ属、アブラナ科、コナラ属コナラ亜属が出現する。このことから、SD-37・SD-40は止水と流水が繰り返され、周辺では稲作やアブラナ科、ソバなどの畑作がおこなわれ、クリを伴うナラ林が分布していたと推定される。SD-37・SD-40において止水と流水が繰り返されていたという珪藻分析の結果については、SD-37ではラミナ状堆積やグライ化した黒灰色粘質土層が確認されていることから追認される。一方、SD-40では止水を示すグライ化した灰褐色粘土層は確認されているが、ラミナ状堆積などの層理は確認されていないため、流水があったかどうかは断定できない。ただし、真・好流水性種が15%、真・好止水性種が19%の割合を占めることから、水田域やその周辺環境が反映されたものと推定される。

(4) 炭化材の樹種同定

遺跡周辺の古植生や当時の木材選択を明らかにするため、炭化材の樹種同定を実施した。試料は南区のA区IV層、B区SX-42、D区SX-42、南区一括、北区Ⅲ・IV層、SI-2、SI-3、SI-31、SI-41、SB-9、SD-37、SD-40で採取した炭化材16点である。全体では広葉樹のコナラ属クスギ節が6点と最も多く、針葉樹のモミ属が2点、広葉樹のクリ(可能性があるものを含む)が3点、針葉樹のイヌガヤ、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属・コナラ属・ハンノキ属ハンノキ亜属、分類群不明の広葉樹が各1点であった。これらは、いずれも温帯から暖帯に分布する樹木であり、遺跡周辺に生育していた樹木が伐採利用されたと推定されている。この結果は、花粉分析においてコナラ属コナラ亜属やクリの樹木花粉が認められることから追認される。

(5) 石製紡錘車の石材同定

石材の産地を明らかにし、石材流通に関する情報収集を目的として、石製紡錘車の石材同定を実施した。試料は北区のSI-2から出土した石製紡錘車1点である。担当者による肉眼観察では、暗灰茶色を白色とし、黒斑及び純タルクを帯状に内包する蛇紋岩領域に生成される滑石片岩と考えられた。しかし、実体顕微鏡による観察や蛍光X線分析による化学組成の結果から、蛇紋岩と判断された。石材とされる蛇紋岩は日本各地に広く分布しており、化学組成にも地域的な特徴が現れにくいため産地を特定することはできなかった。

(6) 銭貨の蛍光X線分析

化学組成値を把握し当時の貨幣流通を推定することを目的として、銭貨の蛍光X線分析を実施した。試料は北区のSD-37から出土した銭貨2点である。その結果、青銅製でほぼ銅・スズ・鉛からなる化学組成であることから、銅の比率が高くスズをほとんど含まない模鑄銭ではなく公鑄銭であると考えられる。

以上が、今回自然科学分析を委託した担当者(考古学)からみた分析結果に対する評価である。次節では、株式会社火山灰考古学研究所および株式会社パレオ・ラボから提出された報告書の内容を掲載する。

参考文献

- 西本右子・佐々木稔 2002 「公鑄銭・模鑄銭の化学分析」『ふんせき』2002年10月号
堀木貞美子・鈴木正貴 2014 「豊田市乙ケ林出土銭の蛍光X線分析」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第15号

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子

(1) はじめに

真岡市の下飯貝遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、炭化材 9 点である。南区では A 区 IV 層出土の試料 No.2 (PLD-49329) と、D 区の SX-42 の 1 層出土の試料 No.3 (PLD-49330) の 2 点、南区 B 区では SX-42 の上層出土の試料 No.4 (PLD-49331) の 1 点、北区では SB-9 の P 6 埋土上層出土の試料 No.6 (PLD-49332) と、SI-2 カマド内出土の試料 No.7 (PLD-49333)、SD-37 東端の 2 層上面出土の試料 No.13 (PLD-49334)、SD-40 の 2 層出土の試料 No.14 (PLD-49335)、SI-41 の 2 層出土の試料 No.15 (PLD-49336)、SI-31 出土の試料 No.16 (PLD-49337) の 6 点である。試料はいずれも最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

測定試料の情報、調整データは第 16 表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第 17 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第 49 図と第 50 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第16表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-49329	調査区：南区 A 区 IV 層 試料 No.2	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・鹼洗浄（塩酸：1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49330	調査区：南区 D 区 遺構：SX-42 層位：1 層 試料 No.3	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・鹼洗浄（塩酸：1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49331	調査区：南区 B 区 遺構：SX-42 層位：上層 試料 No.4	種類：炭化材（クリ？） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・鹼洗浄（塩酸：1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49332	調査区：北区 遺構：SB-9 P6 層位：埋土上層 試料 No.6	種類：炭化材（モミ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・鹼洗浄（塩酸：1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49333	調査区：北区 遺構：SI-2 カマド内 試料 No.7	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・鹼洗浄（塩酸：1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49334	調査区：北区 遺構：SD-37 東端 層位：2 層上面 試料 No.13	種類：炭化材（コナラ属アカガシ垂果） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・鹼洗浄（塩酸：1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49335	調査区：北区 遺構：SD-40 層位：2 層 試料 No.14	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・鹼洗浄（塩酸：1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：0.1 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49336	調査区：北区 遺構：SI-41 層位：2 層 試料 No.15	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・鹼洗浄（塩酸：1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：0.1 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49337	調査区：北区 遺構：SI-31 遺物 No.8 試料 No.16	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・鹼洗浄（塩酸：1.2 mol/L 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）

(4) 考察

以下、各試料の暦年校正結果のうち、2σ 暦年代範囲（確率 95.45%）に着目して結果を整理する。

南区の A 区 IV 層の試料 No.2 (PLD-49329) は、774-792 cal AD (16.77%)、797-893 cal AD (73.88%)、928-946 cal AD (4.80%) の暦年代範囲を示した。これは、8 世紀後半～10 世紀中頃で、奈良時代から平安時代中期に相当する。

南区 D 区の SX-42 の 1 層の試料 No.3 (PLD-49330) は、603-657 cal AD (95.45%) の暦年代範囲を示した。これは、7 世紀初頭～中頃で、古墳時代終末期に相当する。

南区 B 区の SX-42 の上層の試料 No.4 (PLD-49331) は、774-777 cal AD (1.99%) および 779-885 cal AD (93.46%) の暦年代範囲を示した。これは、8 世紀後半～9 世紀後半で、奈良時代から平安時代前期に相当する。

北区の SB-9 の P 6 埋土上層の試料 No.6 (PLD-49332) は、673-754 cal AD (71.18%)、756-775 cal AD (9.09%)、788-827 cal AD (15.18%) の暦年代範囲を示した。これは、7 世紀後半～9 世紀前半で、古墳時代終末期から平安時代前期に相当する。

北区の SI-2 カマド内の試料 No.7 (PLD-49333) は、678-746 cal AD (52.19%)、759-767 cal AD (2.18%)、771-776 cal AD (2.64%)、786-835 cal AD (31.82%)、849-877 cal AD (6.62%) の暦年代範囲を示した。これは、7 世紀後半～9 世紀後半で、古墳時代終末期から平安時代前期に相当する。

北区の SD-37 東端の 2 層上面試料 No.13 (PLD-49334) は、1304-1366 cal AD (75.17%) および 1382-1403 cal AD (20.28%) の暦年代範囲を示した。これは、14 世紀初頭～15 世紀初頭で、鎌倉時代から室町時代に相当する。

第17表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-49329 試料 No.2	-24.82 \pm 0.21	1180 \pm 21	1180 \pm 20	775-788 cal AD (13.64%) 827-861 cal AD (32.29%) 863-887 cal AD (22.33%)	774-792 cal AD (16.77%) 797-893 cal AD (73.88%) 928-946 cal AD (4.80%)
PLD-49330 試料 No.3	-24.27 \pm 0.22	1412 \pm 22	1410 \pm 20	607-622 cal AD (29.90%) 638-653 cal AD (38.37%)	603-657 cal AD (95.45%)
PLD-49331 試料 No.4	-23.60 \pm 0.19	1204 \pm 20	1205 \pm 20	775-776 cal AD (0.90%) 784-791 cal AD (7.01%) 800-811 cal AD (10.38%) 819-835 cal AD (14.92%) 842-878 cal AD (35.06%)	774-777 cal AD (1.99%) 779-885 cal AD (93.46%)
PLD-49332 試料 No.6	-24.99 \pm 0.20	1257 \pm 21	1255 \pm 20	685-743 cal AD (63.67%) 761-765 cal AD (2.50%) 772-774 cal AD (2.10%)	673-754 cal AD (71.18%) 756-775 cal AD (9.09%) 788-827 cal AD (15.18%)
PLD-49333 試料 No.7	-26.52 \pm 0.21	1245 \pm 21	1245 \pm 20	704-740 cal AD (39.82%) 773-775 cal AD (1.93%) 790-822 cal AD (26.52%)	678-746 cal AD (52.19%) 759-767 cal AD (2.18%) 771-776 cal AD (2.64%) 786-835 cal AD (31.82%) 849-877 cal AD (6.62%)
PLD-49334 試料 No.13	-22.88 \pm 0.21	601 \pm 20	600 \pm 20	1319-1360 cal AD (56.65%) 1389-1397 cal AD (11.62%)	1304-1366 cal AD (75.17%) 1382-1403 cal AD (20.28%)
PLD-49335 試料 No.14	-23.79 \pm 0.23	855 \pm 21	855 \pm 20	1176-1194 cal AD (31.35%) 1200-1221 cal AD (36.92%)	1160-1230 cal AD (91.83%) 1243-1258 cal AD (3.62%)
PLD-49336 試料 No.15	-25.66 \pm 0.19	1507 \pm 21	1505 \pm 20	559-594 cal AD (68.27%)	541-605 cal AD (94.49%) 629-634 cal AD (0.96%)
PLD-49337 試料 No.16	-25.44 \pm 0.18	1706 \pm 20	1705 \pm 20	264-274 cal AD (11.22%) 349-402 cal AD (57.05%)	258-281 cal AD (19.34%) 329-410 cal AD (76.11%)

北区のSD-40の2層の試料No.14 (PLD-49335)は、1160-1230 cal AD (91.83%)および1243-1258 cal AD (3.62%)の暦年代範囲を示した。これは、12世紀中頃～13世紀中頃で、平安時代後期から鎌倉時代に相当する。

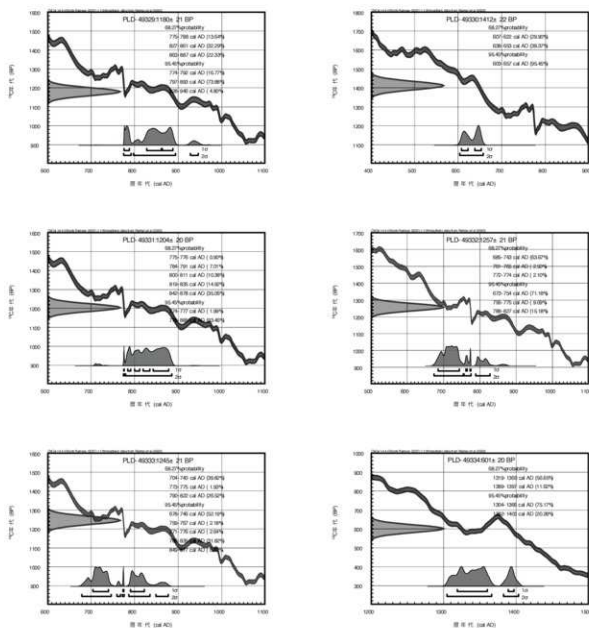
北区SI-41の2層の試料No.15 (PLD-49336)は、541-605 cal AD (94.49%)および629-634 cal AD (0.96%)の暦年代範囲を示した。これは、6世紀中頃～7世紀前半で、古墳時代後期から古墳時代終末期に相当する。

北区のSI-31の試料No.16 (PLD-49337)は、258-281 cal AD (19.34%)および329-410 cal AD (76.11%)の暦年代範囲を示した。これは、3世紀中頃～後半もしくは4世紀前半～5世紀前半で、赤塚(2009)を参照すると、古墳時代前期から中期に相当する。

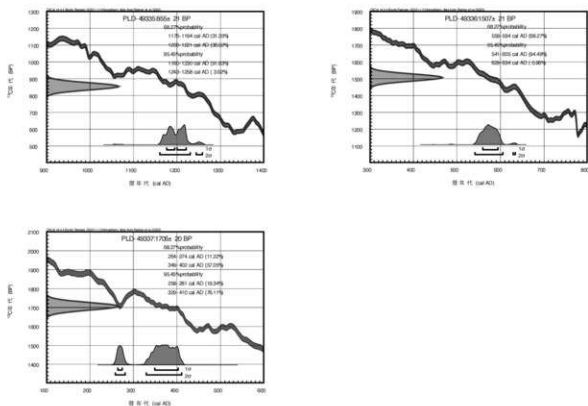
なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、試料の木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 (2009) 弥生後期から古墳中期 (八王子古宮式から宇田式期) の暦年代. 日本文化財科学会第 26 回大会実行委員会編「日本文化財科学会第 26 回大会研究発表要旨集」: 14-20, 日本文化財科学会.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757. doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)



第 49 図 暦年較正結果 (1)



第50図 暦年校正結果(2)

第3節 テフラ分析

株式会社 火山灰考古学研究所

(1) はじめに

北関東地方中部に位置する真岡市とその周辺には、男体、赤城、榛名、浅間など、北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方、さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、火砕物）が降灰している。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代、岩石記載的な特徴がテフラカタログ（たとえば町田・新井，2011）などに収録されており、考古遺跡などでテフラに関する調査分析を行って、年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、遺物包含層や遺構の年代などに関するデータを得られるようになっている。

真岡市下飯貝遺跡の発掘調査でも層位や年代が不明な遺構や土層が認められたことから、野外調査（地質調査）を実施して、土層やテフラ層の層序記載ならびに高純度での分析試料採取を行った。さらに、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析）を行って、指標テフラの検出同定を実施した。調査分析対象地点は、SF-36の第1～3地点、SD-40、SD-37、SD-37・SD-40重複地点、SI-31の中央部、東部、西壁の9地点である。

(2) 調査分析地点の土層層序

1) SF-36第1地点（第52図1）

調査区北壁で認められたSF-36のうち、採土場の可能性が考えられている第1地点の遺構埋土は、下位より黄色土ブロックを多く含む赤褐色スコリア混じり暗灰褐色土（層厚23cm、スコリアの最大径12mm）、炭

化物をわずかに含む赤褐色スコリア混じり暗灰褐色土（層厚 35cm, スコリアの最大径 5mm）、赤褐色スコリアや黄色軽石を含む色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚 12cm, スコリアの最大径 6mm, 軽石の最大径 11mm）からなる。その上位には表土があり、それは下位より灰褐色土（層厚 5cm）、灰色土（層厚 5cm）、赤褐色スコリアや黄色軽石を多く含む褐色土ブロック混じりのやや暗い灰褐色土（層厚 13cm, スコリアの最大径 11mm, 軽石の最大径 12mm）、しまった灰褐色土（層厚 14cm）、やや褐色をおびたしまった灰色土（層厚 8cm から構成されている。これらのうち、少なくとも最上部の 3層は、各土層の層相とそれらの連続から水田作土と考えられる。

2) SF-36 第2地点（第52図2）

調査区北部で認められた SF-36 の柱穴と推定されている第2地点の遺構の埋土は、下位より黄色土ブロックを多く含む赤褐色スコリア混じり暗灰褐色土（層厚 46cm）からなる。

3) SF-36 第3地点（第52図3）

調査区北壁で認められた溝状遺構の可能性のある第3地点における遺構埋土は、下位より黄色土ブロック混じり暗灰褐色土（層厚 13cm）、赤褐色スコリア混じり灰色土（層厚 15cm, スコリアの最大径 5mm）、赤褐色スコリアおよび黄色軽石を含む暗灰褐色土（層厚 36cm, スコリアの最大径 7mm, 軽石の最大径 8mm）からなる。

4) SD-37（第52図4）

SD-40 より上位にある SD-37 の埋土は、下位より灰色泥層（層厚 6cm）、垂円礫を含む灰色泥層（層厚 18cm, 礫の最大径 88mm）、暗灰色泥質土（層厚 9cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚 18cm）、黄色砂に富む灰褐色土（層厚 12cm）、赤褐色スコリア混じり灰褐色土（層厚 16cm, スコリアの最大径 4mm）からなる。

5) SD-40（第52図5）

13世紀初頭頃の溝状遺構と推定されている SD-40 の埋土は、下位より灰色泥層（層厚 3cm）、灰色泥層（層厚 4cm）、黄色土粒子に富む灰色泥層（層厚 7cm）、黄色軽石混じりで赤褐色スコリアも少し含む暗灰色泥質土（層厚 15cm, 軽石の最大径 10mm, スコリアの最大径 8mm）、赤褐色スコリア混じり暗灰色泥質土（層厚 10cm, スコリアの最大径 3mm）、灰色泥層（層厚 10cm）、垂円礫混じり暗灰色土（層厚 8cm, 礫の最大径 106mm）、炭化物をわずかに含む赤褐色スコリア混じり暗灰褐色土（層厚 19cm, スコリアの最大径 3mm）、赤褐色スコリア混じりで黄色土ブロックを含む暗灰褐色土（層厚 12cm, スコリアの最大径 3mm）からなる。

6) SD-37・SD-40 重複地点（第52図6）

本地点における SD-40 の埋土は、褐色スコリア混じりで黄色土粒子を多く含む暗灰色泥層（層厚 19cm, スコリアの最大径 3mm）からなる。また、上位の SD-37 の埋土は、下位より暗灰色泥層（層厚 16cm）、暗灰色泥質土（層厚 9cm）、かすかに成層した黄色砂混じり暗灰色泥層（層厚 4cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚 8cm）、黄灰色砂層（レンズ状、最大層厚 3cm）、暗灰褐色土（層厚 4cm）、ラミナが発達した灰色砂層（層厚 6cm）、暗灰褐色土（層厚 6cm）からなる。

7) SI-31 中央部 (第 52 図 7)

5 世紀後半の竪穴建物と推定されている SI-31 の中央部では、黄色軽石層 (層厚 3 cm 以上、軽石の最大径 7 mm) を切って掘り方がつくられており、赤橙色スコリアを含みややしまった暗灰褐色土 (層厚 5 cm、スコリアの最大径 3 mm、4 層) で床面が構成されている。ここでの床面の埋土は、下位より黄色軽石混じり暗灰褐色土 (層厚 15 cm、軽石の最大径 5 mm、2 層)、黒灰褐色土 (層厚 8 cm)、橙色スコリア混じり暗灰褐色土 (層厚 8 cm、スコリアの最大径 6 mm、以上 1 層) からなる。

8) SI-31 東部 (第 52 図 8)

SI-31 埋土断面東部での遺構埋土は、下位より黒色土ブロックや赤橙色スコリア混じり暗灰褐色土 (層厚 10 cm、スコリアの最大径 6 mm、3 層)、黄色軽石をわずかに含む暗灰褐色土 (層厚 10 cm、軽石の最大径 4 mm、2 層)、赤橙色スコリア混じり暗灰褐色土 (層厚 6 cm、スコリアの最大径 9 mm、1 層) からなる。

9) SI-31 西壁 (第 52 図 9)

SI-31 の西壁では建物跡の基盤の土層を観察できた。ここでは、下位より黄褐色土 (層厚 5 cm 以上) と成層したテフラ層 (層厚 9 cm) が認められた。成層したテフラ層は、下部の赤橙色スコリア層 (層厚 4 cm、スコリアの最大径 12 mm、石質岩片の最大径 2 mm) と、上部の黄色軽石層 (層厚 5 cm、軽石の最大径 11 mm、石質岩片の最大径 2 mm) からなる。下部と上部は、いずれも約 1.4 ~ 1.5 万年前に日光火山群男体火山で発生した噴火活動の産物で、順に男体今市スコリア層 (Nt-I, 原田, 1943, 山崎, 1957, 町田・新井, 2011 など) と、男体七本桜軽石層 (Nt-S, 原田, 1943, 山崎, 1957, 町田・新井, 2011 など) と呼ばれている。したがって、上述地点において肉眼で認められたスコリアと軽石の多くは、Nt-S や Nt-I に由来すると考えられる。

(3) テフラ分析 (テフラ検出分析)

1) 分析試料と分析方法

上述 9 地点の土層やテフラ層から採取された試料のうちの 44 点を対象に、含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするテフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

- ① 砂分の含有程度に応じて試料 5 ~ 8 g を電子天秤で秤量。
- ② 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- ③ 恒温乾燥器により 80℃ で恒温乾燥。
- ④ 実体顕微鏡下で観察。

2) 分析結果

① 検出されたテフラ粒子の特徴

テフラ検出分析の結果を第 18 表に示す。軽石やスコリアは検出されなかったものの、火山ガラスやテフラ由来の鉱物などがいずれの試料でも認められた。その量は少ないものも多様で、少なくとも次の 7 種類がある。

タイプ a : やや光沢をもつ淡褐色や褐色の軽石型や中間型の火山ガラスで、いわゆるゼリー状のもの。

タイプ b : 破片状や塊状の分厚い中間型や繊維束状軽石型の火山ガラスで、色調は淡灰、淡褐色、無色透明などである。

タイプ c : 黒色や黒褐色のスコリア型ガラス。

タイプd：良く発泡した灰白色のスポンジ状軽石型ガラス。

タイプe：白色の軽石やスポンジ状軽石型ガラスで、斑晶に角閃石や斜方輝石をもつ。

タイプf：淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラス。多産層準では斜方輝石や単斜輝石が目立つ。

タイプg：わずかに灰色をおびた白色のスポンジ状軽石型ガラス。光沢をもつものも認められる。

②各地点でのテフラ粒子の産状

SF-36 第1地点では、試料14～10にタイプdを除くタイプa～eがごくわずかに含まれている。試料8より上位ではタイプfが認められ、試料2にはほかにタイプgもごくわずかに含まれている。SF-36 第2地点で検出された火山ガラスはごくわずかであるものの、試料9～5にタイプbが、また試料3より上位でほかにタイプfが認められた。さらに、SF-36 第3地点では、最下位の試料13で、タイプbのほかにタイプdやタイプeが認められた。そして、試料3以上にタイプfが含まれている。

SD-40 埋土断面では、最下位の試料18にタイプfやタイプeが少量認められた。このうち、タイプfはより上位の試料からも連続的に検出された。上位のSD-37において、このタイプfは試料8に比較的多いものの、いずれの試料でも認めることができた。この傾向は、SD-37・SD-40 重複地点でも同様で、いずれの試料からもタイプfが検出された。

SI-31 中央部では、試料8および試料6でタイプd、試料4でタイプeがごくわずかに認められた。また、試料2からは、ほかにタイプfが比較的多く検出された。さらに、SI-31 東部の試料2では、タイプdがわずかに認められた。

(4) 考察

1) テフラ粒子の由来について

タイプaの火山ガラスは、岩相から約2.4～2.9万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 2011, 早田, 2019 など) に由来すると推定される。タイプbは、岩相から約2万年前の浅間大窪沢テフラ群 (As-Ok Group, 中沢ほか, 1984, 早田, 2019 など) や、約1.5～1.65万年前の浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 2011 など) で代表される浅間火山軽石流期 (荒牧, 1968) のテフラに由来する可能性が高い。タイプcは、岩相から Nt-I に由来すると思われる。

タイプdは、岩相から3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 坂口, 2010) と考えられる。また、タイプeについては、6世紀初頭の榛名ニツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など) や、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名ニツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など) の可能性が考えられる。テフラの分布と本遺跡の位置関係からは、前者の可能性が高い。

タイプfは、岩相から1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ (As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979) に由来すると考えられる。さらに、タイプgは、1783 (天明3) 年に浅間火山から噴出した浅間A軽石 (As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979) と推定される。

2) 指標テフラからみた遺構の層位と年代

SF-36 の第1地点、第2地点、第3地点のいずれにおいても、埋土の途中でAs-Bが検出され始める。これらのうち、第3地点の埋土の最下部からは、As-CやHr-FAの可能性のある火山ガラスが検出された。これら

のことから、SF-36の遺構群はいずれもAs-Bより下位で、とくに第3地点の遺構については、Hr-FAより上位の可能性が高い。

SD-40およびSD-37では、重複地点を含め、いずれの試料からもAs-Bが検出されたことから、これらの遺構はAs-Bより上位と考えられる。このことは、発掘調査の成果から推定されている遺構の年代（13世紀頃）と矛盾しない。また、SI-31では、貼床構成層（4層）と埋土の下部（3～2層）にAs-C、上部の1層下部にHr-FA、そして1層上部にAs-Bが混在している。貼床構成層（4層）にAs-C、埋土中にHr-FAが認められることから、本遺構の層位はAs-CとHr-FAの間と考えられる。このことは、発掘調査の成果から推定されている遺構の年代（5世紀後半）と整合的である。

（5）まとめ

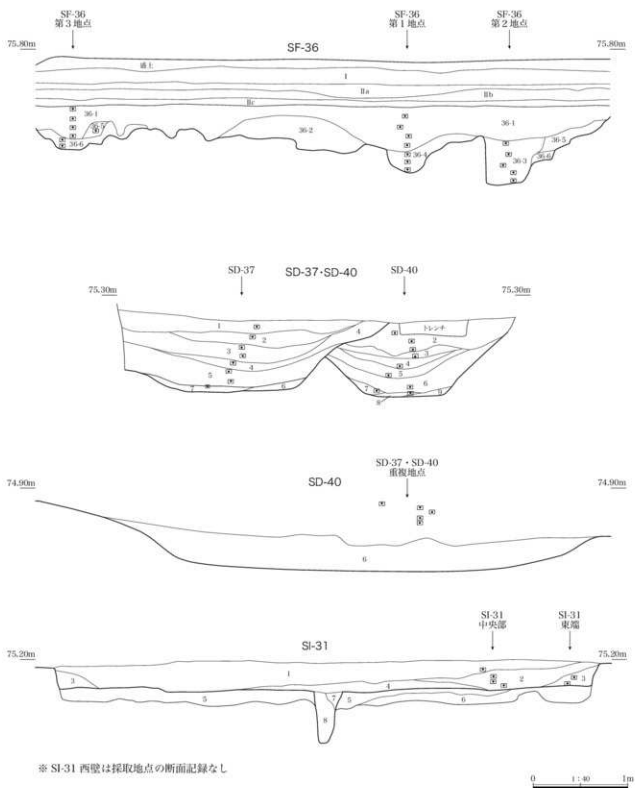
真岡市下飯貝遺跡において、野外調査（地質調査）とテフラ分析（テフラ検出分析）を実施した。その結果、下位より浅間板鼻褐色軽石群（Ag-BP Group, 約2.4～2.9万年前）、浅間大窪沢テフラ群（As-Ok Group, 約2万年前）および浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 約1.5～1.65万年前）で代表される浅間火山軽石流期のテフラ、男体今市スコリア・七本桜軽石（NT-I・S, 約1.5万年前）、浅間C軽石（As-C, 3世紀後半）、榛名ニツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）、浅間A軽石（As-A, 1783年）などに由来する可能性が高いテフラ粒子を検出できた。

指標テフラの顕著な濃集はさほど認められなかったものの、指標テフラの出現層準などをもとに検討を行った結果、SF-36の遺構群はHr-FAとAs-Bの間、SD-40およびSD-37はAs-Bより上位、そしてSI-31はAs-CとHr-FAの間に層位があると考えられる。これらの遺構のうち、とくに後二者については発掘調査成果をもとにした年代推定と整合的である。

文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79。
 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル，no.157，p.41-52。
 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」，p.136-149。
 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質。地研専報，no.14，p.1-45。
 原田正夫（1943）関東ロームの生成に就いて。東京帝国大学農学部土壤肥科学教室報告，3，p.1-140。
 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義。科学，46，p.339-347。
 町田 洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺（第2刷）」。東京大学出版会，336p。
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山。黒斑～前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70。
 坂口 一（1986）榛名ニツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119。
 坂口 一（2010）高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向—中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落との関係—。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」，p.17-22。
 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究，27，p.297-312。
 早田 勉（2019）北関東地方西部における旧石器時代の火山噴火と環境変化。令和元年度岩宿フォーラム講演要旨集，p.19-25。
 山崎正男（1957）男体火山末期の活動。火山，2，p.63-76。

第4章 理化学分析

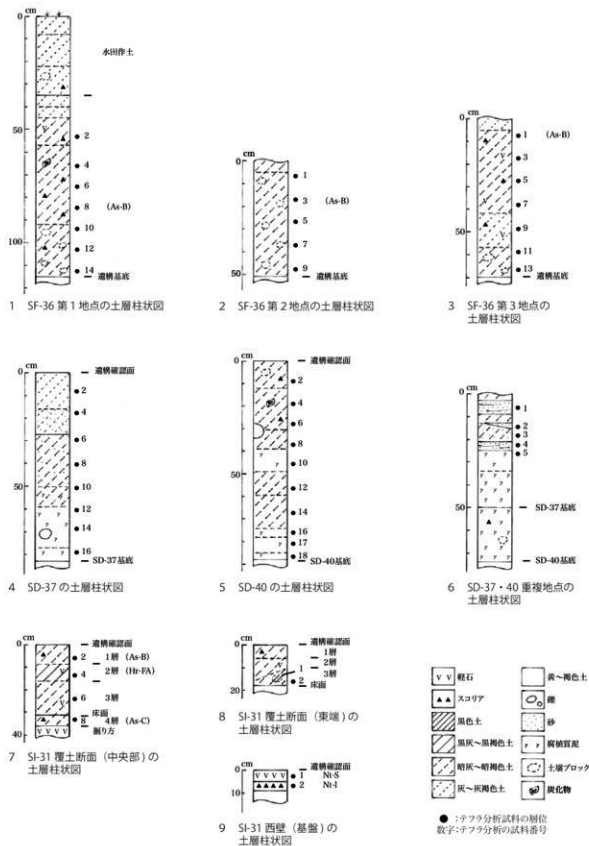


第51図 テフラ分析試料採取位置図

第18表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径	量	形態 色調	
SF-36 第1地点	2	**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, (灰) 白	opx, cpx, am		
	4	**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, am		
	6	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, 灰白	opx, cpx, am, (ol)		
	8	*	pm(sp, fb)	淡灰, 淡褐, 褐, 無色透明	opx, cpx, am, (ol)		
	10	(*)	pm(sp)	白	opx, cpx, am, (ol)		
	12	(*)	md, pm(sp)	淡灰, 灰褐, 無色透明	opx, cpx, am*, (ol)		
	14	(*)	sc	黒褐	opx, cpx, am, ol		
SF-36 第2地点	1	(*)	pm(sp)	淡灰, 白	opx, cpx, am		
	3	(*)	pm(sp), md	淡灰, 淡褐, 褐, 無色透明	opx, cpx, am*, (ol)		
	5	(*)	md	褐	opx, cpx, am		
	7	(*)	md	褐, 無色透明	opx, cpx, am		
	9	(*)	md	淡褐, 褐	opx, cpx, (am)		
SF-36 第3地点	1	*	pm(sp)	褐, 淡褐	opx, cpx, (am)		
	3	(*)	pm(sp), sc	褐, 黒	opx, cpx, (am)		
	5	(*)	md, pm(fb, sp)	淡褐, 無色透明, 白	opx, cpx, (am)		
	7	(*)	pm(sp)	白	opx, cpx, am*		
	9	(*)	md, pm(sp)	無色透明, 淡褐	opx, cpx, am		
	11				opx, cpx, am		
	13	*	pm(sp), md	白, 灰白, 無色透明	opx, cpx, am*		
SD-40	2	(*)	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, (am)		
	4	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, am, (ol)		
	6	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, am, (ol)		
	8	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, am, (ol)		
	10	*	pm(sp)	淡褐, 灰白	opx, cpx, (am)		
	12	(*)	pm(sp)	淡褐, 灰白	opx, cpx, (am)		
	14	*	pm(sp), md	淡灰, 褐	opx, cpx, (am)		
	16	(*)	pm(sp), md	淡灰, 褐	opx, cpx, (am)		
	18	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, (am)		
SD-37	2	(*)	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx, (am)		
	4	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, (am)		
	6	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, (am)		
	8	**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, am		
	10	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx		
	12	(*)	pm(sp)	淡褐, 褐	opx, cpx		
	14	(*)	pm(sp)	白, 淡褐, 褐	opx, cpx, am*		
16	*	pm(sp)	白, 淡灰	opx, cpx, (am)			
SD-37・40 重複地点	3	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx		
	5	(*)	pm(sp)	淡褐, 褐	opx, cpx		
SI-31 中央部	2	**	pm(sp), md	淡灰, 淡褐, 褐, 白, 灰白	opx, cpx, am, am*, ol		
	4	(*)	pm(sp)	白	opx, cpx, am, (ol)		
	6	(*)	pm(sp)	灰白	opx, cpx, am, (ol)		
	8	(*)	pm(sp)	灰白	opx, cpx, am, am*, ol		
SI-31 東部	1				opx, cpx, am, (ol)		
	2	(*)	pm(sp)	灰白	opx, cpx, am, (ol)		

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, 重鉱物は不透明鉱物以外,
bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型 ol: カンラン石, opx: 斜方輝石,
cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, am*: 火山ガラス付着角閃石, mc: 雲母, 重鉱物の ○: 量が少ないことを示す。



第 52 図 テフラ分析土層柱状図

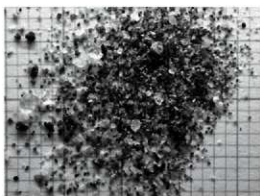


写真1 SF-36第1地点・試料2

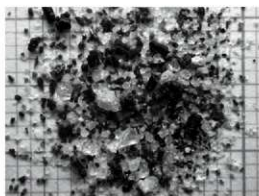


写真2 SF-36第3地点・試料13

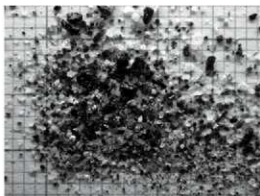


写真3 SI-31中央部・試料2

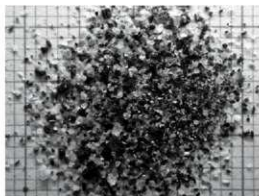


写真4 SI-31中央部・試料4

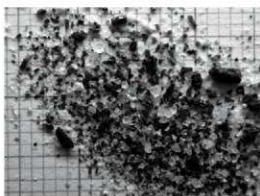


写真5 SI-31中央部・試料8

写真1：SF-36第1地点・試料2
写真2：SF-36第3地点・試料13
写真3：SI-31中央部・試料2
写真4：SI-31中央部・試料4
写真5：SI-31中央部・試料8

写真はいずれも落射光下で撮影。

第53図 下飯具遺跡のテフラ実体顕微鏡写真

第4節 花粉・珪藻分析

株式会社 火山灰考古学研究所

(1) はじめに

真岡市下飯貝遺跡において、奈良・平安時代の性格不明の土坑や中世の溝を対象に花粉分析と珪藻分析を実施して、当時の環境および植生の復原、さらに遺構の用途などに関する情報の収集を行った。

(2) 分析の特色と分析試料

花粉分析は、花粉層序によるゾーン解析で地層を区分し、ゾーン間比較によって植生や環境の変化を復原する方法で、第四紀学研究においてよく実施されている。おもに湖沼などの堆積物が対象となり、堆積盆単位など比較的広域な植生・環境の復原を行う方法として用いられる。遺跡調査に際しては、遺構内の堆積物など局地的でかつ時間軸の短い堆積物も対象となり、より現地性の高い植生・環境・農耕の復原もデータ比較の中で行える場合もある。さらに遺物包含層など、乾燥的な環境下の堆積物の分解性も環境の指標となる。

一方、珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物で、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面などで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息域を持っている。珪藻化石群集の組成は生息当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

下飯貝遺跡における分析対象試料は、野外調査の際にSF-36の第1～第3地点、SD-37、SD-40、そしてSD-37・SD-40重複地点の埋土から採取された7試料である。

(3) 花粉分析

1) 分析方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに次の手順で行った。

- ①試料から1 cm³を採量。
- ②0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎。
- ③水洗処理の後に0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去。
- ④25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置。
- ⑤水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- ⑥再び氷酢酸を加えて水洗処理。
- ⑦沈澱にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリン・ゼリーで封入してプレパラート作製。
- ⑧検鏡・計数。

検鏡は、生物顕微鏡(Nikon ECLIPSE Ci)によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(—)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、鳥倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、チール石炭酸フクシンで染色を施すことにより特徴がより鮮明になるため、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定している。なお、花粉分類では樹木花粉(AP)および非樹木花粉(NAP)となるが非樹木花粉(NAP)は草本花粉として示した。

2) 分析結果

① 検出された分類群

出現した分類群は、樹木花粉 15、樹木花粉と草本花粉を含むもの 3、草本花粉 22、シダ植物胞子 2 形態の計 42 分類群である。これらの学名と和名および粒数を第 19 表に示し、花粉数が 50 個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 54 図に示す。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した（第 56 図）。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。次に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、クマシテ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、イヌブナ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属—ムクノキ、トチノキ、ブドウ属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、カラマツソウ属、アブラナ科、フウロソウ属、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属—フサモ属、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

② 花粉群集の特徴

それぞれの地点における花粉構成と花粉組成の特徴を記載する。

1 SF-36 第 1 地点（試料 14）・第 2 地点（試料 9）・第 3 地点（試料 13）

第 1 地点（試料 14）では花粉はほとんど検出されなかった。草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、樹木・草本花粉のクワ科—イラクサ科などがわずかに出現する。第 2 地点（試料 9）では、密度がやや低いものの、樹木花粉が 22%、草本花粉が 53%、樹木・草本花粉が 16%、シダ植物胞子が 9% を占める。樹木花粉のクリ、樹木・草本花粉のクワ科—イラクサ科、草本花粉のヨモギ属、タンポポ亜科、イネ科（イネ属を含む）、タンポポ亜科、などが出現する。第 3 地点（試料 13）では密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されず、イネ科、ヨモギ属などがわずかに出現する。

2 SD-37 土層断面（試料 16）

密度がやや低いものの、樹木花粉が 13%、草本花粉が 60%、樹木・草本花粉が 3%、シダ植物胞子が 24% を占める。草本花粉のカヤツリグサ科の出現率が高く、ヨモギ属、イネ科が伴われる。他にアカザ科—ヒユ科、タンポポ亜科、アブラナ科、キク亜科、セリ亜科が低率に出現し、ソバ属が検出される。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属の出現率がやや高く、クリが伴われる。

3 SD-40 土層断面（試料 18）

密度はやや低いが、樹木花粉が 3%、草本花粉が 71%、樹木・草本花粉が 24%、シダ植物胞子が 2% を占める。

草本花粉ではアカザ科ーヒユ科の出現率が高く、ヨモギ属、イネ科（イネ属を含む）、カヤツリグサ科が伴われ、樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科の出現率も高い。

4 SD-37・40 重複地点（試料5・試料3）

花粉の組成、構成ともに極めて類似した出現傾向を示す。樹木花粉が9%、草本花粉が75%、樹木・草本花粉が2%、シダ植物胞子が14%を占める。草本花粉では、カヤツリグサ科、ヨモギ属、イネ科（イネ属を含む）の出現率が高く、タンポポ亜科が伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、クリが低率に出現する。

3) 花粉分析から推定される植生と環境

次にそれぞれの地点において、花粉群集の特徴から植生と環境の復原を行う。

① SF-36 第1地点（試料14）・第2地点（試料9）・第3地点（試料13）

SF-36 第1地点（試料14）では、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速く花粉が集積できなかったと考えられる。わずかに検出されたイネ科、カヤツリグサ科は多くは水生植物ではあるが、比較的乾燥にも耐えられる種もあり、乾燥を好むヨモギ属、クワ科ーイラクサ科の草本であるカナムグラ、カラムシなどと共生する。堆積地はこれらの草本が生育する陽当りのよい比較的乾燥した環境であったとみなされる。

SF-36 第2地点（試料9）では、陽当りのよい乾燥した環境を好むヨモギ属、同様な環境に生育するクワ科ーイラクサ科の草本であるカナムグラ、カラムシ、他にタンポポ亜科、アブラナ科、イネ科などが出現する。これらは人里植物ないし耕地雑草で、イネ属も出現し、アブラナ科には多くの栽培植物が含まれ、周辺に水田および畑の分布が示唆される。樹木花粉ではクリが出現し、比較的乾燥した環境を好む落葉樹で、果実は食用となり、木材は様々な用途に利用され、建築部材に適した有用植物であり、周囲に生育していたと考えられる。

SF-36 第3地点（試料13）では、密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥した堆積環境であったと考えられる。

② SD-37 土層断面（試料16）

水生植物の多く含むカヤツリグサ科、イネ科の出現率がやや高く、乾燥した環境を好む耕地雑草のヨモギ属、タンポポ亜科、アカザ科ーヒユ科、アブラナ科、キク亜科、セリ亜科が低率に出現し、ソバ属が検出されることから周辺でソバの畑作が行われたと考えられる。樹木花粉では、比較的乾燥した環境に生育する落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属、クリが出現し、近隣にナラ林の分布が示唆され、クリは構成要素であったと考えられる。

③ SD-40 土層断面（試料18）

分析対象となった土層の形成時には、陽当りのよい乾燥した環境を好むアカザ科ーヒユ科、ヨモギ属、同様な環境を好むクワ科ーイラクサ科の草本であるカナムグラ、カラムシなどの草本が繁茂する乾燥した環境であったとみなされ、やや湿潤などところにはイネ科、カヤツリグサ科が生育していた。樹木花粉は少なく、コナラ属コナラ亜属がやや遠方ないし孤立木として生育していたと推定される。

④ SD-37・40 重複地点（試料5・試料3）

水生植物の多いカヤツリグサ科とイネ属を含むイネ科の出現率が高く、周辺に水田が分布していたとみなされる。改変地や人為環境に多いヨモギ属、タンポポ亜科が伴われ、堆積地ないし水田の周囲にはこれらの草本が生育する陽当たりのよい比較的乾燥した環境であったと考えられ、土層形成時には比較的安定した堆積環境であったと推定される。

(4) 珪藻分析

1) 分析方法

珪藻の抽出と同定を次の手順で実施した。

- ①試料から1 cm³を採量。
- ②10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置。
- ③上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）。
- ④残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥。
- ⑤マウントメディアによって封入し、プレパラート作製。
- ⑥検鏡、計数。

検鏡は、生物顕微鏡（Nikon ECLIPSE Ci）によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、珪藻が少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

2) 分析結果

①検出された分類群

試料から出現した珪藻は貧塩性種（淡水生種）132分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。分析結果を第20表に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第55図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe（1974）、陸生珪藻は小杉（1986）、環境指標種群は水生種から水生種は小杉（1988）、そして淡水生種は安藤（1990）による記載に基づく。現生珪藻のCMB仮説と呼ばれる分類体系も用いられるが、科や属によってすべてを再分類できているわけではなく、混乱を避けるため従来の分類を用いた。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した（第57図）。次に、ダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthydium minutissimum, *Amphora copulata*, *Aulacoseira ambigua*, *Caloneis bacillum*, *Caloneis branderii*, *Caloneis lauta*, *Caloneis molaris*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella subaequalis*, *Cymbella tumida*, *Cymbella turgidula*, *Diploneis pseudovalis*, *Encyonema gracile*, *Encyonema silesiacum*, *Eunotia minor*, *Fragilaria capucina*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema acuminatum*, *Gomphonema brebissonii*, *Gomphonema clevei*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Nitzschia amphibia*, *Nitzschia palea*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia schoenfelderi*, *Pinnularia viridis*, *Rhopalodia gibberula*, *Tabellaria fenestrata-floculosa*

②珪藻群集の特徴

それぞれの地点において珪藻構成と珪藻組成の特徴を記載する。

- ・SF-36 第1地点(試料14)、第2地点(試料9)、第3地点(試料13)

いずれの地点でも、珪藻組成、構成ともに類似した出現傾向を示し、密度は低い。陸生珪藻が優占することで特徴付けられ、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*の出現率が高く、*Pinnularia borealis*が伴われる。第3地点(試料13)では、好流水性種で中～下流性河川種の *Cymbella turgidula* が低率に出現する。

- ・SD-37 土層断面(試料16)

真・好流水性種が22%、真・好止水性種が31%、流水不定性種が39%、陸生珪藻が8%を占める。流水不定性種の *Encyonema silesiacum* の出現率がやや高いものの、特に優占する種は認められず、好流水性種の *Gomphonema parvulum*、好止水性種の *Aulacoseira ambigua*、*Encyonema gracile*、流水不定性種で沼沢湿地付着生種の *Pinnularia viridis* などが多様に出現する。また、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia viridis* などは水田に多くみられる種である。

- ・SD-40 断面(試料18)

真・好流水性種が15%、真・好止水性種が19%、流水不定性種が26%、陸生珪藻が40%を占める。陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* の出現率がやや高く、好流水性種の *Gomphonema clevei*、*Gomphonema parvulum*、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、流水不定性種の *Gomphonema brebissonii* などが低率に出現する。

- ・SD-37・40 重複地点(試料5・試料3)

試料5および試料3の出現傾向は類似する。真・好流水性種が18～19%、真・好止水性種が25～27%、流水不定性種が50～48%、陸生珪藻が7～6%を占める。流水不定性種の *Encyonema silesiacum* の出現率がやや高く、*Rhopalodia gibberula* が伴われ、好流水性種で中～下流性河川種の *Cymbella turgidula*、好流水性種の *Gomphonema parvulum*、好止水性種の *Encyonema gracile*、沼沢湿地付着生種の *Pinnularia viridis*、*Cocconeis placentula*、*Cymbella subaequalis*、*Eunotia minor* が低率に出現する。*Cymbella turgidula*、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia viridis*、*Cocconeis placentula*、*Rhopalodia gibberula* は、水田指標種の性格を持つ種である。

③珪藻分析から推定される堆積環境

地点ごとに珪藻群集の特徴から環境の復原を行う。

- ・SF-36 第1地点(試料14)、第2地点(試料9)、第3地点(試料13)

いずれの試料でも珪藻密度が低く、陸生珪藻が優占し、出現率の高い *Navicula mutica* や、伴われる *Pinnularia borealis* は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い種で、*Hantzschia amphioxys* はそれに随伴する種である。これらのことから堆積地は、多少湿り気のある土壌表面などの常に大気にさらされた陸域の環境が示唆される。第3地点(試料13)で出現する *Cymbella turgidula* は、河川沿いの河岸段丘や後背湿地などに集中して出現する種で、時期的に流水域の影響を受ける環境が考えられる。

・SD-37 断面（試料16）

とくに優占する種は認められず、流水不定性種の *Encyonema silesiacum*、好流水性種の *Gomphonema parvulum*、好止水性種の *Aulacoseira ambigua*、*Encyonema gracile*、流水不定性種で沼沢湿地付着生種の *Pinnularia viridis* などが多様に出現し、水田の指標となる珪藻も含まれ、湛水と落水を繰り返す人為度の高い水環境が示唆され、水田に多く見られる *Gomphonema parvulum*、*Pinnularia viridis* などが出現し、水田の環境が含まれる。

・SD-40 断面（試料18）

陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* の占める割合がやや高く、湿った程度の土壌の環境が優占するが、好流水性種の *Gomphonema clevei*、*Gomphonema parvulum*、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、流水不定性種の *Gomphonema brebissonii* なども出現し、流水の影響のある沼沢地、止水性の滞水域など多様な環境が考えられ、水田域やその周辺の環境が反映されたと推定される。

・SD-37・40 重複地点（試料5・試料3）

流水不定性種の *Encyonema silesiacum* や、*Rhopalodia gibberula*、好流水性種で中～下流性河川種の *Cymbella turgidula*、好止水性種の *Encyonema gracile* など多様に出現し、河川からの流水の影響を受け滞水域を伴う沼沢地などの多様な環境が考えられ、この多様性と *Cymbella turgidula*、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia viridis*、*Coconeis placentula*、*Rhopalodia gibberula* などの水田の指標となる珪藻が出現することから、水田の環境が反映されたとみなされ、この溝は、水田に伴う溝の可能性が示唆される。

(5) まとめ

真岡市下飯貝遺跡の発掘調査で検出された遺構埋土を対象に、花粉分析と珪藻分析を行った。SF-36 遺構群では、花粉、珪藻ともに密度が低く、ヨモギ属、タンポポ科、草本のクワ科—イラクサ科などが乾燥を好む草本および陸生珪藻が多いことから、これらの生育する湿った程度の土壌の比較的乾燥した環境が推定される。また、周囲にはクリの二次林または孤立木が生育していたらしい。SD-37 および SD-40 では、イネ属、ソバ属、アブラナ科が耕地雑草を伴って出現することから、周囲が水田、畑作が行われていたことが推定される。流水性、止水性、流水不定性、陸生など多様な環境に生育する珪藻が認められることは、湛水と落水を繰り返す水環境を示唆しており、時期または季節によって引水される溝であったと考えられる。

文献

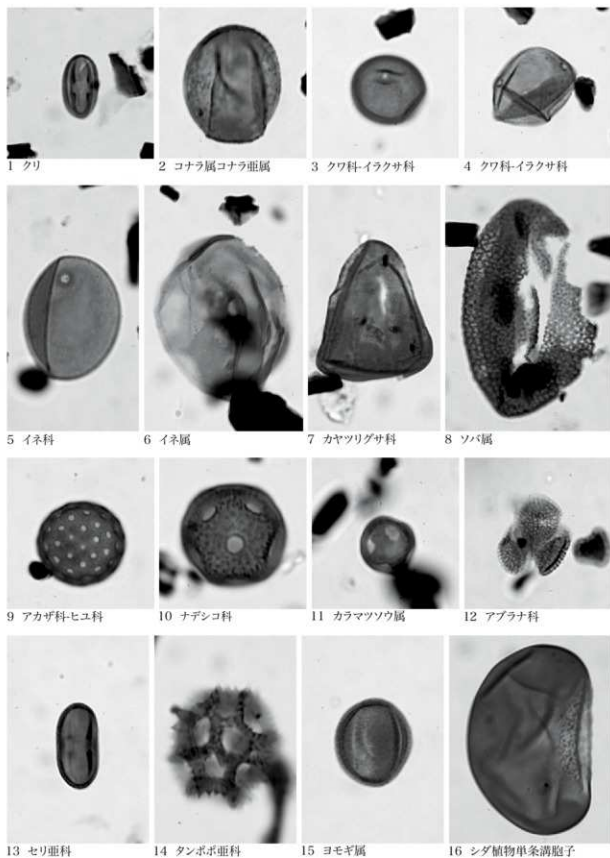
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用。東北地理, 42, p.73-88.
 Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. National Environmental Research Center, 333p.
 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—。植生史研究, no.1, 植生史研究会, p.29-44.
 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究, 27, p.1-20.
 中村 純 (1967) 「花粉分析」。古今書院, 232p.
 中村 純 (1974) イネ科花粉について。とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.
 中村 純 (1977) 稲作とイネ花粉。考古学と自然科学, no.10, p.21-30.
 中村 純 (1980) 日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録, 13, 91p.
 島倉三郎 (1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録, 5, 60p.

第19表 下飯貝遺跡における花粉分析結果

Taxa (分類群)		SF-36-1	SF-36-2	SF-36-3	SD-37	SD-40	SD-37・40 重複	
Scientific name (学名)	Japanese name (和名)	14	9	13	16	18	5	3
Arboreal pollen								
<i>Cryptomeria japonica</i>	榎木花粉				1			1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科							1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属					1	1	5
<i>Betula</i>	カマシラ属							1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	カマシラ属・アサダ			1	1			
<i>Castanea crenata</i>	クリ	2	20		15	3	10	10
<i>Castanopsis</i>	シイ属						3	
<i>Fagus</i>	ブナ属						1	1
<i>Fagus japonica</i>	イヌブナ				1			
<i>Quercus sulgifer</i> Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属				34	6	19	16
<i>Quercus sulgifer</i> Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属							1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エビキ属-ムクノキ						1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ				3			
<i>Vitis</i>	ブドウ属	1			5			1
Oleaceae	モクセイ科				1			
Arboreal・Nonarboreal pollen								
Moraceae-Urticaceae	タワ科-イラクサ科	4	15		12	84	8	8
Rosaceae	バラ科							1
Leguminosae	マメ科							1
Nonarboreal pollen								
草本花粉								
<i>Alisma</i>	サジメガカ属						1	1
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属				1			
Gramineae	イネ科	6	5	3	41	30	63	75
<i>Oryza</i>	イネ属		1			2	3	6
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	1		84	20	106	116
<i>Allium</i>	ネギ属				1			
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節				3	2		
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属				3			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		2		20	120	1	4
Caryophyllaceae	ナデシコ科				2	2		
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属		2		1	1		
Cruciferae	アブラナ科		4		14	11	5	2
<i>Geranium</i>	フウロソウ属				1			
<i>Impatiens</i>	ツリブネソウ属				2	1	1	1
<i>Hibiscus Myricophyllum</i>	アキノトウグサ属-フサモ属				11	1	5	5
Agrioidae	セリ薬科	1	1		2	1	1	
Labiatae	シソ科					3		
<i>Plantago</i>	オモハコ属				2			
Valerianaceae	オミナエシ科		2					
Lactucoidae	タンポポ薬科	1	6		19	6	27	18
Asteroidae	キク薬科		2		15	1	8	6
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	8	23	3	54	48	78	79
Arboreal pollen	榎木花粉	3	20	1	61	10	37	36
Arboreal・Nonarboreal pollen	榎木・草本花粉	4	15	0	12	84	8	10
Nonarboreal pollen	草本花粉	19	49	6	272	249	299	314
Total pollen	花粉総数	26	84	7	345	343	344	360
Pollens frequencies of 1cm ²								
		$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^3$
Unknown pollen	未特定花粉	0	1	1	11	7	7	13
Fern spore								
シダ植物胞子								
Monolate type spore	単葉溝胞子	1	6	1	107	8	50	53
Triolate type spore	三葉溝胞子		2		4	5	5	6
Total Fern spore	シダ植物胞子総数	1	8	1	111	8	55	59
Parasite eggs								
寄生虫卵		()	()	()	()	()	()	()
Stone cell								
石細胞		()	()	()	()	()	()	()
Digestion remains								
明らかな消化残渣		()	()	()	()	()	()	()
Charcoal・woods fragments								
炭酸化物・微細木片		(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体 (Charcoal・woods fragments)								
		(×10 ³)						
未分解遺体片		0.4	0.7	0.7	0.9		0.4	0.4
分解質遺体片		10.6	16.4	17.2	24.9	18.8	9.5	12.8
炭化遺体片 (微粒炭)		1.1	0.7		0.9		0.4	

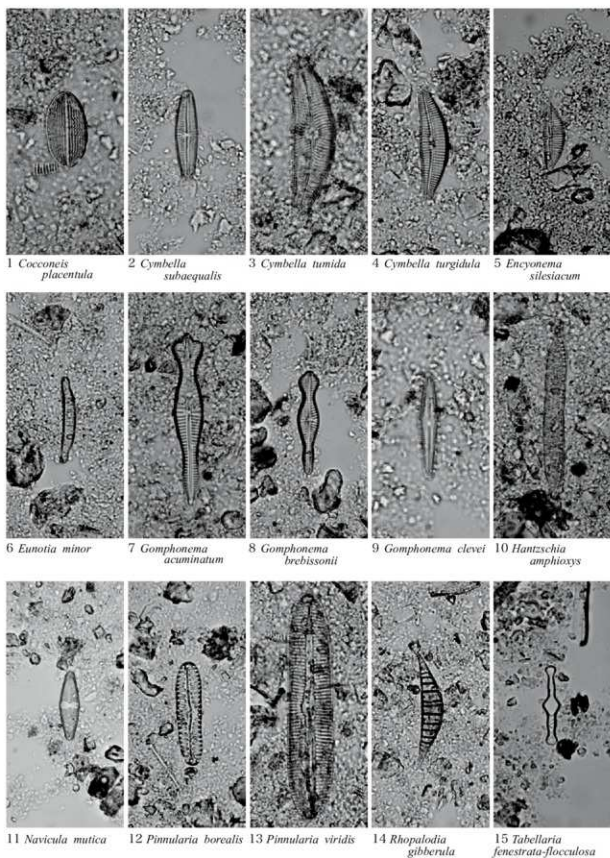
第20表 下飯貝遺跡における珪藻分析結果

分類群	SP	SP	SP	SP	SP	SP37+40 合計	分類群	SP	SP	SP	SP	SP	SP	SP37+40 合計
	30-1	30-2	30-3	37	40			30-1	30-2	30-3	40	40		
<i>Achnanthes inflata</i>			2		1		<i>Hippodonta capitata</i>							1
<i>Achnanthes laevcolata</i>		1	1	3	1	4	<i>Leucicola hungarica</i>	2	7	1		2	1	
<i>Achnanthebidium minutissimum</i>	2		1	2	14	3	<i>Nastucula bacillum</i>						1	
<i>Actinella brasiliensis</i>				2			<i>Nastucula clementoides</i>		1					
<i>Amphora cyclopsa</i>	1	1		2	1	2	<i>Nastucula colvini</i>							
<i>Amphora montana</i>					12		<i>Nastucula costata</i>		1	1		6	1	
<i>Aulacoseira ambigua</i>	2			14	1	9	<i>Nastucula cryptophylla</i>				1			
<i>Aulacoseira muzzanensis</i>				1			<i>Nastucula cryptotenella</i>	1				1		
<i>Aulacoseira</i> spp.					1	2	<i>Nastucula cuspidata</i>							
<i>Aulacoseira valida</i>				1			<i>Nastucula eglonensis</i>	3	3		4	1	2	2
<i>Bacillaria paradoxa</i>			1				<i>Nastucula kotschyi</i>							
<i>Brachysetra brevisporii</i>				1		3	<i>Nastucula laevissima</i>	1	1			1	1	4
<i>Gabonella bacillum</i>	3	1	2	5	2	2	<i>Nastucula mutica</i>	103	229	132	7	31	3	4
<i>Gabonella brandii</i>	7	6	6	2	4	1	<i>Nastucula placenta</i> v. <i>obovata</i>				3			1
<i>Gabonella laeta</i>	1	5	1	1	1	5	<i>Nastucula radiosa</i>					5	1	
<i>Gabonella molaris</i>	5	3	2	1	10	8	<i>Nastucula</i> spp.	1			2	3	2	
<i>Gabonella silicula</i>			3	2	5		<i>Nastucula viridula</i>				1			
<i>Gocconeis ditriculus</i>	1	4	3	1	3	1	<i>Netidium affine</i>	1	1					
<i>Gocconeis placenticula</i>	1	1	2	9	5	7	<i>Netidium alpinum</i>	2			1	2	3	
<i>Cyclotella bodanica radiosa</i>			2	3	1		<i>Netidium ampliatum</i>	5	1		1	4	1	
<i>Cyclotella meneghiniana</i>				1			<i>Netidium bovalatum</i>	1	2	1	1			
<i>Cymbella aspera</i>				1		1	<i>Nitzschia amphibia</i>	11	3	2	1	5	6	5
<i>Cymbella cuspidata</i>	1			1		1	<i>Nitzschia nama</i>	1	1	1		1		
<i>Cymbella</i> spp.						4	<i>Nitzschia palea</i>	4	4	2		7	1	
<i>Cymbella subaequalis</i>	2		6	1	10	7	<i>Nitzschia parvulaeoides</i>		3					
<i>Cymbella tumida</i>	1		4	1	6	6	<i>Nitzschia</i> spp.				1			
<i>Cymbella turgidula</i>	4	1	29	6	40	38	<i>Orthoseira roseana</i>		1					
<i>Cymbopelta rusciculiformis</i>	1	1		3	3	1	<i>Planularia acropora</i>				4	3	5	4
<i>Diadesmis confusivaca</i>	3		2				<i>Planularia arstuarii</i>	1		1	2	2	1	3
<i>Diploneis elliptica</i>	1		3	2	3	2	<i>Planularia appendiculata</i>				1			
<i>Diploneis lineata</i>				1	1	1	<i>Planularia bovalis</i>	23	15	19	5	3	1	4
<i>Diploneis ovalis</i>				1	1	1	<i>Planularia braunii</i>	2			1			1
<i>Diploneis pseudovalis</i>	4	3	1	12	10	11	<i>Planularia divergens</i>				3		1	2
<i>Diploneis yatsukensis</i>				2	2		<i>Planularia gibba</i>	1						1
<i>Eocymena gracile</i>	8	1	3	15	8	30	<i>Planularia hemiptera</i>							1
<i>Eocymena silicicum</i>	17	2	6	40	5	76	<i>Planularia interrupta</i>				1			
<i>Epithemia adusta</i>					1	1	<i>Planularia isabela</i>				2	1	3	
<i>Epithemia turgidula</i>			1				<i>Planularia microstaurum</i>	2	1	2	9	3	5	2
<i>Eurotia arcus</i>					1	1	<i>Planularia nodosa</i>			1	1			3
<i>Eurotia bilunaris</i>			2	1			<i>Planularia obscura</i>	1	1					
<i>Eurotia minor</i>	3	1	2	12	10	18	<i>Planularia schoenfelderi</i>	5	3	4		4	2	2
<i>Eurotia pulchra rhomboides</i>	1	1	3	5	1	1	<i>Planularia</i> spp.				2	2	1	2
<i>Eurotia pectinatis</i>		1	3	1			<i>Planularia stomatophora</i>				1	1	3	
<i>Eurotia praerupta</i>	3	2	3	4	5		<i>Planularia striata</i>	3			18	5	13	12
<i>Eurotia serrata</i>				1	1	1	<i>Pseudostaurastria breviseriata</i>				2			1
<i>Eurotia</i> spp.				1	1	1	<i>Rimeria sinuata</i>	1			2		1	
<i>Fragilaria capricosa</i>			1	8	3	7	<i>Rhizosolenia abbreviata</i>							
<i>Fragilaria edgisi</i>					1	1	<i>Rhopalodia gibba</i>				3	2	2	
<i>Fragilaria paradoxa</i>	1						<i>Rhopalodia gibberula</i>	7	4	6	10		23	25
<i>Fragilaria tenera</i>				3		1	<i>Sellopsira pupula</i>	1						
<i>Fragilaria vaucheriae-Geratoniensis vaucheriae</i>				3			<i>Stauroneis acuta</i>				1		1	
<i>Fragilaria virescens</i>				1			<i>Stauroneis anceps</i>			2		1	1	2
<i>Frustula vulgaris</i>	1	5	3	2	5	8	<i>Stauroneis javanica</i>				1		1	
<i>Gomphonema acuminatum</i>		1		10	6	2	<i>Stauroneis laurburgiana</i>					1	1	2
<i>Gomphonema angustatum</i>			1	2	1	1	<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	2					3	1
<i>Gomphonema angustum</i>				1	1	1	<i>Stauroneis smithii</i>				1		1	2
<i>Gomphonema asperum</i>				4	14	6	<i>Stauroneis costriensis v. virens</i>							
<i>Gomphonema brevisporii</i>				10	20	6	<i>Sarivella angusta</i>				1			1
<i>Gomphonema clevei</i>	1	1	1	5	2		<i>Sarivella ovata</i>				1			1
<i>Gomphonema gracile</i>				2	1	5	<i>Sarivella tenera</i>					1		
<i>Gomphonema grovei</i>	1		2	1			<i>Synedra ulna</i>	2			4	1	1	3
<i>Gomphonema nitidum</i>							<i>Tabellaria fenestrata fluctuosa</i>	2			6	13	7	7
<i>Gomphonema parvulum</i>	9	4		20	15	19								
<i>Gomphonema pseudolagur</i>				1		1								
<i>Gomphonema pseudoheterophorum</i>			2	1	3	1								
<i>Gomphonema punctatum</i>	1		8	1	3	1								
<i>Gomphonema</i> spp.	1		1	3	1	4								
<i>Gomphonema truncatum</i>			4	2	1									
<i>Gyrodinium</i> spp.				1	1	2								
<i>Hantzschia amphioxys</i>	39	51	78	8	49	2								



第56図 下飯具遺跡の花粉生物顕微鏡写真

— 10µm



第 57 図 下飯貝遺跡の珪藻生物顕微鏡写真

— 10 μ m

第5節 炭化材樹種同定

黒沼保子（ハレオ・ラボ）

(1) はじめに

真岡市の下飯貝遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（第4章第2節参照）。

(2) 試料と方法

試料は、南区から4点、北区から12点の、合計16点である。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

(3) 結果

樹種同定の結果、針葉樹のモミ属とイヌガヤ、広葉樹のクリとコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、コナラ属クスギ節（以下、クスギ節）、コナラ属、ハンノキ属ハンノキ亜属（以下、ハンノキ亜属）の7分類群が確認された。なお、試料No.14は試料が微細で状態が悪く、広葉樹までの同定となった。結果の一覧を第21表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を第58・59図に示す。

1) モミ属 *Abies* マツ科 第58図 1a-1c (No.6)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織で数珠状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約5種がある。材は軽軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

2) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch var. *harringtonia* イヌガヤ科 第58図 2a-2c (No.9)

第21表 樹種同定結果一覧

No.	調査区	出土地点	層位・位置	遺物 No.	樹種	形状	残存径	年代測定番号
1	南区	-	-	-	モミ属	不明	0.3 × 0.5cm	
2	南区	A区IV層	-	-	クリ	不明	0.5 × 0.5cm	PLD-49329
3	南区	D区 SX-42	1層	-	コナラ属クスギ節	不明	0.5 × 0.5cm	PLD-49330
4	南区	B区 SX-42	上層	-	クリ?	不明	0.3 × 0.3cm	PLD-49331
5	北区東端	-	Ⅲ・Ⅳ層	-	コナラ属 (未炭化)	不明	1.0 × 1.0cm	
6	北区	SB-9 P6	覆土上層	-	モミ属	不明	2.0 × 0.5cm	PLD-49332
7	北区	SI-2	カマド内	-	クリ	不明	0.5 × 0.3cm	PLD-49333
8	北区	SI-3	床面	-	ハンノキ属ハンノキ亜属	不明	2.0 × 1.0cm	
9	北区	SI-3	カマド内	-	イヌガヤ	不明	2.3 × 1.5cm	
10	北区	SI-31	南東床直	-	コナラ属クスギ節	不明	2.0 × 1.0cm	
11	北区	SI-31	北西	-	コナラ属クスギ節	不明	1.5 × 1.5cm	
12	北区	SI-31	貯蔵穴	-	コナラ属クスギ節	不明	1.0 × 1.0cm	
13	北区	SD-37	東端 2層上面	-	コナラ属アカガシ亜属	不明	1.5 × 1.5cm	PLD-49334
14	北区	SD-40	2層	-	広葉樹	不明	0.1 × 0.1cm	PLD-49335
15	北区	SI-41	2層	-	コナラ属クスギ節	不明	0.2 × 0.1cm	PLD-49336
16	北区	SI-31	-	No.8	コナラ属クスギ節	不明	0.5 × 0.5cm	PLD-49337

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は非常に狭い。樹脂細胞は早材・晩材を通じて均等に分布する。放射組織は単列で2～5細胞高、分野壁孔はトウヒ型で、1分野に1～2個存在する。仮道管にらせん肥厚がある。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する常緑の低木または小高木である。材は堅硬および緻密である。

3) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 第58図 3a-3c (No.7)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

4) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第59図 4a-4c (No.13)

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は、木材組織からの識別が困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強韌で、水湿に強い。

5) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 第59図 5a-5c (No.10)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が、単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強韌で、加工困難である。

6) コナラ属 *Quercus* ブナ科

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では径を減じた小道管が配列する環孔材である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。状態が悪く、木材組織がつぶれていたため、コナラ属までの同定に留めた。

7) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科 第59図 6a-6c (No.8)

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は10～20段階程度の階段状である。放射組織は単列同性で、集合放射組織が存在する。

ハンノキ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ハンノキやヤマハンノキなど7種がある。材は全般に硬さおよび重さが中庸で、加工は容易である。

8) 広葉樹 Broadleaf tree

道管と放射組織を有する広葉樹である。試料が微細で、横断面の道管配列が確認できなかったため、広葉樹までの同定となった。

(4) 考察

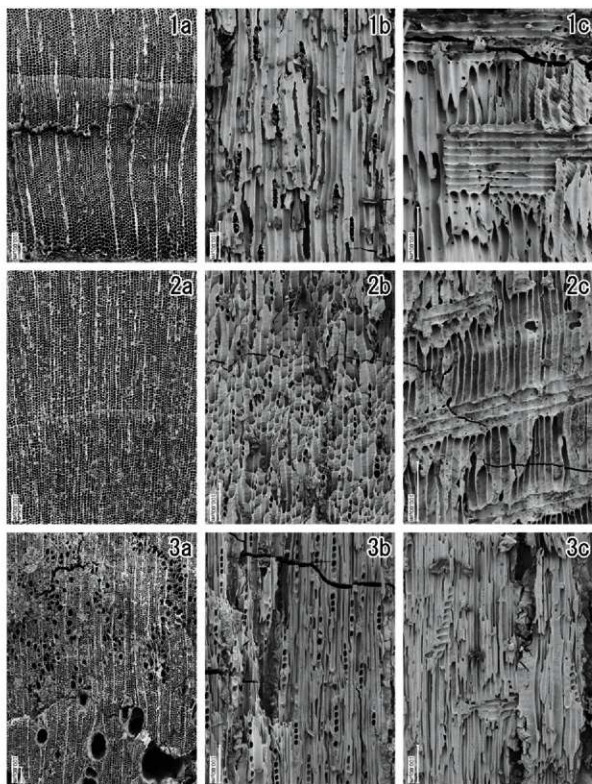
南区では、試料No.1がモミ属、A区IV層の試料No.2がクリ、D区SX-42の試料No.3がクヌギ節であった。B区SX-42の試料No.4はクリ?であった。北区では、東端のIII・IV層の試料No.5がコナラ属、SB-9のP6の試料No.6がモミ属、SI-2カマド内の試料No.7がクリ、SI-3床面の試料No.8がハンノキ属、SI-3カ

マド内の試料 No.9 がイヌガヤ、SI-31 の試料 No.10 ～ 12 は 3 点ともクスギ節、SD-37 東端の 2 層上面の試料 No.13 がアカガシ亜属、SD-40 の試料 No.14 が広葉樹、SI-41 と SD-31 の試料 No.15、16 がクスギ節であった。

全体ではクスギ節が 6 点で最も多く、その他はモミ属とクリ（クリ？を含む）が各 2 点、イヌガヤとアカガシ亜属、ハンノキ亜属、コナラ属、分類群不明の広葉樹が各 1 点であった。クリとアカガシ亜属、クスギ節の材は重硬で、ハンノキ亜属の材は硬さ中庸である。また、モミ属の材は軽軟で、イヌガヤの材は硬く緻密である。いずれも温帯から暖帯に分布する樹木であり、遺跡周辺に生育していた樹木が伐採利用されたと推測される。

参考文献

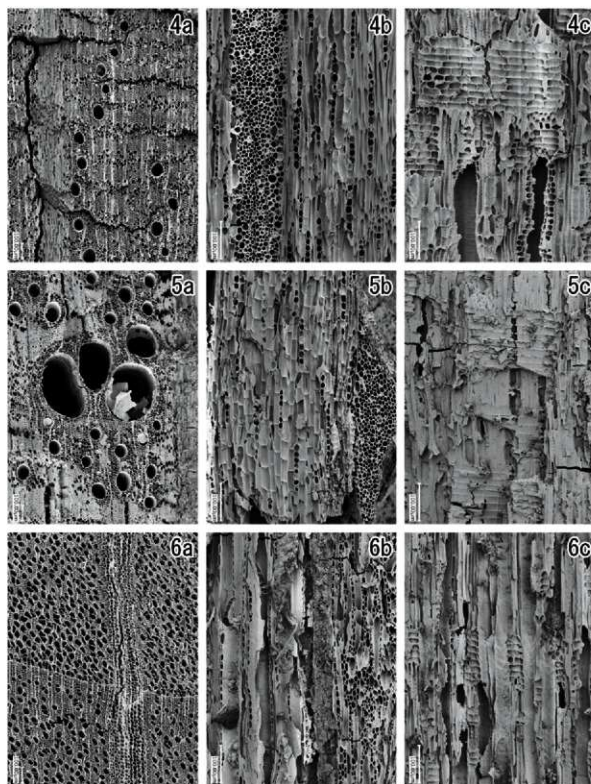
- 平井信二（1996）木の大自然。394p。朝倉書店。
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌。238p。海青社。



1a-1c, モミ属 (No.6) 2a-2c, イヌガヤ (No.9) 3a-3c, クリ (No.7)

a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面

第 58 図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (1)



4a-4c, コナラ属アカガシ亜属 (No.13) 5a-5c, コナラ属クヌギ節 (No.10) 6a-6c, ハノノキ属ハンノキ亜属 (No.8)
a:横断面, b:接線断面, c:放射断面

第 59 図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (2)

第6節 石製紡錘車の石材同定

藤根 久・竹原弘展（バレオ・ラボ）

(1) はじめに

真岡市京泉地内に所在する下飯貝遺跡から出土した紡錘車について、石材を検討した。

(2) 試料と方法

試料は、紡錘車1点である（第22表）。分析は、実体顕微鏡観察、蛍光X線分析、比重測定を行った。

第22表 石製品とその詳細

分析No.	製品名	調査区	遺構	遺物No.	岩石の特徴	重量(g)	比重	石材名
1	紡錘車	MO-S1北区	SI-2	No.17	白色・浅褐色・黒色等の縞状、やや顆質、不均質	39.31	2.78	蛇紋岩

実体顕微鏡観察は、色調や構造的な特徴について観察・記載した。

蛍光X線分析は、エネルギー分散型蛍光X線分析計 XGT-9000（株式会社堀場製作所製）を使用した。分析装置の仕様は、X線管の最大電圧50kV、ロジウム（Rh）管球、SDD検出器である。

試料は、平坦面を試料台上に両面テープで固定した。初めに、全体について元素マッピング分析を行った後、代表的な部分の点分析を行った。点分析は、X線100 μ mチューブ、X線管が電圧50kV、管電流1000 μ A、測定時間300秒間、代表的な部分5ヶ所について点分析を行った。定量計算は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）により行った。

定量元素は、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化ケイ素（SiO₂）、酸化リン（P₂O₅）、酸化カリウム（K₂O）、酸化カルシウム（CaO）、酸化チタン（TiO₂）、酸化マンガン（Mn₂O₃）、酸化鉄（Fe₂O₃）、酸化銅（CuO）、酸化亜鉛（ZnO）の12元素である。

比重測定は、電子天秤（株式会社エー・アンド・デイ製 GR-60 に同比重測定キット AD-1653 を使用）で空気中重量と水中重量を測定し、比重を算出した。

(3) 結果および考察

以下に、実体顕微鏡による特徴と分析結果について述べる。

[紡錘車（分析 No.1）]

紡錘車は、白色・浅褐色・黒色等からなる縞状構造を示し、やや顆質の不均質な岩石である。比重は、2.78であった（第22表）。

この紡錘車の石材は、質感や縞状構造において、蛇紋岩の特徴と似ている。

元素マッピング分析では、いずれの元素においても不均質な分布を示し、ケイ素（Si）やカリウム（K）あるいはカルシウム（Ca）などにおいて偏在傾向が強い（第60図1～6）。代表的な部分の点分析では、黒色や灰色では酸化マグネシウム（MgO）が30%程度含まれていた（第23表）。

蛇紋岩は、主に蛇紋石を主成分とする岩石で、一般にかんらん岩が熱水変質作用によって形成されたと考えられている（鈴木、2013）。蛇紋石は、化学式 $2\text{Mg}_3\text{Si}_2\text{O}_5(\text{OH})_4$ で示され（黒田・諏訪、1989）、マグネシウム（Mg）を特徴的に多く含む。なお、蛇紋岩の主成分の蛇紋石の比重は、2.4～2.8である（牧野、1998）。

日本において、蛇紋岩は、北海道の神居古潭帯、岩手県の宮守・早池峰帯、新潟県の上越帯、岐阜県などの飛騨外縁帯、中国地方の長門・蓮華帯、中央構造線沿いの黒瀬川帯などに分布する（磯崎ほか，2010）。

この蛇紋岩製の紡錘車は、他遺跡においても同様の石材が使用されていることが多く、流通品と考えられる。

第23表 主な高濃度部分の点分析結果（単位：重量%）

点No.	注目元素(色)	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Mn ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	ZnO	total
1	Ca 青緑色	0.37	22.94	1.08	56.82	0.01	0.08	11.38	0.08	0.14	6.96	0.13	0.00	100.00
2	Ca 青色	0.22	23.35	1.07	55.99	0.10	0.00	10.60	2.15	0.28	6.14	0.08	0.01	100.00
3	Mg 灰色	0.18	30.23	15.10	39.52	0.02	0.06	0.24	0.03	0.40	14.06	0.16	0.01	100.00
4	Fe 栗色	0.57	15.84	1.64	26.70	0.02	0.09	0.37	29.36	2.27	23.06	0.09	0.01	100.00
5	Al 黒灰色	0.65	29.66	14.23	39.00	0.03	0.20	0.27	0.05	0.61	15.12	0.14	0.06	100.00
	最小値	0.18	15.84	1.07	26.70	0.01	0.00	0.24	0.03	0.14	6.14	0.08	0.00	
	最大値	0.65	30.23	15.10	56.82	0.10	0.20	11.38	29.36	2.27	23.06	0.16	0.06	

引用文献

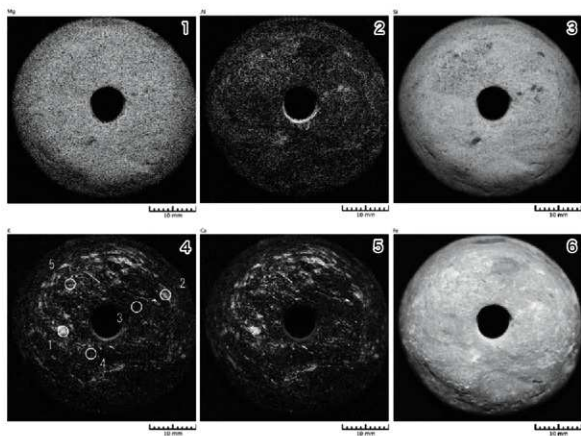
磯崎行雄・丸山茂徳・青木一勝・中間隆児・宮下 敦・大藤 茂（2010）日本列島の地体構造区区分再訪—太平洋型（都城型）

造山帯構成单元および境界の分類・定義一，地学雑誌，999-1053。

黒田吉益・瀧訪兼位（1989）偏光顕微鏡と岩石鉱物〔第2版〕，共立出版，343p

牧野和孝（1998）鉱物資源百科辞典，1390p，日刊工業新聞社。

鈴木淑夫（2013）岩石学辞典，877p，朝倉書店。



1. マグネシウム (Mg) 2. アルミニウム (Al) 3. ケイ素 (Si)

4. カリウム (K) 5. カルシウム (Ca) 6. 鉄 (Fe)

第60図 紡錘車の主な元素マッピング図（カリウム(K)の数字：点分析No.）

第7節 銭貨の蛍光X線分析

竹原弘展（ハレオ・ラボ）

（1）はじめに

真岡市京泉に所在する下飯貝遺跡より出土した中世の銭貨について、蛍光X線分析を行い、その材質を検討した。

（2）試料と方法

分析対象は、SD-37より出土した銭貨2点である（第24表、第61図）。分析No.1は唐国通宝、分析No.2は元豊通宝である。2～3mm程度の範囲を精密グラインダーを使用して錆を削り取り、分析箇所とした。分析位置を第61図に示す。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 μ Aのロジウム（Rh）ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。測定条件は、管電圧50kV、一次フィルタ・測定時間（s）の組み合わせがPb測定用・1000s、Cd測定用・1700sの2条件、管電流自動設定、照射径1mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、MBH Analytical社の32X LB14（batch A）を用いて補正したファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

蛍光X線分析は、表面分析であり、均一とは限らない金属製品の正確な組成比を必ずしも示しているとはいえないが、おおよその組成、含まれている微量元素を知る上では非常に有効な手法である。

（3）結果

第24表に、FP法による半定量分析結果を示す。

[分析No.1 唐国通宝]

銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）が主に検出され、Cu-Sn-Pb系の銅合金、いわゆる青銅製であった。ほかに、鉄（Fe）、ニッケル（Ni）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）が微量に検出された。

[分析No.2 元豊通宝]

銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）が主に検出され、Cu-Sn-Pb系の青銅製であった。ほかに、鉄（Fe）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）が微量に検出された。

（4）おわりに

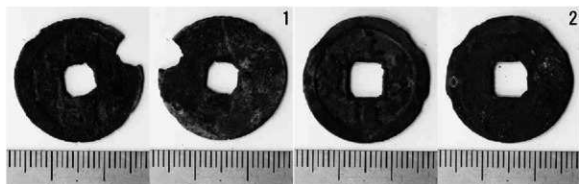
下飯貝遺跡より出土した銭貨2点の材質を分析した結果、唐国通宝、元豊通宝のいずれもCu-Sn-Pb系の青銅製であった。それ以外の不純物は少なく、ほぼ銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）からなる化学組成であった。

参考文献

- 中井 泉編（2005）蛍光X線分析の実際。242p。朝倉書店。
西本右子・佐々木稔（2002）公鑄銭・模鑄銭の化学分析。ふんせき、10、585-586。

第24 分析対象一覧および半定量分析結果 (mass%)

分析No.	種類	初鑄年	出土位置	Cu	Sn	Pb	Fe	Ni	Ag	Sb
1	唐国通宝	南唐 959年	SD-37	63.92	14.94	20.81	0.19	0.04	0.03	0.07
2	元豊通宝	北宋 1078年		58.98	12.00	28.78	0.14	—	0.07	0.04



第61図 分析対象遺物と測定位置 (右上数字は分析No.)

第5章 総括

第1節 下飯貝遺跡および周辺における時期的変遷の検討 (第62～65図・第25表)

下飯貝遺跡は、五行川左岸の台地上に形成された集落遺跡である。出土遺物から、弥生時代後期にまでさかのぼることが判明したが、主体となるのは古墳時代中期から奈良時代後期までの竪穴建物、平安時代前期の掘立柱建物・道路状遺構、奈良時代から平安時代前期の土器集積遺構、中世の溝である。遺物は、奈良～平安時代の土師器・須恵器を主体に、古墳時代の土師器・須恵器、中世の常滑・瀬戸・瀬美窯産陶磁器、中国産陶磁器のほか製塩土器、墨書土器、鉄滓、羽口、漆附着土器などが出土している。また、須恵器に関しては益子窯跡群のほか三鑫山麓窯跡群、常陸産、上野産、東海産の製品が出土している。

本遺跡の時期は出土した土器の年代や遺構変遷の画期から、大きく6時期に区分できる。ここでは、各時期の土器と遺構の変遷を検討してみたい。なお、須恵器の田辺編年(田辺1966・1981)および飛鳥編年(西1978)との対応を示す。

I期(弥生時代後期～古墳時代前期)

遺構は確認されていないものの、SD-37 東部から二軒屋式と考えられる弥生時代後期の壺1点、南区C区SX-42・C区IV層から古墳時代前期のS字状口縁台付甕が、出土している。明確な遺構は確認できないが、本遺跡周辺に当該期の集落の存在を示唆するものとして注目される。

古墳時代前期のS字状口縁台付甕(以下、S字甕)は、東海地方西部を起源とし、伝播ルートについては、東海地方から直接持ち込まれたのではなく群馬・埼玉県北部や久慈川流域からの二次的波及であったと考えられている。真岡市周辺では五行川流域の鶴田A遺跡、峰高前遺跡、谷近台遺跡、中峯遺跡、吹上遺跡群、熊倉遺跡、江川流域の拠点集落である亀山北遺跡、伊勢崎II遺跡、小貝川流域の市ノ塚遺跡で出土し、栃木県内でもS字甕が卓越する地域である。また、亀山北遺跡や市ノ塚遺跡は集落規模が大きく、亀山北遺跡ではS字甕、くの字甕、有段口縁壺、高坏、器台、市ノ塚遺跡ではS字甕、くの字甕、畿内系の有段口縁壺、東海系のパレス壺、谷近台遺跡でもS字甕、くの字甕、二重口縁壺、高坏、器台などの外来系土器が出土している。このようなあり方から、五行川や小貝川流域における低地開発や生業は、現在確認されているかぎりでは、亀山北遺跡や谷近台遺跡、市ノ塚遺跡を中心におこなわれたと考えられる。

II期(古墳時代中期)TK216～208併行

本遺跡において、台地上に集落が形成される段階でSI-31が指標となる。本遺跡周辺では古墳時代中期の墳墓は確認されていないが、当該期の拠点集落とみられる市ノ塚遺跡は集落規模が大きく、有力者の墳墓が確認されている。また、遺跡の立地は前期に続いて低地を臨む台地縁辺に形成される傾向にあり、五行川右岸の谷中遺跡、蟹が入遺跡など五行川流域の西根台地が遺跡分布の中心となる。古墳時代中期になると前期に比べ集落数が減少すると指摘されているが、小規模ながらも本遺跡で当該期の集落が確認されたことは注目される。

遺物は、5世紀中頃の内斜口縁形の土師器環が主体で丸底と平底のものがある。また、共存する土師器鉢は小形で口縁部が外反し、平底を呈する。なお、この段階では須恵器の出土はない。

III期(古墳時代後期～終末期)TK209併行

SI-30・41が指標となる。有力者の墳墓としては周辺に京泉ストミ原古墳群があり、住居数がやや拡大す

ることから当該期の拠点集落の1つであったと考えられる。古墳時代後期になると遺跡の立地は台地縁辺から台地全体へと広がり、古墳と集落が近接する傾向にある。また、前代までの拠点集落であった市ノ塚遺跡で住居数が減少する一方、井頭遺跡では新たに集落が形成され、本遺跡や鶴田A遺跡とともに奈良・平安時代の拠点集落へ移行していく動きは注目される。

遺物は、SI-41から6世紀後半の口縁から体部内外面を磨く土師器環が出土し、周辺からは7世紀前半の磨きのない身模倣形の土師器環が出土している。SI-30からはやや新しい6世紀末～7世紀前半の内外面を漆仕上げした半球形の土師器環、混入の可能性もあるがSI-2からは6世紀末～7世紀前半の磨きのない内湾口縁形の土師器環が出土している。また、SD-37からの出土ではあるが、古墳時代中期～後期の多孔式の鉢形甕が出土している。なお、この段階では6世紀代の須恵器灯蓋・坏身や、7世紀以前の甕が出土しており、明確な遺構は確認できないが、本遺跡周辺に当該期の集落の存在を示唆するものとして注目される。

IV期（古墳時代終末期～奈良時代後期）飛鳥Ⅲ～原東2号窯段階

SI-1・2・3が指標となる。大内廃寺創建期から補修期および芳賀郡衙と推定される堂法田遺跡の成立期にあたる段階で、本遺跡周辺では鶴田A遺跡や井頭遺跡などの大規模な集落が複数確認されており、遺跡数は前代に比べて増加する傾向にある。ただし、本遺跡においては調査区の制約を考慮する必要があるが、7世紀後半～8世紀前半が1軒（SI-3）、8世紀中頃～後半が2軒（SI-1・2）と確認された住居数は少ない。これは、本遺跡が大内廃寺の寺域に隣接し台地縁辺に立地するなど地理的な制約があり、周辺での拠点集落は堂法田南遺跡など台地中心部に存在していたことが要因と推定される。

SI-3は7世紀後半～8世紀前半の内湾口縁形の土師器環が主体となる。SI-2は大内廃寺補修期にあたる8世紀中頃～後半の原東1・3～2号窯段階の須恵器が主体となる。また、大内廃寺と同範の下野薬師寺205b型式の宇瓦が出土し、下野国分尼寺跡・堂法田遺跡・中村遺跡・井頭遺跡・鶴田A遺跡からも同範品が出土している。SI-2は立地や出土遺物から、大内廃寺に関連した工房兼住居（工人集落）と考えられる。SI-1でも8世紀後半の須恵器が出土しており、SI-2と同様の性格であった可能性がある。また、南区のⅢ層（遺物包含層）やSX-42からは、西山窯産の大内廃寺創建期の三重弧文字瓦と同じ叩きの女瓦が出土しており、本遺跡周辺に創建期段階の工房が存在した可能性もあるが、その場合は年代の近いSI-3が候補であろうか。この段階は、原東4号窯から原東2号窯段階の須恵器が出土し、器種は、蓋・坏・高台付坏・鉢・甕がある。産地は益子窯産を主体とし、少量であるが三義窯産、新治窯産が認められる。

V期（平安時代前期）谷津入～監屋窯段階

SB-9・10、SF-36、SX-7・8、SX-42が指標となる。大内廃寺や芳賀郡衙と推定される堂法田遺跡の廃絶期にあたる段階で、本遺跡でも集落が衰退するとみられる。本遺跡周辺では前代から継続する大規模な集落が複数確認されており、西物井遺跡や鶴田A遺跡、彦七新田遺跡、蟹が入遺跡では9世紀代に最盛期を迎える動きが注目される。本遺跡においては、当該期の竪穴建物は確認されず、台地上で9世紀第1四半期頃の掘立柱建物（SB-9）、9世紀中頃～後半の道路状遺構（SF-36）、低地では、8世紀後半から9世紀後半まで断続的に黒書土器など信仰関連遺物を含むステパ（SX-42）が確認されるなど集落の様相が変化する。とくに、9世紀第2四半期から中頃には黒書・刻書土器が多く出土することは特筆される。

SB-9は常総型の土師器甕、カスガ入窯段階の須恵器環、SX-7は滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器環が出土している。SF-36は、北に延長すると大内廃寺の塔跡と金堂跡の中間にあたることから、大内廃寺へ向か

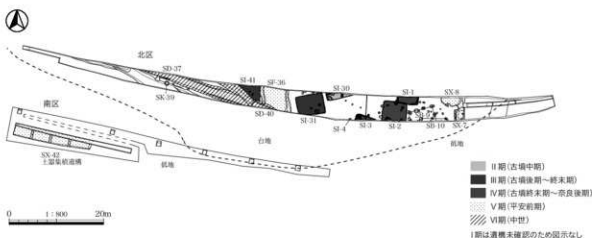
う参道と考えられる。遺物は原東1・3号窯段階の蓋や籬倉窯段階の甕、男・女瓦が出土している。SX-42は9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階の須恵器が主体であるが、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の谷津入～カスガ入窯段階の須恵器も一定量出土している。また、尾張産の灰軸陶器、常陸産の製塩土器が出土している。このほか「奉」と記された墨書土器が可能性のあるものも含めて14点、「社」と記された刻書土器が2点出土している。これについては第3節で詳述する。この段階は、谷津入窯から脇屋窯段階の須恵器が出土し、器種は、蓋・坏・高台付坏・捏鉢・鉢・皿がある。

VI期（13世紀初頭～14世紀頃）

SD-37・40が指標となる。9世紀後半段階で集落の形成がみられなくなるため、古墳時代以降の集落は途絶え、再び生活の痕跡がみられるようになるのは13世紀初頭になってからである。13世紀初頭から14世紀頃の区画溝がつくられる段階で、本遺跡周辺では御前城跡、芳賀城跡、八木岡城跡などの城館跡が多数確認されている。本遺跡においては、13世紀初頭の溝（SD-40）、13世紀後半～14世紀頃の溝（SD-37）があり、土師質土器皿や国産・中国産陶磁器などが出土している。なお、これらの溝の年代は11世紀後半～12世紀中頃にさかのぼる可能性のある中国産陶磁器が出土していることから、下限は12世紀以前となる可能性もある。溝の性格は建物を確認していないため断定はできないが、館や寺院に伴う区画溝（堀）であり、館に伴う溝である可能性が高いと考えられる。

第25表 下飯貝遺跡における時期別変遷表

時代	時期	主な遺構	確定できない	時期不明
弥生時代後期～古墳時代前期	I期	遺構未確認		SK-39
古墳時代中期	II期	SI-31		
古墳時代後期～終末期	III期	SI-41 → SI-30		
古墳時代終末期～奈良時代後期	IV期	SI-3 → SI-2 → SI-1	SI-4・SB-10 (古代)	
平安時代前期	V期	SB-9 → SF-36, SX-7, SX-8, SX-42		
中世	VI期	SD-37, SD-40		



第62図 時期別遺構変遷図

弥生土器 壺



S字状口縁台付罎



SX-42-56

南区IV層-19

II期

土師器
環 半球形



SI-31-1

内斜口縁



SI-31-2

SI-31-3



SI-31-5



SI-31-4

SI-31-6

鉢



SI-31-7

瓶



SD-37-4

須恵器 坏蓋



南区II-III層-1

III期

半球形



SI-30-1

身模散形



北区遺構外-1

蓋模散形



SI-2-2

内湾口縁



SI-2-3



SI-2-4

鉢



SI-1-1



SD-40-2



SD-40-3

坏身



南区IV層-20

IV期

半球形



SX-42-22

身模散形



SX-42-54

蓋模散形



SX-42-21



SI-2-5

産地不明



SI-2-14

産地不明



SD-37-6

原東4号窯

高台付坏



SX-42-30

罎

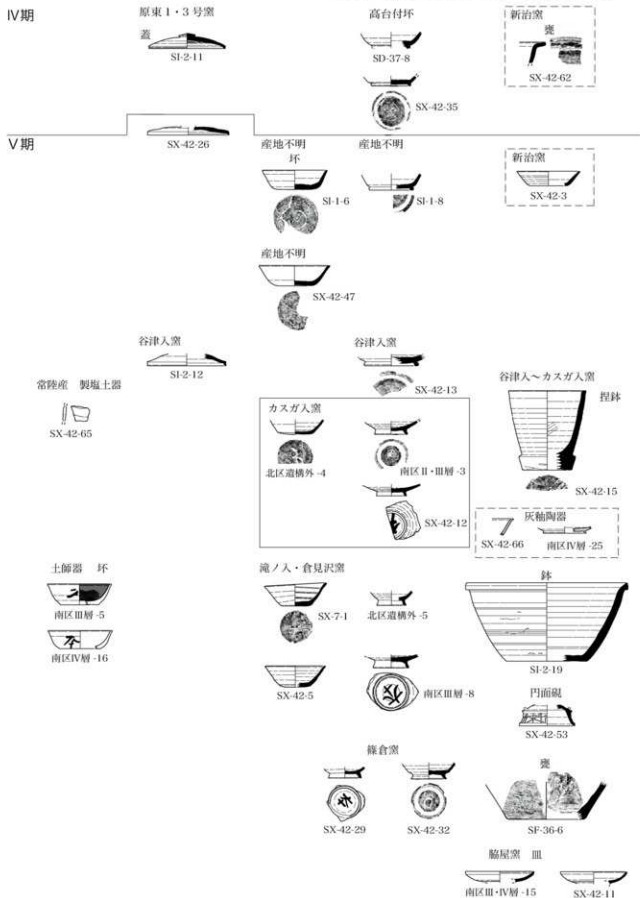


南区III層-9



第63図 土器変遷図(1)

第1節 下飯貝遺跡および周辺における時期的変遷の検討



第64図 土器変遷図(2)

VI期 土師質土器 皿



南区田層-4

常滑窯 瓶子



SD-37-30

常滑窯 片口鉢



SD-37-27

土師質土器 皿

ロク口成形



SD-37-26

手づくね



SD-37-25

山茶碗窯系 片口鉢



SD-37-28

瀬戸窯 三足盤



SD-37-29

中国産陶磁器

白磁 碗



SD-37-40

龍泉窯系
青磁 碗



SD-37-35



SD-37-36

同安窯系
青磁 碗



SD-37-41

同安窯系



SD-40-11



SD-40-10

龍泉窯系
青磁 碗



SD-37-39

0 1:8 20cm

第65図 土器変遷図(3)

第2節 集落内の手工業生産 (図版三一)

下飯貝遺跡では、鍛冶関連遺物である椀形滓・羽口のほか漆付着土器、焼成粘土塊、常陸産の製塩土器、石製紡錘車が出土している。ここでは、鍛冶関連遺物と漆付着土器、焼成粘土塊について概観したい。

鍛冶関連遺物 北区SX-8、南区B区Ⅲ層、C区SX-42で椀形滓小片各1点(第38図4、第42図14、第48図70)、北区SF-36、南区Ⅱ・Ⅲ層で羽口小片各1点が出土している。これらはいずれも建物に伴うものではなく、調査区内で鍛冶炉・鍛造剥片などの鍛冶関連遺構や遺物が確認されていないことから、周辺に鍛冶工房が存在したと考えられる。これらの年代については、北区SF-36や南区SX-42の年代から8世紀後半から9世紀後半である可能性が高いとみられる。本遺跡周辺での鍛冶関連遺跡は、タライ遺跡で古代の多量の鉄滓が出土しており、堂法田遺跡と関連する鍛冶工房とも推定されている(真岡市2015)。このほか、亀山北遺跡で古墳時代前期の竪穴建物から、鉄が付着した金床石・鉄滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓・羽口片・灰壁が放棄された状態で出土しており、蟹が入遺跡では古墳中期の鍛冶工房が確認されている。

本遺跡周辺で生産された製品は、芳賀郡衙や大内廃寺などで必要とされる器材と推定されるが、漆工などの最終加工がおこなわれていた可能性もあり注意される。

漆付着土器 漆付着土器は、黒色や暗褐色の漆が付着した土器のことで、漆の運搬・保存容器、漆使用時のパレット、漆器模倣土器がある。これまでの研究により、蓋・環・皿類はパレット、壺・平瓶・甕は漆の運搬・保存容器として用いられたと考えられている(玉田1995)。

下飯貝遺跡では、南区B区SX-42(第46図34)、C区Ⅳ層で各1点、C区Ⅲ層で2点の漆付着土器が出土している。これらはいずれも使用後に廃棄されたと考えられ、須恵器で内面に黒色または暗褐色の漆が付着している。器種はC区Ⅳ層出土資料が高台付環、それ以外は口縁部および底部を欠くが環とみられ、パレットとして使用したと推定される。これらの年代については、C区Ⅳ層出土資料が9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階のもので、ほかの資料もSX-42や遺物包含層の年代から8世紀後半から9世紀後半のものと考えられる。漆付着土器は寺院・官衙、地域の拠点集落での出土例が多く、本遺跡周辺に芳賀郡衙にかかわる漆製作工房が存在したとみられる。本遺跡では、運搬・保存容器は出土しておらず集積された量は不明であるが、漆が使用される手工業生産機能が整備された、遺跡の集約性が認められる。

焼成粘土塊 焼成粘土塊は、覆い焼きの被覆材、試し焼き、焼き台、混和材など土師器の焼成作業に関連する遺物と考えられている(秋山1997、内山1997)。下飯貝遺跡では、北区SI-1・2・3・31、SB-9、SD-37・40、SX-7、南区A区Ⅱ・Ⅲ層、Ⅳ層、SX-42、B区Ⅱ・Ⅲ層、Ⅲ層、SX-42、C区Ⅳ層、SX-42から79点の焼成粘土塊が出土し、とくに、SI-2・3のカマド周辺、A・C区Ⅳ層、SX-42での出土が多い。これらの多くに稲わらや草本類の圧痕が確認され、一部には平坦面がみられることから平坦面に押し付けて成形したと推定される。大きさは5cm以下が大半を占め、被覆材を思わせるような大形のものも出土していない。色調はにぶい橙色～褐色が多く、胎土は白色粒や赤色粒、雲母粒、砂粒などを含むものも含まないものがある。下飯貝遺跡から出土する焼成粘土塊は、5cm以下で稲わらなどの圧痕が確認できるものが多いことから、大半は混和材の可能性が高いと考えられる。本遺跡では、土師器焼成遺構や不良品、未製品の焼成品、土師器削りかすの焼成品は出土していないが、混和材とみられる焼成粘土塊が多く出土することから、周辺で土師器の生産がおこなわれていたと考えられる。

これらのことから、下飯貝遺跡周辺では、鉄生産や加工、漆工、土師器生産などの手工業生産が集約的におこなわれていたと考えられる。また、工房の管理主体者については、大内廃寺や芳賀郡衙と推定される堂法田遺跡などに近接すること、手工業生産の集約性などから、官衙あるいは首長層の関与が推定される。

第3節 下飯貝遺跡出土の古代文字資料について (第66～68図、第26～28表、図版三二)

下飯貝遺跡では、南区のSX-42を中心に多数の文字資料が出土した。その内容は、墨書土器32点、刻書土器68点である。ここでは、下飯貝遺跡出土の文字資料から遺跡の性格について検討したい。なお、大半が残存率1/8以下であることから非掲載としたものが多いが、報告書掲載資料のすべてを第66・67図に掲載し、非掲載を含むすべての出土資料を第26・28表に一覧で示した。

(1) 墨書土器

墨書土器出土状況 墨書土器32点の出土遺構と層位は、SX-42上層が10点、SX-42の1層が4点、SX-42の1・2層が3点、SX-42一括が2点、A区IV層が7点、C区IV層が3点、B区・D区III層が各1点、7トレンチIII層が1点である。SX-42からの出土が19点と59%を占め、遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層から出土したもののについても、土器の年代や墨書の特徴からSX-42から遊離したものと判断されるため、実際の比率はさらに高かったと推定される。

墨書土器の出土位置は、SX-42に集中しており、遺物の投棄は、台地から低地への地形変換点を意識しているものとみられる。とくに、南区のSX-42(低地)では「奉」と記された墨書土器が多く出土していることからステパであったと推定される。

墨書土器の特徴 墨書土器の器種は、須恵器環、高台付環、高台の有無が不明のもの、土師器環があり、須恵器環が23点で主体となるのが特徴である。記載部位は、体部外面に記されたものが多く、高台付環ではすべて底部外面、須恵器環(第45図6)は体部外面と底部内面の2カ所に記されている。文字は、すべて1文字書きのものであり、「奉」が8点、「奉」と思われるものが6点と大半を占める。このほか、「寺」が1点、「得カ」と思われるものが1点ある。年代は、9世紀第2四半期～中頃の滝ノ人・倉見沢窯段階が多く、SX-42への土器の投棄はこの時期を中心におこなわれていたことがわかる。

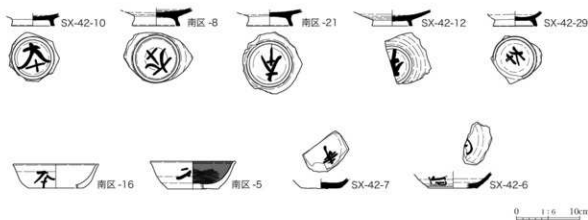
これら墨書土器の特徴として、信仰にかかわる「奉」の文字を1文字書きしたものが最も多く、寺院(大内庵寺)の存在を示す「寺」、吉祥文字あるいは仏教とのかかわりを示す「得カ」のほか、判読不明のものについてもすべて1文字書きという点があげられる。また、字形がすべて異なることも特徴的である。なお、遺存状態は小片が8割以上を占めており、その割合は墨書のない土器とほぼ同じであることから、人為的な破砕がおこなわれたとの断定はできない。

「奉」墨書土器 SX-42および遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層から、須恵器環の体部や底部に「奉」と記された墨書土器が出土した。「奉」は器に盛った食物を供献する行為を示しており、東日本では古代の集落遺跡を中心に出土している。「奉」という文字には「本」、「夫」、「奉」など様々な略字体があると指摘されており(渡辺1996、平川2000)、下飯貝遺跡から出土する「奉」も「奉」の略字体と考えられる。

これまで栃木県内では、「奉」または「本」、「奉」、「夫」の墨書土器が23点出土している(第27表)。これらの遺跡では土師器環に「本」、「奉」の1文字を記すものが主体で、1遺跡から1～3点出土している。一方、下飯貝遺跡では須恵器環に「奉」および「奉」と思われるものが県内最多となる14点出土しており、特筆すべきである。

第26表 下飯貝遺跡出土墨書土器一覧

番号	図版・検出番号	遺構・層位	種別	器種	記載部位	戳文	生産地・時期	備考
1	第43図16	C区 IV層	土師器	埴	体部外面	奉	不明	
2	第42図8	7トレンチ III層	須恵器	高台付埴	底部外面	奉	魂ノ入・倉見沢窯段階	
3	第43図21	A区 IV層	須恵器	高台付埴	底部外面	奉	魂ノ入・倉見沢窯段階	
4	第45図10	C区 SX-42 1層	須恵器	高台付埴	底部外面	奉	魂ノ入・倉見沢窯段階	
5	第45図12	C区 SX-42 1層	須恵器	高台付埴	底部外面	奉	力スガ人窯段階	
6	第46図28	B区 SX-42 1・2層	須恵器	高台付埴	底部外面	奉	魂合窯段階	
7	巻部図版3	C区 SX-42 1・2層	須恵器	埴	体部外面	奉	益子窯	
8	巻部図版3	SX-42 上層	須恵器	埴	体部外面	奉	益子窯	
9	非掲載	D区 III層	土師器	埴	体部外面	奉カ	不明	
10	第42図5	A区 IV層	土師器	埴	体部外面	奉カ	不明	内面黒色
11	非掲載	A区 IV層	土師器	埴	体部外面	奉カ	不明	
12	非掲載	C区 IV層	須恵器	埴	体部外面	奉カ	益子窯	
13	非掲載	B区 SX-42 上層	須恵器	埴	体部外面	奉カ	益子窯	
14	非掲載	B区 SX-42	須恵器	埴	体部外面	奉カ	不明	
15	第45図7	A区 SX-42 1層	須恵器	埴	底部内面	寺	魂ノ入・倉見沢窯段階	
16	第45図6	C区 SX-42 1層	須恵器	埴	底部内面 体部外面	□/得カ	不明	
17	非掲載	B区 III層	須恵器	埴	体部外面	不明	益子窯	
18	非掲載	A区 IV層	須恵器	埴	体部外面	不明	益子窯	
19	非掲載	A区 IV層	須恵器	埴	体部外面	不明	益子窯	
20	非掲載	A区 IV層	須恵器	埴	体部外面	不明	益子窯	
21	非掲載	D区 SX-42 1・2層	須恵器	埴	体部外面	不明	益子窯	
22	非掲載	B区 SX-42 上層	須恵器	埴	体部外面	不明	益子窯	
23	非掲載	B区 SX-42 上層	須恵器	埴	体部外面	不明	益子窯	
24	非掲載	B区 SX-42 上層	須恵器	埴	底部内外面	不明	益子窯	
25	非掲載	C区 SX-42 上層	須恵器	埴	体-底部外面	不明	益子窯	
26	非掲載	SX-42 上層	須恵器	埴	体部外面	不明	益子窯	
27	非掲載	A区 IV層	須恵器	埴	体部外面	保留	益子窯	
28	非掲載	C区 IV層	須恵器	埴	体部外面	保留	益子窯	
29	非掲載	B区 SX-42 上層	須恵器	埴	体部外面	保留	益子窯	
30	非掲載	B区 SX-42 上層	須恵器	埴	体部外面	保留	益子窯	
31	非掲載	C区 SX-42	須恵器	埴	体部外面	保留	不明	
32	非掲載	SX-42 上層	須恵器	埴	体部外面	保留	益子窯	



第66図 下飯貝遺跡出土墨書土器

第27表 栃木県内出土奉書土器一覧

番号	遺跡名	遺構・層位	種別	器種	記載部位	釈文	時期	備考
1	滝田本郷遺跡	遺構外	土師器	坏	体部外面	本か大十	10世紀後半	墨書
2	北の前遺跡	A区 SI-21 カマド	土師器	坏	体部外面	本カ	9世紀後半	墨書
3	土神土・茂原遺跡	SK-47	土師器	坏	体部外面	本	8世紀前半	墨書
4	東林南遺跡	HT-1 カマド	土師器	坏	体部外面	本	9世紀後半	墨書
5	多功南原遺跡	SI-256	土師器	坏	体部外面	同草カ	9世紀後半	墨書
6	多功南原遺跡	SI-07	土師器	坏	底部外面	本	9世紀後半	墨書
7	鬼の内台遺跡	75号住居	須恵器	坏	底部外面	本か大十	8世紀後半	墨書
8	鶴田A遺跡	SI-21	土師器	坏	体部外面	本	9世紀後半	墨書
9	鶴田A遺跡	SD-15	須恵器	皿	底部内外面	本	9世紀後半	墨書
10	八幡根東遺跡	SI-198	土師器	坏	体部外面	本	9世紀後半	墨書
11	八幡根東遺跡	SI-11A・Bカマド	土師器	坏	底部外面	奥	10世紀前半	刻書
12	寺野東遺跡	SI-1下層	土師器	坏	体部外面	筒カ/本か幸	9世紀後半	墨書
13	寺野東遺跡	SI-1下層	須恵器	坏	体部外面	本	9世紀後半	墨書
14	金山遺跡	III区 SI-015	土師器	坏	体部外面/底部外面	本/本	9世紀前半	墨書
15	金山遺跡	III区 SI-015 床面	土師器	坏	底部外面	本	9世紀前半	墨書
16	金山遺跡	V区 SE-086A	土師器	坏	体部外面	本カ	9世紀後半	墨書
17	新開遺跡	SX-1	須恵器	坏	体部外面	本千	9世紀後半	墨書
18	下野回分寺跡	SA-425	土師器	坏	体部外面	本カ	9世紀後半	墨書
19	下野回分寺跡	2層	土師器	坏	底部外面	本カ		墨書
20	下野回分寺跡	2層	土師器	坏	底部外面	本カ		墨書
21	館之前遺跡	HT-14	土師器	坏	体部外面	本カ	9世紀後半	墨書
22	館之前遺跡	HT-35	須恵器	坏	底部外面	本	8世紀後半	墨書
23	タヅラ山西遺跡	SI-7	土師器	坏	体部外面	本	9世紀後半	墨書

(2) 刻書土器

刻書土器出土状況 刻書土器68点の出土遺構と層位は、南区SX-42上層が22点と最も多く、次いでSX-42一括が7点、A区IV層が7点、C区IV層が5点、7トレンチIII層が5点、北区SI-1が1点、SI-2が2点、SF-36が1点などとなっている。

刻書土器の出土位置は、SX-42が33点と49%を占め、墨書土器と同様にSX-42に集中する傾向にあり、遺物の投棄についても台地から低地への地形変換点を意識しているものとみられる。とくに、「大」、「社」、「井」と記された刻書土器がやや多く出土しており注目される。

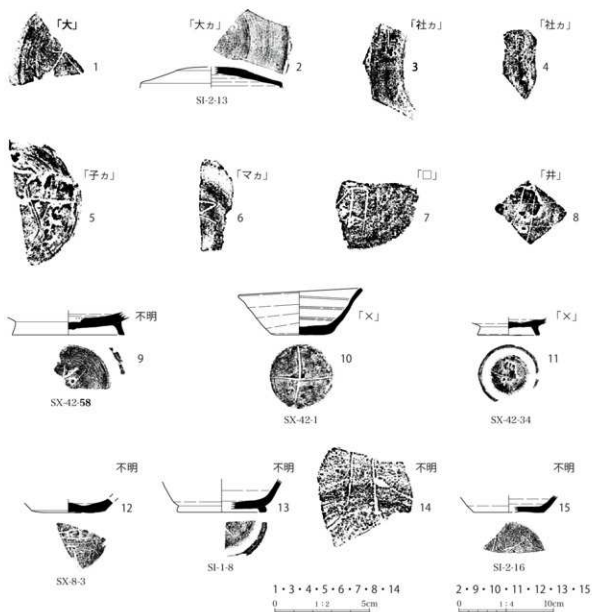
刻書土器の特徴 刻書土器の器種は、須恵器蓋、坏、高台付坏、高台の有無が不明のものがあり、須恵器坏が主体となるのが特徴である。記載部位は、底部外面に記載されたものが主体で、すべて1文字書きである。記載内容は文字と記号があり、文字は「大」が3点、「大」と思われるものが2点、「社」と思われるものが2点、「子」が1点、「マ(部)」が1点である。記号は「一」などの数字とみられるものが17点、「×」が6点、「井」が1点、「井」と思われるものが2点などである。小片が多く年代のわかるものは限られるが、8世紀第3四半期～第4四半期の原東2号窯～谷津入窯段階のものから9世紀第2四半期～中頃の滝ノ入・倉見沢窯段階のもののみられる。

これら刻書土器の特徴として、数字とみられる「一」などの線を1文字書きしたものが最も多く、「社」など祭祀にかかわる刻書が出土していることが注目される。また、判読不明のものも含めて1文字書きが主体となるようである。なお、遺存状態は小片が9割以上を占めており、その割合は刻書のない土器とほぼ同じであることから、人為的な破砕がおこなわれたとの断定はできない。

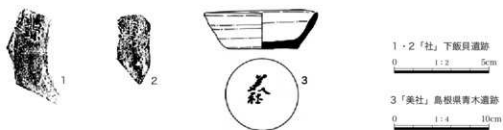
第28表 下飯貝遺跡出土刻書土器一覧

番号	採回番号	調査区	遺構・層位	種別	器種	記載部位	釈文	生産地・時期	備考
1	非掘藏	南区	A区 B・Ⅱ層	須恵器	杯	底部外面	「大」	益子窯	文字
2	非掘藏	南区	B区 SX-42	須恵器	杯	底部外面	「大」	益子窯	文字
3	第67回4	南区	SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	「大」	不明	文字
4	非掘藏	南区	C区 IV層	須恵器	杯	底部外面	「大カ」	益子窯	文字
5	第14回13	北区	SI-2	須恵器	蓋	天井部外面	「大カ」	関東2～谷津入窯段階	文字
6	第67回3	北区	SF-36	須恵器	杯	体部外面	「社カ」	不明	文字
7	第67回4	南区	SX-42 上層	須恵器	杯	体部外面	「社カ」	不明	文字
8	第67回5	南区	A区 SX-42 上層、A区 IV層	須恵器	杯	底部外面	「子カ」	不明	文字
9	第67回6	南区	SX-42 上層	須恵器	杯	底部内面	マカ	不明	文字カ
10	第67回7	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	□	不明	文字カ
11	非掘藏	南区	B区 Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	□	不明	文字カ
12	非掘藏	南区	D区 SX-42 1・2層	須恵器	杯	底部外面	□	益子窯	文字カ
13	非掘藏	南区	A区 IV層	須恵器	杯	底部外面	□	益子窯	文字カ
14	非掘藏	南区	D区 SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	□	益子窯	文字カ
15	非掘藏	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	□	益子窯	文字カ
16	非掘藏	南区	D区 SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	大または×	益子窯	文字または記号
17	第67回8	南区	C区 IV層	須恵器	杯	底部外面	井	不明	文字または記号
18	非掘藏	南区	B区Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	井カ	益子窯	文字または記号
19	非掘藏	南区	C区 Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	井カ	不明	文字または記号
20	第48回58	南区	C区 SX-42	須恵器	高台付杯	底部外面	不明	不明	記号
21	第38回1	北区	SX-7、SD-6・SX-7付近	須恵器	杯	底部内面	×	魂ノ入・倉見沢窯段階	記号
22	第46回34	南区	SX-42 2層	須恵器	高台付杯	底部外面	×	益子窯	記号
23	非掘藏	南区	7トレンチ Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	×	益子窯	記号
24	非掘藏	南区	7トレンチ Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	×	益子窯	記号
25	非掘藏	南区	C区 SX-42	須恵器	杯	底部外面	×	益子窯	記号
26	非掘藏	南区	A区 SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	×	益子窯	記号
27	非掘藏	南区	A区Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	—	益子窯	記号
28	非掘藏	南区	C区 IV層	須恵器	杯	底部外面	—	益子窯	記号
29	非掘藏	南区	A区 SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	—	益子窯	記号
30	非掘藏	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	—	益子窯	記号
31	非掘藏	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	—	益子窯	記号
32	非掘藏	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	杯	底部外面	—	益子窯	記号
33	非掘藏	南区	C区 IV層	須恵器	杯	体部外面	二カ	益子窯	記号
34	非掘藏	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	杯	体部外面	二カ	益子窯	記号
35	非掘藏	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	杯	体部外面	二カ	益子窯	記号
36	非掘藏	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	杯	体部外面	二カ	益子窯	記号
37	非掘藏	南区	南区一括	須恵器	杯	体部外面	二カ	益子窯	記号
38	非掘藏	南区	D区 SX-42 1・2層	須恵器	杯	底部外面	三	益子窯	記号
39	第38回3	北区	SX-8	須恵器	杯	底部外面	多重線	カスガ入窯段階	記号カ
40	非掘藏	南区	B区Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	多重線	益子窯	記号カ
41	非掘藏	南区	C区 Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	多重線	益子窯	記号カ
42	非掘藏	南区	C区 Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	多重線	益子窯	記号カ
43	非掘藏	南区	D区 SX-42 1・2層	須恵器	杯	底部外面	多重線	益子窯	記号カ
44	第11回8	北区	SI-1	須恵器	高台付杯	底部外面	不明	不明	不明
45	第14回16	北区	SI-2	須恵器	杯	底部外面	不明	魂ノ入・倉見沢窯段階	不明
46	非掘藏	南区	A区Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	不明	益子窯	不明
47	非掘藏	南区	A区Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	不明	益子窯	不明
48	非掘藏	南区	7トレンチ Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	不明	益子窯	不明
49	非掘藏	南区	7トレンチ Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	不明	益子窯	不明
50	非掘藏	南区	7トレンチ Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	不明	益子窯	不明
51	非掘藏	南区	C区 Ⅲ層	須恵器	杯	底部外面	不明	益子窯	不明
52	非掘藏	南区	A区 IV層	須恵器	高台付杯	底部外面	不明	益子窯	不明
53	第67回14	南区	A区 IV層	須恵器	杯	体部外面	不明	不明	不明
54	非掘藏	南区	A区 IV層	須恵器	杯	底部外面	不明	不明	不明
55	非掘藏	南区	A区 IV層	須恵器	杯	底部外面	不明	不明	不明
56	非掘藏	南区	A区 IV層	須恵器	杯	底部外面	不明	益子窯	不明

番号	調査番号	調査区	遺構・層位	類別	器種	記載部位	観文	生産地・時期	備考
57	非掘載	南区	A区 IV層	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明
58	非掘載	南区	C区 IV層	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明
59	非掘載	南区	A区 SX-42 上層	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明
60	非掘載	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明
61	非掘載	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明
62	非掘載	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	蓋	体部外面	不明	益子窯	不明
63	非掘載	南区	B区 SX-42 上層	須恵器	坏	体部外面	不明	益子窯	不明
64	非掘載	南区	SX-42 上層	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明
65	非掘載	南区	A区 SX-42	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明
66	非掘載	南区	C区 SX-42	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明
67	非掘載	南区	C区 SX-42	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明
68	非掘載	南区	C区 SX-42	須恵器	坏	底部外面	不明	益子窯	不明



第 67 図 下飯具遺跡出土刻書土器



第68図 「社」の字形と参考資料

「社」刻書土器 SF-36 および SX-42 から須恵器環の体部外面に「社」と思われる文字を記した刻書土器が出土した。「社」は神をまつる建物を示しており、管見によれば「社」の1文字を記した刻書土器は出土例がなく、島根県の出雲国府跡、青木遺跡、福富遺跡から島根部の郡司姓である「社邊」の刻書土器が出土しているのみである。また、墨書土器では島根県青木遺跡から「社」、「美談社」、「美社」など神社名を記した墨書土器が出土しているほか、山形県行司免遺跡、千葉県戸張作遺跡、富山県桜町遺跡、岐阜県美濃国分寺跡、静岡県竹の台遺跡など全国でも30例ほどが知られているに過ぎない。

『令集解』古記にみえる「国郡郷里毎村在社神」、同一云の「社官」、「社首」の存在、『令集解』儀制令春時祭田条などによれば、神社が祭礼の場であったと考えられている（義江1978）。本遺跡では、神社遺構は確認されていないが、「社」の刻書土器が出土している。本遺跡の北約300mには昌泰元年（898）創建と伝わる相宮神社が所在するが、祭祀がおこなわれていた時期とはやや年代差があり、直接的な関連を求めることはできない。もし、想定が許されるならば、本遺跡の南約3kmには延喜式内小社の大前神社があり、「大」や「社」は大前神社と関連する可能性も考えられよう。

（3）出土文字資料からみた信仰儀礼

これまでの検討により、南区のSX-42（低地）は墨書・刻書土器を伴う信仰関連のステバであったことが明らかとなった。SX-42 および遺物包含層はグライ化した堆積層であることから、当時は湿地化した環境であり周辺には水田域が広がっていたと推定される。

これらの墨書・刻書土器は、文字の記されていない坏や甕、鉢など一括で捨てられている状況から、神祇令下の祭祀ではなく民間信仰儀礼に伴うものと判断され、当時の民間信仰を考えるうえで重要視される。また、「寺」の墨書土器からは仏教思想との混在も認められる。なお、台地と低地の境界（水辺）に投棄されたという点では、村境などで疫病の侵入を防ぐ道饗祭や祈雨祭がおこなわれていた可能性が考えられるという^(註1)。本遺跡は、周辺に所在する大内廃寺や芳賀郡衙と推定される堂法田遺跡などと密接に関連する集落であり、民間信仰儀礼とどのように関わっていたのかを考えるうえで貴重な資料を提示したといえる。

第4節 下飯貝遺跡の評価（第69図、図版三一）

下飯貝遺跡では、道路整備に伴う限られた面積での調査であったが、古墳時代中期から中世までの遺構が確認された。また、遺構は確認されていないが弥生時代後期の二軒屋式とみられる壺と古墳時代前期のS字状口縁台付甕が出土し、周辺に当該期の集落が存在する可能性が高まったことは注目される。これは、台地上に古墳時代中期の集落が形成され、古墳時代後期には住居数が増加し、有力首長層の墳墓である京泉シトミ原古墳群が築造されるなど、当地域における低地開発の拠点となっていく動きとして注目される。

7世紀末頃には大内廃寺や芳賀郡衙と推定される堂法田遺跡が成立し、下飯貝遺跡周辺はこれらを支える工人集落として、鉄生産や加工、漆工、土師器生産などの手工業生産が集約的におこなわれていたと考えられる。出土した文字資料には、工房の管理主体者の性格をうかがわせるものは少ないが、周辺遺跡の状況や手工業生産の集約性などから、官衙あるいは首長層の関与が想定される。

低地では、8世紀後半から9世紀後半まで断続的に、墨書・刻書土器を伴う土器の一括投棄がおこなわれ、とくに9世紀第2四半期から中頃には「本」の墨書土器や「社」の刻書土器など、民間信仰儀礼とのかかわりを示す資料も出土しており重要視される。また、本遺跡でおこなわれた儀礼は「寺」の墨書土器が示す仏教思想との混在など、その目的は様々であったことがうかがえる。そして、9世紀中頃から後半には掘立柱建物や道路状遺構がつくられ、低地では民間信仰儀礼がおこなわれるなどの画期をむかえたのちは、大内廃寺や堂法田遺跡の衰退とともに本遺跡も一時衰退し、集落の様相が大きく変化したと考えられる。

13世紀初頭には、台地上に国産・中国産陶磁器などが出土する区画溝がつくられるようになる。溝の性格は建物を確認していないため断定はできないが、京泉館をはじめ芳賀氏一族の城館跡や墓所があるなど、芳賀氏とのつながりが深い地域であり、出土遺物（中国産陶磁器）からも館に伴う区画溝である可能性が高いと考えられる。

下飯貝遺跡は古墳時代後期以降、本地域の低地開発の拠点集落になったと推定され、奈良時代前半から平安時代初頭にかけては芳賀郡衙や大内廃寺を支える工人集落として重要な機能を果たしていたものと考えられる。また、一時衰退するものの中世には芳賀氏の拠点として館に伴う区画溝が構築されるなど、14世紀まで存続したことが明らかになった。以上のことから、古墳時代中期以降の地域開発、芳賀郡衙の成立から衰退とその後地域開発を考えるうえで重要な遺跡といえる。

第5節 今後の展望と課題

今回の下飯貝遺跡の発掘調査では、調査区の制約もあったが多くの成果が得られた。とくに、弥生時代後期から古墳時代前期の土器や古墳時代中期の集落の発見は、当地域の低地開発を考えるうえで重要な発見である。また、芳賀郡衙周辺域での集落の発見や、手工業生産にかかわる鍛冶関連遺物・漆付着土器・焼成粘土塊・製塩土器、民間信仰儀礼にかかわる墨書・刻書土器などの文字資料も、本遺跡の性格を考えるうえで重要な資料である。

ただし、本遺跡周辺では低地や微高地での調査事例が乏しく、今回の調査でも低地部の調査面積は狭小であったため、水田・畑などの生産の実態や微高地上への集落展開は不明なままである。当地域では、古墳時代前期から低地開発が本格化していったと考えられるため、今後、調査事例が増加し実態が明らかにされることを期待したい。また、芳賀郡衙周辺域と栃木県内や東国の官衙周辺域との集落や生産域などの比較についても、今後の課題である。



第69図 下飯貝遺跡の機能想定図

注

注1 藤原祐一氏よりご教示いただいた。

参考文献

- 有富純也 2016 「奉」「本」「本」などと記された墨書土器に関する予備的考察『アジア太平洋研究』41号
成蹊大学アジア太平洋研究センター
- 秋山浩三 1997 『黒斑等の遺物属性からみた土器焼成遺構』『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 真陽社
- 内山敏行 1997 『八幡根遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第189集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 大町健 1986 『古代村落と村落首長』『日本古代の国家と在地首長制』校倉書房
- 小田和利 2016 『大宰府史跡出土の漆付着土器』九州歴史資料館第37回企画展 大宰府の役人と文房具
九州歴史資料館
- 金子裕之 2014 『古代都城と律令祭祀』柳原出版
- 九州歴史資料館 2014 『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ 不丁地区遺物編Ⅱ』
- 藤原祐一 2004 『律令神祇制における「社」検証のための一視点』『栃木県考古学会誌』第25集 栃木県考古学会
- 高島英之 2000 『墨書土器村落祭祀論序説』『日本考古学』第9号 日本考古学協会
- 田辺昭三 1966 『陶邑古瀬址群』I 平学学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 玉田芳英 1995 『漆付着土器の研究』『文化財論叢Ⅱ』同朋社出版 325-345頁
- 西弘海 1978 『土器の時期区分と型式変化』『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- 平川南 1991 『墨書土器とその字形—古代村落における文字の実相—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集
国立歴史民俗博物館 67-130頁
- 平川南 2000 『墨書土器の研究』吉川弘文館

第5章 総括

義江彰夫 1972 「律令制下の村落祭祀と公出挙制」『歴史学研究』380号 青木書店

義江彰夫 1978 「儀制令春時祭田条の一考察」『古代史論叢』中 吉川弘文館

渡辺晃宏 1996 「歌姫西瓦室等出土の瓚書き瓦」『奈良国立文化財研究所 1995年度年報』奈良国立文化財研究所
島根県教育庁埋蔵文化財センター 2006 『青木遺跡Ⅱ』島根県教育委員会

写真図版



下飯貝遺跡遠景（南から）



下飯貝遺跡全景（上空から）

図版二
遺構（全景）



北区調査区西半全景（北から）



北区調査区東半全景（北から）



南区調査区全景（南西から）



下飯貝遺跡現況（西から）



北区 SI- 1 完掘 (南から)



北区 SI- 1 B-B' 土層断面 (南から)



北区 SI- 1 遺物出土状況 (南から)



北区 SI- 1 鉄鏃(第11014)・砥石(第11013)出土状況(東から)



北区 SI- 2 完掘 (南から)



北区 SI- 2 遺物出土状況・B-B' 土層断面 (南から)



北区 SI- 2 カマド完掘 (南から)



北区 SI- 2 カマド D-D' 土層断面 (東から)



北区 SI- 2 入口ピット土層断面（東から）



北区 SI- 2 字瓦（第15図23）出土状況（南東から）



北区 SI- 2 掘方完掘（南から）



北区 SI- 2 貼床内石裂跡修繕（第15図24）出土状況（西から）



北区 SI- 2 作業風景（南から）



北区 SI- 3 完掘（南から）



北区 SI- 3 土層断面（北から）



北区 SI- 3 カマド完掘（南から）

図版六
遺構
(竪穴建物)



北区 SI- 3 カマド C-C' 土層断面 (東から)



北区 SI- 3 貯蔵穴 D-D' 土層断面 (南から)



北区 SI- 4 完掘 (北から)



北区 SI- 4 カマド A-A' 土層断面 (北から)



北区 SI-30 完掘 (西から)



北区 SI-30A-A' 土層断面 (部分) (南から)



北区 SI-30 P 2・P 3 完掘 (南から)



北区 SI-30 P 2・P 3 C-C' 土層断面 (南西から)



北区 SI-31 完掘（東から）



北区 SI-31B-8' 土層断面（南から）



北区 SI-31 P 1 土層断面（南から）



北区 SI-31 炉完掘（南から）



北区 SI-31 炉検出状況（西から）



北区 SI-31 貯蔵穴 C-C' 土層断面（東から）



北区 SI-31 貯蔵穴・遺物出土状況（南から）



北区 SI-31 土師器坏（第 23 図 2）出土状況（東から）

図版八
遺構
(竪穴建物・掘立柱建物)



北区 SI-41 完掘 (東から)



北区 SI-41B-B' 土層断面 (南から)



北区 SI-41 P 1 完掘 (南から)



北区 SI-41 P 1 土層断面 (南から)



北区 SB-9・SB-10 全景 (東から)



北区 SB-9・SB-10 検出状況(西から)



北区 SB-9 P 1 完掘(南から)



北区 SB-9 P 1 柱穴検出状況(南から)



北区 SB-9 P 1 土層断面(東から)



北区 SB-9 P 1 土層断面(南から)



北区 SB-9 P 2 完掘 (南から)



北区 SB-9 P 2 柱穴検出状況 (南から)



北区 SB-9 P 2 土層断面 (南から)



北区 SB-9 P 3 完掘 (南から)



北区 SB-9 P 3 柱穴検出状況 (南から)



北区 SB-9 P 3 土層断面 (南から)



北区 SB-9 P 4 完掘 (南から)



北区 SB-9 P 4 柱穴検出状況 (南から)



北区 SB-9 P 4 土層断面 (南から)



北区 SB-9 P 4 土層断面 (東から)



北区 SB-9 P 5 完掘 (南から)



北区 SB-9 P 5 柱穴検出状況 (南から)



北区 SB-9 P 5 土層断面 (東から)



北区 SB-9 P 6 完掘 (南から)



北区 SB-9 P 6 柱穴検出状況 (南から)



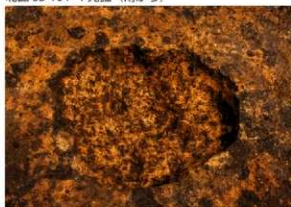
北区 SB-9 P 6 土層断面 (東から)



北区 SB-10 P 1 完掘 (南から)



北区 SB-10 P 1 土層断面 (南から)



北区 SB-10 P 2 完掘 (南から)



北区 SB-10 P 2 土層断面 (南から)



北区 SB-10 P 3 完掘 (南から)



北区 SB-10 P 3 土層断面 (南から)



北区 SK-39 完掘 (南から)



北区 SD-37 作業風景 (東から)



北区 SD-37・SD-40 完掘 (東から)



北区 SD-37 全体 (東から)



北区 SD-40 完掘 (北西から)



北区 SD-37A-A' 土層断面 (東から)



北区 SD-37・SD-40B-B' 土層断面 (東から)



北区 SD-37・SD-40 遺物出土状況 (東から)



北区 SD-37 遺物出土状況 (東から)



北区 SD-37 遺物出土状況 (西から)



北区 SD-37 常滑産瓶子 (第31図30) 出土状況 (東から)



北区 SD-37 青磁碗 (第31図39) 出土状況 (東から)



北区 SD-40 青磁碗 (第32図10) 出土状況 (南から)



北区 SD-37 壁面掘削痕跡 (北から)



北区 SD-40 壁面掘削痕跡 (北東から)



北区 SP-15 土層断面 (南から)



北区 SP-18 土層断面 (北から)



北区 SP-21 完掘 (南から)



北区 SP-21 土層断面 (南から)



北区 SP-26 完掘 (南から)



北区 SP-26 土層断面 (南から)



北区 SP-27 完掘 (南から)



北区 SP-27 土層断面 (南から)



北区 SP-28 完掘 (南から)



北区 SP-28 土層断面 (南から)



北区 SP-27・SP-28・SP-29 完掘 (南西から)



北区 SF-36 完掘 (南から)



北区 SF-36 D 1 完掘 (南から)



北区 SF-36 D 2 完掘 (南から)



北区 SF-36B-B'・C-C' 土層断面 (部分) (南から)



北区 SF-36 から大内麿寺を望む (南から)



北区 SX- 7 完掘（西から）



北区 SX- 7 A-A' 土層断面（北から）



北区 SX- 7 須恵器坏（第 38 図 1）出土状況（北から）



北区 SX- 8 完掘（南から）



北区 SD- 6 土層断面（南西から）



北区 SF- 5 土層断面（南から）



北区 SF- 5 板材検出状況（南から）



北区 SD- 6・SF- 5 検出状況（東から）



南区 SX-42 遺物出土状況（西から）



南区 A 区 SX-42 遺物出土状況（南東から）



南区 A 区 III 層墨書土器（第 42 図 5）出土状況（北から）



南区 A 区 SX-42 捏鉢（第 45 図 5）出土状況（東から）



南区 A 区 III 層女瓦（第 42 図 12）出土状況（南から）



南区 B 区 SX-42 遺物出土状況（南から）



南区 C 区 SX-42 遺物出土状況（南から）



南区 C 区 SX-42 1 層墨書土器(第 45 図 6) 出土状況(東から)



南区 7 トレンチ土層断面（南西から）



南区 E-E' 土層断面（東から）



南区 C・D 区作業風景（南東から）



地元説明会



調査参加者

図版二〇 遺物













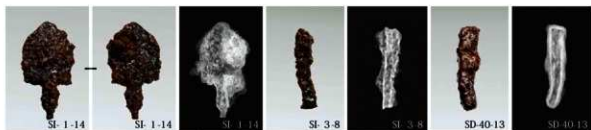












図版三二 遺物(刻書土器)



刻書-1



刻書-3



刻書-4



刻書-6



刻書-5



刻書-7



刻書-8



刻書-14

報告書抄録

ふりがな	しもいいがいいせき
書名	下飯貝遺跡
副書名	快適で安全な道づくり事業費（補助）国道121号京泉Ⅱ工区に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第415集
編著者名	手島 実実子
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2024年3月28日（令和6年3月28日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯東経		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
下飯貝遺跡	栃木県 真岡市 京泉	09209	92	36° 28' 29"	140° 1' 55"	20220523 ～ 20220728	1,123 m ²	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
下飯貝遺跡	集落	古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	竪穴建物 掘立柱建物 土坑 ピット 溝 道路状遺構 性格不明遺構 土器集積遺構	7軒 2軒 1基 23基 2条 1条 2基 1基	土師器 須恵器 土製品 瓦 陶磁器 石製品 鉄製品 銭貨	大内廃寺の参道と推定される道路状遺構や信仰に関わる土器集積遺構を検出。鉄滓、羽口、漆付着土器、焼成粘土塊、製塩土器が出土。「本」「寺」墨書土器、「社カ」刻書土器などの文字資料が出土。

要 約	<p>下飯貝遺跡は、栃木県南東部の真岡市に所在し、五行川左岸の西根台地縁辺に立地する。今回の調査によって、古墳時代中期から中世にかけての遺構が検出された。</p> <p>とくに、弥生時代後期から古墳時代前期の土器や古墳時代中期の集落の発見は、当地域の低地開発を考えるうえで重要な発見である。また、古墳時代後期以降は本地域の低地開発の拠点集落となり、奈良時代前半から平安時代初頭にかけては芳賀郡衙や大内廃寺を支える工人集落や信仰関連のステバとして重要な機能を果たしていたことが明らかになった。</p> <p>手工業生産にかかわる鍛冶関連遺物（鉄滓・羽口）、漆付着土器、焼成粘土塊、製塩土器、祭祀にかかわる墨書・刻書土器などの文字資料も、本遺跡の性格を考えるうえで重要な資料である。</p>
-----	---

栃木県埋蔵文化財調査報告第415集

下飯貝遺跡

—快速で安全な道づくり事業費（補助）国道121号京原II工区に伴う発掘調査—

発行 栃木県

宇都宮市堀田1-1-20

TEL 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町1-8

TEL 028 (643) 1011

編集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

TEL 0285 (44) 8441

発行日 令和6年3月28日発行

印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
